
薔薇のマリア
17.この痛みを抱えたまま僕らはいつまで
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF
RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


「よくもマリアを……！」
今まで何度、同じようなことがあっただろう。
数えられない。数える気にもなれない。
身にまとう黒衣はあちこち裂けて破れている。
暗黒の翼もぼろぼろだ。
それでもあいつは――
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
17.この痛みを抱えたまま僕らはいつまで


「我らが勝利をつかむためェーにッツッ……！」
悪魔どもへの奇襲が成功し、勢いに乗る新生太陽王国軍。すると、ファニー・フランクが朗々と歌い出し、なぜか兵士たちの唱和が続く。士気はともかく、場は盛りあがっているようだ。
「おかしなフランク万歳！」
「おかしなフランク万歳！」
「……もう勝手にして」


「ロム・フォウ……！　久しぶり……！」
マリアローズは走り出した勢いのまま抱きついた。お日さまの
匂いがする。ロム・フォウはちょっと驚いたみたいだけれど、
ぎゅうっと抱きかえしてくれて、頬ずりまでしてくれた。

薔薇のマリア

17．この痛みを抱えたまま僕らはいつまで

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 17

Pain walk with me

Ao Jyumonji

First published 2012 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

17

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF REDROSE

17

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Honeymerry
ハニーメリー

脱走機術師。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Funny Frank
ファニー・フランク

新生太陽王国の馬鹿陛下。



Q'bell-Adrus
きゅー

キューベルアドラス。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。



SIX
シックス

幽閉者。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K（シリアル・キラーズ）》の頭目。

and the others

Beartricea
ベアトリーチェ

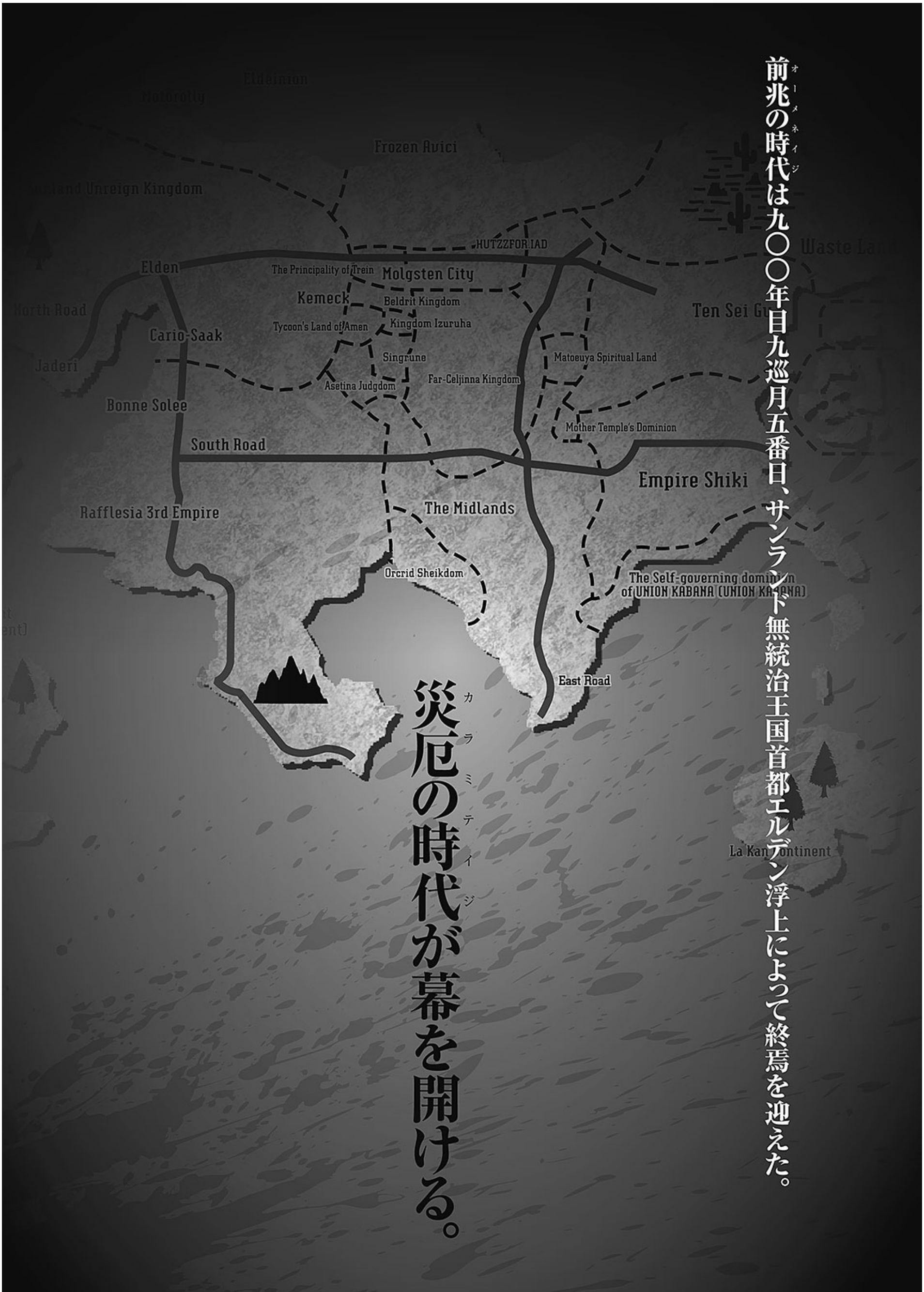
Twaning
トワニング

Gin Vodka
ジン・ウォッカー

Jean Stanback
ジャン・スタンバック

Matilda
マチルダ

and etc.



前兆(オーメネイジ)の時代は九〇〇年目九巡月五番日、サンランド無統治王国首都エルデン浮上によって終焉を迎えた。

災厄(カラミテイジ)の時代が幕を開ける。

Calamitage 001 "Resistance"

カラミテイジ元年九巡月六番日　タット大森林

　ここはどこだろう。

　わからない。

　あたりには木々が生おい茂しげっている。森だ。暗い、森──。

　自分は地べたに腰を下ろして樹木に背をもたれさせ、膝を抱かかえている。一人じゃない。周りに人がいる。皆みな、同じだ。誰も彼も傷つき疲れ果てた身体からだを休めているというより、とにかくもう一歩も動けない。ここはどこだろう。

　エルデンからは──エルデンがあった場所からは、だいぶ離れた。それはたぶん間違いない。かなり逃げたし。ひたすら逃げつづけて、命からがらここまでたどりついた。もうダメだと何度も思った。数えきれないほど。

「……なんで、生きてるのかな」と呟つぶやいて、低く笑う。

　笑う。笑う。笑う。笑う。

　ああ、おかしい。

　自分がまだ生きているなんて。

　死んでいてもおかしくなかった。違う。そうじゃない。むしろ死ぬべきだった。

　だって悪あく魔まどもに、贄にえの園そのの住人たちに、蜥蜴人どもに、亜人ボーグたちに、その他いろいろな異界生物フリークスどもに追いかけられて襲われた。自分は羊どころか愛あい玩がん用に品種改良されて実用に耐たえる牙きばも爪つめも持たない鼠ねずみみたいだった。どこまでも無力だった。抵抗なんてできなかった。逃げた。ただ逃げるだけだった。危ないところを何回も何回も仲間に救われた。片腕を失ったカタリに。ユリカに。サフィニアの魔術にも助けられた。ピンパーネルにも。ハニーメリーにも。きゅーにまで。そして、トマトクン。仲間だけじゃない。りりぃ。

ベティ。トモヨ。魔術士たち。それから──それから……。

「生きてる、かな……みんな」

　この森にはかなりの人数が逃げこんでいるようだ。でも暗い。真っ暗だし、誰も彼もうなだれている。顔なんてわからない。その中に果たして仲間はいるのだろうか。それとも皆はぐれてしまったのか。やっぱり自分は一人なのか。結局、一人きりなのか。

　終わりだと思う。もうおしまいだ。一人じゃ無理だ。とてもとても生き残れない。この期ごに及およんで生きのびることを考えている。そんな自分がおかしい。おかしいけれど笑えない。地面に転がっている背負い袋ぶくろに目をやった。──ルーシー。

　それはルーシー・アッシュカバードの背負い袋だ。中にはルーシーの荷物と、カタリ、ユリカの腕が一本ずつ入っている。

　あの瞳ひとみを思いだしてしまいそうだ。見開かれたままの、何も映していない、もう何も映すことがない、赤い眼めを。ああ。

　ああ。ああ、ルーシー。ごめん。ごめんね、ルーシー。きみの頭、拾ってくればよかったのかな。頭だけでもあれば、なんとかなったかな。トワニングなら、髭ひげならどうにかしてくれたかもしれない。だけど髭はジェードリだ。ジェードリ。そうだ。ジェードリは大丈夫なのか。わからない。異界生物フリークスたちはエルデンがあった場所の一帯を荒あらしまわるだけで満足するのだろうか。わからない。わかるわけがない。

　そもそもなんでこんなことに。古代九く頭ず竜りゅうの呪のろいはどうなってしまったのか。キング・グッダー。まさか、異界生物フリークスたちを抑おさえこんでいた古代呪式を解いて、自分だけ逃げたのか。エルデン。飛んでいってしまった。エルデンが飛ぶなんて。でもこの目で見た。事実だ。エルデンの中にいたはずのベアトリーチェは無事なのか。モリーは。他の人たちは。

　頭を抱える。叫びたい。口を押さえる。ダメだ。声を出したら見つかる。敵を呼びよせてしまうかもしれない。胸が前後に動く。背中も。激しく動く。涙があふれる。もうどれだけ泣いたかわからない。走りながら、息を殺しながら、転げまわりながら、ずいぶん泣いた。後悔している。だけど何を悔くいているのか、何を悔いるべきなのか、今はわからない。考えられない。それに──それに、違う

んだ。

　まだ若かった、前ぜん途と有望だった若い仲間を、おそらく永遠に失った。自分は必ずしもそのことで涙しているわけじゃない。少なくとも、それだけじゃない。心細いだけなんだ。これからどうすればいいのか。見当もつかない。怖いんだ。先行きが不ふ透とう明めいどころの騒さわぎじゃない。真っ暗だ。月も星もない闇やみ夜よより遥はるかに暗い。まるで、真っ黒い粘ねん液えきに満たされた底なし沼ぬまの中にいるみたいだ。つかまる藁わらの一本もなくて、この身はどんどん沈しずんでゆく。怖くて怖くてたまらない。

　こんなふうに怖がっていたって、どうする？　どうなる……？

　どうにもならない。

　だから、立ちあがって歩こう。逃げよう。早く。一刻も早く。遠くへ。もっと遠くへ。

　でもひどく、ひどすぎるほど疲れている。思えばずっと何も食べていない。最後に水を飲んだのはいつだろう。水。そうだ。水を飲まないと。非常食を口に入れないと。肝かん心じんなときに動けなくなったらどうする。肝心なとき？　肝心？　それって、いつ……？　さあ。わからない。わかるものか。

　もういいんじゃないの。逃げたってどうするんだよ。どうせ逃げきれっこない。だけどあきらめて、どうする？　悪魔か、他の異界生物フリークスの前に身を差しだして、おとなしく殺される？　あまり痛くないように、ひと思いにやってほしいとでも頼んで、やさしく殺してもらう……？

　ダメだ。ダメに決まっている。そんな頼み、異界生物フリークスが聞いてくれるわけがないとか、そういう問題じゃない。

　何のためにここまで逃げてきたと思ってるんだよ。

　何のための犠ぎ牲せいだったんだよ。

　自分はここで、こうして息をしている。手傷はいくらか負っているけれど、さいわい足の怪け我がは軽い。右足を少し捻ねん挫ざした程度だ。身を守るための武器だって、すべて失ったわけじゃない。まだやれる。やれる？　何をやれるって……？　知らないよ。そんなの知らない。でも自分にできることが何もないわけじゃな

い。万ばん策さく尽つきたなんて口が裂さけても言えない。

　だって、生きている。生きのびたんだから。

　気力だけだ。気持ちの問題だ。もう何をやっても無む駄だな気がする。それで身体が動かない。目に焼きついている圧あつ倒とう的な力が、恐るべき数の暴力が、植えつけられた恐怖が、心を立ちすくませている。大丈夫だ。平気だ。なんともない。そんなふうに否定したところで無駄だ。受け止めろ。現実をそのまま認めるしかない。

　震えだした自分の身体を、両腕できつく、きつく、抱だきしめる。

「怖い……怖い……怖い……怖い……怖い……怖い……怖い、怖い、怖い、怖い」

　直面している事態は問答無用で最悪だ。神を向こうに回したときよりも絶望的だ。有効な打開策なんてない。とりあえず現時点においては。じゃあ、いつか道が開ける？　とてもそうは思えない。この状況下では、どんな楽天家でも明るい未来を夢見ることはできないだろう。本当にそうか？　悪魔をふくめた異界生物フリークスどもが地上を席せつ巻けんしようとする。そうなれば当然、人間たちは反はん抗こうする。せざるをえない。各国が組織的に、必死に抵抗すれば、むざむざと負けはしないだろう。本当に……？

　あの悪魔。七本の剣けんを背負った青い肌はだの剣舞のメンチド・大公爵ハイヴエリオン。タイダル・クライシズ。サフィニアたちの魔術がまったく効かず、その剣は魔ま獣じゆうと化す魔ま剣けんだった。しかも、やつが最強の敵とはかぎらない。あんなやつと同等、もしかしたらあれ以上の化物がこの先現れるかもしれない。ひょっとしたら、もうどこかで猛もう威いをふるっているかもしれない。悪魔だけじゃない。とんでもなく大きな贄の園の住人たちもいた。他の異界生物フリークスども━たとえば、下等蜥蜴人や蜥蜴人の軍勢はどれくらいの規模を誇ほこっているのだろう。どう考えても数百ではきかない。千か。万単位か。人間たちに勝ち目はあるのか。防ぎきれるのか。まともに戦えるのか。

　控ひかえめに、ものすごく控えめに言っても、かなり、とてつもなく難しいだろう。マチルダだの、踊り羊だの、超賢者モーグだの、その弟子だの、とっくに人間を辞めて別の存在になってしまっ

ている魔術士たちは別かもしれないが、まともな人間はきっと立ち向かう気にさえなれない。

　それでも国を、故郷を、家族を、恋人を、友人を守るために、剣を手にとって雄お叫たけびをあげ、己おのれを奮い立たせて敵を迎え撃うつ勇ゆう敢かんな者もいるかもしれない。しかしその勇気で一いつ矢しを報むくいても、彼らは結局、敵に蹂じゆう躙りんされるだろう。

　守るなんて無理だ。

　敵の全体像を把は握あくしているわけじゃないから明確な根こん拠きよはないけれど、まず不可能だと思う。あんな敵から町や国を守るなんてできっこない。

　だったらどうする？　何ができる……？

　逃げる。たった一つしかない命をつなぐために、逃げて、逃げて、逃げつづける。

　いつの間にか身体の震えは収まっていた。何のことはない。自分自身にできる唯ゆい一いつのことを、自分はしてきたし、これからもするしかない。それだけのことなのだ。

　水すい筒とうをとりだして口をつけた。水を飲んで、味よりも滋じ養よう分重視の練り乾かんパンをかじる。少し薬臭くさくてもそもそしたまずいパンを咀そ嚼しやくすることに集中していると、次し第だいに気持ちが落ちついてきた。──行ける。

　立ちあがってあたりを見渡す。うずくまる者たちの数は、ぱっと目に入っただけでも十二、いや、十三人。大半がラフレシア第三帝てい国こく軍の軍服を着ている。誰もこっちを見ない。精も根も尽き果てているのだろう。だから何だ。知ったことじゃない。僕は生きる。死んでたまるか。生きてやる。

　そして、仲間を捜さがさないと。

　こんな自分が生きのびている。きっとみんな無事だ。必ず見つけて合流する。全員と。すべてはそれからだ。やってやる。

「よし」自分自身に気合いを入れて、足を前に踏みだそうとした。その矢先だった。ＹＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ

ＥＳＨというような咆ほう哮こう──そう、獣けものか何かの叫び声が暗い森に響ひびき渡った。獣……？　違う。そうじゃない。敵。

　敵だ。

　打ちひしがれていた逃とう亡ぼう者たち、そのうちの一部が短い悲鳴をあげた。立つのもそこそこに駆かけだそうとする。何だ何事だと首をめぐらす者もいる。敵はどっちだ。どこからくる。遠くでちらちらと光が踊っている。南のほうだ。南。自分が今、南だと思っている方角は本当に南なのか。わからないが、とにかく敵は南だと見なしている方向からくる。ＹＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＳＨＨＨＨＨＨ。ＹＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＳＨＨＨＨ。胸をかきむしりたくなるような不ふ穏おんで不快な声だ。どんどん近づいてくる。足音も聞こえる。それは馬ば蹄ていの音に似ている。一いつ匹ぴき二匹じゃない。もっといる。

　必死に地面を蹴けった。少しやわらかくて、下草が生おい茂しげっていて、走りづらい地面を。あっという間に息が切れた。木の根か低木の枝か何かに足をとられ、転びそうになる。なんとか持ちこたえて走った。でも引き離せない。ＹＥＥＥＳＨ。ＹＥＥＥＳＨ。ＹＥＥＥＳＨＨＨＨＨ。声が近い。近いよ。もうかなり近い。速いんだ。敵の足が速すぎる。

　駆けながら振り返ると、闇の中にそれらしい姿が見えた。馬か。胴どうにランタンのようなものをいくつか吊つるしている。騎き馬ば。いや、あれは人間じゃない。あたりまえだ。人間のわけがないし、近い。本当に近い。おそらく十メーテルくらいしか離れていない。声を出してしまいそうになって口を押さえる。まだ気づかれていないかもしれないのだ。希望的観測だろうか。たぶんそうだ。敵は接近してくる。すごい勢いで。──おかしい。

　いくらなんでも近すぎる。すぐ後ろにいる。そんな気がする。まるで獲え物ものを追う犬みたいな息づかいが聞こえるのだ。

　とっさに横っ跳とびすると、何かが右足をかすめていって、それはすぐに反転した。暗闇の中で青く光る二つの目。四つ足の生き物──異界生物フリークスだ。見たことがない。悪魔か。

　そいつが飛びかかってくる。よけられないと思った。だから両りよう腕うでで顔をかばいつつ前に出た。激げき突とつ。吹っ飛ばされたが、咬かまれてはいない。起きあがりながら剣を抜いた。く

る。やつが。また躍おどりかかってくる。「──っ……！」

　反射的に剣を出したら偶ぐう然ぜん、当たった。相手はキュオンッと鳴いて地面に叩たたきつけられる恰かつ好こうになった。今だ。殴なぐれ。「んぁ！」殴れ、もっとだ。殴れ。「あぁ！」もっと、もっと殴れ。「あぁっ……！」動かなくなるまで殴れ。──いや。

　冷静にならないと。

　思いなおしたときにはもう新手が迫せまっていた。騎馬みたいなやつだ。腕が四本ある人間と馬が融ゆう合ごうしたような姿をしている。悪魔。きっとこいつも悪魔だ。

「％＆％×＄＃＋＊＃＝￥％＆＊××××××」四腕人馬悪魔は何か言葉らしきものを発しながら突っかかってくる。でかい。犬みたいなやつとは大きさが違う。違いすぎる。それに、四本の腕にそれぞれ槍やり状の武器を持っている。

　その槍が、くる。無我夢中だった。地面に身を投げだしてなんとか初撃をよけ、とっさに木こ陰かげに逃げこんだ。やばい。やばすぎる。あんなやつとまともにやりあって勝てるわけがない。しかも、敵はやつだけじゃない。聞こえる。あの息づかい。横合いから犬みたいな悪魔が突進してきた。さっきの悪魔犬とは別のやつだ。慌あわてて背にしていた木を回りこむようにして身をかわすと、そいつは木に衝しよう突とつした。──しまった。

　まずい。こっちは正面だ。迂う闊かつにも四腕人馬悪魔の正面に出てしまった。

「＆＄＃＋％＊＃＆×××××」「──っ……！」槍だ。やつは何か叫んで槍を投げつけてきた。同時に二本。もうダメだ。そう思いながらも身体からだは勝手に動いた。右でも左でも後ろでもない。しゃがんだ。左肩のあたりに重い、重すぎる衝撃。だけど直撃じゃない。槍は突き刺さらなかった。左肩の肉が削けずられただけだ。でも地面に左手をついた瞬間、意識が飛びかけた。痛い。痛いって。ひどい痛みだ。このぶんだと、肉だけじゃなくて骨までいっているかもしれない。

　やつは残り二本の槍を投とう擲てきしようとしている。歯を食いしばって逃げようとしたら、右の脛すねを咬まれた。悪魔犬の仕し

業わざだ。やばい。引きずられる。

「＄％＋＆＊＋＄×××」四腕人馬悪魔が大声を出すと、悪魔犬は動きを止めた。といっても、右脛は咬まれたままだ。

　左足で悪魔犬の鼻はな面づらを蹴っ飛ばす。それで悪魔犬みたいなやつは少し怯ひるんだが、別の悪魔犬が左腕にかぶりついた。痛くて声も出なかった。身体よりも心が、魂が、引きちぎられて持っていかれそうだ。

「％＆×××」四腕人馬悪魔は二本の槍を振りかぶりながら、そのまま動くな、とでも言ったのだろうか。悪魔犬どもは従った。こいつらはたぶん、あいつの手下なのだ。悪魔犬は見た目のとおり猟りよう犬けんで、四腕人馬悪魔は狩人かりゆうどなのだろう。標的は人間だ。人間はもはや狩られる獲物でしかないのだ。

　槍が飛んでくる。

　与えられた選せん択たく肢しは二つだけだ。

　目をつぶって死ぬか、開けたまま死ぬか。

　マリアローズは目を閉じなかった。ルーシー・アッシュカバードのように。

　槍が、迫りくる槍が、二本とも、ほぼ同時に──からめとられた。

「……え」

　黒い管だった。

　数十本、それ以上の黒い管が、雨というよりも濁だく流りゆうのように降ってきて、二本の槍をほとんどのみこんでしまった。「──やっと見つけた！　マリア……！」

　まさか、暗黒の翼を羽ばたかせて夜の空を飛びまわり、ずっとマリアローズを捜していたのか。あいつのことだから、きっとそうなのだろう。そしてとうとうマリアローズを発見し、間かん一いつ髪ぱつのところで救ってくれた。

　今まで何度、同じようなことがあっただろう。

　数えられない。数える気にもなれない。

「よくもマリアを……！」

　身にまとう黒衣はあちこち裂けて破れている。暗黒の翼もぼろぼろだ。それでもあいつは鋭く急降下してきて、四腕人馬悪魔を蹴り倒しながら、無数の黒い管──アルカーディアで悪魔犬どもを串くし刺ざしにした。四腕人馬悪魔はすぐに起きあがろうとしたが、果たせなかった。あいつは泣き叫ぶ短剣を一いつ閃せんさせて、悪魔の首をやすやすと両断した。「──これが犯おかした罪にふさわしい報いだとは、決して思わないことだ……！」

　マリアローズは起きあがろうとしたが、左肩やら右脛やらが猛もう烈れつに痛んで、座る体勢になるのがやっとだった。

「マリア」

　あいつはアルカーディアを引っこめて翼を畳たたみ、静かに近づいてくる。もうすぐそばにいるのに、マリアローズにふれようとせず、ひざまずくように片かた膝ひざをついた。

「──マリア。大丈夫じゃないネ、マリア。くそ。なんてことだ。ボクがもう少し早くキミを見つけていたら、こんなことには……」

　マリアローズは首を横に振る。違う。そういうことじゃないんだ。そういうことじゃ。でも、だったらどういうこと……？　わからない。わからないよ。いろんなことがあって、すごく疲れているし、ひどく痛いし、もうよくわからない。

「マリア……」

　あいつがようやく右手をのばしてきた。

　頰ほおに、その指先が届く。

　反射的にまた首を振って、手を振りはらってしまった。

　それでいて、マリアローズの右手は破れた黒衣の端はしをつかんでいる。

　ほとんど溺おぼれているようなものだから、すがるしかなかったんだ。

「……ごめん」

　謝りながらも、マリアローズは手放すことができずにいる。

「いや……」

　あいつは──アジアンは、アジアンらしく、迷ったみたいだ。

　ためらって結局、いつものように引きさがる。──違った。

　アジアンはそっとマリアローズの右手をとって、それからゆっくりと──そう感じられたけれど、実際にはそれなりに素す早ばやかったのかもしれない、だって逃げる暇ひまもなかったのだから──マリアローズを抱だきよせた。

　左肩はほとんど痛まなかった。どうやら、アジアンはマリアローズの怪け我がの具合を見てとっていて、その部分をかばうようなやり方をしているらしい。そんな芸当が可能なのか。不思議でしょうがない。でも、アジアンは実際、それをやってのけていた。

「痛いよ」とマリアローズは呟つぶやくように言った。たいして痛くないのに。

「すまない」アジアンはそう言っておきながら、マリアローズを離そうとしない。

「……痛いんだよ」マリアローズは右手でアジアンの背中を叩いた。

　そして、しがみつく。

　さっきまで翼が生えていたその場所は、どこまでもなめらかな裸の背中だった。

　　　　　同日　クライド大山脈

　目が霞かすむ。身体が重い。身体だけじゃない。軽いはずの大たい剣けんが重い。これほど重量を重量として、いや、それ以上に感

じたことはかつてない。

　限界なのか。そんな考えが頭をよぎった。何度も、何回も。そのたびに打ち消すことすらもはや億おつ劫くうだ。

　どれだけ斬った。

　とにかく斬った。

　斬って、斬って、斬りまくっても、敵はあとからあとから押しよせてくる。やつらは泥どろのようだ。尽つきることのない泥の流れが、彼をのみこもうとする。彼はそれを振りはらうように斬る。払はらいのけるように斬る。斬って遠ざけようとする。だが、相手は泥だ。彼の全身が泥の飛ひ沫まつを浴びて汚よごれている。重いのはこの泥のせいか。重いし、ひどく生なま臭ぐさい。眩暈めまいがする。

「ディオロット……！」

　名を呼ばれ、真しん紅くの姿を認めて、昼間なのかと思う。どうやら日が出ているらしい。さっきまで夜だった。そんな気がする。気のせいだろうか。

　りりぃは禍まが々まがしく反り返った双そう剣けんで敵を撫なで斬りにしながら、装そう甲こうに覆おおわれた顔をこっちに向けている。彼は呼吸をするように大剣を振って敵を押しのけ、ああ、と返事をした。妙だ。声を出したつもりなのに、自分の耳には聞こえなかった。

「──ひどいざまだ、貴様は下がっていろ！」

　おもしろいことを言うやつだ。俺たちは下がっているじゃないか。これは撤てつ退たい戦だ。退ひいても退いても敵は追ってくる。あのときとは違う。あのときとはいつのことだろう。ずいぶん昔の話だ。

　あのとき──俺は一人だった。自分以外、何もいらなかった。自分自身も、たぶんどうでもよかった。お前はどうだった、りりぃ。なんで飽あきもしないで俺に突っかかってきた。お前は何に執しゆう着ちやくしてるんだ。俺は？　俺は──そうだな。俺は。

　彼は歯を食いしばった。

　たしかに、彼とりりぃは撤退戦を強いられている。それは主に彼のせいだ。

　しばらく前から、彼はとろとろ歩く程度の速さでしか移動できない。一歩進むよりも、大剣を振るうほうがまだ楽なくらいだ。これは疲ひ労ろう感かんでも眠ねむ気けでもない。彼の身体から、彼自身が離れようとしている。何か見えない力によって引き剝はがされてしまいそうなのだ。彼はそれにあらがっている。

　今この身体を失うわけにはいかない。俺は守りたいものを守ることもできていない。

　それどころか見失って、ここには俺とりりぃしかいない。

「──ッ……！」彼は息をつめて大剣を振りまわし、泥のかたまりみたいな敵を二、三匹びきいっぺんにぶった斬ってから、一度目をぎゅっとつぶって開く。

　泥なんかじゃない。妙に頭がでかくて灰色の肌はだをした小こ鬼おにのような悪あく魔まだ。見るからに雑ざ魚こだが、数だけはやたらと多い。どこでもかしこでも番つがって虫みたいに卵を産む。卵はあっという間に孵かえって、土でも糞ふんでも何でも喰くらってめきめき育ち、小鬼の姿になる。鼠ねずみほどの知能も持たない最下級の悪魔で、使い捨てされる使いっ走りだ。俺はこんなやつらに追いまわされているのか。笑えない話だ。そうだ。笑っている場合じゃない。笑うよりも他ほかにやることがある。「──おおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

　彼は大剣の波打つ刃やいばではなく、平ひらの部分で、小鬼どもを次から次へと潰つぶし飛ばした。

「ようやく目が覚めたか！」りりぃが小鬼の列を斬り破りながら言った。

「まあな」彼は短く答えつつ小鬼の波を押し返す。まだだ。

　今はまだ、この身体を手放すわけにはいかない。

　はぐれた仲間を見つける。一人残らず絶対に捜さがしだす。そのためには、この身体が必要だ。今、失うわけにはいかない。

　それにしても、きりがない。小鬼の群れはどれだけ叩たたいて打

ち減らしても際限なく押しよせてくる。小鬼の死し骸がいは小鬼の餌えさだ。連中は同族の屍しかばねを喰らいながら、彼やりりぃに飛びかかってこようとする。もしかすると、小鬼どもに個の意識などないのかもしれない。小鬼どもはその集合が一つの生命体で、一匹一匹の小鬼は細さい胞ぼうのようなものでしかないのかもしれない。細胞一つ一つの運命を気にかける者などいないように、それぞれの小鬼がいかにむごたらしく死のうと共食いしようと、小鬼どもは歯し牙がにもかけないのだ。絶滅しないかぎり、全体としての小鬼は小鬼としてありつづける。

　細胞のごとき小鬼どもを片っ端ぱしから潰すというむなしい作業は、だが、唐とう突とつに中断するしかなくなった。

　不意に小鬼の波が止まったのだ。次の瞬間には引きはじめた。

「『十じつ戒かい』という映画を観たことはあるか」りりぃが呟くように言った。

「いや」彼は首を振った。ひどく息が乱れている。「聞いたことしかない」

「骨こつ董とう品みたいな映画だったが、海が割れるシーンが見事なんだ。ふと思いだした」

　その映画──しかし、映画とは懐なつかしいにもほどがある──についてはよくわからないが、りりぃの言いたいことは理解できた。小鬼どもはただ後退してゆくだけではない。ちょうど彼とりりぃがいるあたりを境にして、左右に分かれながら退いてゆく。海が割れる。そんなふうに喩たとえられなくもない眺ながめだ。

「気をつけろ」りりぃは装甲に覆われた顔を一瞬だけこちらに向けた。「何かくるぞ」

「ああ」彼はうなずいて、低く笑う。

「……何がおかしい」

「お前はいつからそんなに親切になったんだ」

「貴様が不ふ甲が斐いないからだ！」

「わかるような、わからんような理由だな」

「貴様こそ、その身体からだはいったいどうなっている。見かけが変わっていないから気づかなかったが、完全に別物なのか」

「おかげで借りを作った」

「では、やはり捕とらえられたのだな」

「そうだ」

「馬鹿め。己おのれの力を過信して、単独で突とつ出しゆつするからだ」

「俺に勝てるやつがいるとは思わなかった」

「だが、負けた。それにもかかわらず、お前は囚とらわれ、生かされた。神の──〝無限のダイアデルタ〟の心臓を持つお前を、殺すことまではできなかったというわけか」

「みたいだな」

「そして、逃にげだすために、お前は何者かの力を借りた。誰だ。悪魔でなければ、神か」

「ソオルだ」

「かつての〝光輝神ルキフアエル〟──〝彷ワ徨ンえダるリ星ン神グ〟ソオル。離り反はんした管理者の一人だな」

「俺は、お前やジュジと違って、そのへんのことはよく知らん」

「やつの名を出すな。──でも、厄やつ介かいだぞ、ディオロット。管理者たちの目的は結局のところ、この世界の維い持じだ。彼らはもともとそのために生みだされたのだからな。しかし、離反者は何を企たくらんでいるのか知れたものじゃない。最初の神殺しで、打ち破る者のお前を利用しようとしているのは、まず間違いないだろうが」

「お前は否定するかもしれんが、やっぱり似てるな」

「何の話だ」

「お前とジュジ。似たような話をやつがしてた。──いや、あれは夢

だったか」

「……大丈夫なのか、お前」

「どうだかな」彼は大剣を担ぐように構えて腰を落とした。

　逃げろ、と本能が言っている。同時に、逃げても無む駄だだ、とも。りりぃは感じていないのか。感じていないとしても、不思議ではない。あのときの彼もそうだったからだ。

　引き返してゆく小鬼どもの間にできた一本の道を、一人の男が──十五かそこらの、まだ成熟していない、中性的な雰ふん囲い気きさえ漂ただよわせている、やけに見目形の美しい、凛りんとしているくせにどろっとした退たい廃はいを内包している容姿の若い男が、にじむような黒々とした瞳ひとみを光らせ、漆しつ黒こくの髪を揺らして歩いてくる。

　男は、ゆったりした、所々に切れ込みが入っていて肌がのぞいている黒と紫むらさきの衣を身につけているが、どういうわけか裸足はだしだ。武器らしいものを携けい帯たいしているようにも見えない。口くち許もとにはかすかな笑えみさえ浮かべている。

　あからさまに異様ではあるが、見る者にまったく脅きよう威いに類するものを与えない。たとえば、男が人間の街をうろついていたとしても、目をとめる者はもちろんいるだろうが、数秒間、視線を向けて、それで終わりだろう。

「あれは……何ものだ」りりぃの声は戸と惑まどいでわずかに曇くもっていた。あれを警戒しているだけでも、さすがと評すべきだろう。

「あいつは──」彼が言う間に、男が足を止めて口を開いた。

「やあ。初めましてと、久しぶり」

「……お前は」りりぃは一瞬で今にも飛びだしそうな体勢になった。「何だ」

「まず名を教えよう」男は笑みを深めた。深まれば深まるほど、その整いすぎた顔に底のない穴が広がってゆくかのように思われる。空くう虚きよでおぞましい笑みだった。

　それにしても、近い。

　いつの間にかここまで接近を許していたのだ。そのことに、りりぃだけではなくて、男を知っている彼も気づいていなかった。

「私はアーマン」

「アーマン……だと」りりぃは装甲の奥で息をのんだようだ。

「そう」アーマンは胸に左手をあてて首を少し傾かたむけてみせた。「名の次に、私の立場を教えよう。私は悪魔大公グランヴエリオン。簡単に言えば、地じ獄ごくで二番目に偉い」

「帝王の息子か」

「うん」

「──貴様が」

「そう。見えないと、よく言われる。地獄でも。さあ、次だ」アーマンは右手を横に差し向けた。唐突だった。何の前まえ触ぶれもなく現れたそれを、アーマンの右手が握にぎりしめた。

　それは黒い。形はしっかりと定まってはいない。黒い炎ほのおの柱のごときものだ。

「私の力を教えよう。だが、口で説明するよりも、見せてしまったほうが手っ取り早いと思わないか。私はそう思う」

「よけろ、りりぃ」彼は息を吐はいた。「あれは防げん」

　りりぃが返事をするより早く、アーマンが黒炎の剣を斜ななめに振りおろした。剣。いや、それは剣ではない。炎でもないが、黒い炎のごとき何ものかなのだ。無から生じて定まった形を持たず、意思あるもののようにうねり、のびて、襲いかかってくる。音もなく。

　──無音。

　どこまでも静かに、圧あつ倒とう的な速度で迫せまってくるそれを、彼はかつて己の剣で受けようとしたが、かなわなかった。それは彼の剣をすり抜ぬけて彼をとらえた。彼はあやうく木こっ端ぱ微

み塵じんにされるところだった。同じ失敗は繰くり返さない。

　彼は重い身体を無理やり横っ跳とびさせる。りりぃは彼とは反対側に跳ちよう躍やくした。黒炎の剣は胴どう回まわり五メーテルほどもありそうな長大な黒炎をまとう巨おお蛇へびと化して、その身を地面に打ちつけめちゃくちゃにえぐるだけでは飽き足らず、大いにのたうって大地を震わせかきまわす。彼はフライパンの上のポップコーンみたいに陽気なダンスを踊おどる羽目になった。それはあまりにも陽気すぎる、自分では制せい御ぎよできない滑こつ稽けいな踊りだ。

　ふと彼は思う。俺は餓が鬼きのころポップコーンが好きだった。だからといって、ポップコーン同然の扱あつかいは御ご免めんだ。

　彼は体勢を立てなおそうとする。地に足がつかない。

　正直、参った。勝てそうな気がまったくしないどころか、あと一分持ちこたえる自信さえない。

　今さらながらに自覚する。彼は両りよう翼よくをもがれた鳥だ。飛べない鳥は、囲われて飼われ餌を与えられでもしないかぎり、生きのびられない。

「おもしろい……！」彼とは違い、人工の、しかも手製の翼で力強く羽ばたくことのできるりりぃが、嬉き々きとして叫びながらアーマンめがけて突進してゆく。「━お前は行け、ディオロット……！」

「あらためて初めまして」アーマンは黒炎の剣を一瞬で手許に引きよせ、鞭むちのようにしならせてりりぃを打ちすえようとした━が、りりぃは脚きやく部ぶの装そう甲こうをわずかに展開してそこから何か輝かがやく粒りゆう子しを放ち、滑すべるように、とんでもなく強い力に押し流されるように、左に、真横に移動する。とてつもない速さだった。何人、何十人ものりりぃが横一列に並んでいるように見えた。残像か。

　アーマンは顎あごを上げて目を細め、唇の端はしを舌先で舐なめた。「名を訊きいておこう」

「知りたくば」りりぃは右斜め上に跳んで、そこから流星のごとく急降下する。「少しあたしにつきあえ……！」

　アーマンは迫りくるりりぃを物もの憂うげに見上げたかと思うと、いきなり誰かにぶん投げられたかのような不自然な動きで──こっちに、彼のほうに、飛んできた。

　アーマンが頭から、というより顔から突つっこんでくる。やつは少し首を傾かしげてニタニタ笑っている。彼はその場から動けない。間に合わないことがわかっているからだ。迎むかえ撃うつしかない。この大剣で。

　彼はそうしようとした。

　その前にアーマンが黒炎の剣を振るうだろう。アーマンのほうが早く、速いだろう。

　予測がついたところで他ほかにどうしようもない。彼は破れかぶれだった。

「あたしに──」りりぃが彼を救ったのだ。

　りりぃはアーマンに追いすがって双剣を振るった。アーマンはりりぃの両腕とほとんど一体化している二振りの剣をくねくねとすり抜けてよけ、おかげで直進軌き道どうの変へん更こうを余よ儀ぎなくされた。

　今だ。

　彼は身を翻ひるがえさなくてもいいぎりぎりの方向、左斜め後方へと駆かけだした。

　りりぃが叫ぶ。「つきあえと言っている……！」

「しょうがないな」アーマンがそう応じた声は、かろうじて彼の耳に届いた。それが最後だった。

　失望も屈くつ辱じよくも感じない。アーマンはそれくらい圧倒的な相手だった。彼は脇わき目めもふらず、何も聞かず、何も考えずに身体を進ませることに集中した。それは今の彼にとって、全精力を傾けなければ成し遂とげられない大仕事だった。

　彼はひたすら逃げた。

九巡月七番日　マグルーの緑野

　同居人として悪くないところ。まず彼は静かだ。喋しやべらないどころか動かない。まあ動かないというより、動こうにも動けないのだが。他に何かあるだろうか。彼女の頭脳をもってしても思いつかない。

　では悪いところ。こっちに気を遣つかってくれているわけではないだろうが、彼は身じろぎ一つしないわけだし、いるだけで邪じや魔まくさいという点は大目に見るべきだろう。でも、臭においがひどい。これだけは、彼のせいではないとしても、やはり挙げておかざるをえない。

「──どぉ？」と声をかけられた。

　どうでもいいのだけれど、この女はいつまで裸でいるつもりなのか。正確にいうと、ショーツだけは穿はいているのだが、ほとんど全ぜん裸らのようなものだ。そんな恰かつ好こうともいえないような恰好で、狭せまいからしょうがないとはいえ、操縦席に突っ伏ぷしている彼の上に座っていて、気持ち悪くないのだろうか。──操縦席。

　果たしてその呼び名が正しいのかどうか。わからないが、とりあえずそうとしか呼びようがない。

　彼女たちはラフレシア第三帝てい国こく軍の自走式戦車に仮住まいしている。

　その戦車は窪くぼ地ちに嵌はまりこんでいて、外側はこんがり焼けていたが、操縦席が一つと簡易座席が一つあるだけの狭い車内には、それほど損傷がなかった。ただ、操縦士を務めていたらしい男は、どこかに強打したらしい頭部と顔面から血を流し、操縦棒とおぼしき機器にしがみつくようにして息絶えていた。

　魔力も体力も使い果たして、進退窮きわまっていた彼女たちが運よく、偶ぐう然ぜん発見した避ひ難なん所じよが、この戦車の中だった。

「いいかげん何か着たら」

「着るって、何を？」

「その素す敵てきな彼が着てるものでも貸してもらえばいいんじゃないの」

「ん～」女は下した敷じきにしている彼をまじまじと見た。「趣しゅ味みじゃにゃいにゃ～」

「どっちが？　顔？　それとも服？」

「どっちも」トモヨは右足で彼の後頭部を愛あい撫ぶするように踏みにじった。「トモヨさんのお眼鏡にかなうレベルにはぁ～、まぁ～ったく達してないってかんじ？　てゆ～かぁ、眼鏡なくしちゃって、すっげーショックなんですけど」

「知らないわよ……」

「服は正直なくてもいいんだけど、眼鏡はねぇ～。トモヨさん的にないよりあって欲しいアイテムナンバーワン的なアレだし？　あぁ～カンダヴァの眼鏡屋さんもなくなっちゃったのかにゃ～。あそこいい職人さんがいて、頼めばどんな眼鏡でも作ってくれたのに」

「眼鏡より、もっと他に気になることはないわけ」

「いや、なくもないよ？　トモヨさんはぁ～、あんたと違って大人の女だしぃ？　恋の一つや二つや三つや四つや五つや六つや七つや八つ──」

「はいはい。たくさんね。とにかく、たくさん」

「で、甘すぎだったり、甘酸っぱかったり、ちょおっぴり苦かったりする恋の思い出が、いっぱい、い～っぱい、あるわけだしぃ？　気になる子の十人や二十人や三十人──」

「もういいわよ、それ」

「あんたはどうなの、ベティ」

「あたし？」ベティは少しだけ眉まゆをひそめ、小さな簡易座席を分けあって座っているサフィニアを一いち瞥べつした。

　サフィニアは目をつぶって眠ねむっているのか、瞑めい想そうし

ているだけなのか。いずれにせよ、まるで死んでいるかのようにぴくりともしない。

「──どうだっていいでしょう、あたしのことは。あんたには関係ないわ」



「べつにそこって、頑かたくなになるトコじゃなくない？　単なる会話のネタなのにさぁ～。つまんねぇ～女」

「あんたを楽しませてやらなきゃならない理由が、どこにあるのよ」

「トモヨさんはもう休憩ばっちりで退屈なの。わかるぅ？　トモヨさんはあんたの姉弟子なんだから、楽しませるくらいのことはして当然じゃない？」

「あたしも十分休んだわ」

「……わたしも」サフィニアが目を開けた。「……大丈夫……です。いけます」

「そう」ベティはサフィニアの髪かみを指で梳すいた。「じゃあ、そろそろ出ましょうか」

　本当は、サフィニアだけではなくて、ベティも、そしてトモヨも、まだまだ万全には程遠い。彼女たちは文字どおり死力を尽つくしたのだ。それも、戦いに勝つためではなくて、ただ生き残るために。

　魔力が完全に枯こ渇かつして、ごくごく初歩的な魔術すら使えない。そんな状況に追いこまれた魔術士は、ときに魔術を忘れてしまうことさえある。これはおそらく自衛のためで、それ以上、魔術を使えば心身ともに崩壊してしまう。その破局を避さけるために、脳が魔術の行使を強制的に制止する措そ置ちだといわれている。

　彼女たちは三人とも、ほぼそれに近い状態に陥おちいったのだ。

　復調を期するなら、十日、十五日、あるいはそれ以上、じっくりと心身を休める必要がある。可能ならば。現状では無理だ。望むべくもない。

　彼女たちは半日以上、戦車から出ていないが、車外の気配は伝わってくる。音がする。ときおり何かが戦車を乗り越えてゆく。騒さわがしくはないものの、静せい寂じやくには程遠い。

　敵は━異界生物フリークスどもは、おそらくエルデンが飛び去ったあとの大穴メガボロスから続々と、絶え間なく、今この瞬間も這はいだしてきて、刻一刻と人間たちの領土を侵おかしている。

　この避難場所は、連中の侵攻路の只ただ中なかに存在しているのだ。いつ敵に発見されるかわからない。そして、その敵が最悪の相手かもしれない。

「森を目指しましょう」ベティは腰に手をのばして魔術士の剣〝グリギュエンル〟にふれた。魔術に頼らず、節約しなければならないので、この剣で敵を斬きり伏ふせることになるかもしれない。「──タット大森林。平地よりはましだわ」

「……そう……ですね。仲間とも……もしかしたら、会えるかも……」

「他人をあてにするのも、こそこそするのも、トモヨさんの好みじゃにゃいにゃあ～」

「じゃあ、あんたは敵のど真ん中に突っこんだら？」

「突っこむよりぃ～、突っこまれたい気分？」

「なんでいちいち下ネタに持ちこまないと気がすまないわけ」

「欲求不満なのかにゃあ～」

「知らないわよ……」

「……あの……行くなら、行きませんか……？」

「あぁ～。それなら、サフィニア、先に行っちゃっていいよぉ～。によによによ」

「何、その気持ち悪い笑い方。ていうか、こういうとき妹分を先に行かせる鬼き畜ちくな姉弟子がどこにいるのよ」

「ここにいるけどぉ？」

「いいわ。あたしが先に出るから」

　トモヨは目を細めて、ふふん、と低く鼻を鳴らした。「ゆぅ～と思った」

　ベティの中に殺意が芽生えたが、この露ろ出しゆつ狂きようの馬鹿女を叩たたき殺すだけの元気があるのなら、とっておいてこれか

らの逃とう走そうに活用するべきだろう。きっとベティはそう考えてこらえるだろうというところまで、トモヨには見み透すかされているに違いない。そのことを考えると腹立たしいが、相手にしたら図に乗るので無視するにかぎる。

　ベティは元操縦士の同居人に胸中でさよならを言ってから、這うようにして戦車後部に移動し、ハッチを開けた。そっと開けたいところだったが、金属製のハッチはかなり重量があって、滑なめらかに開け閉めできるような代しろ物ものでもない。一気に開けて地面に飛び降りると、近くを歩いていた鳥頭の猿えん人じんといった姿の悪魔がギャアギャア騒ぎだした。鳥猿人悪魔は小生意気なことに鎖くさり帷子かたびらを着て槍やりと盾たてで武装している。ベティは舌打ちをしながら鳥猿人悪魔の懐ふところに飛びこみ、蹴け倒たおして馬乗りになると、抜ぬいたグリギュエンルを両手持ちしてやつの眉み間けんにぶちこんだ。すぐに飛び離れ、駆けよってきた別の鳥猿人悪魔に体当たりをぶちかましてやったら、肩が痛くて頭にきた。

　ちらっと戦車のほうを振り返る。

　トモヨの馬鹿は戦車の上に腰かけてにやにやしているが、サフィニアは蛸たこに犬を足して二で割ったような悪魔を杖つえで殴おう打だしまくっていた。

「トモヨ！　あんたも……！」ベティは叫びつつ体当たりで倒した鳥猿人悪魔に躍おどりかかって、とどめを刺した。そこにまた別の鳥猿人悪魔が槍を突きだしてきたので、間かん一いつ髪ぱつ、転がってよけた先に、鳥猿人悪魔の新手が立ちはだかっていた。

「くっ……！」ベティは下がる。跳とび下がる。そうして鳥猿人悪魔どもが繰くりだす槍を、剣をかわす。「──西へ……！」

　西に目を転じても、ここからだとまだタット大森林の姿は見えない。何しろ現在地が明確ではないから、はっきりしたことは言えないが、そうとう距きょ離りがあるということだ。生きてたどりつけるだろうか。たどりついたところで、一息つけるという保証はない。そもそも、地上にはもはや安全地帯など存在しないのかもしれないのだ。たとえ今は安全でも、いずれは異界生物フリークスたちの侵略を受ける。人間たちは追い立てられ、狩られるしかないのかもしれない。これは悲観論だろうか。そうとは思えない。

なぜベティたちがここにいるのかといえば、とどまって、戦ったからだ。

彼女たちには矜きよう恃じがあった。魔術には世界を変える力がある。魔術は世界を滅ぼすことさえできる。閃せん光こうの魔女や踊り羊や超賢者、古くは魔導王たちなど、先せん駆く者の力にはまだ及およばないかもしれない。それでも、上り詰つめれば、彼女たちもその境地に至ることができる。いやしくも魔術士たる者、その野心、気き概がいを持たずしてどうする。

彼女らは人間にとって最大、最強、最高の力である魔術の娘たちだった。自分たちの信念が正しいのならば、異界生物フリークスどもをはねかえすことができるはずだ。彼女たちはそうしなければならなかった。おそらく、彼女たちの上位者である超高位の魔術士たちも、そのつもりで戦っていたはずだ。負けるわけにはいかなかった。魔術は敗北しない。これは人類が生みだし、今日まで高めてきた究極の力なのだ。

しかし、この有様を見てみるがいい。悪魔は、異界生物フリークスたちは、我が物顔でこの地上を闊かつ歩ぽしている。閃光の魔女と踊り羊と超賢者、その弟子、当代きっての魔術士たちが、偶然なのか必然なのか、あの場面に居合わせた。それなのに止められなかった。

魔術は敗れたのだ。

彼女らは、魔術の娘たちは、みじめな敗残者でしかない。

いつの間にか、トモヨが先頭に立っている。その後ろにベティ、それから少し遅おくれてサフィニアがついた。三人の敗残者は、悪魔どもを引き連れるようにして駆かける。

悪魔の中にはとろくさいものもいれば、足の速いものもいる。引き離すことはできそうにない。それどころか、遅おそかれ早かれ追いつかれるだろう。その前に彼女たちは追っ手を一撃して怯ひるませ、いくらか時間を稼かせいで、また逃にげるのだ。

ベティは走りながら苦笑いとともに吐はき捨てる。「あまり分のいい勝負じゃないわね」

鳥猿人悪魔のような雑ざ魚こだけなら、なけなしの魔力を使いき

らない程度の魔術でうまい具合に一いつ掃そうする手立てを考えることもできるだろう。だが、ベティはある予感に駆られて振ふり向き、自分の勘かんのよさをほんの少しだけ呪のろうことになった。

　雑魚どもの後ろに、かなり体格が大きくて、どうやら全員、深緑色の甲かつ冑ちゆうを身にまとっているらしい、人間の兵士の一団めいた集団の姿がある。ここから見たかぎりでは、胴どう体たいの上に頭があって、腕は二本のようだが、もちろん連中は人間ではないだろう。おそらく悪魔だ。

　甲冑悪魔の集団は、鳥猿人悪魔どもを蹴け散ちらして迫せまってくる。

　鳥猿人悪魔のほうも、吹っ飛ばされたり蹴倒されたりしてはたまらないとばかりに散開しはじめた。

　甲冑悪魔は二本脚あしではなくて、四本とか五本とか、それ以上の脚を持っているようだ。蛸の、頭部の代わりに胴体が生えている。そんな恰かつ好こうをしていて、たくましい触しよく手しゆのような脚がうねうねせかせか動き、とにかく速い。数は、百や二百ではきかないだろう。

「逃げきれないわ」ベティは声に出して呟つぶやくことで、自分がまだ冷静だと確認した。走りながら呼吸を整えたいところだが、さすがに無理だ。このままだと最さい後こう尾びのサフィニアがまず敵に捕つかまる。それは避けたい。「──ここでやるわよ……！」

　足を止めて振り返り、大きく強く息を吐いた。

　サフィニアも倒れこみながらも後ろを向いて、杖の先を甲冑悪魔たちに向ける。

　精神集中は、ベティの頭の中にいるもう一人の彼女が維い持じしていた。魔術士衣のポケットから触しよく媒ばいをつかみだす。すぐさま唱えた。「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」少し遅れてサフィニアも同じ爆ばく雷らい索さくの呪じゆ文もんを詠えい唱しようした。

　間を置かずトモヨが黒魔術をつなげる。「怨Ｓｙ款冥Ｇｒｕｍ愛死雷」

　閃光の魔女が編みだした白魔術に対たい抗こうするつもりか、黒魔術なんてご大層な名で呼んでいるけれど、ただ独自に規定して実現化させた黒い要素精霊を用いているだけで、要素魔術と大差ないとベティは看破している。既き成せい概がい念ねん化することによって確固たる存在となっている既存の要素精霊を利用したほうが効率的に決まっているのだから、そうしないトモヨは愚おろかで意固地なのだ。

　ともあれ、数十の白い稲いな妻ずまと黒い稲妻が絡からみあうようにして突き進み、一瞬のうちに描えがかれて目に焼きついた軌き跡せきが消える前に、甲冑悪魔の集団を直撃した。前列の甲冑悪魔が折り重なってばたばた倒れたが、後ろの甲冑悪魔は前の同族を乗り越え、飛び越えて押し寄せてくる。ベティは寒気を覚えた。何だろう。この感覚は。怖いのか。甲冑悪魔の集団が。危機に直面して怖おぞ気けをふるった。それだけなのか。「……違う」

　ベティはグリギュエンルを抜きながら、また触媒をとりだした。この魔術を使ったら、魔力がやばいかも。いい。それどころじゃない。使い果たさないように、ぎりぎりのところでコントロールする。できる。やるしかない。やらないといけない。

　やつは、集団の中段あたりにいた一いつ匹ぴきの甲冑悪魔の背にしがみついていたようだ。そこからよじのぼるようにして身体からだを持ちあげ、甲冑悪魔に肩車をしてもらっているみたいな形になって、初めてその姿がベティの目に入った。

　見た目は人間と大差ない。白はく髪はつで、肌はだも透すきとおるように白く、赤い目をしている。やせっぽちで、あくまで人間的な基準ではあるものの、妙に覇気のない若者のようにも、極端に皺しわの少ない老人のようにも見える面おも差ざしだ。悪魔どもが身につけている甲冑と同じ深緑色の汚きたならしいぼろぼろの外がい套とうをつけて、斧おの槍やりのようなものを背に負っている──あの男。あれは危険だ。決して非合理な判断ではないと思う。人間から見れば異形というしかない悪魔たちに混じって、あのようなものがいる。それだけでも十分おかしい。絶対に警戒するべきだ。

　ベティは白髪の男をまっすぐ見すえ、触媒を握にぎりこんでいる左手の指をグリギュエンルの刃やいばに這わせた。「威鶯虞Ｇａｘｉｓ滅崇Ｄｅｕｘ嵐怒」

　雷らい獅じ子し。雷らい霆ていの槌つちが天から白髪の男めがけ

て打ち下ろされる。

　男は口を左右に押し開くように開けて、笑った。そう見えた。男はよけなかった。

　大気が引き裂かれる轟ごう音おんが鳴り響ひびき、大地が震える。巻きこまれて、七、八体の甲冑悪魔が弾はじけ飛んだ。男と一緒に直撃を食らった甲冑悪魔も、いくらかいたはずだ。

「……嘘」とサフィニアが呻うめくように言った。

「うぇ～……もしかして、とんだ化物ひいちゃったっぽい？」トモヨも口ぶりほど余よ裕ゆうがないことは明らかだ。「もぉ～籤くじ運悪すぎだってぇ～。いったい誰のせい……？」

「日ごろの行いが悪いのは、どう考えてもトモヨ、あんたでしょ」

「トモヨさんはエロスな善行積みまくりだよぉ？」

「何なのよ、エロスな善行って……」ベティは呆れてため息をつきながら、煙の中から悠ゆう然ぜんと歩みでてきた男を見つめていることしかできない。

　白髪の男は全ぜん裸らと成り果てていた。斧槍だけは担ぐように持っているが、着衣は雷獅子に残らず吹き飛ばされたようだ。

　痩そう身しんの素す肌はだに、赤紫色の不気味な紋もん様ようがみみず腫ばれのごとく浮きあがっている。

　生き残った甲冑悪魔どもは、男の後ろに列をなして次々と止まった。

「人間の魔術士ですかー」白髪の男は耳みみ障ざわりな声で、やけに丁てい寧ねいな共通語を喋しゃべった。「なかなかいい魔術でしたよ。あんなものをまともに浴びたら、普ふ通つうは死んでしまいます。私は死にませんけどね。実を言うと、私、死ねないんですよ」

「……お喋りな悪魔ね。しかも、いけしゃあしゃあとあたしたちの言葉を」

「何をおっしゃってるんです。これは私たちの言葉ですよ。正確に

は、選ばれた者のみが用いる貴族語ノーブルタンの一種ですけどね」

「あなたたちの言葉……ですって？」

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃないですかー」白髪の男は顔をゆがめ、肩を揺らして、ひぇっ、ひぇっ、ひぇっと笑った。「人間の魔術士たち。全員、女だ。私はね。人間の女にずっと興味があったんですよ。率直に言って、やりたぁーい。飽あきるまでやりまくりたぁーい。あなたがた、あくまで私から見て、ですが、けっこう器量よしだ。私の相手をしてくださいよー」

「Ａｍｉｄ澪」トモヨが返事をする代わりに魔術を発動させた。彼女らの師であるマチルダが創始した白魔術、その初歩の初歩、勾マガ玉タマ。無色透とう明めいの小さな球体が七つ、トモヨの周りに生じると、次の瞬しゆん間かん、白髪の男に向かって飛んでゆく。

「うひぃ」白髪の男は情けない声をあげて身をよじった。七つの勾玉のうち三つは男の身体に穴をうがち、二つはかすって肉をえぐっただけで、残りの二つは命中しなかった。

　男は自分の右みぎ腿ももと左腕、それから腹にあいた直径三サンチか四サンチほどの円い傷きず跡あとをざっと見て「うぅ、痛え」と呟いた。それらの傷だけではなくて、かすった跡からも赤黒い血液らしき液体が流れでている。──どういうこと……？

　ベティが雷獅子をお見み舞まいしても、男は平然としていた。それなのに、トモヨの勾玉は男を傷つけた。あんなものをまともに浴びたら、普通は死ぬ、と男は言っていた。自分は死なないが、と。──実を言うと、私、死ねないんですよ。

「まいったな」男はニタニタしながら斧槍を一振りした。いつの間にか、股こ間かんのものが怒ど張ちようし、反り返って天を衝ついている。その先端が口のように割れて、そこから蛆うじ虫むしの集合体みたいなものがせりだし、うごめきはじめた。「私は痛いのは嫌きらいなんだけどな。とんだお転てん婆ばじゃないですか。それも悪くないなー。いいないいなー。全員、身体がばらばらのめちゃくちゃになるまでやってやりますよ。いひひひひ。私は呪われカーシー・大公爵ハイヴエリオンジャリコ・カスパーロウという者です、ねえねえ、人間の魔術士のお嬢じようさんがた、あなたたちのお名前は？　知りたいな。あなたたちを繰くり返し犯おかしながら

あなたたちの名前を何度も何度も呼んであげたいから、どうか私に教えてくださいよー」

「冗じよう談だんじゃないってぇ～の……」トモヨは唇の端はしを嚙かんだ。迷っているのだろう。徹底抗戦か、それとも退くか。腹立たしいが、ベティも同じだ。どっちも見込みが立たない。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」サフィニアが爆雷索をジャリコに叩たたきこんだ。おそらく確かめようとしたのだろう。常人なら消し炭になってもおかしくない雷獅子は、ジャリコ・カスパーロウとやらにはまったく効かなかった。普通の人間でも、当たり所が悪くなければまず死にはしない勾玉は手傷を負わせた。ただの人間が何の準備もなく食らったら命を落とすだろう爆雷索はどうか。

　幾いく条じようもの稲妻をその身に受けたジャリコは「ぎひぃっ」と叫んだ。

　ベティは目を疑った。

　ジャリコは全身を揺らして、ひぇっ、ひぇっ、ひぇっ、と笑ってみせた。

　無傷だ。

　爆雷索はジャリコに何の影響も及およぼさなかった。そればかりか、勾玉で負った傷も見あたらない。治ってしまった。一瞬のうちに。そんな馬鹿な。でも実際、目まの当たりにしている。動かしがたい、否定しようがない、これは事実だ。

「言ったじゃないですかぁ。私は死ねないんですよー」ジャリコは跳とぼうとしている。

「──っ……！」その前にベティは駆けだしていた。サフィニアの魔術士衣をつかんで思いきり引っぱる。「──あぅ……っ」

　ジャリコが跳ちよう躍やくして斧槍を振りまわした。狙ねらいはサフィニアだった。ぎりぎりだった。当たらなかった。「死なないなら……！」トモヨが前に出た。「──痛めつける！　Ａｍｉｄ澪」八つの勾玉がジャリコを貫つらぬいた。ジャリコは「はっ、あっ、ああぅ」とか気持ち悪い呻き声をもらしながらよろめく。甲冑悪魔たちが動こうとしたが、ジャリコが斧槍を振りあげて制止した。こいつらは自分の獲え物ものだとでもいうつもりか。ベティはサフィ

ニアを背にかばい、グリギュエンルの切っ先をジャリコに向けた。「Ａｍｉｄ澪」生じた十一個の勾玉はすべてジャリコに命中した。当たるたびに、ジャリコは黒ずんだ血を振りまきながら「がっ、ずっ、うぇ、ぎぉ、ぬぁ」と不ぶ恰かつ好こうに踊おどり、それが終わると白髪を振り乱して叫んだ。「──おまえたちぃー！　私は痛いのが嫌いだって言ってるでしょうが！　ああああああ痛え！　痛くて痛くてたまらねえ！　もぉぉぉぉーいやだぁー……！」

「あっ──」ベティは声を失った。

　ジャリコが斧槍の尖とがった柄つか頭がしらを自分の喉のどに突き刺したのだ。あれは死ぬ。絶対、死ぬ。でも、生きている。ジャリコはぴんぴんしていた。勾玉による傷は、やはりすべて跡あと形かたもない。ただ、斧槍の柄は喉から後頭部に突き抜けたままだ。「……ああああ痛かった。なんだか声が出しづらいな。これのせいか。抜こう。いひっ」

　ジャリコは斧槍の柄を喉から引き抜いた。血が噴ふきだしたが、それも一瞬だった。傷らしきものはもうない。「──私はねぇ。呪のろわれているんですよ。何を隠そう、神にねえ。だから誰も私を殺せない。私は絶対に負けないんですよ。そして、私はしつこい。わかりますかー？　私は絶対に、何があっても、あなたたちを逃がしませんよー？　飽きるまでねえ。ひぇっ、ひぇっ、ひ──」

　何かが落ちてきて、いやらしい声が途と切ぎれた。

　それは白かった。純白の服を身にまとっていた。人だった。姿形は。少女だった。満天の星を瞳ひとみに宿した少女が、美しい銀色の髪かみの毛を逆立てて、落下してきた勢いのままジャリコのど頭たまを蹴けったのだ。

「ぐひっ──」ジャリコの首がありえない曲がり方をした。

　ジャリコは地べたに叩きつけられて、少女は華か麗れいに舞まい降りる。

　少女、ではない。

「……お、お姉様……」サフィニアが呆ぼう然ぜんと呟つぶやくように少女ならぬ魔ま女じよをそう呼んだ。

「まったく何をやっているのかしら」魔女は銀ぎん髪ぱつをかきあ

げて腕うで組ぐみをすると、星の瞳を不ふ遜そんに細めて平らな胸を傲ごう然ぜんと反らせた。「どうも見あたらないと思って捜さがしにきてあげたら、こんなところにいるのですもの。まるで芋いも虫むしみたい。あなたたちはこのわたくしのものなのに、わたくしを一人ぼっちにしてどうするの？　わたくしについてこられる者はそう多くないどころか、とてつもなく少ないのよ。無理だろうと何だろうと、わたくしを必死に追いかけてくるのがあなたたちの役目でしょうに。違って？」

　その言葉にたやすく胸を熱くしてしまう自分自身が憎にくらしい。──ああ。

　ああ、お姉様。正真正しよう銘めいの天才、魔術の申し子、人類の最終兵器といってもいいかもしれない閃せん光こうの魔女マチルダが、あたしたちを、あたしを捜してくれた。あたしを認めてくれている。自分のあとを追う者だと──ベティは首を振る。だから、何……？

　魔女の呪じゆ縛ばくを断たち切れ。あたしは魔女のものなんかじゃない。あたしはあたし。誰かに認めてもらう必要なんかない。

「……ていうか、鳥でもあるまいし、自由自在に空を飛びまわるような化物を追いかけられるわけないでしょ……」

「修行が足りないのだわ」マチルダは顎あごを上げてベティに人差し指を向けた。「飛ぶこともできないなんて、無能……！」

　トモヨが顔を真っ赤にして「ぺっ」と唾つばを吐はいた。「何百年も生きてるてめえらの基準で判断してんじゃねえ、ロリババア！　だいたい、誰のせいでこんなわけのわからねぇ事態になったと思ってやがるんだ……！」

「……誰の……せい……？」サフィニアは眉まゆをひそめた。

「言うに事欠いて、ロリババア、ですって……？」マチルダは振り向くなり甲かつ冑ちゆう悪魔の群れを一いつ喝かつした。「──さっきから思っていたのだけれど、あなたがた、醜みにくくて邪じや魔まくさいのだわ！　消えなさい！　trav'ic-tra.」

　まるでマチルダの怒ど声せいが白光と化したかのようだった。白光は長大な剣となって甲冑悪魔たちを薙なぎ払はらった。白光はふ

れるものを皆みな、熱して融ゆう解かいさせる恐おそるべき刃だった。ほとんど一瞬のうちに、全滅とまではいかないものの、甲冑悪魔の大半が白光の剣に斬きり伏ふせられた。

　マチルダはトモヨを睨にらみつける。「──ロリババア……？　この広く醜くも美しい残ざん酷こくなわたくしの世界にはね。言っていいことと悪いことがあるのよ、トモヨ。思い知らされたいというわけなのかしら？」

「黙だまりやがれ！　トモヨ様はなあ、ずっと考えてたんだよ！　オーメネイジがもうすぐ終わって、カラミテイジが始まる！　てめえが言った、あの言葉の意味を！　あのときから、てめえはこうなることをわかってやがったな！　それどころか、この状況を招き寄せるために、てめえはラフレシアに荷担した！　図星だろうが……！」

　マチルダは蜜みつ蜂ばちや蝶ちようを誘さそう花のように微笑ほほえんだ。「だったら、何だというの？」

「そん……な──」サフィニアは声を失った。

　ベティも衝撃を受けていた。──何？　何なの？　どういうこと？

　これが、このひどい状況が、お姉様の、マチルダの望みだった……？

　いったい何のために……？

「なんだかおもしろそうな話ですねー」倒たおれ伏していたジャリコが、起きあがりざまに斧おの槍やりを振るった。「──是ぜ非ひ、私も混ぜてくださいよー……！」

　マチルダは下がることも、左右に動くこともしなかった。ジャリコに近づいて、斧槍の柄をがっちりと握にぎり止めると、不ふ機き嫌げんそうに眉をひそめた。「果たして、あなたにその資格があるのかしら」

「試ためしてみればいいじゃないですか。ひぇっ、ひぇっ、ひぇっ」

「k'aten'a-tia.」

　さながら太陽の光が矢となって降り注いだかのごとく、直上から下りてきた一筋の白光がジャリコの頭頂から尻しりまでを貫いた。ジャリコは「ひぎぇっ」と情けない悲鳴をあげたが━それだけだった。

　マチルダはかすかに目を瞠みはった。「あら」

「お姉様……！」サフィニアが叫んだ。「その人は……死にません……！」

　ベティはため息をついた。「人って……」

「あ……そうでした……人じゃありませんよね……」

「そう、死なないの」マチルダは唇の両りよう端たんをつり上げた。「では、こうしましょう。あなたが本当に死ななかったら、わたくしの暇ひまつぶしに加えてさしあげるわ」

「いいですねー、それ。乗りましょう。さあ、さっそく私を殺してみてください」

　マチルダは斧槍を手放し、向こうに押しやった。「el-pastra.」

　その頭上で光が渦うず巻まきはじめた。光の渦は第二の太陽とでも呼ぶべきものに変じようとしている。

「うわぁぁー」ジャリコは二つ目の太陽を仰あおいで瞳を輝かがやかせた。「すごいな。人間の魔術もけっこう笑わせてくれますねー。それでも私は死なないんだな。そんなので死ねたら苦労はしな━」

　太陽が落ちてきてジャリコをのみこんだ。その瞬間、視界が真っ白に塗ぬり潰つぶされただけではなくて、すべての音が消え失うせた。何も存在しない、ただただ白いだけの空間に陥おちいった。そんな感覚に襲われ、数秒後、世界が色しき彩さいや輪りん郭かくや音をとりもどすと、マチルダと無傷のジャリコが何事もなかったかのように対たい峙じしていた。

「どういう仕し掛かけなのかしら」マチルダは純真無む垢くな乙女おとめのように小首を傾かしげた。「興味があるわね。ああ、教えてくれなくて結構よ。わたくしが自分で解き明かすから」

「それじゃあ、回答じゃなくて、私から一つ質問が」

「何かしら」

「反撃はしても？」

「あなた、案外、律りち儀ぎなのね。好きにするがいいのだわ」マチルダはジャリコに向かって右手を差しだした。「d'al-endraw.」

「お……」ジャリコの身体からだのあちこちに光の点が生じた。点は斑はん点てんとなって、さらに大きくなってゆく。光がジャリコを侵しん食しよくする。「う、あ、わ……」

　あっという間だった。もはやジャリコの三分の一ほどを光が占しめている。それ以上に光が勢力をのばそうとした瞬間、ジャリコがマチルダめがけて斧槍を繰くりだした。マチルダは跳び下がる。かわした。そう見えたのに、斧槍の穂ほ先さきがマチルダをかすめた。穂先が伸のびたのだ。というよりも、羽を広げるように変形した。

「あなたの暇つぶしと私の暇つぶし、いったいどっちが楽しいでしょうねー」ジャリコは肩を震わせて舌なめずりした。その仕し種ぐさにあわせて股こ間かんのものがうごめいている。そうとう気持ち悪い。「殺してからやろうかな。それとも、殺す前にやろうかな。そうかー。殺す前にやって殺してからもやればいいんだ。ひぇっ、ひぇっ、ひぇっ」

　マチルダは右の二の腕につけられた一筋の傷に指先をふれさせた。「品性下げ劣れつね」

「逃げるよ」トモヨが囁ささやくように言った。

「でも—」ベティは口にしかけた言葉を引っこめてうなずいた。「わかったわ。サフィニア、あんたもついてくるのよ」

「……はい」サフィニアがそう答えた直後、白光があふれた。それが合図になった。

　ベティたちは駆かけだした。西へ、タット大森林に逃げこみたいところだが、今、そっちの方向にはマチルダとジャリコがいる。北は元エルデン、大穴メガボロスだから、東か、南か。ベティは南を選んだ。彼女の仲間たちは西へ向かった。東では完全に逆方向とい

うことになってしまう。マチルダは激げき怒どするだろうか。嗤わらうだろうか。もしくは、不ふ甲が斐いない弟子たちを見限るだろうか。この期ごに及およんでその結果を一番恐れている自分を振り落とすくらいのつもりで、今は走るしかない。

　　　　九巡月九番日　ネイト海岸

　義足が砂にとられる。体重の移動が思うにまかせない。左足だけではなくて、全身が自分の身体ではないかのようだ。砂すな浜はまに出たのは失敗だった。しかしやむをえなかった。何も好きこのんでこの海岸にきたのではない。異界生物フリークスに追われ、逃げているうちに、ここまできてしまった。

「──当たれ……！」ハニーメリーが振り向きざまに拳銃を撃うつ。銃弾は追っ手の蜥蜴人の右眼球に命中した。そいつは派手にぶっ倒れたが、蜥蜴人はまだいる。三十、いや、四十近くいるか。その後ろに下等蜥蜴人の集団もいて、こっちは百以上、まあ二、三百といったところだろう。

「きゅう……！」きゅーが視線で前方を示している。ピンパーネルはそっちへ目をやった。柵さくと櫓やぐらが見える。武装漁村か。中に人はいるのか。いれば櫓に物見くらい置くだろう。櫓の上には人ひと影かげがない。おそらく無人だ。

「ハニー！」ピンパーネルはハニーメリーに声をかけた。「あそこに逃げこみマス！　このままよりワいい！」

「わかった！」

「きゅー！　ハニーを持って・先ニ！」

「くう！」

「え!?　持ってって──きゃっ」

　きゅーはハニーメリーをかっさらうように担ぎあげて速度を上げた。やはりきゅーはだいぶ余力があったのだ。柵まであっという間だった。柵は乱らん杭ぐいや有ゆう刺し鉄てつ線せんで防護力を高

められている。でも、きゅーには関係ない。止まらずに跳とんで、有刺鉄線だらけの柵上部にとりついた。被ひ毛もうと皮ひ膚ふ、皮下脂し肪ぼうのおかげで、きゅーはあの程度の有刺鉄線くらいなら物ともしない。そして、柵のあちら側へ。

　ピンパーネルもきゅーのあとを追った。全速力だ。それなのに蜥蜴人を突き放すことができない。この左足のせいだ。愚ぐ痴ちを言っても仕方ない。疲れているのだ。精神が安定していない。苛いら立だっている。

　行け。黙って進め。振り返らずに駆けろ。

　乱杭を踏み台にして、ピンパーネルは跳躍した。有刺鉄線を金属製の義足で踏みつけ、柵の向こうへと身を躍おどらせる。着地と同時に転がって衝撃をやわらげ、起きあがるとハニーメリーが駆けよってきた。

「ピンパーネル……！　怪け我がは……!?　してない!?　よかった！　とか言ってる場合じゃないのかもしれないけど、とりあえず！」

「はイ」

　思わずハニーメリーの頭をそっと撫なでて微笑んだ。火傷やけど隠かくしのマスクはいつの間にか外れてしまっていた。汚よごれた包帯の隙すき間まから傷ついた皮膚がのぞいているが、彼女の美しさは少しも損なわれていない。他ほかの何にも増して彼女を輝かせているのは、その魂の強さだからだ。

「ちょっとは時間稼かせぎに──」ハニーメリーはピンパーネルの手をつかんで、自分の唇のところに持っていった。「なる、かな？」

　ピンパーネルは手を引くこともできずに柵のほうを見た。「どうでしょうカ」

　蜥蜴人たちはもう柵に迫せまっているだろう。ただ、獲え物ものは少数だし、無理をして柵をよじ登らなくてもいい、どこかに出入口があるはずだと考え、手勢を側面や裏側に差し向けようとしているかもしれない。

　実際、出入口はある。ピンパーネルたちは北東から武装漁村に入ったが、西側は海岸に面していて、南に門がある。門の前には乱

杭などの侵入防止の仕掛けはないだろう。武装漁村の住民たちは逃げたあとらしいから、門は簡単に開けることができるはずだ。

「あたしの弾たまは……」ハニーメリーは左手でピンパーネルの手を握ったまま、右手で腰の物入れを探さぐった。「──あと十二発かな。うん。まだやれる。狭せまい場所でなら、なんとか迎撃できるんじゃない？」

「きゅう！」きゅーが首をぶるぶる振って、南のほうを視線で示し、それから自分の胸を叩たたいてみせた。「くう！　きゅう！　きゅう！」

「……え。何？　きゅー、何て言ってるの？」

「たぶん」ピンパーネルは乱暴にならないように注意しつつ、ハニーメリーの右手を振りほどいた。「──自分が門から出て囮おとりになる・ト」

「そんなっ──」ハニーメリーは一瞬、歯を食いしばって、うつむいた。「……そっか。むしろ、あたしたちが足手まといなんだ」

　要約しすぎのような気もするが、ハニーメリーの認にん識しきは正しい。戦闘能力よりも走力だ。おそらくきゅー単独ならば、蜥蜴人たちを容易に引き離して逃げきれる。しかし、ハニーメリーはもちろん、ピンパーネルも、今の状態ではそれはかなわない。

　自分が囮になって、ハニーメリーをきゅーに託たくす、という選せん択たく肢しもある。その場合、自分が生存できる可能性は決して高くないだろう。

　たとえ自分が犠ぎ牲せいになっても、ハニーメリーときゅーが助かるのなら、それでいい。

　本当にそれでいいのか……？

　仲間たちの顔が思い浮かんだ。

　──死ねない。

　ここで死ぬわけにはいかない。

　自分が死ぬのはいい。生き物は皆みな、死ぬ。死ねばすべてを

失って、何もわからなくなる。怖くはない。でも、残された者は死んだ者を失うだけで、何もわからなくなるわけではないのだ。ピンパーネルは仲間を失いたくない、誰にも死んでほしくない、必ず無事に再会したいと思う。仲間たちもきっと同じだろう。

　死ねない。死にたくない。皆が生き残る。そのための方法を選ばなければならない。

「きゅー」ピンパーネルはきゅーのまんまるい黒々とした瞳ひとみを見すえた。「生きるコト・逃げるコト・優先して。絶対に。約束してくだサイ」

　きゅーは力強くうなずいた。「くう」

　ハニーメリーはきゅーに抱だきついて、もふもふした毛に顔をうずめた。「──また会える！　何があっても、見つけるから！」

「くう！」

「デワ・きゅーは南の門から！　ワタシとハニーは北から！　行きマス……！」

　きゅーが真っ先に飛びだした。その全身が金こん色じきに輝いている。もう振り向かない。ピンパーネルも駆けだした。ハニーメリーがついてくる。笑え顔がおだった。

「生きよう！　生きなきゃ！　あたし、あなたの子供が欲しい……！」

　何を言いだすのかと思いながらも、ピンパーネルは笑ってしまった。

　きゅーは蜥蜴人たちを引きつけてくれて、なおかつ逃げのびる。自分とハニーメリーはきゅーのおかげで窮きゆう地ちを脱だつするだろう。他の仲間たちも無事だ。

　そう信じられる気がした。

　　　　　同日　タット大森林

——男は土の中にいる。

正確に言えば、地面に穿うがたれた虚うろのような穴の中だ。

穴は、広さが二メーテル四方程度、深さは三メーテルといったところで、一人や二人ならばまだしも、総勢八名もいるから正直、狭せま苦くるしくてかなわない。完全に定員オーヴァーではないか、と男は思っている。しかも、自由に出入りすることもできない。穴は横にしてひん曲げた涙るい滴てき型とでもいうような形をしていて、地表に出るには這はって斜しゃ面めんを登らなければならないが、角度は五十度といったところだ。かなり急ではあるもののたいした高さではないから、可能か不可能かの問題ではない。地上には敵がいるのだ。見つかったら大変なので、迂う闊かつに外に出るわけにはいかない。

もう丸一日以上、飲み食いもほとんどせずに穴あな籠ごもりをしている。

いつまでもここにいるわけにはいかない。そんなことは皆、わかっているはずだが、外の様子をうかがおうと言いだす者さえいない。たまに誰かが小声で泣き言を言ったり、唐とう突とつにすすり泣きを始めたりしても、いたわろうとする者は皆かい無むだ。彼らは全員、人間であり、生きているのであり、それだけで仲間同士と言ってもいいはずなのに、連帯も、同情も、憐れん憫びんも、望むべくもなかった。彼らは恐怖と絶望に圧殺されようとしていた。

このままではいかん、と男は思っている。ずっと、ずっと、思っていた。

そろそろ行動を起こすべきではないのか……？

何度もそう考え、腰を上げようとしたが、そのたびに思いとどまった。

——機、いまだ熟さず。

男にはわかるのだ。そのときがくれば、男は立つだろう。立たざるをえないだろう。立とうとすれば膝が震え、足が萎なえる。これはまだ立つべきではないことの証左だ。決して怖いのではない。怖くなどない。

男は知らずに親指の爪つめを噛かんでいた。爪はもうずいぶん短い。短すぎる。完全に深爪ではないか。深爪にも程がある。噛みすぎて、血が出ているではないか。いかん、いかんぞう。親指が痛くては戦いくさができん。というか腹が減った。食べ物はない。水もない。わかっている。打開だ。現状を打開せねば未来はない。男はとくと理解しているが、他の者たちはわかっていないのだ。誰もわかっていない。

男が導かねば、彼らは全滅する。

男がやらずして、誰がやる。

男は暗い穴の底でクワッと目を見開いた。「──ぃよしッ」

いったん腹を決めれば、男はもう迷わない。あたりまえだ。男の名はフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト。〝おフかアしニなー〟フランクとも呼ばれ、あえてそう自じ称しようすることもある。人並み外れて勇ゆう敢かんで決断力に富み、独創的で、威い風ふう堂々と己おのれの道を歩む者は、ときとしておかしフアニーなやつ・ガイと思われるものだ。ファニー・フランクは、だが、そうした世評を恐おそれることはない。私は正しい。私にとって、私はいつも正しい。私の道は正しい道である。男はそう信じている。信じて、どこまでも突き進む。

四つん這ばいになって穴の出口へと向かいはじめたファニー・フランクに、穴の底で打ちひしがれるばかりの男たちが疑ぎ惑わくや不安の眼まな差ざしを向ける。

穴の出口から射しこむわずかな光を背にして、ファニー・フランクは彼らに笑いかけてみせた。「──大丈夫だッ。この私に任せたまえッ。万事オーケーだよッ。すべて絶対うまくいくッ。完全に間違いないッ」

「……見つかったら、どうする……」と弱々しい声が返ってきた。「……どう責任をとってくれるんだ……あいつらに……異界生物フリークスに、もし見つかったら……」

「心配ないッ」ファニー・フランクは血が出ている親指をビッと立てた。「そのときはそのときだッ」

「……物の見事に行き当たりばったりだろ……すげえ心配だ

よ……」

「私を信じるのだッ」

　しばらく待ってみたが、返事がなかったので、ファニー・フランクは進むことにした。彼らは怯おびえきっている。この苦境から抜ぬけだしたいと思いながらも、何かを変えるのが恐ろしいのだ。自分ではできないから、誰かにどうにかしてほしいと願っている。軟なん弱じゃく。柔にゅう弱じゃく。惰だ弱じゃく。哀あわれな者たちよ。それでは私がやろう。このファニー・フランクが状況を一変させてやる。救い主になるのだ。英雄に。私にはできる。「──否いなッ。むしろ、私にしかそれは成し遂とげられんのだッ……！」

　ファニー・フランクは斜面をよじ登ろうとした。

「どべっ」という声がして、土砂を撒まき散らしながら何かが転げ落ちてきた。

「──ずどおっ……!?」「ほげえっ……！」

　ファニー・フランクはその何かを受け止めようとしたわけではないが、結果的にそのような恰かつ好こうになった。受け止めきれず、押し潰つぶされた。

「カタリ!?　大丈夫……!?」上のほうから少女の声が飛んできた。

「……お、おう！　平気や！　わしは、やけども──」

「ずぬぬぬ……そ、その声は……」

「魚ぎよぉっ!?　ジブン、ファニー・フランクかいっ!?」

「そ、そうだッ。わかったらどきたまえッ。重いッ。痛いッ。苦しいッ。し、死ぬーッ」

「すまんすまん、おいっ、ユリカーッ！　この穴、人がおるで！──ジブンら、ここに隠れとったんやな」

「誤解されるといけないので言っておくのだが、我々はあくまで緊急避難的にここで一息ついていただけだッ。そこのところは勘違いしないでもらいたいッ」

「せやったら緊急避難は終わりや！　大規模な敵の捜そう索さく隊がこっちに向かっとる！　見つかったらしまいやで！　──ユリカッ！　外はどうや!?」

「まだきていないわ！　でも、いしょいで！」

「了解っ！　──ちゅうわけで、ジブンら、ここで死にたなかったら早う逃げるんや。しかし、運がよかったのう。わしがうっかり落ちとらんかったら、きっとやばかったで」

　この男が穴に落ちたその瞬間、穴から出ようとしていた私は運がいいのか悪いのか、と思わないでもなかったが、否、否ッ、やはり自分は幸運なのだろうとファニー・フランクは考えなおした。この男が現れず、何も知らずに外に出て、敵と鉢はち合あわせしていたら最悪だった。そうならなかったのは、自分の運が超絶よすぎるからだ。

「……むむッ。それはそれとして、貴公、右腕がッ──」

「へっ。この程度、大事ないわ。左腕一本でなあ。十分やっちゅうねん」

「カタリ！　早くして……！」また上からの声だ。聞き覚えがある。声の主はたぶん、えらく小こ柄がらな女医術士だろう。──医術士。医術士がいれば、怪け我がも恐れるに足らずだ。

「クフッ。私はやはり、猛もう烈れつにツイているッ……！」

「なんか言いよったか？」

「何もッ！　──いよォーし皆の衆ゥゥッ！　今こそここから出ようではないかッ。前を、いやッ、上を向いて、私とともに行こうッ！　明日のため、輝かがやかしい未来をこの手につかむためェーにッッッッ……！」

「……なんもかんもメタクソなことになっとんのに、えらいポジティブやのう」



「雌し伏ふくのときが私に教えてくれたッ。何があろうと我々が決して失ってはならないただ一つのもの、それは希望だッ。希望は夢を生み、夢を抱いていれば人は笑うことができるッ。笑いは我々に活力を与あたえてくれるッ。さあさあ一緒にッ、盛大に笑おうではないかッ！　ウアッーハッハッハッハァーッ……！」

「なんだかうるしゃいけど、何をやってるの……!?　敵がきたらどうしゅるのよ……！」

「うおうッ、す、すみませんッ！　──というわけなのでッ!?　とりあえず、さっさと出るとしようッ！　ここにいては袋ふくろのネズミならぬ土中のモグラだッ！　むッ!?　モグラならば土中にあろうと穴を掘ほって逃げられるかッ……!?」

「そんなんどうでもええて！　行くで！」

　知ち己きというほどでもないが、縁えんあって何度か顔をあわせたことがあるカタリという男に従う形で、ファニー・フランク以下八名の男たちは穴から這いだした。

　外に出ると、日の傾かたむき方から、もう夕刻に近い時間帯らしいとわかった。

　それにしても、薄々気づいてはいたのだが、ファニー・フランク以外の七人はエルデン市民らしき者が三人、ラフレシアの兵士らしき者が四人で、いずれも顔を知らない。

「……これは──なんとか我が軍師どのを捜さがしださねばッ……」ファニー・フランクは拳こぶしをきつく握にぎり固めた。「私一人では正直ッ、何にもできんッッッ……！」

「何かっこつけて頼りないこと呟つぶやいとんのや、ジブン……」

「カタリ！　行かないと！」

「お、おう、せやなっ！」

「むッ──ぬおぉッ!?　そこな女医術士どのッ！　あなたも腕をッ……!?」

「わたしは大丈夫。処置はしてあるから」

「なッ、なんと健けな気げなッ……私は感動を禁じえないッ……！」

「……ええと、歩けないような怪我をしている人はいない？　見たかんじだと、いないみたいね。しょれじゃあ、行くわよ！」

「──ィィィいやッ！　待ちたまえッ！　ここはこの私、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトが先頭に立とうッ！　さあ、私についてくるがいいッ……！」

「あっ、ボケッ！　そっちは敵がくる方向や！　逆！　逆っ！」

「そ、そそそそそうかーッ！　ではこっちだッ！　総員、私につづけーッ！　エイッ、エイッ、オーッ……！」

　数名が控ひかえめに「オー」と応じてくれたが、女医術士に「しじゅかに！」と叱しつ咤たされて口をつぐんだ。ファニー・フランクは走りながら笑った。「──ヌワハハハッ！」

「何がおかしいんや、ジブン⁉」

「いやいや、おかしくなどないッ。ただ笑わねばならんと思うだけだッ。こんなときこそ、笑わねばッ。クワハハハハハァーッ……！」

「だから、黙だまりなしゃい！　叩たたかれないとわからないの⁉」

「……ユリカ、ジブンもあれやで。声、な」

「ご、ごめんなしゃい、わたし……」

「やあ、悪いのはこのオッサンやしな？」

「うむッ！　そうすることで、少しでも精神的に楽になるのならば、すべて私のせいにするといいッ！　何しろ私は打たれ強いので、ぜんぜん平気だッッッ！」

「なんでこっちが八つ当たりしたみたいな話になっとんのや。原因はジブンやって、わしはゆうとんのやで」

「ふゥーむッ。そんなに細かいことをいちいち気にしながら生きているとアレではないかねッ。疲れないかねッ」

「……カタリのことを細かいって言う人、初めてかもしれないわ……」

「わしとしては正確無比で綿密緻ち密みつな人間のつもりなんやけ

ども？　―おおっと、人間のとこにツッコむのんはナシやで？　そこは前提やからな？　大前提やで、正味の話」

「ムハハハッ！　カタリ君！　きみはなかなかおもしろい男のようだねえーッ」

「ジブンにゆわれると、なんやごっつうむかつくわぁ……」

「怒おこらない怒らなァーい。笑いたまえッ。これはねえ、キミィ、健康の秘ひ訣けつだよッ。いつもニコニコ元気で勇気を持って本気でやれば、できないことなど何もないのだァーッ」

「まあたしかに、元気は大事やけども……」

「そうだろうそうだろうッ。ところで、さっき進むべきはこっちの方向だと教えてくれたのはキミタチだと記き憶おくしているのだが、あれは本当に正しかったのかねッ……？」

「なんでそないなこと訊きくんや―って」カタリは足を止めて離はなれ気味の両目から目玉を思いきり飛びださせた。「魚ぎよ魚魚ぉっ……!?」

「ど、どうして……!?」可か憐れんな女医術士ユリカも立ち止まった。

「むうぅーッ。よしッ、一同スタァーップッ！」ファニー・フランクも急停止して手をあげ、大きく振ふった。「―スタァーップッ！　もといストップだッッッ……！」

　振り返ると、カタリとユリカ以外の七人はだいぶ後ろにいて、まごまごしている。世せ知ち辛がらい無統治王国で逞たくましく生き抜いてきたのだろう元エルデン市民も、軍にあっては勇ゆう猛もう果か敢かんだったのかもしれない元帝国軍兵士も、この窮きゆう地ちでは恐れ迷える哀れな子羊にすぎないのだ。しかし、こういうときにこそ、人は真価を発揮するものなのではないか。―たとえば、この私のように。

　ファニー・フランクは前に向きなおった。木々の隙すき間まに牛のような顔をした巨きよ漢かんや、巨大な蜘く蛛もから人間の上半身が生えているやつや、鱗うろこ肌はだの四足獣じゆうや、歩く花とでも表現するしかなさそうな生き物等々、おそらく悪あく魔まなのだろう異界生物フリークスたちの姿が見える。距きよ離りはどれ

くらいだろう。五十メーテルか。百メーテルはなさそうだ。いずれにせよ、一刻の猶ゆう予よも許されない。

「ここは私に任せたまえェッ！　私が敵を食い止めている間に、キミタチは反対方向へと逃げるのだァーッッッ！」

「おおきに！　ほんなら頼むわ！」

「──止めんのかねッ!?」

「ほれ、ユリカ！　他ほかのモンも！　さっさと行くで！　ファニー・フランクの犠ぎ牲せいを無む駄だにしたらあかん……！」

「正確に言うとまだ犠牲にはなっていないのだがッ……!?　ぬおうッ！　しかしまさか本当に行ってしまうとはァーッ!?　かくなる上はッ……！」ファニー・フランクは腹を決め、敵に向かって走りだした。「──我こそはフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトォーッ！　地上随ずい一いちの勇者にして人類の救い主、史上最大最高の指導者であーるッ！　異界の侵略者たちよッ！　できるものならこの私、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトを討うちとってみるがいいッ！　ヌハハハハハハァーッ……！　──と見せかけてェーッ……!?」

　転進。退却ではない。あくまでこれは転進である。

　ファニー・フランクは汚よごれた外がい套とうを翻ひるがえして、華か麗れいに踵きびすを返した。

「──う、討ちとられるッ。このまま突っこんだらマジで討ちとられてしまうッ。少なくともその可能性は否定できないッ！　それはまずいッ、なぜなら私はまだッ！　死ぬわけにはいかんのだッ！　私には世界を救うという崇すう高こうな使命があるわけでそれを果たすまでは死ぬわけには死んでしまうとは何事だ死にたくなァァァァーいッ……！」

　それでも敵にぎりぎりまで迫せまって、そのうえでファニー・フランクは転進したのだ。当然のことながら、敵はファニー・フランクに狙ねらいをつけて追いかけてくる。先に逃げた者たちは……？　遠いが、いる。行く手に彼らの姿がちらちらと見える。──これでいいッ。時間稼かせぎにはなった。たぶん。おそらく。いくらかは。実を言うと、最初からこうするつもりだったのだ。敵は

数が多い。勝てないこともないかもしれないが、勝てないかもしれない。勝利が確実でないのならば、戦わずに威い嚇かくする、敵の注意を引きつける、時間を稼ぐ、そして自分自身も逃げきるッ。これがベストプランだッ。成し遂とげてみせるッ。

「──できるはずだッ。私は救い主で、英雄なのだからッッッ……！」

　問題は──そう、問題がないわけではない。

　息が切れてきた。喉のどがヒュウヒュウいっている。脇わき腹ばらが痛い。涙があふれて、前がよく見えない。私は苦しいのか。苦しくなどないッ。それでは悲しいのか。悲しくもないッ。ただ──ただ、現実問題として、ずっと走りつづけることは不可能だし、もう速度が落ちはじめていて、そろそろやばい──と思った瞬間、落ちた。「──喪もッ……!?」

　すとん、と落下したのではない。滑かつ落らくした。穴か。さっきまで潜ひそんでいた、あの穴と同種の穴に落ちこんだらしい。急きゆう勾こう配ばいの穴を滑すべり落ちて底に尻しり餅もちをつく。息が詰つまって声も出なかった。

　地上を駆かけ過ぎてゆく足音が聞こえる。敵はファニー・フランクを見失った。だが穴に落ちたとは思いもよらず、身を低くしてそこらに隠かくれているか、今もまだ逃げていると判断したのだろう。

「……助かっ──た……？」ファニー・フランクは激しく頭を振った。「いやッ。私一人が助かれば、それでいいという問題ではッ──ない……のか？　いやいやいやッ！」

　ファニー・フランクは落ちてきたばかりの急きゆう斜しや面めんを急いで懸けん命めいに這はいあがりながら、小声で唱える。「……私はッ……私は少し前までの私とは違うのだ、私は生まれ変わったのだ、というよりもこれが私の真実なのだ、私はスーパーヒーローなのだッ……」

　穴から顔を出すと、歩く花的な悪魔が目の前にいた。こっちにくる。戻るか。否、否、否だ。ファニー・フランクは穴から一気に飛びだし、歩く花的な悪魔に躍おどりかかって組みついた。「──この、この、このゥッ！」

　無我夢中で矢や継つぎ早に鉄てつ拳けんをお見み舞まいすると──五発目で卵の殻からを割ったような手て応ごたえを感じて、歩く花的悪魔はしおれるように動きを止めた。ファニー・フランクは満面に笑みを浮かべた。「──どうだァッ！　見たかッ！　私の力ッッッ！　さあ、私はここにいるぞォッ！　どぉーんとかかってきたまえェィッ……！」

　言ってみるものだ。近くにいる敵だけではない。だいぶ行きすぎて、二十メーテルか三十メーテルも離れた場所にいる敵までこっちを向いた。くる。次々とくる。どんどん引き返してくるではないか。「──か、かッ、感謝するのだぞ皆みなの衆ゥッ！　私がこうして敵を引きつけ──ぬおッ!?」

　グモオオオオオオオオウと突進してきた牛頭悪魔を、ファニー・フランクはとっさに地面に身を投げだしてよけた。そこに蛸たこみたいな悪魔がワサワサワサワサワサ攻めかかってくる。じょじょじょ冗談ではないッ。ファニー・フランクは脂羽蟲ゴキのように高速で匍ほ匐ふく前進して逃げる。逃げる。逃げる。「──つ、つ、つッ、つかまえてごらんなさァーいッ！　ムハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァーッ……！」

　数えきれないほどの悪魔を従えるような恰かつ好こうで森を這いずり回りながら、ファニー・フランクは笑った。大笑いした。馬鹿笑いした。笑っているかぎり、自分は大丈夫だと、絶対に大丈夫に違いないと、彼は信じていた。どう考えても絶体絶命の危機なのに、自分が死ぬとは思えない。とくに根こん拠きょはないのだが、なんとかなりそうな気がする。

　だから、彼に追いすがろうとしていた悪魔がグギャアと苦鳴の叫びをあげたときも、ちっとも驚かなかった。きたッ、と彼は思った。きたきたきたッ。ようやくきたッ。──何を隠そう私はねえッ！　必ずこうなるとわかっていて、このときを待っていたわけだよキミタチィッ……！

　振り向くと、漆しつ黒こくの巨鳥が──否いな、黒い衣を身にまとった男が、赤い髪の女を胸に抱だき、背中に生えた黒い翼つばさを羽ばたかせて、悪魔たちを見下ろしていた。

「──アジアン、下ろして……！」

　赤髪の女が言うと、黒い衣の男は短くうなずいて高度を下げた。

　そうして赤髪の女が飛び降りるなり、黒い衣の男は死を撒まき散らしはじめた。

　それは異様な、おぞましい、圧あつ倒とう的な、情け容よう赦しゃのない、完全に一方的な殺さつ戮りくだった。男の左腕は黒い竜のごときものと化し、右腕は無数の黒い管に変じて、悪魔たちを噛かみ砕くだき、食い散らかして、貫つらぬき、斬きり裂さいた。

「──てゆうか、なんできみみたいなやつを助けなきゃならないのってかんじではあるんだけど……」気がつくと、赤髪の女がそばにいた。「まあ、仲間を捜さがしてる最中に偶然、見つけちゃっただけなんだけどね。見捨てるのもあれだし。──平気？」

　ファニー・フランクは胸を張って笑った。「平気ではないように見えるかねッ……？」

「うん。主に、頭の中身とか」

「フハハハァッ。心配には及およばんよッ。私は正常だし平気だッ。しかし──やはりッ。やはりこうなったッ！　まさにッ、私の読みどおりッ……！」

「……ホントに大丈夫？」

「ああ、大丈夫だッ。私はもちろん大丈夫だし、きみも大丈夫ッ。誰も彼も大丈夫だッ。この私がいるかぎりッ！」

「うわ。かなりやばいよ、この人。目がイッちゃってるし……」

「そうッ！　私はやばいッ……！」フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトは陶とう然ぜんと目を細め、悪魔どもが虐ぎゃく殺さつされてゆく光景を眺ながめた。「──やばいくらい、ツイているッ！　ツキまくっている！　このツキがあれば、私は無敵だッ！　とうとうッ！　私の時代が到とう来らいした、否ッ！　時代が私に追いついたのだッ！」

「それってつまり、僕らが助けたせいできみの誇こ大だい妄もう想そうを助長しちゃったってこと？」

「妄想などではないッ」ファニー・フランクは拳こぶしを振りあげた。「──私はッ！　新世代の王となるッ！　私はそのために生まれてきたのだァーッ……！」

「状況的に、王様になるとか言ってる場合じゃないような気がしてしょうがないんだけどね……」

「むしろッ！　こういう状況だからこそ──だッ！　民たみを安んじる、強大な王が必要なのだッ。安心したまえ、きみのような美しいご婦人が守られる国を、この私が築くッ。築いてみせるッッッ！」

「おーっと……きたよ。きちゃったよ」

「むッ？　何がきたのかねッ……？」

「僕の記憶が間違ってなければ、ずーっと前にも否定したと思うんだけどね？　覚えてないんだろうね。まあいかにも記憶力が生まれつき全壊してそうな顔してるしね……」

「だから、何がだねッ……？」

「僕は──」赤髪の女は拳を振りかぶってぐるぐる回した。「女の子じゃないっ……！」

「のがッッッ……!?」

　ファニー・フランクの頰ほおに拳がめりこんだ。華きや奢しやな身体からだから繰くりだされたわりには、腰が入っていてナイスなパンチだった。吹っ飛ばされ、地面に叩たたきつけられて、彼は思った。

　ようするに、人は見かけで判断してはならんということだねえ。

九巡月二十五番日　ジェードリ

「──いかん！　チーロ・パンカロッ！　そう突出しては……！　ええい！」

　叫んだところで聞こえはしないか。ならばしかし、どうやって止めればいい。

　振り返れば、港町ジェードリの城壁にへばりつくようにして、武

装した人々がひしめいている。それ以外は、前方のみならず右を見ても左を見ても敵、敵、敵、敵だらけだ。誤解しようがない、和解など望むべくもない、明々白々に相あい容いれない、人ではないどころかこの世界の生き物ですらない異形の敵、異界生物フリークスの大群──否、大軍が、海からではなくて陸から押しよせるその大波が、ジェードリをのみこもうとしている。

港はすでに空からだ。商船も護衛船も漁船も小こ舟ぶねも、すべて人と物資を満まん載さいしてジェードリから離れた。近きん隣りんからジェードリに避ひ難なんしてきた者たち曰いわく、どこもかしこも異界生物フリークスの制圧下にあるか蹂じゆう躙りんされつつあるらしい。これでは陸路をとって逃げることもままならないだろう。

それでも我が身一つであれば、一か八か突とつ貫かん、突破を図ってもいいが、無む辜この民を捨て置いて自らの命だけ拾うような真ま似ねができようか。愛する故郷を、そして無力な女子供や老人を守るため、あえて絶望的な戦いに己おのれを投じている者もいるのだ。

たとえば、チーロ・パンカロ以下、そろいのトレンチコートを身にまとったパンカロ・ファミリーの男たちのように。

「しかしッ！　血気に逸はやって無む駄だに命を散らしてはならぬ……！」

唸うなれ、我が拳。

トワニングの右拳が豚ぶた面づら悪あく魔まの顔面にめりこみ、これを破は裂れつさせる。

「ならぬ！」

間を置かず、左拳が別の豚面悪魔を粉ふん砕さいした。

「──ならぬ！」

今度は右の手刀だ。豚面悪魔二匹ひきの首をやすやすと斬り飛ばす。

「ならァーぬッ！　戦いにおいてはァァァァァハァァッ……！」

　トワニングは両手を刀と化さしめて、豚面悪魔どもを手当たり次し第だいに斬り刻んだ。

「常にッ！　死中に活を求めんでどうする大馬鹿者がァァァァァァァハアアッ……！」

　悪魔の血肉が乱れ飛ぶ。返り血の腥なまぐささや熱さよりも、己おのが肉体の発する熱にトワニングはむせびそうになる。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱すぎるではないか。

　耐たえられなくなって僧そう服ふくを破り捨て、外気に肌はだをさらした。

「──ぬうううううううううううううぅぅぅぅぅぅぅううううう筋肉万歳ハイパーマツソオッッッッ……！」

　こうなったら誰も、何ものもトワニングを止めることはできない。筋肉は進む。悪魔どもを薙なぎ倒たおしてまっしぐらに進んでゆく。向かう先では、戦列から突出したパンカロ・ファミリーの精せい鋭えい部隊が敵中に孤こ立りつしている。チーロ・パンカロ。あの男を死なすわけにはいかない。父エンツォ・パンカロのように尊敬を集めているわけではないが、あの天てん真しん爛らん漫まんな男はやたらと人好きがする。ようするに人気者なのだ。あの男が死んだら、人々は大きな希望の光を一つ失うことになる。それは幻まぼろしの光にすぎず、闇を照らす力など本当は備えていないのかもしれない。それでも、光だと信じられるものがないよりは、あるほうがましだ。それに──今、死んだら、とりかえしがつかない。

　原因は不明だが、九巡月五番日を境にして、祭さい壇だんが機能を停止した。

　いや、作動はするのだ。しかし、マグニデア・プールに一いつ切さいアクセスできない。

　祭壇が動かなければ、いかなる僧そう侶りよであろうと蘇そ生せい式しきの施式は不可能だ。

「死んでしまえばおしまいなのだぞ、わかっておるのか、チーロ・パンカロォッ……！」

　トワニングは糞くそが糞を垂れたような糞ったれな悪魔どもに飛び蹴げりをぶちかまして爆散させ、血と肉と骨片その他を突っ切っ

てパンカロ・ファミリーの一団に迫せまった。

　チーロは鉄球付きの義手を振りあげて、血に汚よごれた無骨な顔に場違いな人ひと懐なつっこい笑えみを浮かべてみせた。「──よぉっ！　オストロスの腐くされ破は戒かい僧そうじゃねえか！　こんなとこで何してやがんだ！」

「こォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォの愚おろか者がァァァァァァァァッ！」

「ごはっ……！」

　トワニングはチーロ・パンカロを殴なぐり飛ばし、間かん髪はつを容れず殺さつ到とうしてきた悪魔どもを右みぎ脚あしの後ろ回し蹴りで蹴散らした。「──命を粗そ末まつにするでないッ！　勇気と無む謀ぼうは別物だと心得よッ……！」

「つーか、痛ぇーよ！」チーロは頬をさすりながら跳とび起きて、トワニングに詰つめよってきた。「オレだって死ぬつもりはねえ！　でもな！　オレらがやらねーで誰がジェードリ守るんだよ……！」

「坊ぼつちゃん……！」短たん髪ぱつで長身の男が、斜ななめ後ろからチーロに襲いかかろうとしていた鱗うろこ肌はだの悪魔を長刀で斬り倒した。「──その坊ぼうさんの言うとおりだ！　私らァ前に出すぎたンです！　下がらねえと包囲殲せん滅めつされて終わりだ！」

「うっせーぞ、カルロ！　気合い入れすぎたのか何なのか、いつの間にかここにいたんだからしょうがねーだろうが！　それから、いいかげん坊ちゃんはやめろっつーの！」

「ぼ、ぼ、ボス……！　あれ……！」太った男が東のほうを指さして叫んだ。

「ああ!?　バーカ、デブ・フトッチョ、オレらは今、大事な話してんだろーが！　あとにしやがれ、あとに！」

「で、でも、あれ……！　ついでに、デブ・フトッチョじゃなくて、ボボ・ファッチョです……」

「いやいやボス！」いやに前歯の大きな男が唾つばを飛ばして声を

張りあげた。「話もええですけど、あれはあれで大だい事じっちゅうか、大おお事ごとっちゅうか……！」

「……坊ちゃん」カルロは目を見開いた。「……イビツの言うとおりです。──あれは、やべえ」

「んだよ、カルロ、てめーまで──」チーロは東に視線を向けた途と端たん、「げっ──」と目を剝むいた。

「むう……」トワニングも唸るしかなかった。何という大きさだろう。

　巨きよ人じんだ。鎖くさりと鎧よろいとで完全武装した巨人が歩いてくる。身の丈たけはおそらく十メーテル以上。十五メーテルほどもありそうだ。一人、と言っていいのか。とにかく、一人ではない。六人、いや、七人──違う、十人もいる。

　悪魔どもの向こうから、巨人たちが列をなして近づいてくる。

「あれも異界生物フリークス……なのか。だが、いったい、どこからきたのだ。まさか、古代九く頭ず竜りゅうの呪のろいが解けたという噂うわさが真実まことだというのか。しかし──ぬうむッ……！」トワニングは両手で頰をバシンッと叩いた。萎なえかけた筋肉力マツスルパワーに活を入れたのだ。この上は筋肉がつづくかぎり戦う以外にない。「──我が筋肉は永遠なりッ……！　チーロ・パンカロッ！　おぬしらは後退せよ！　拙せつ僧そうがしんがりについて援えん護ごするッ……！　城壁に依よって少しでも敵を食い止め、一人でも多くの市民を……！」

「つっても、てめー一人で──」

「馬鹿め！　筋肉の威い力りよくを知らんのかッ！　拙僧の筋肉はァァァァァ万人力なのだッ！」

「ですが、敵は万より多いンじゃないですか!?」

「カルロの言うとおり──だと思うぜ！　オレは計算苦手だしよくわかんねーけど！」

「筋肉は恐れぬ……ッ！」トワニングは勇ゆう躍やくして両の拳を振るい、豚面悪魔と犬面悪魔を粉こな微み塵じんに打ち砕いた。「──筋肉は怯ひるまぬ！　敗れぬ！　筋肉こそ最上！　最強！　筋

肉最高ッ！
フゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーッ……！」

　己を鍛きたえる。技わざを磨みがく。克こつ己きのためではない。断じて。目的は暴力である。力を解き放ち、破は壊かいをなす。道も理も義もない。原始の歓かん喜きがここにはある。暴力がそれをもたらす。これは狂きよう気きではない。透とう明めい。あくまで透すきとおっている。正気である。

　トワニングの右脚が光を放ちはじめる。

　黄おう金ごん脚きやく。

　その右脚を振りまわす。

　まるで、砂。砂のようだ。崩くずれる。トワニングの黄金脚がふれるだけで、悪魔どもは崩れるように倒れてゆく。

　トワニングは前進する。回転しながら、黄金脚で敵を薙ぎ払はらいながら、どんどん突き進む。悪魔どもはすっかり怖おじ気けづいている。悪魔とて恐れ、怯むのだ。彼の圧あつ倒とう的な暴力の前には平ひれ伏ふすのだ。さもありなん。

「拙僧をォォォォォォォォォォォォ止めることなどォォォォォォォォォォォォできはせん雑ざ魚こ雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚雑魚ォォォォォォォォォォォォォォォ」

　渦うず巻まく血潮と肉片の中心はひたすら東進する。敵。敵。敵ィィィィィ。トワニングは打ち倒すべき敵を求めている。これは敵ではない。こんなもの、敵などでは。障害物ですらない。

　敵はあれだ。あそこにいる。

　巨人。

　もうすぐそばに。

　真っ赤に充じゆう血けつした両眼で、彼は敵をねめつける。身長約十五メーテル。全身を隙すき間まなく覆おおう鎧をまとい、その上に鎖が巻きつけられている。鎖は鎧の各所に留められてもいるようだ。人間の体型と比ひ較かくすれば、やや前ぜん傾けい姿勢で上

半身が異常に発達していて胴どう長なが短足、それから頭がだいぶ大きい。両手首から鎖が垂れ、その先端には巨大な棘とげ付つきの鉄球がぶら下がっている。巨人はトワニングを見下ろして標的と認にん識しきしたようだ。

「こォォォォォいッ！　かかってくるがいいィィィィィ拙僧は強いぞォォォォォォォォ」

　ＧＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨ……！

　巨人は右腕を振りあげた。鉄球をトワニングに叩たたきつけるつもりだろう。

「遅おそいわデカブツがァァァァァァァァァッ……！」トワニングは巨人の懐ふところに──というよりも足あし許もとに飛びこんで跳ちよう躍やくし、左膝に回し蹴りを叩きこむ。「ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァァァンンンンンッッッッ……！」

　ＧＮＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＨＨＨＨＨＨＨ……！

　巨人はよろめき、左膝を折った。今だ。トワニングは両足を踏んばって、両手を腰の横にもってゆく。そうして気を握にぎり固める。暴力的な、否いな、暴力そのものでしかない力を凝ぎよう集しゆうさせるのだ。それは光として知覚されるが、ようするに暴力のかたまりだ。「──気力充じゆう溢いつッ！　絶ぜつ紹しよおォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……」

　思うままに力を放つ。

　壊すために。

　こんなにすばらしいことはない。

　トワニングは両手を真上に突きあげる。

「殲セン封プウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ気キッッッッッッ……！」

暴力の光が凶きよう猛もうな竜たつ巻まきと化して巨人の頭部を襲った。

暴れよ。暴れよ。暴れよ！　暴れるがいい……！

力はぞんぶんに猛もう威いをふるった。巨人の頭部のぜんぶとまではいかないものの、顎あごは消失した。巨人はのけぞった。そのまま仰あお向むけに倒れる前に、横合いから鉄球が轟ゴウと飛んできて、巨人を左方向にぶっ飛ばしてしまった。別の巨人の仕し業わざだ。そいつだけではない。巨人は続々とくる。トワニングは呵か呵か大笑した。「──ブワハハハハァァァァーッ！　少なくとも、相手に不足することだけはなさそうではないかァァァァァァーッ……！」

死地かもしれぬ、との思いが脳のう裏りをよぎる。

己おのが道に迷い、そして信じて、数えきれない命を奪うばい、救ってきた。

その果てが、終着点が、ここなのか。

「だから何だというのだァァァァァァァァァァァアアアアアアアァァァァァッ……！」

トワニングは飛んで、跳はねて、転がって、巨人どもが繰くりだす鉄球をよける。よけても逃げずに近づこうとするのだが、思うに任せない。

機をうかがうのだ。その間に連中の鉄球は悪あく魔まどもを容よう赦しゃなく潰つぶす。木こっ端ぱ微み塵じんにする。連中に同士討うちという概がい念ねんはないらしい。同族間の仲間意識はどうなのか。さっき巨人が巨人に鉄球を見み舞まった。ということは徹てつ底てい的に見境がないのか。だが連中は明らかに敵軍の一員だ。トワニングは嚇かつと目を見開いた。「──そういうことかッ……！」

巨人の背に籠かごのようなものが設置されている。その籠には巨人を普ふ通つうの人間大に縮小したような恰かつ好こうの悪魔か何かが乗りこんで、鎖を引っぱったり緩ゆるめたりしていた。おそらくああして巨人を操あやつっているのだ。

しかし、それがわかったからといってどうすればいいのか。巨人

の背せ丈たけは十五メーテル、背の籠に乗っている操縦者には拳こぶしが届かない。身軽なピンパーネルであれば、もしくは魔術の使い手がいれば──だが、彼は一人だ。「──つま
りィィィィィィッ！　やるしかないということだッ……！」

　我が筋肉、死中に活を求めんとす。

　トワニングは「参サンッ……！」と合がつ掌しようして、全身の筋肉を巡めぐる力の流れを一瞬で整えた。

　鉄球が猛もう然ぜんと迫りくる。

　もはやかわさぬ。逃げぬ。

　迎むかえ撃うつ。

「憤フンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン
ンッッッッッッッッッッッッ……！」

　トワニングは右の正拳を鉄球に叩きこんだ。

　鉄球は割れた。

　物の見事に砕くだけ散ったが、次の鉄球がくる。上等。上等だ。こい。くるがいい。

「怒ヌウウウウウウウウウウゥゥゥゥゥゥゥゥゥァァァァアアアアアアアァァ……！」

　今度は左の正拳だ。鉄球と衝しよう突とつする。押されそうになったが、撥はね返した。

　ぶち砕いて、筋肉が沸わきたつ。

　すぐにまた次がくる。それはわかっていたが、準備をする間がなかった。もう至近だ。

　拳ではない、全身で受け止めるような形になった。

　棘が身体からだのあちこちを貫つらぬき、削けずって、その一秒か二秒後にはもう、トワニングの身体は宙を舞まっていた。

　受け身をとることもできなかった。無様な体勢で墜つい落らく

し、すぐさま起きあがったのは意思によるものではない、肉体が勝手に反応したのだ。すなわち筋肉がトワニングを立たせた。立ちあがってから彼は我に返った。

　負傷の程度はよくわからない。出血はある。骨折はどうか。不明だ。やけにふらつく。これはいかん、と思いながらも、トワニングはニヤリと笑った。「……ここから、だ。ここから、拙僧の筋肉が……本領を、発揮する……ッ！」

　トワニングはおぼつかない足どりで巨人へと近づいてゆこうとする。

　戦やれるか、戦れぬか、ではない。戦るか、戦らぬか。

　だとしたら──戦る。そうではないか……？

　トワニングは胸を張って両腕を広げてみせた。「さあ、戦るぞ……ッ！」

　巨人がいきりたって向かってくる。

　その足が突然、止まった。

　喚かん声せい。

　矢だ。右側面、つまり南の方向から無数の矢が飛んできて、巨人を射すくめた。いや、矢は巨人をたじろがせただけではない。

　ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨ……！

　巨人が身をよじって地じ団だん駄だを踏みはじめた。その巨人のそばにいる別の巨人も同じだ。

　矢は鎧に弾はじかれ、ばらばらと落ちて、たぶん一本も貫かん通つうしていない。

　背の籠だ。

　矢は巨きよ人じんを傷つけられなかったが、背の籠に乗っていた操縦者を射殺した。

　足並みが乱れるどころの騒さわぎではない。巨人たちが暴れだして、互たがいに押しあい、殴なぐりあって、一部では取っ組みあいが始まった。そのへんでなんとか隊たい伍ごを組もうとしたり、右往左往したりしていた悪魔たちも、大いに巻き添ぞえを食いまくっている。

　しかし、誰が、いったい何者が──いや、いかなる集団が、矢を。

「おお……！」

　見れば、右方に整然とした隊列がある。ベージュに赤いラインが入ったあの軍服。同色のヘルメット。そして、盾と弩剣ラバイユ。なぜ彼らがここに。

「バルモア商会私兵隊……！」

　逃げたはずだ。バルモア商会は多数の商船と護衛船を所有している。それらの船に社員、その家族、それから私兵隊を乗せ、物資を積みこんで、彼らはいち早くジェードリから離れた。バルモア商会私兵隊はジェードリ最大の武力集団だ。かつて血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツがオストロス神しん殿でんを占せん拠きょした折には、これを奪だつ回かいするため、ジェードリのために、彼らも血を流した。その離り脱だつというより逃とう走そうが全市に与えた衝撃は大きく、商会の名望は地に落ちたが、所しょ詮せん、抜け目がない商人なのだ、あてにするのがそもそも間違っている、というあきらめに似た感想を抱いだく者も少なくなかった。それが、いったいなぜ。

「撃ち方やめェイッッ……！」

　雷らい鳴めいのような大音声だった。知っている声だ。──そうか。

　あの男か。洋上に逃のがれたはずのバルモア商会私兵隊を、どうやってここまで引きずってきたのか。見当もつかないが、あの男ならやりかねない。

「突撃するぞ！　己おれにつづけ！　このジャン・ジャック・ド・ジョーカーが貴様らを勝たせてやる！　貴様らはただ己おれを信じてひたすら進めばいい……！」

「ジョーカー！」「ジョーカー！」「ジョーカー！」「ジョーカー

……！」

　私兵たちは盾に身を潜ひそめるようにして弩剣ラバイユを突きだした。敵に一いつ斉せい射撃を浴びせたあと、ああして密集隊形で突撃するのが彼らの常じよう套とう手段だ。単純だが強力で、幾いく多たの海かい賊ぞく、山賊を粉砕してきた。

　雄おゝおしく前進を開始した私兵たちの戦列から、黒と金のどぎつい鎧、魔導王〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーの〝摩訶マハーク鴉一式ロウスーツ〟を身にまとった男が、黄金色の大おお太だ刀ち──あれは〝東の原野の魔導王〟天テン正セイ具グ象シヨウの遺刀、刃は渡わたり一・二メーテルの〝大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウ〟だ──を掲かかげて飛びだし、一人のほっそりした女が見る間にそれを追い抜いて駆かける。女の全身から何か黒っぽい靄もやのようなものが噴ふきだした。女の手の中にそれが集まり固まって、ある形をなそうとしている。

　トワニングは低く唸うなった。「──グリムサイズか……！」

　巨人の惑わく乱らん、否、狂きよう乱らんによって隊列を乱しに乱している悪魔たちに肉にく薄はくして、女がその武器を振りかぶる。

　黒い、やや緑がかった正体不明の物質でできていて、大きい、柄つかだけでも五メーテル以上の長さがあり、その柄の先から三メーテルもあろうかという獰どう猛もうに湾わん曲きよくしている刃やいばが直角に突きだしている──あれは、鎌かまだ。

　命を、それもたくさんの命を、いっぺんに、取るに足らない雑草のように刈かりとってしまう、恐ろしい鎌──グリムサイズを、彼女は、〝凍てつくドールマスター・森のオブ・フローズン人形王フオレスト〟アドニス・グリムハーゲンの最後の娘むすめ、最高傑けつ作さくの人形姫マイネイヒクローディアは、鋭するどく斜ななめに振りおろした。

「──〝斬回ROLLIN'〟……！」

　そして死が、無差別の容赦ない死がばらまかれる。

　死は生命の残ざん滓しとしての体液をぶちまけながら、肉片の、骨片の、鉄片の、その他ありとあらゆる欠片かけらという形で散乱

して、あとはむなしく潰ついえるだけだ。

　死の旋せん風ぷうに不意打ちされて、敵は、悪魔たちは怯ひるむ。

　怖おじ気けづいた悪魔たちを、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーが大懺悔嘯で撫なで斬ぎりにしてゆく。

　駄だ目め押しは私兵隊だ。私兵隊の突撃によって、悪魔たちは押し流されるように潰かい走そうを始めた。

「なんと……」トワニングは親指で髭ひげをぬぐって短く笑う。これが笑わずにいられようか。

「──パンカロもいくぞォォォォォォラァッ……！」チーロの馬鹿でかい声が聞こえた。一度は後退したパンカロ・ファミリーが、また前に出ようとしている。

　トワニングは軽く肩をすくめた。気持ちはわからなくもないが、止めねばなるまい。もはや笑いの衝しよう動どうは収まっていた。彼は理解している。どうやら敗北はまぬがれそうだが、これは決して勝利ではない。ジョーカーの奇襲的な加勢のおかげで、なんとか一時的に敵を退けることができただけだ。ふたたび攻められたら持ちこたえることができる保証はないし、敵はきっとまたやってくるだろう。──おそらく、そう遠くないうちに。

十巡月十六番日　？？

　縁ふちにしっかりとつかまって身を乗りだすと、下から塊かたまりのような空気が猛然と吹きつけてきた。目ま深ぶかにかぶっていたフードがはねあげられる。一度目をつぶって、すぐに薄うす目めを開けた。「──おーおーおォー。すっげェー……」

「よせ、危ないっ！」後ろから声が飛んできた。

「ダァーイジョブだって」肩を震わせて笑い、しっかりと見すえる。

かつて南門があった場所、その端はし、絶ぜつ壁ぺきの上から──真下を。

地面が見える。砂地だ。砂漠というほどじゃない。草むらや灌かん木ぼくの茂しげみが点々としている。起き伏ふくはほとんどない。平地だ。徐々に近づいてきている。

降下しているのだ。

一いち巡じゆん月げつ以上にわたって飛行しつづけたサンランド無統治王国首都エルデンが。

「フヒッ」飛燕フエイヤンは顔を引っこめ、一気に立ちあがって振り向いた。「このままだと、遠からずヒサビサの地上っつーコトになりそォーだぜ、ベアトリィー」

「落ちているんじゃなければ、な……」ベアトリーチェは腕うで組ぐみをして眉まゆをひそめている。医術士服の上に厚手のコートを着ているのは防寒のためだ。たぶん地上より山の上のほうが気温が低いのと同じ理り屈くつだろう。まだ十巡月のはずなのに、現在、空を飛んでいるエルデンは真冬のように寒い。

「ンだよ。心配性しようだなァ。明るく考えよォーぜ。ぴかぴかムッキムキの前向きによォー」

「わたし一人の問題ならばいい。でも、エルデンには大勢の市民が残っているんだ。もしこれが落下なら、まず間違いなく全員助からない」

「そンなら考えたって無む駄だじゃね？」

「それはそうなんだが──」ベアトリーチェは一つ息をついて首をかすかに振った。「そうだな。結局、わたしはただ死にたくない。それだけなんだ。なんとか生き延びて、会いたい者もいる。何があっても、必ず会わないといけない」

「ンなのオレだって同じだっつゥーの」

「ユリカさん、か」

「まァーねェー」飛燕は後頭部をひとしきり掻かいてからフードをかぶりなおした。「あとは、仲間な」

「そう考えると、わたしはまだマシなほうだな。こんな状況ではあるけど、母様も、アサイラムのみんなも、それに古巣の仲間たちも一緒なんだ」

「イヤけど平気っしょ」飛燕は人差し指で鼻の下をこすってケケケと笑ってみせた。「ジンとかよォ。オレァ、マジでうまくやってるって信じてンぜ？　ユリィなんて、そもそもハンパねェーしさ。オレだってそうそう勝てねェーっつーの。そのユリィがいるワケだから、マリィーロージィーとかもそりゃもォー無事すぎンだろゼッタイ」

　ベアトリーチェは何か言いかけて口をつぐみ、少しすると微笑ほほえんだ。「ああ、そうだな。わたしもそう思う」

　強ェー女だな。もちろんユリィにはかなわねェーけどよォ。ベアトリーチェの傍かたわらに無言で立っている男の存在がなければ、口に出してそう言ったかもしれない。

　上背があることは間違いないが、長身という言葉はその男にふさわしくない。魁かい偉いと表現するべきだろう。

　男は微び動どうだにせず、ベアトリーチェをじっと見つめている。まぶしそうに目を細めているようでも、獲え物ものの隙すきをうかがっているようでもあって、何か企たくらんでいるとしか思えない。さりとて、この男がベアトリーチェに危害を加える可能性はかぎりなく無に近いだろう。男の身体からだつき、顔がん貌ぼう、眼光、身にまとう拘こう束そく衣めいた装しよう束ぞく、たしかにすべてが異様なのだが、過去の姿を知っている身としては、何から何まで変わったという印象しか受けない。かつてふれるものぜんぶ汚けがして犯おかして殺していたのに、もはや虫も殺さない男になったのではないか。そんなふうにさえ感じてしまう。

　飛燕の視線に気づいたのか、男がこちらに顔を向けた。「何だい。俺の顔がそんなにめずらしいのか」

　声まで前と違いやがる。飛燕は苦笑いする気にもなれず唇をひん曲げてみせた。「いまだにどォーも見慣れねェー眺ながめではあるけどな。べつにめずらしかァーねェーよ。いッくらなんでもサスガにな」

　ＳＩＸはクッと喉のどを鳴らしてわずかにうなずいた。「そうか

い」

「ついてくるなと言うと、その場にずっと立ったままでいるんだ」ベアトリーチェは気まずそうに顔をしかめた。「それはそれで、なんというか……困るだろう。やっぱり、いろいろと。いっそ近くにいてくれたほうが、わたしの目も届くし──」

「気を遣つかわせてすまないねえ」

「まったくだ」

「俺もあなたを困らせるようなことはしたくない。だがねえ。正直よくわからないんだよ。何しろ、こういうことは初めてなものだからさ」

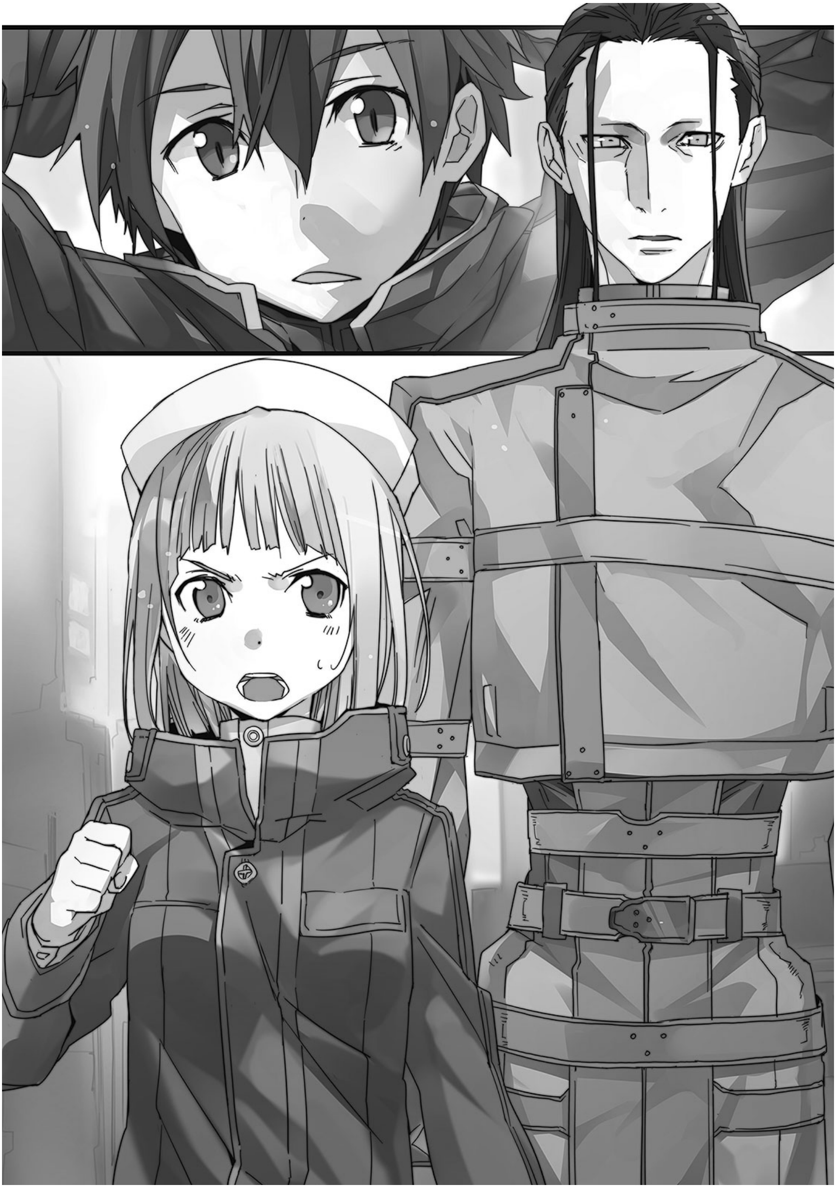
「まあ、今のところはおかしな真ま似ねをしたことはないし、わたし個人がそこまでお前に悩なやまされているわけでもないんだが」

「そいつはよかった。今後もそうありたいと願っているし、そうするつもりだよ」

「なンッかよォー」飛燕は頭の後ろで手を組んで眉根を上げた。「テメーら妙っつーか変なアレだなァ、何？　関係っつーの？」

「い、言っておくがっ。わたしとこの男は、どういう関係でもないからなっ」

「そのとおりさ。俺が一方的にこの人に惚ほれ抜いていて、勝手にこの人を守りたいと思い、この人の役に立ちたいと望んでいるだけだからねえ」



「わたしとしては迷めい惑わくなんだっ。いや、今のところ、実害は被こうむっていないけどっ……」

「いや。実際、俺のような輩やからがそばにいるだけで、十分以上に迷惑この上ないと思うよ」

「何だその言い種ぐさは!?　そんなふうに卑ひ下げして何がどうなるものでもないだろう!?　たしかに、過去を消し去ることはできないし、償つぐなえない罪もある！　それでも、後ろばかり見ている者、うつむいてばかりいる者と、顔を上げて前を向く者との間には、天と地ほどの差があるんだ！」

　ＳＩＸは少しだけ腰をかがめてベアトリーチェの言葉を最後まで聞くと、三度、まばたきをしてから、二度、首を縦に振った。「心しよう」

「そうしろ！　卑ひ屈くつな男は大嫌いだ！」

「あなたに好かれる日がくるとは思えないが、嫌われたくはないからねえ」

「だからまたそういうことを──」ベアトリーチェはぷいと横を向いた。「もういい！」

「ケッコー毛だらけでオモシれェーことになってンな、テメーら」

「ぜんっぜん、おもしろくないっ」

「つゥーかさっきから顔ォ、真っ赤っかだぜェ？」

「寒いからだっ」

「そいつはいけない。着る物を貸そう」

「それを脱いだら、お前は裸になってしまうだろうが！」

「なぁーに、俺は平気さ。幸か不幸か、死ねもしない身体だからねえ」

「お前はよくても、わたしが平気じゃないっ」

「ベアトリーチェ……！」

　銀色に輝かがやく鎧よろいを着こんで、濃のう紺こんのオーバーコートを羽織ったヨハン・サンライズが、似たような恰かつ好こうの番人たちを引き連れて早足で近づいてきた。その中には死神の面をつけた羅ラ叉サもいて、刀の柄に手をかけている。

　いろいろあってこんな状況だから、さしもの死神も問答無用で襲いかかってきたりはしないが、いつでも戦やれるという姿勢は決して崩くずさない。一方、眼鏡の総長のほうは気味が悪いくらいこの現実に順応している様子で、今では必要に応じて飛燕と話しあいをすることも厭いとわなくなった。

　あるいは、最近、体調が思わしくないらしい女副長の変化が、ヨハン・サンライズの心理にさまざまな影響を及およぼしているのか。──しッかし、よくわかンねェーけど、自分のガキが女の腹ン中にいるっつゥーのは正直どういう気持ちなンかねェ……。

「どのような様子だ。エルデンは高度を落としつづけているか」

「はい、おそらく──」

「オレァ、この目でバッチシ確認したぜ。オレらのエルデンは落ちてるか、降りてるか、そのどっちかだ。それだけは間違いねェーよ」

「そうか」ヨハンは一度、ＳＩＸに無感情な視線を投げかけてから、右手の中指で眼鏡を押しあげた。「──では予定どおり、もしエルデンが地に降りたったら至急、総員退去する。何しろ急な話だから、それまでに準備が終わるかどうかが問題だが」

「アサイラムはどうにか間に合うのではないかと思います。秩序の番人のみんなに手伝ってもらっていますし──それから、龍りゅう州しゅう連合にも」

「残留市民がなかなか一枚岩になれない中で、協調してくれる勢力の存在は貴重だ」

「何ソレ？　もしかしてオレらのことゆってンの？」

「あくまで現時点では、という条件付きではあるがね」

「ハッ。そりゃそォーだ。今は非常事態っつゥーヤツだからよォ。テメーらもそォーかもしンねェーけど、しょォーがなくやってるだけだかンな。首しゅ尾びよく地上に降りられたらキレーさっぱりオサラバだぜ」

　ヨハンは笑みらしきものを唇の端に浮かべた。「そう願いたいものだ」

「速度が上がってきたみたいだねえ」ＳＩＸが低く言った。

「おッ……」飛燕は軽く目を瞠みはった。「マジだ」

　さっきまでとは明らかに違う。体重が軽くなったような、そのうち身体が浮きあがりそうな、心こころ許もとなさにも似た感覚がはっきりとある。

「これもキング・グッダーの仕業なのか」ヨハンが呟つぶやいて、相変わらずエルデンの中央にそびえ立っているシャイニンググローリーパレスのほうに目をやった。

　あの悪あく趣しゆ味みなまでに派手派手しい城を見ると、飛燕も胸がむかついてくる。異界生物フリークスどもが地上にわいて出てきたのは、どう考えても古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいが解けたからだし、エルデンが勝手に飛ぶわけはないから、これにも十中八九、キング・グッダーの意思や力が関係しているだろう。その王は城から出てこない。魔ま導どう兵へいの姿はどこにも見あたらないが、城に押し入ろうにも出入口が完全に封ふう鎖されていて不可能だ。クソヤロウめ。いったい何考えてやがるンだ。つゥーか、アレなんじゃねェーの。キング・グッダーなんて、ホントは最初ッからどこにもいねェーんじゃねェーのか……？

「あの男は、きっと──」押し殺したようなＳＩＸの声だった。「俺たちを下ろしてしまいたいんだよ。邪じや魔まなのさ」

「まるでチョクセツ知ってるみてェーな口ぶりじゃねェーかよ」

「何せ有名人だからねえ。──む……」ＳＩＸは体勢を崩しかけたベアトリーチェを支えて、すぐに手を離した。転びそうになったのはベアトリーチェだけではない。秩序の番人の中には座りこんでしまった者もいたし、飛燕もとっさに膝を曲げて踏んばった。

　この音は地鳴りではない。エルデンは地面の上にはないのだ。エルデン自体が揺れ、震えている。鋼はがねのように鍛きたえ抜かれて、実戦の阿あ鼻び叫きよう喚かんを肌はだ身みで知っているはずの番人たちがおののき、悲鳴をあげた。

「騒さわぐな！　不ふ甲が斐いない……！」羅叉がそう怒ど鳴なる気持ちもわからなくはないが、彼らを嗤わらう気にはなれない。飛燕も恐ろしかった。だって、何がどうなろうと、何の手も打てない

のだ。ただ運命に身を任せるしかない。「──こォーゆーのはイチバンやだし、怖ェーんだよ……！」

「落ちることはない！　大丈夫だ！」ヨハンが叫んだ。

「降りるよ……！」ＳＩＸはいつでもベアトリーチェを抱きよせられるような姿勢を保っている。そんなにベアトリィーのコト好きなンかよ。あれァ正真正しよう銘めいのモノホンだな。

　飛燕は地面にしがみつくようにして南門跡あとの向こうに広がる空を見た。空が移動する。上へ、上へと。目に映る空がどんどん低く、低くなってゆく。それにつれてエルデンの鳴動が強まる。ずいぶんとまあ激しい。本当に大丈夫なのか。よしんば大地に激突しなくても、途と中ちゅうでエルデンが壊れてしまうのではないか。恐ろしくてたまらないが、それだけじゃない。高ぶってもいる。飛燕は唇を舐なめてヘヘッと笑った。「──地上か……！」

同日　Ｍ．Ｔ．Ｄ．

　顔を上げると台座のような形をした山が目に入る。世界最古にして最大の神しん殿でんを戴いただくあの聖山こそがＭ．Ｔ．Ｄ．の中心で、象しよう徴ちようで、Ｍ．Ｔ．Ｄ．そのものだ。

　石いし畳だたみの道も、踏み均ならされた道も、野の道なき道も、人、人、人であふれかえり、彼ら、彼女らは一様に、脇わき目めもふらず一心に、聖なる山を目指している。示しあわせたわけではない。ただ皆みな、救いを求めているのだ。もしくは避ひ難なん所じよを探している。神がもたらす最高の恵めぐみである蘇そ生せい式しきの総本山で、謹きん厳げんな僧そう侶りよたちの故郷として知られるあの聖山なら、拒こばまれることはないだろう。少なくとも、一時的な滞たい在ざいくらいは許されるはずだ。

　全身に布を巻きつけてフード付きの外がい套とうを身につけているリクの大きな手が、ルカの手をしっかりと握にぎりしめてくれている。リクの大きな身体に目をとめる人はいても、警戒心をあらわにする人はいない。それどころではないのだろう。

　世界は混こん沌とんの叢むら雲くもに覆おおわれつつある。

　噂うわさによると、ラフレシア第三帝国の軍隊がサンランド無統治王国の首都エルデンを陥かん落らくさせ、破壊のかぎりを尽つくした結果、古い魔術の封ふう印いんが破れて異界生物フリークスたちが地上に這はいだしてきたのだという。もちろんエルデンは遠いが、空を飛ぶ、鳥ではない異界生物フリークスの群れを、ルカも何度か目もく撃げきした。そうした異界生物フリークスに襲われ、逃げてきた人たちの傷つき疲れきった姿も目にしている。噂がそのままぜんぶ真実かどうかはわからないが、真っ赤な嘘うそではないことだけはたしかだ。

「他ほかに行くあてもないんだけど……」ルカがそっと言うと、リクがこっちを見る。ルカはリクの手に絡からめている指にぎゅっと力をこめた。「なんだか、いやな予感がする」

　リクが足を止めたので、ルカも立ちどまった。

「おお……！」という喚かん声せいがそこらじゅうでわき起こったのはそのときだ。

　リクがびくっとして聖山のほうに目をやった。ルカもつられてそっちに視線を向ける。途と端たんに寒気がして鳥とり肌はだが立った。

　周りの人々は合がつ掌しようしたり、両手を頭の上で組みあわせて激しく振ったり、ひざまずいたり、平へい伏ふくしたりしている。早くも感かん涙るいにむせんでいる者さえいた。でもルカは怯おびえている。あれは不ふ吉きつだと、何かよくないものに違いないと、ルカの本能が感じとっていた。

「竜……」とリクが掠かすれた低い声で呟いた。

　ルカは首を横に振る。べつにあれが竜ではないと否定しようとしたわけではない。そうではなくて、とにかく拒きょ絶ぜつしたいのだ。あのようなものが現に存在する。それは打ち消しがたい事実だけれど、あれを認めてはいけない。どれだけ美しくても、胸を打つほど神こう々ごうしくても、あれはとてもまがまがしいものだ。

　それはどこからともなく現れて、聖なる山の頂にそびえ立つ神殿の上で十四枚の翼を広げていた。長大だが蜻蛉とんぼの翅はねを思わせる透とう明めいな翼は、雲間から斜ななめに射しこむ陽光を受けて七色に輝いている。聖山まではまだまだ距きょ離りがあるの

に、その姿形がはっきりとわかった。途方もない巨きょ体たいなのだ。優美な身体からだつきはまさしく竜のそれだが、全身が白い。真しん珠じゅのような光こう沢たくを帯びている。

「神だ……！」と誰だれかが声を張りあげた。「神が降臨された……！」

「そうだ、神！」「神さまだ……！」「どうか、お助けを！」「神さま！」「神よ、救いたまえ……！」「神さま……！」

「違う」ルカはもう一度、今度は明確に、否定するために力強く首を横に振った。「違う。あれは、違う。だいたい、神さまなんて──」

「ルカ」リクが有う無むを言わせずルカを抱きあげた。

　竜が十四枚の翼を羽ばたかせる。飛ぶのか。明らかに飛ぼうとしている。

　人々の喚声が悲鳴に変わった。──神よ！　あなたは我々を救ってくれるのではないのか！　いったいどこへ行くのだ！　神よ……！

「だから……！」

　あれは違うのだ。神さまなんかじゃない。もし神さまだとしても、人間を救ってくれたりしない。ルカはそのことを知っている。神さまなんて、ろくなものじゃない。

　とうとう竜が飛びたった。

　人々は動揺し、悲ひ嘆たんに暮れて、一部は狂乱に身を任せようとしている。

　リクはルカを抱いたまま駆かけだした。恐きよう慌こうに陥おちいったり、激情に支配されたりした人間たちがどんなに厄やっ介かいか、ときに恐ろしいか、二人ともよく理解している。何か不測の事態が起きて苦境に立たされても、二人なら切り抜けられるはずだ。しかし、そのために人を傷つけることになってしまうかもしれない。それはできれば避さけたいから、一刻も早くこの場を離れるのだ。

「どこへ行こう」と、リクが胸の底まで響ひびいて染しみ渡わたる

ような声で言った。

　最初は正直、少し聞きとりづらかったけれどすぐ慣れたし、今ではこの声が大好きだ。

　ルカはリクに強くしがみついて叫ぶ。「──遠くへ……！」

　リクはちょっぴり笑った。「そうだね。わかった。遠くへ行こう。もっと遠くへ」

「どこまでも！」

「ああ、どこまでも」

　ルカは空を舞まうおぞましいまでに壮そう麗れいな竜を見上げた。さっきまでは怖くて仕方なかったけれど、もう平気だ。ステラ。ラッチャ。テッド。ジョルジュ。アンナ。ミミ。皆は無事だろうか。どうやら想像もつかない規模の恐ろしいことが起きているみたいで、唯ゆいーいつそれだけが心配だけれど──きっと、大丈夫だよね。大丈夫に決まっている。だって、みんな、ローラの子供だもん。

十巡月十七番日　テルバド山砦

　ダメだ。気を抜くと眠ってしまいそうになる。というか、少し眠っていたのかもしれない。肩が濡ぬれている。雨。

　雨がしとしと降っている。

　山やま肌はだから突つきだすこの見張り台には、木組みの屋根が掛かけられているが、隙すき間まだらけで雨あま漏もりがひどいのだ。だから、雨だれをよけて座っていたはずなのに、外套が湿っている。寒い。

　むちゃくちゃ寒いよ。いったん意識すると、震えが止まらなくなった。死ぬんじゃないかな。死なないって。このくらいで。

　ここから見渡す景色は雨のせいで煙けむっていて、視界良好とは

いえない。眼下の黒々とした森の中にうごめく影が紛まぎれていたとしても、マリアローズには判別できないだろう。

　歯を食いしばってなんとか震えを止めようとした。わずかの間、成功して、すぐに失敗する試みが気持ちをいっそうしぼませる。

　ユリカ、カタリとは合流することができたけれど、トマトクン、サフィニア、ピンパーネル、ハニーメリー、きゅーの消息は依い然ぜんとして不明だ。なりゆきでファニー・フランクたちと行動をともにしているのも、いいのか悪いのか。

　ともあれ、昼飯時ランチタイムの目的地だったらしいこの山さん砦さいを探しあててはみたものの、たどりつくともぬけの殻からだった。一時的にでも昼飯時ランチタイムの連中が滞在したのならその形けい跡せきがあるはずだし、メッセージくらい残していってもおかしくない。何も見つからないわけだから、事情があってここにはきていないということだ。

　この山砦で昼飯時ランチタイムを待つという手もある。ただ、山砦といえば聞こえがいいが、ようは洞窟と木造建築物をでたらめに組みあわせた山さん賊ぞくの隠かくれ家がだ。籠ろう城じようできるほど堅けん固ごな防御施設ではないし、食しよく糧りよう等の備び蓄ちくもない。異界生物フリークスに嗅かぎつけられて攻められたらひとたまりもないだろう。

　果たして、ここにとどまるべきなのか。

「マリア」後ろから声をかけられても、マリアローズは振り向かなかった。

「何だよ」

「代わろうか？　その──見張りを」

「いいよ」マリアローズはフードを揺すって水すい滴てきを落とした。外套もボディスーツもぼろぼろだ。裂さけたり穴があいたりしている部分を繕つくろったり布で補強したりして着つづけているけれど、そろそろ限界だろう。「大丈夫だから」

「でも、だいぶ疲れているように見えるヨ」

「疲れてない人なんかいないでしょ。きみだって──」マリアローズ

は自分の両肩をつかんで唇を噛かんだ。「……きみだって、身体は平気かもしれないけどさ。内心、気が気でないんじゃないの。心配でしょ。仲間のこと」

「それは、まあ……ネ」

「やっぱり──」

　マリアローズにはわからない。ずっと言おうとしていた、何度も言いかけた、いいかげん言わないといけない。そう考えて口に出そうとしているのか。それとも、不意に今、唐とう突とつに思いついただけなのか。どっちにしても、自分を止めることができなかった。

「やっぱりさ、ダメだよ」

　ダメなのは僕じゃないか。こういうことは、せめて振り返って顔を、目を見て言うべきだ。どうしてその程度のこともできないのか。できない理由があるのか。

「……ダメって」

「きみはここにいちゃダメだってこと。ここで昼飯時ランチタイムの人たちに会えればよかったのかもしれないけどね。そうはならなかったわけだから」

「ボクは」

「気にならないなんてことはないでしょ。仲間のことなんかどうでもいいなんて、まさかそんなこと言わないよね。聞きたくないし」

「それは、もちろん──」

「一人でも」マリアローズは自分から言いだしておいて、絶句した。

　この傷口にはふれたくない。縫ほう合ごうして、消毒して、包帯をあてて、見えないように隠しておきたい。

　でも、痛い。

　どうしたって、痛いんだよ。

　いっそほじくりだして泣き叫びたい。

　悶もだえて、転げまわって──何も感じなくなるまで。

「──一人でも、欠けたら……失ったら、それがもし、自分がいない間に起こってたら、絶対、必ず、後こう悔かいする。もうそうなってるかもしれないんだよ？　なんで平然としていられるんだよ。どうしてまだここにいられるんだよ。おかしいよ。それなのに、代わる、だって？　見張りとかしてる場合じゃないだろ？　違うよね？　そうじゃなくて、きみがしなきゃいけないことは、そんなことじゃなくて──」

「マリア……」

「だから！　僕の名前なんか呼んでる場合じゃないだろ！　僕はなんともないし！　怪け我がだってユリカに治してもらったし！　ユリカとカタリの腕だってくっついたし！　そのうちもとどおりになりそうだし！　僕は大丈夫なんだよ！　大丈夫じゃないのはきみじゃないか！　頼たのむから、さ──」マリアローズは膝に顔を押しつけた。「……頼むから、捜さがしに行ってよ。きみの仲間だろ。大事な仲間じゃないか。いやなんだよ。失ってほしくないんだよ。ダメだってば。こんな思いをするのは──」

　違う。違う。違う。

　もっともらしいことを言って、まるで相手を気き遣づかっているようなことを言って、だけどそんなものお為ためごかしにすぎない。それどころか、ほとんど八つ当たりだ。

　わかっているのに。

　本当はきみだって、身体が二つあればいいと本気で願っているくらい、思い悩なやんでいる。それを一いつ切さい見せないで、ここにいる。僕が言っているようなことなんて、ぜんぶ承知の上なんだ。それくらいは僕もわかってるんだ。わかっているのに、こんなことをきみに言う。僕は最低だ。腐くさってる。最悪の屑くずだ。

「……僕は、大丈夫だからさ。ユリカとカタリがいるから。僕も仲間を見つけないといけないしさ。今はそれが一番大事で、正直、他ほかのことは考えられないし、考えたくないしさ。だから、もう行ってよ。てゆうか、これが今生の別れってわけじゃないでしょ。

お互たがい生きてれば、いつかまたどこかで会うことだってあるかもしれないし。ないとはかぎらないしさ。……行ってよ。頼むから」

「ああ」

　雨音に紛れてしまいそうな、吐と息いきのような声だった。

「わかった。そうする」

　マリアローズが唇を引き結んでうなずいてみせると、近づいてくる気配がした。

　べつに、とりたててその動作が素す早ばやかったわけじゃない。振り払はらうことも、身をかわすことも、その気になればできた。できたはずなのに、しなかった。

　後ろから抱だきすくめられた。

「じゃあ、行ってくるヨ」

　耳みみ許もとで囁ささやかれた。身み震ぶるいしそうになった。なんとかこらえた。そのために全身をこわばらせないといけなかった。呼吸もろくにできない。いつまで我が慢まんしていればいいのかな。

　長い、長い時間だった。そう感じただけかもしれない。心臓が止まる前に、離れてくれてよかった。止まるどころか、大暴れしている。

　ゆっくりと、少しずつ息を吐はいた。

　まだすぐ後ろにいる。早く行ってよ。行け。行けったら。

　ようやく足音が聞こえはじめ、それはだんだんと遠ざかっていって、もう気配も何も感じなくなると、顔がゆがみそうになった。顎あごが震える。目め頭がしらが熱くなって、何かがあふれてきそうだ。

　思いきり目をつぶった。鉛なまりの塊かたまりを飲みこもうとするように耐たえていると、発ほつ作さのような感情の高ぶりが収まってきた。

なんだか頭がぼんやりしている。腰の物入れを探さぐって、細工物をとりだした。透とう明めいな石でできていて、小さな宝石がちりばめられている、薔ば薇らをかたどった細工物。日が出ていたら、もっときれいに見えるのにな。今日は雨降りだから。

ためらう元気もなかった。

黒々とした森に向かって細工物を放ると、ため息がこぼれた。

「……でも、きみがいると、強くなれないと思うんだよ」

十一巡月十三番日　ヨナ樹海

皺しわ深ぶかい老女が草むした地面に腰を下ろして背を丸めている。

老女は微び動どうだにしない。死体か、あるいは彫ちよう像ぞうのようにも見える。

樹海は湿っていて静かだ。生き物の気配はない。この広く深い樹海が育はぐくむ生き物たちの多くは、逃げ散ってしまったか、どこかに隠れて息を潜ひそめている。

樹海は侵略され、荒らされていた。しかし侵略者の領土にはまだなっていない。守り手がいるからだ。いや、守り手という呼び名はふさわしくないだろう。彼らは樹海を戦場にしている。樹海を利用して、侵略者たちに抵抗しているのだ。樹海を守っているわけでは決してない。むしろ樹海が彼らを守ってくれている。

やがて樹海の静せい寂じやくが破られた。何かが地面を踏む音がする。草や低木を踏みにじる音が聞こえる。何か硬かたいもの同士がふれあっている。息づかい。話し声。奇声。怒声。侵略者どもが近づいてきつつある。

老女はまだ動かない。本当に動くことができないのかもしれない。とうに息絶えていたとしても不思議ではないほど、彼女は見るからに年老いている。

侵略者どもは刻一刻と迫せまってくる。

ついに老女がゆっくりと肩かたを上げながら息を吸った。

老女は今まで呼吸を止めていたのだ。

そして吐きだす前に、侵略者どもの前衛が乱れた。

折れる音。砕くだける音。落下し、あるいは滑すべり落ちて、叩たたきつけられ、もしくは貫つらぬかれて、いくつもの叫び声が、悲鳴があがる。落とし穴だ。一つや二つではない。大小五十以上の落とし穴が侵略者どもの足をすくった。

混乱し、後退しようとする者、右往左往する者もいたが、侵略者の前衛は鎧よろい兜かぶとや鎖くさり帷子かたびら、剣けん、盾たて、槍やり、斧おの槍やりなどで武装している蜥蜴人だ。蜥蜴人はその名のとおり、蜥蜴人間としか言いようのない姿をした異界生物フリークスだが、下等蜥蜴人と違ちがって彼らの知能は高い。すぐに秩ちつ序じよをとりもどすだろう。

それよりも早く老女が顔を上げた。老い萎しなびてはいるものの、眼光は炯けい々けいとしている。息を吐きながら発する声は陣じん太だい鼓このように響ひびいた。

「今だよ！　かかれ……！」

樹上で息を殺していた者もいる。隠された塹ざん壕ごうに潜んでいた者もいる。大だい胆たんにも地面に伏ふせていた者もいる。

彼ら、彼女らは一いっ斉せいに潜せん伏ぷく場所から飛びだして、蜥蜴人たちに襲いかかった。

混乱から立ちなおるどころか、まだその真まっ只ただ中なかにいる蜥蜴人たちは、ろくに応戦できない。しかも、待ち伏せしていた人間たち、とくにその先せん鋒ぽうは皆みな、手て練だれだ。効率よく敵を無力化するすべを、頭ではなく身体からだでわかっている。

ある者は剣の一ひと突つきで蜥蜴人を絶命させ、ある者は蜥蜴人の頭部に鈍どん器きを叩きつけて粉ふん砕さいした。ある者が蜥蜴人を落とし穴に追い落とすと、別の者がすかさず落とし穴に落ちた蜥蜴人にとどめを刺した。

蜥蜴人たちは完全に浮き足立っている。蜥蜴人の反はん撃げきで倒たおれる者は一人もいない。今のところは。

たとえ蜥蜴人たちがこのまま態勢を立てなおすことができずに総そう崩くずれしても、いずれ悪あく魔まどもで構成される本隊が到とう着ちゃくし、数に物を言わせて押し返してくるだろう。おそらく、ではなくて、確実に。

老女は身体を前に傾かたむけて、右手で右膝を押さえた。立ちあがろうとすると、腰に、膝に、激痛が走る。情けない話ではあるが、これだけはっきりと痛みを感じられるのならばまだ大丈夫だろうと、老女は笑う。今さら命など惜おしくないが、どういうわけか死に損ない、生きながらえているかぎりは若者たちの、その未来のためにもう一働き、二働きしてやろうと思っているうちに、このざまだ。もはや老女にとってはこの身体が邪じや魔まだった。考えることができて、口が動けば事足りる。「──首から下はいらないってより、ないほうがいいくらいなんだよねえ……」

繰くり言だ。老女はやれやれと膝を叩いてから叫ぶ。「──そこまで！　退ひけ……！」

人間たちは即そく座ざに攻撃の手を止めて踵きびすを返した。もちろん樹海は深く、戦場は広くて、戦闘は激烈だから、全員が全員、老女の声を聞いたわけではない。兵員はすべて、突撃の指令が出たときは「ウー・ラ」、撤てつ退たいは「イー・レ」といった具合に決められた短い声を発することになっている。こうした工夫によって、指揮官の命令が直接届かなくてもあっという間に仲間から仲間へと伝達され、一糸乱れず行動できるのだ。

「さて……」老女が老骨に鞭むち打うって立ちあがろうとすると、向こうからひどく人相の悪い男が駆かけてきた。とにかく顔全体がゆがんでいて、瞳ひとみの色も右は青で左は黒い。

合流後、その男は迷めい彩さい服の着用を頑がん強きように拒こばんで、だったらこのババアを殺せと言ってやったら、ようやく折れた。世間的には若造と呼べる年齢ではないのかもしれないが、老女から見ればどうしようもない餓が鬼きだ。

「おい、糞くそババア……！」

「なんだい、ダリエロ、藪やぶから棒に──って、ちょっ……」

「せいぜいつかまってやがれ！」

　抵抗する間もなく、老女は男に抱だきあげられていた。

「あ、阿あ呆ほう！　老いさらばえたりとはいえ、ちゃあんと自分の足があるんだよ！　こんなことしてくれなくたって──」

「うるせぇ黙だまってじっとしてろ！　ババアの棺かん桶おけに突っこみまくってる足の具合を信用してやるほど、こちとらお人ひと好よしじゃねぇ！」

「あんたねえ！　なんて言い種ぐさだい！　ろくな死に方しないよ！」

「どんなふうにくたばろうが、少なくともてめぇよりは長生きする予定でいるから安心しやがれ！」

「安心させたいなら、もっとマシな台詞せりふを吐いたらどうだい！」

「そんな親切な人間に見えるのかよ、この俺が！」

「たしかに！　──って、思わず納なっ得とくしちまったじゃないか、この洟はな垂たれめ！」

　老女はやむなくダリエロにしがみついた。男の胸は血の匂においがするだけではない。実際、異界生物フリークスどもの血に濡ぬれていた。すこぶる不快だが、まあ我慢できなくはない。

「しかし、もうちょっとなめらかに走れないもんかねえ。足りてないんだよ。根本的に。ババアへの気き遣づかいってやつがさ」

「贅ぜい沢たく言うんじゃねぇ！　放り投げるぞ、死に損ないが！」

「やりもしないこと言うんじゃないよ」

「てめぇ──」

「だりゅりぇろー！」と、キャラメル色の髪の毛を頭の左右で束ねた小こ柄がらな女が、後ろからダリエロに抱きついた。

「──ばっ、おい、ミシーリャこら、背中に乗るんじゃねぇ！」

「らっこー。らっこー。らっこらー」

「だっこじゃねぇ！　くそっ──」

「ダリエロ！　オトミさん！　敵の本隊がきたぞ！」

　短たん髪ぱつの女が追いついてきた。カイだ。その腰に吊つるしている明けのモーニング明星・スターだけでなく、迷彩服も血で汚よごれている。

　オトミは後方に目を凝こらした。「──ふん。本隊にはけっこうな大物もいるみたいだねえ。だけど、この樹海じゃあ、でかすぎる身体なんて邪魔なだけさ。問題ない、予定どおり罠わなに嵌はめるよ」

「了解だ！」カイは足を速めてオトミたちを追い抜いていった。

「──ったく、怖ぇババアだぜ。ただの糞ババアじゃねぇとは思ってたが、まさかあの女め豹ひようのなれの果てだとはな」

「バカヤロウ！」オトミはダリエロの頬ほおをつねった。

「いでっ、何しやがる！」「らりしららるかー？」

「なれの果てじゃない、あたしゃあ現げん役えきバリバリだよ！　あたしの業が生んじまったシノビの連中も、それから昼飯時あんたらも、まだまだひよっこどころか卵みたいなもんだ！　孵ふ化かさせて一人前に育てあげるまでは、おちおちおっ死ちぬこともできやしない！」

「子育てにはまるで向かねぇ環かん境きようだがな！」「おろむろりむらりゅろるらー？」

「まったくさ！　なんでこんなことになっちまったんだか──」

　今の状況では考えても無む駄だだと知りつつ、考えずにはいられない。いったい何が起こったのか。何が起こっているのか。これから何が起こるのか。

　そんなことよりも、対処しなければならない。敵の存在は明確

で、和解することも、共存することもできないのだから、可能なら鏖おう殺さつする。戦力的にそれは不可能だから、なんとかして追い返す。それも難しければ、待ち伏せ、奇襲を駆く使しして敵に打撃を与えつつ、消しよう耗もうを極力抑おさえて逃げまわる。

　一般的な意味の勝利は望みえない戦いだ。だが、慣れている。万の戦場を駆け抜けて、勝利の味も敗北の味も舐なめつくしてきた自分だ。

「……因果だねえ。正直、楽しくてしょうがないのさ」

「ああ!?　なんか言ったか、ババア!?」「ぴゅろぴゅらばー!?」

「何も言ってやしないよ！　いいから、あんたはしっかり走りな！」

「俺は馬じゃねぇぞ！」「ろぱろぱろぱーっ。りゅぷりゅりゅりゅんっ」

「ババアの馬にもなれないようじゃあ、とんだ役立たずだよ！　そら、走れ走れ走れ！」

　しかし、こうなってみると、昼飯時ランチタイムの存在はありがたい。もともとはどこぞの山さん砦さいを目指して移動していたのに、空を飛ぶ悪魔の一団に襲撃されて進路の変へん更こうを余よ儀ぎなくされ、結局、ヨナ樹海くんだりまで逃げてきたということらしいが──そう短くもない逃とう避ひ行こうの間、彼らは一人の死者も出さなかった。非戦闘員を抱かかえ、さらに頭領マスターと現代屈くつ指しの魔術士である〝垂れ目のベテイ・ザ・ドウベティルーピングアイズ〟という二大戦力を欠いているにもかかわらず、彼らはその難事業を成し遂とげたのだ。

　こいつらは、使える。

　使えるだけに、老いた女豹が全身全ぜん霊れいを捧ささげて生かす価値がある。

　この戦いに勝利はない。展望というものがない。だが次を失う負け戦いくさと、次に繋つながる負け戦があることを、老いた女豹は知っている。百戦錬れん磨まの彼女ですら勝機を見いだせない状況だが、悪くない負け方を重ねることはかろうじてできるだろう。

　そして待つのだ。状況が変わるのを。必ずそのときはくる。老いているからこそ、長い年月を生きてきたからこそ、絶えず変化しつづけてきた世界を目まの当たりにしてきたからこそ、彼女はそれを確信している。

　勝てなければ、それまで負けつづけて、生きのびる。

　このババアがどういうわけか長生きしちまったのは、ひょっとするとこのためだったのかもねえ。

十一巡月二十番日　ボンヌ・ソレー

　━━払ふつ暁ぎよう。

　ボンヌ・ソレーはかつて海辺に咲さく一輪の百合リリイにも喩たとえられるほど可か憐れんな港町だった。

　今は見る影もない。

　素そ朴ぼくな住民たちは虐ぎやく殺さつされるか逃げだして、もう一人も残っていないだろう。だが殺さつ戮りくの痕こん跡せきはほとんど見あたらない。この町を侵略して占領した悪魔をはじめとする異界生物フリークスたちは、多くの人間が信じるほど野や蛮ばんではないのだ。放置された死体が腐ふ敗はいして放つ死し臭しゅうの中を闊かつ歩ぽする残虐無道の悪魔ども━━といった、人間が想像しがちな姿は見受けられない。ただ、彼らが人間を自分たちと同じ知的生命体だと見なしていないことは間違いないようだ。彼らにとって、人間は獲え物ものにすぎないのだろう。人間が野の獣けものを狩って食しよく糧りようにするように、悪魔たちは人間を殺して食肉にするのだ。

　ボンヌ・ソレー市街地の赤や橙だいだいに塗ぬられて人々の目を楽しませていた家々の屋根には、人間が日干しされている。窓から窓に渡された棒に吊つり下げられている干物も、大半が人間だ。

　真っ白だった壁かべには黒や紫色の塗と料りようが塗りたくられ、正体不明の生き物の骨や皮で作られた旗があちこちに翻ひるがえっている。町を囲む堀ほりには謎なぞめいた褐かつ色しよくの液体が流しこまれ、柵さくはおぞましく補強されて、以前の倍以上の高さになっていた。

「しかし、アロンズさんよ」ヘンリー・ブラックモアは顎あごの無ぶ精しよう髭ひげをこすっていた手を止めて、縮れた黒くろ髪かみをかきあげた。「ざっと見たかぎりじゃあ、あの町を攻せめ落とすってのは、かなり骨なんじゃねえか？」

　リリアン・イヌテロが黒い顔をうなずかせた。「遺い憾かんなが

ら、私も同いかんです。正攻法ではうまくはいかんのではないかと思われる」

「堀もなんだかやばそうだし、柵もな。あの高さじゃあ、ひょいと跳とび越えるってわけにもいかねえ」

「たしかに、いかんな」

「……めげねえやつだな、お前さんは」

「何のことだ」

「いいけどよ。──で、何か策はあるのかい、大将」

「ありません」

　緋ひ色いろの鎧をまとった聖者のような顔をしている男が微び笑しようを浮うかべてそう答えた瞬間、にわかに涼すずやかな風が吹ふいて、総勢千三百七十六名の正統ラフレシア軍の兵士たちが一いつ斉せいに顔を上げた。

　東の果てで目を覚ました太陽がまばゆい光を投げかけている。計算していたかのようにその朝日の片へん鱗りんを浴びて、男はますます聖人めいて見えた。たぶんその効果をまったく意図していないわけではないと思うのだが、付き合いの長いヘンリーも確信は持てない。

　いずれにしても、この男は天才だ。すぐれた戦闘指揮官だし、個人としても勇ゆう猛もうな戦士だが、それよりもえがたい天てん賦ぷの才を持っている。人の言葉では説明しがたい超自然的、超人間的、非日常的な資質を備えていて、それがために人々は男に魅みせられるのだ。

「策など必要ありません。私にはわかる。我々は勝ちます。私を信じない者は去りなさい。私は追いません。私を信じる者のみ、私に従えばいい。私はあなたがたの信頼に必ず応こたえるでしょう。勝利をもって。──もう一度言います。我々は勝ちます」

　アロンズ・ニードルスピアは叫ばない。まあ、正統ラフレシア軍はボンヌ・ソレーから五百メーテルほどしか離れていない丘おかの中腹に布ふ陣じんして、強襲の機会をうかがっているという状況なので、あまり大声で叫ばれると困る。だが、それゆえに叫ばないと

いうわけではないだろう。その必要がないのだ。男の声は低く、深く、じわじわと耳から脳に染しみ入ってきて、人の何か根源的な部分を揺さぶる。

　兵士たちの目が輝かがやきだした。知らずに笑え顔がおになっている者も少なくない。もちろん、立ち去ろうとする兵士は一人もいなかった。いるわけがない。彼らはラフレシア帝国軍の残党だが、皇帝の血族でも何でもない、親衛隊の、しかも突然抜ばつ擢てきされた隊長でしかなかったアロンズ・ニードルスピアを、正統ラフレシア軍総そう帥すい──つまり、ラフレシア第三帝国の後こう継けい者しやと認め、忠誠を誓ちかっている。熱ねつ烈れつな信しん奉ぽう者たちなのだ。

「つってもな……」ヘンリーは小声で呟つぶやいて肩をすくめた。総帥の命令とあらば、喜んで死地にも飛びこみかねない兵隊ぞろいだが、全員が命を顧かえりみずに突撃すれば絶対に勝てるというものでもないだろう。リリアンも浮かない顔をしている。

　ただ、兵たちも追い剝はぎめいた略りやく奪だつ仕事には倦うんできていた。このあたりでわかりやすい戦果をあげておかなければ、そろそろ士気が低下してくるかもしれない。そんな話がヘンリーとリリアンの間で出たのは、つい二日前のことだ。

　すると突然、我らが総帥閣下がご命令をお下しになったのだ。

　ボンヌ・ソレーを攻める、と。

　腹心のヘンリー、リリアンにも相談せず、いきなり全軍の前でぶちあげたものだから、おいおい何だそりゃと思わなかったと言ったら嘘うそになる。アロンズ・ニードルスピアとはそういう男だからしょうがないが、正直、今も勝てる気がしない。本当にこれでいいのかよ。危あやぶんでいながらも、やつの化けの皮が剝がれるところが見られるのなら、それはそれで悪くない。そんなふうに考えている部分もないとは言いきれない。

　アロンズが騎き乗じようして、穂ほ先さきの下に帝国旗を吊してある槍を掲かかげた。「進軍用意」

　ヘンリー、リリアンもただちに馬上の人となった。騎馬はアロンズ、ヘンリー、リリアンをふくめて三十四騎。他ほかはすべて歩兵だ。輜し重ちよう兵などいない。総員が戦闘要員で、自分の荷物は

自分で運ぶ。軍装は一応、赤と黒で統一されているもののぼろぼろだし、兵科がばらばらなので武器はまちまちだ。みじめな軍隊だが、ヘンリーたちはもっとひどい状態を経験してきた。これくらいなら、まだましなほうだと思えなくもない。

「……まあ、愉ゆ快かいじゃあないがね」

「大丈夫です」アロンズが馬を近づけてきた。ヘンリーとリリアンが察して顔を寄せると、アロンズは微笑みをたたえたまま声をひそめた。「──私たちさえいれば、何度でもやりなおせる。我々は負けない。そして、いつか必ず勝ちます」

　リリアンが表情を変えずに片手をあげた。「第一隊、第二隊、前進準備！」

「微妙に声がうわずってるぜ、リリアン」そう言いながらも、ヘンリーも笑いの衝動を押し殺すのに必死だ。これだからうちの大将にはまいる。結局、俺らも兵士どもと同じ穴の狢むじなだってことか。こいつに籠ろう絡らくされて、どこまでもついてゆく。死ぬまでつきあわされて、それを後悔する暇ひまもない。

「さあ、私とともに、新たな世界を築こうではありませんか……！」

　アロンズ・ニードルスピアが声も高らかに宣言すると、兵士たちが一斉に応と答えた。

　その瞬間、ヘンリーは悟さとった。──そうか。

　そういうことかよ。

　忘れもしない、オーメネイジ八九七年十一巡月十日、オストロス神しん殿でんの大いなる祈いのりの場で、アロンズはヘンリーとリリアンに密命を下した。私がこれから言うことを、お二方とも必ず守ってください。必ず、です、と。

　──もし血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツがこの戦いに敗れるようなら、ためらうことなく逃げるべし。是ぜが非ひでも落ち延びて、再起を図るべく準備をするべし。自分がふたたび立ったとき、自分の両りよう脇わきにはヘンリー・ブラックモアとリリアン・イヌテロがいなければならない。自分はたとえひとたび倒たおれても、必ずや南の地でまた立つだろう。

二人は密命を守った。袋ふくろ小路こうじに追いこまれるところまでは粘ねばらずに戦場から離り脱だつし、敗残兵を集めて赤黒隊ノワルージユを結成。ようするに野盗のたぐいだが、南下しながら略奪をつづけ、ラフレシアに入国。当時は帝てい位いに就ついていなかったオクタヴィアンの後見団セコンダンテにアロンズ・ニードルスピアが加わっていることを知り、これと合流。

むろんヘンリーはアロンズに問うた。いったい何を考えているのか。次は何をするつもりなのか。

アロンズの返事は曖あい昧まいだった。世界を再生する。新たな世界を作る。すべてはそのためです。

そんな誇こ大だい妄もう想そう的で意味不明な言葉に、納なつ得とくしたわけではないにしてもここまでついてきた自分たちもどうかと思う。しかし、皮肉を言ったり文句を垂れたりしながらも、この男のことだから、きっと何かある。そんなふうに頭の隅すみで期待していたことは否定しないが──まさか、何かあるどころか、本当にそのままだったとは。

世界を再生する。新たな世界を作る。そのためには？　壊さないといけない。まず旧来の世界をぶち壊して、すべてはそれからだ。

実際、そうなった。世界は壊れた。なぜこうなったのか。ヘンリーにはわからない。わかるわけもないが、たぶん何か突発的な事故が起こったのだろう。人じん智ちの及およばないところで、あまりにも大規模すぎる事故が。そう解かい釈しやくしていた。

違うのだ。そうではなかった。予定どおりなのだ。

世界が壊れることは決まっていた。あえて言えば、何者かが世界を壊したのだ。いったい誰が？　悪あく魔ま？　異界生物フリークスたち？　たしかに、直接の破壊者はそうだろうが、最初に矢を放ったのはラフレシア第三帝国軍だ。その帝国軍を操あやつっていたのは誰か。皇帝ではない。裏で糸を引いていた者がいる。アデナ大元帥、ルイ・アシュモダイ・大智永世マグナスイキス・アデモンディオだ。

ヘンリーは覚えている。

あの片眼鏡モノクルをかけた男の飼かい猫とそっくりの赤い首輪

をつけた灰色の猫が、あの日、陥かん落らく前のゲヘナ聖堂、オストロス神殿にいた。

　アデナ大元帥はどうなったのか。弩級戦車ドレツドタンクアーノルディは轟ごう沈ちんして、皇帝は死んだ。大元帥も運命をともにしたものと思われているが、果たして本当にそうなのか。

　あの男は、かつて一度死んだことがあると噂うわさされていた。同じことが二度起こっても、驚おどろくに値あたいしない。

　そして、我らが御大将、アロンズ・ニードルスピアは、そのアデナ大元帥に利用された駒こまにすぎないのか。あるいは、緊きん密みつな協力者なのか。もしくは、自身の目的を達成するために、アデナ大元帥の企たくらみに乗っただけなのか。

　問い質ただしても、アロンズは答えないだろう。アロンズは決して奇き術じゆつの種を明かしたりしない。種さえわからなければ、見せ方次し第だいで奇術も奇き跡せきになる。

　もし何もかも奇跡ではなく奇術にすぎないのだとしたら、どうか種を隠かくしとおしてもらいたいものだ。最後まで騙だましきってくれれば、何の文句もない。仮に、それができなかったら──ヘンリーは腰の剣を撫なでる。化けの皮が剝がれて、お前さんがただの道化に成り果てたら、祭は終わりだ。この俺がお前さんをぶった斬ぎって、幕を引いてやるさ。

「私とともに進め……！」アロンズが馬の腹を蹴けった。

「第一隊、第二隊、進軍開始！」リリアンが叫びながら手を振ふった。「第三隊、第四隊は待機し、指示を待て！」

「行っくぞお、野や郎ろうども！」ヘンリーは一気に馬を煽あおってアロンズを追いかけた。「我らが大将につづけ！　新たなる世界のために……！」

十一巡月二十九番日　空中要塞エルデン

　直径七十七・七メーテルの完全な円形をなす王の間の床ゆかーい

つ杯ぱいに、宝石や稀少金属レアメタルなどの触しよく媒ばいを用いて魔法円が描えがかれている。魔法円が放つ薄うす赤あかいほのかな光は、まるで炎のようだ。王の間の壁かべは現在、開け放たれているわけでもないのに外の景色を映しだしている。外といっても、ほとんど青一色だ。視線を遠くに向ければ、青い世界の底に敷しかれている乳白色の絨じゆう毯たんが目に入る。

空だ。

エルデンは高度一万メーテルを飛行している。

王は、王の間の中央に鎮ちん座ざしている一個のモニュメントのような玉座に腰をうずめて、長い髭ひげをしごいていた。

高さ十メーテル超、水晶様材クリスタリン製で、漆しつ黒こくに輝く異界の真影石ネクロダイトや緋色の液体金属ファガナグヌスなどで飾かざられている。象かたどるは、竜。その名のとおり、カラミテイイジの訪おとずれを天上から地上に向けて告げる〝天からカラミテ災厄のイジ・時代を告げる者エンジエル〟に座して、王は何を思うのか。

しかし、王はもはや孤独ではない。一人きりで古代九く頭ず竜りゆうの呪のろいを維い持じしつづけ、物思いに耽ふけるだけの準備期間は終わった。

以前の王の間になかったものが、今は存在している。それはカラミテイジ・エンジェルを囲むように配置された座席だ。カラミテイジ・エンジェルと同じ材質、似た意い匠しようの座席は、壁へき面めんから突きだすアームによって支えられていて、口を開けた真しん珠じゆ貝がいのような形をしている。ぜんぶで五つ、いや――六つか。最後の一つは他の五つよりも低い位置に設しつらえられていてひときわ小さく、形状はまるで鳥とり籠かごだ。

六つの座席のうち、四つは空いている。

「嗚あ呼あ――」そのうちの一つを占しめている彼女の一糸まとわぬ肌はだは、真珠のごとき鱗うろこに覆おおわれて乳白色に輝いている。身体からだつきは人間に近いが、人間にはない尻しつ尾ぽが彼女にはあった。その双そう眸ぼうには黒目も白目もない。ただただ色とりどりのきらめきを、絶えず変化する光こう彩さいを奥深くまでたたえている。

　光輝くその瞳ひとみで、彼女は目の前に浮かぶ黒い球体を眺ながめている。球体にちりばめられた無数の光点は常に移動、あるいは明めい滅めつしていて、片時もとどまることがない。

「人の子が死んでゆきます。人の子らが死んでゆきます。魂限界アニマオーバー突破フローは収まる気配がありません。人間世界と地じ獄ごくとをつなぎあわせる異界の扉とびらはかつてないほど拡張されて、もう二度と閉とざされることはないでしょう」

「いやあ、でも──」と、座席の一つに腰かけて、赤い首輪をつけた灰色の猫を抱だいている中肉中背の男が、片眼鏡モノクルを押しあげて薄うす笑わらいを浮かべた。髪の毛が黒と白の斑まだらに染めわけられているだけではない、身につけている燕えん尾び服ふくとタイトなスーツの中間のような装しよう束ぞくも白と黒だ。「実際、みんながんばっていると思いますよ。うん。本当に十分だとぼくは思うな。だって、全体的には負けている。局地的にも、敗走したり壊滅したりしている者たちが多い。だけど、しぶとく抵抗をつづけている連中もけっこういますからね。抵抗。これこそが大事なんだな。あらがいつづけさえすれば、人間は絶対に負けないんですよ。負けないことが最重要なわけじゃないですか」

「悪魔たちもあきらめはしないでしょう。この人間世界こそが彼らにとって唯ゆい一いつの侵略すべき、そうするだけの価値がある世界なのですから」

「同じように、人間たちもあきらめないとぼくは思うな。ねえ、ヴィシュクラトー、あなた相手にこんな話をするのも馬鹿げてますが、ぼくが話したいから話すだけなんで、聞いてくれますか」

「聞きましょう、ジュジ」

「ありがとう。嬉うれしいな。でね。侵略というのはなかなか面めん倒どうなんですよ。侵略が成功する条件というのは、突き詰つめれば二つしかない。侵略者が、形はどうあれ、面従腹背でも何でもいいんですが、とにかく被ひ侵略者に受容されるか、もしくは侵略者が被侵略者を全滅させるか。このどちらかが満たされないかぎり、侵略は成功しないんです。つまり、悪魔たちは自分たちが支配者だと人間たちに認めさせるか、さもなくば人間を殺し尽つくさないといけない。これはねえ。正直、どちらも骨ですよ。悪魔と異界生物フリークスの連合軍がいかに強力でもね。人間だって馬鹿じゃないし、飛び抜けて優秀な戦闘能力の持ち主だっている、協調性も

ある。悪魔は人間を舐なめているでしょうが、そんなに甘い相手じゃありませんよ。人間が生き抜くために発揮する力はなかなかのものです。すばらしい、とさえ言ってもいいかもしれない。いやはや、サンランド無統治王国、とくにエルデンでは、そういった人間の本ほん性しようが思うぞんぶん発揮されて、キラキラと輝かがやいていて、まぶしいほどでしたよ。だいたい人間ってのはまあ、中ちゆう途と半はん端ぱに賢かしこいから、放っておくとすぐ自分たちの理性で自分たちを飼い慣らしてしまいますからね。本能を抑よく制せいしない者は、やれ犯罪者だ、やれ異常者だ何だと難なん癖くせをつけられて排はい除じよされる。人間だけの社会が維持されるなら、そうしたほうが合理的なんだろうな。でも、ぼくらは知っていたわけですからね。そんなことはありえないということを。サンランド無統治王国という名のカオスは、人間が牙きばや爪つめを失わないために必要だったんだな。実際、魔導王に匹ひつ敵てきするような魔術士たちも、サンランドがなければ生まれることはなかったでしょう。異様な才能を生まれ持った者の多くは、サンランドに流れついた。そこで人と交わり、人を殺し、人を愛し、何かを残し、死んでいった。まだ生きている者も、もちろんいますけどね。サンランド無統治王国という装置は、ぼくは半信半疑でしたけど、今から思えばやはり必要でしたね。そこについてはグッダーの慧けい眼がんを認めないわけにはいかないな」



　王は髭を引っぱって舌打ちをした。「相変わらずの長ちよう広こう舌ぜつだ」

「褒ほめているのに」

「貴様に褒められて喜ぶ被ひ虐ぎやく趣しゆ味みを余は持ちあわせ

ておらぬ」

「わかってますよ。あなたはＳかＭかでいったら、完全にＳだ。ぼくはどうかな。ときにＳで、ときにＭかな。ちょっとＭ度のほうが高いかもしれませんね。ぼくドＭだなって思うときもあったりしますから。ヴィシュクラトーはどうかな。基本、Ｓ度が高いですよね。自分ではどう思います？」

「考えたこともありません」

「そっか。あはは。まあどっちでもいいですよね。とにかく侵略って大変なので、悪魔たちはこれから苦労しますよ。大いにね。彼らが勝つためには、虱しらみ潰つぶしに人間を殺していかなきゃいけない。でも、人間は虱じゃありませんからね。黙だまって殺されはしない。公爵ヴエリオンまでならともかく、大公爵ハイヴエリオンあたりになったら人間にはどうにもできないかもしれません。だけど、それがわかったら、人間は違う方法をとりますよ。敵かなわない相手からは徹てつ底てい的に逃げまわって、身を隠して、叩たたける相手だけ叩く。結局、ここでも人間は人間なんだな。おもしろいですよね。まったく、どこまでいっても、人間は人間なんだ。人間は決定的な破局を合意のもとに防ぐべく手をとりあって努力して最良の結果を出せるほどには賢くなかったけど、完全な破滅をさけることはできた。その程度には賢いんです。人間はそう簡単には負けませんよ」

　王はつまらなそうに鼻を鳴らして、ヴィシュクラトーに顔を向けた。「監かん視し対象のほうはどうなのだ」

「健在です、グッダー」ヴィシュクラトーは黒い球体上の一つの光点を指先で示した。

　その周囲には、明らかに他ほかの光点とは異なる、やけに輪りん郭かくのはっきりした点がたくさん表示されている。

「ルヴィー・ブルームが残した標識が張りついているかぎり、我々が鍵かぎを見失うことはないでしょう」

　ジュジが王に視線を投げた。「あれはまだ調整中ですか？」

　王はジュジのほうを見ようとしない。「調整はすんでいる。起動は可能だ。が──まだそのときではなかろう」

「ええ、もちろんですよ、陛下」ジュジは猫の喉のどを撫でながら軽やかに笑った。「我々にはまだ足りないピースがありますからね。まずはそれを集めることです。まあ、焦あせらなくたっていい。急せいては事をし損ずる、ともいいますからね。何しろ、我々はこんなにも待ったんです。ここまできて、詰めを誤るわけにはいかない。そうでしょう……？」

Calamitage 002-003 "Strugglers"

カラミテイジ二年十巡月二十七番日　カウバーロークの谷

　望遠鏡を右目にあてて左目をつぶった。

　旧アセチナ法国領内にあるカウバーロークの谷は、谷と呼ばれてはいるものの、実際はちょっとした盆ぼん地ちだ。この盆地にはかつてリモテーという名の村があって、四百人ほどが畑を耕したり羊を飼ったり獣けものを狩ったりしてのんびりと暮らしていたらしい。その村が悲劇というより惨さん劇げきに見み舞まわれたのは今から九巡月前。悪あく魔まの一団が村に押しよせてきて、村人の九割以上がなすすべなく殺され、食しよく糧りようにされた。リモテーの村は壊滅して、それから復興した。──悪魔どもの手によって。

　望遠鏡によって拡大されている視界の中で、泥どろ人形みたいな姿をした悪魔ども（通つう称しようは見た目のまま、泥人形）が農作業にいそしんでいる。

　何度見ても不思議な光景だ。

　あいつらも生き物で、食べないと生きてゆけなくて、個体差はあるにせよ人間と同等か、もしかするとそれ以上に賢いやつもいたりする。だから、農耕の文化くらい持っていてもおかしくない。というか、普ふ通つうに考えれば持っていないはずがないのだ。頭では理解しているのだが、どうしても感情的に受けいれることができない。

　悪魔が農夫面づらをしてこの地上で平和に畑仕事をしているなんて、何か変だ。変どころか、許しがたい。許してはいけないと思う。

　やつらが畑で育てている作物は、地獄から持ちこんだ植物らしい。動物の手足やら眼球やらを思わせる形をしていたり、ごにょごにょとうごめいたり、褐かつ色しよくだったり深緑色だったり鮮せん紅こう色しよくだったり黄と紫の縞しま模も様ようだったり、奇きっ怪かいだったりグロかったりキモかったりして、どれもこれも見たこともないものばかりだ。味のほうはまあ、工夫すれば食べら

れたりもして、人間の口にまったくあわないわけでもない。

　でもやつらは、人間の臓物を細切れにしたものや、砕くだいた骨に血液を混ぜたものを肥料として畑にばらまく。

　連中としては、ただ獲物を有効活用しているだけなのかもしれないが、だからやむをえないのだとこっちが納なつ得とくしてやる義理はこれっぽっちもない。

　悪魔と、その同盟者らしい他の異界生物フリークスたちは、人間の世界を蹂じゅう躙りんするだけではなく、奪うばって我が物にしようとしている。敵の全体が秩ちつ序じょだった行動をとっているようには見えないが、着々と各地に植民が行われ、異界生物フリークスどもの王国が、とりわけ地じ獄ごく帝てい国こくの領土が拡張をつづけていることは間ま違ちがいない。

「よし──」マリアローズは望遠鏡を下ろして軽く息をついた。「やるよ」

「いつでもオッケーやで」カタリは大だい湾わん刀とう〝血吸いのブラドキ斬馬刀ユラトス〟を担ぐように構えて、不敵な笑みを魚顔に浮かべてみせた。少し前に悪魔の男爵ツエペリオンギュルゲ・モルテンをしとめて奪ったもので、たしかに武器としての性能はいいのかもしれないが、重いしかさばるし邪じゃ魔まだし、どうせ乱戦になれば腰に吊つるしてある変形斧に頼ることになるのだから、よせばいいのに「だってかっこええやん？」というくだらない理由でしつこく使いつづけている。相変わらず馬鹿だ。どうしようもない馬鹿だ。馬鹿魚だ。

「任しぇて」

　でも、その隣となりでにっこり笑ってそう言ってくれたユリカ・白雪スノーホワイトのおかげで、腐くされ半魚人が振りまく傍はた迷めい惑わくきわまりないアホアホ臭しゅう気きにもどうにか耐たえられる。

　本当にユリカは癒いやしだ。救いだ。世界の絶対に欠かすことのできないもっとも重要な要素だ。ユリカがいなかったら、この世界はあまりにも超最低ＳＵＣＫすぎて、とてもじゃないけれど正気を保ったまま生きてはゆけない。マリアローズは不覚にも涙ぐみそうになって、なんとかこらえた。それにしても、ユリカはかわいい。

目の保養で、心の栄養だ。

　ユリカは地味にこの一年で五サンチくらい背がのびて、可か憐れんさはまったく変わっていないのだが、ふとした瞬間に見る者の心臓を鷲わしづかみにするようなあでやかさを感じさせるようになった。大きくなったせいで女性用ナース医術士服・ユニがちょっときつくなり、身体からだの線がはっきりわかるので、ちょっとユリカそのへんは気をつけたほうがいいんじゃないのとか、つい余計な心配をしてしまう。

　まあ実際、余計なお世話なのだ。

　何しろユリカは、愛らしくてきれいなだけじゃない。最強伝説の持ち主だ。現在、マリアローズが誰よりも信しん頼らいを置いていて、どう考えても一番計算できる戦力なのだから、仮に邪心を起こした不ふ埒らち者がいたとしても寄せつけない。手を出そうとした途と端たん、一いつ蹴しゆうされるに決まっている。

「それではッ、皆みなのものぉごっ──」と、大声を出そうとしたというか出しやがったバカタレの口を、なんでこの僕が慌あわてて押さえたりしなきゃならないんだよと思わなくもないけれど、しょうがない。マリアローズは、何のつもりか茨いばらの冠かんむりをかぶっているファニー・フランクの口を両手でふさいだまま、顔を近づけた。「しーっ」

「ぐ、ぐむっ……」ファニー・フランクがコクコクコクッとうなずいてみせたので、マリアローズは手を離した。涎よだれとか変な体液とかがついていそうだから何かで手をふきたいが、ふいたらその何かも汚お染せんされてしまう。結局、ファニー・フランクの外がい套とうで軽く手をぬぐっておいた。

「……いちいち無む駄だなことさせないでよね。疲れるから。理解した？」

「うむ、理解したぞッ、軍師どのッ」

「そのわりには微妙に声、大きいからね？　あと、その呼び方はやめて……」

「だがしかし実際きみは私の、否いなッ、我が新生太陽王国軍の軍師だッ。少なくとも、軍師と呼ばれるにふさわしい仕事をきみはし

てくれているッ」

「そういうつもりはないから。そりゃあこういう状況だし、できることはしなきゃっていう気持ちはあるけど、ほんっとにただそれだけだし……」

「謙けん遜そんけんそぉーん。このこのこのぅッ」

「や、やめっ、ちょっ、つっつかないでよ、汚けがらわしくてたまらなくて身も心も魂までも汚お濁だくにまみれちゃいそうだから」

「そこまで言われると、さしもの私も多少は傷つかなくもないのだがッ……？」

「あ、そう？　でも謝らないけどね。悪いとかまったく思ってないし」

「正直でよろしいッ！」

「だから、声」

「むっ──」ファニー・フランクは目を見開いて、自分の手で口を押さえた。

「もう、ね……」頭を抱かかえかけたマリアローズの頰ほおに、つめたいものがあたる。右肩の上にいる小動物が、喉をくるるくるると鳴らしながら鼻はな面づらをこすりつけてきたのだ。マリアローズは小声で呟つぶやいた。「……慰なぐさめてくれてるの？　ありがと、クルル」

　半年くらい前のことだ。仮か眠みんをとって起きると、この大きな黒い目をしたリスみたいな子猫みたいな生き物が目の前にいた。そのときは逃げてしまったのだが、何度かそういうことがつづいて、試ためしに餌え付づけしてみたらすっかり懐なつかれてしまった。呼び名の由来は喉を鳴らす音で、安易なネーミングだけれど、いつどこかへ行ってしまうかわからないし、それでいいと思っている。でも正直、かわいい。

　クルルのかわいさに免めんじて──というのも変な話だが、我が慢まんだ、我慢。これくらいでうんざりしていたらきりがない。こんな男でも、どうしようもないほど悪くはないところもなきにしもあらずだったりするし。

今年の一いち巡じゅん月げつ一番日に突然、新生太陽王国建国を宣言するとか言いだしたときにはどうなることかと思ったが、まがりなりにも現在の国民は五百七十八名にのぼっている。

そのうち女性や高齢者、年少者などの非ひ戦闘員は百五十一名。つまり、新生太陽王国のファニー・フランク国王陛下は、総勢四百二十七名の軍団を率いる軍団長でもあらせられるのだ。

国民に敬われているとはちょっと思えない。ただまあ、親しまれてはいる。頼り甲が斐いがあるかというと、かなり微妙だ。とはいえ、そこまで悪い人間じゃないし、何より底そこ抜ぬけに明るくて元気をくれる。このご時世ではそんな人材こそが貴重だ。旗振り役を買って出ようという物好きが他ほかにいるわけでもないし、とにかくなんとかみんなで守もり立ててやるしかないよね、みたいな感じになってしまっている。実態は国王というよりどうも放っておけない親分といったところで、みんな冗談半分で陛下、陛下と呼んでやっているのに、本人はすっかりその気になっているから、本当におめでたいのだろう。

マリアローズは振り返って新生太陽王国軍の兵士たちを見まわした。雑木が生おい茂しげる斜しゃ面めんにへばりついている兵士たちの出自は実にさまざまだ。エルデン脱出者もいれば元帝国軍人もいて、トレイン公国、エーメン大公国、ベルドリッド王国、ハッツフォー独立軍領、果ては熾しき帝国や顛テン聖セイ虞グ出身の人間までいる。当然、装備も一様ではない。軍装の者、旅装に剣と盾を帯びただけの者、普ふ段だん着ぎで農具を担いでいる者━そんな連中をなんとか分類し、組織化して、そこそこ戦える集団になってきてはいるが、あくまでそこそこだ。人数だけでいったら、たとえば往時の秩序のモラル・番人キーパーズにもそうひけをとらない。でも、戦力的には足あし許もとにも及およばないし、一度でも大負けしたら新生太陽王国はあっという間に崩壊する。かといって、生きるためには戦わないといけない。━食うためには。

何かを察したのか、クルルが外套の首巻きのところにもぐりこんだ。

エルデンがあんなことになったとき身につけていた衣類は、すべてズタズタのボロボロになってしまったので、ありあわせを着るしかない。ボディスーツなんて上等な物はまず見つからないし、金属製の鎧なんか重くて無理だから、薄うす手での服を重ね着している。防御力も耐たい久きゅう性もひどいものだが、クルルにとって

は意外と居い心ごこ地ちがいいみたいだ。激しく動くときはだいたいこうやって服の中に入り、邪魔にならないようにじっとしている。クルルは小さいわりに賢かしこいのだ。

　マリアローズは右手をあげた。「──全軍突とつ撃げき用意」

　途端に皆が息を凝こらして、空気が張りつめた。

　マリアローズは隣の陛下に目をやった。陛下は大きく眼めを見開いて、じっとこっちを見ている。突撃のコールを今か今かと待っているみたいだけれど、なんで待っちゃってるんだよ。本来こういうのはどう考えてもきみの仕事じゃないか。めんどくさいことはぜんぶこっちに押しつけて、ただのほほーんと陛下ごっこしてるだけなんだから、せめてこれくらいのことはやってくれてもいいんじゃない？　もういいけど。言っても、どうせすぐ忘れるし。なんっにも覚えられないし。ため息をついてしまいそうになる。ぐっとこらえて、マリアローズは右手を振りおろした。「──全軍突撃」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

　すぐさま馬鹿陛下が信じられないほどでかい声を出して、兵たちもそれに倣ならった。

　先頭を切って駆かけだした馬鹿陛下に、ユリカが、カタリが、そして兵たちがつづく。

「ほんと、声だけはでかいよね……」マリアローズも呟きながら走りはじめた。隊列はすでに乱れて広がっているけれど、このくらいは予想の範はん囲い内で許容できるというか、するしかない。マリアローズとしては位置取りが重要だ。馬鹿陛下の左斜ななめ後ろ。ここだ。ここなら馬鹿陛下の手た綱づなを握にぎっていられるし、戦場も見渡せる。

　新生太陽王国軍は木々をよけながら斜面を駆けおりてゆく。

　畑仕事に精を出していた泥どろ人形どもは、手を止めて、しかし逃げるでも応戦しようとするでもなく、ただただうろたえているようだ。

「魚うおっしゃぁぁーッ……！」一番槍やりならぬ一番刀は半魚人だった。といっても、畑をうろうろしていた泥人形を一刀両断した

だけだから、手て柄がらのうちには入らない。半魚人もたまたま邪魔だったからぶった斬ぎったのだろう。あとはもう泥人形なんか無視して、泥人形と泥人形の間を走り抜けてゆく。ユリカも同じだ。でも、馬鹿陛下は違った。

「ふはははははァーッ！　食らうがよいわッ、我が聖剣グランソードッ……！」とか言いながら馬鹿陛下が振りかぶった長ちよう剣けんは、何のことはない、拵こしらえがちょっと立派に見える、しかもそう見えるように飾かざりつけしただけで、頑がん丈じようさしか取り柄えがない大量生産品だ──ということを、少なくともマリアローズは知っているけれど、言いふらすのも大人げないので黙だまっている。「──つあっ……！」

「うっわ……空振った……」

「ぬうッ！　せッ、聖剣グランソードの一いち撃げきをかわすとはッ！　敵ながら天晴あつぱれッ！　だがしかァーしッ！」馬鹿陛下は逃げようとした泥人形を背中から斬り伏ふせると、聖剣グランソードとやらを掲かかげて雄お叫たけびをあげた。「──どゥォーだッ！　これがァッ！　聖剣の力だッッッ！　すなわち私の力ッッッ！　さあみんなッ、この勢いで勝利をもぎとろうではないかァーッ！」

　マリアローズは耐えきれなくなって馬鹿陛下の後頭部をはたいた。「いいから走るっ」

「じょはッ！　──な、何をする軍師どのッ。私はただ、場を盛りあげようとだな──」

「場を盛りあげてどうするんだよ宴えん会かいじゃないんだから！　士気を高めたいんだったら、無駄なことしてないで敵に突っこめっての！」

「いやだから私は私なりに敵を……」

「そんなの敵のうちに入らないだろ!?　敵はあっち！」マリアローズは前方を指さした。

　カタリやユリカたちが向かう先には、旧リモテーの市街とも呼べないような人家（もう人は住んでいないが）の連なりがある。

　そっちのほうから悪あく魔まどもが続々と姿を現した。ぱっと見

たところでは、豚ぶた面づら悪魔（通つう称しよう・豚野や郎ろう）がいて、山や羊ぎ面悪魔（通称・山羊助）がいて、それから上半身蛸たこ状悪魔（通称・蛸魔）もいる。装備もばらばらだし、武器を持っていない悪魔もいて、人間の感覚からするとおぞましくて凶きよう悪あくそうな外がい貌ぼうを度外視すれば、新生太陽王国軍よりも粒つぶがそろっていない。悪魔は恐ろしい敵だが、すべての悪魔が手て強ごわいわけではないのだ。

　だから、強きを避さけて、弱きを挫くじく。

　戦いは勝ってナンボだ。勝てそうな戦い以外はしない。遊びではないのだ。生活がかかっている。

　カタリが豚野郎と、ユリカが山羊助と戦端を開いて、そうかと思うとあっという間にぶっ倒たおしてしまった。ユリカがすぐさま極限クライマツクス九手棍ナインボールで蛸魔を殴なぐり飛ばすと、明らかに敵の様子に変化が見られた。浮き足立つとまではいかないが、わっと押しだしてくるという雰ふん囲い気きじゃない。

「おおほッ！　我が軍は優勢であーるッ！」馬鹿陛下が嬉き々きとして叫んだ。「いくぞみんなッ！　もちろん私も征ゆくッ！　征かずして何とするッ！　突撃ッ！　突ゲェーキッ！　これからがモノホンの突撃だァッッッ……！」

「ったく、調子いいんだから……」

　でも、馬鹿陛下の声を聞き、張りぼてに近い鎧をガシャガシャ鳴らしながら走る、どちらかと言えば不ぶ恰かつ好こうな姿を見て、兵士たちの気分は軽くなり、明るくなる。いくら条件が有利でも、戦いの場では何があるかわからない。敵を百人殺して、味方の死者は一人でも、自分がその一人になるかもしれないのだ。当然、怖い。馬鹿陛下はそうした恐怖を忘れさせてくれる。狙ねらってやっているわけではなく、完全に天然だけれど、これはこれでえがたい才能だ。

　マリアローズとしては、そのあたりも十二分に利用して、新生太陽王国軍を勝利に導かないといけない。今はとにかく──生き抜くために。

「むおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

　相変わらず馬鹿でかい声を出しながら、聖剣グランソードを振りかざして、馬鹿陛下はドタバタドタバタ突き進む。一応、護衛役に任じている兵士が四人いて、それなりに気の利きく連中だし、今もちゃんと周りにいるから、とりあえず馬鹿陛下のことは彼らに任せておいても大丈夫だろう。そうでなくても、我らが馬鹿陛下は強運の持ち主だ。腕は立たない、戦術眼も戦略眼もない、ないない尽づくしのわりに、命を落とさないどころか怪け我がもあまりしない。運も実力のうちというし、これもまあ才能といえば才能だ。

　そんなわけで、マリアローズは馬鹿陛下を盾みたいに使って戦せん況きようをうかがうことにしている。

　勝てる戦いしかしないという方針に則のつとれば、何一つ指示を出さなくても戦いの趨すう勢せいが決してしまうのが理想だ。勝てそうな相手を見つけたら、すぐに攻めて、圧あつ倒とうし、さっさと片をつける。常にそうありたいものだが、現実は甘くなくて、なかなかそんな具合にはいかない。

「第六中隊、遅れすぎ！　急げ！　第四、第五中隊！　誰が散開しろなんて言ったんだよ、フィッシャーマン、ヘリング！　各中隊長はきちんと見て！　戦力を分散させるな！　第三中隊！　もっと第一中隊を支し援えんできる位置に！　第二中隊は突っこみすぎ！　孤こ立りつしたいのか……！」

　ここまで細かいことをいちいち言わなくてもいいんじゃないかと思わなくもない。でも、気になると放っておけないのだ。まあいいかと流したせいで、死傷者が増えるかもしれない。部隊が崩壊するかもしれない。負けるかもしれない。

「ユリカたちは……よし」マリアローズはそっとうなずいた。ユリカを筆頭、カタリを二番目の戦力として、孫ソン狼ロウという顚聖虞人に率いさせている第一中隊は、順調に敵を突き崩くずしつつある。

　この第一中隊六十八名が新生太陽王国軍の中ちゆう核かくで、暗黒大陸生まれエルデン育ちのマックス・ルビカンが束ねる第二中隊七十二名、同じくエルデン出身でＤＩＥというわりと名の知れた悪党クランで若衆頭ヤングマンだったらしいロス・サンディーが中隊長を務める第三中隊七十名までが、まあ計算できる主力部隊だ。あとの第四、第五、第六中隊はほとんど烏う合ごうの衆に近いので、苦境に陥おちいったらまたたく間に総崩れになるだろう。

　なるべくなら、第一中隊、第二中隊、第三中隊だけで勝負を決めてしまいたい。

　アセチナ法国出身者から情報をえて偵てい察さつをし、物の数に入らない泥人形が三百程度、その他の悪魔もせいぜい百くらいで、警備はなきに等しいとわかったから、農作業中の昼間に急襲することにした。今回は総力をあげるまでもなく勝てる戦いだ。

「わァ～れッらッ、しィ～んせッいッ、たァ～いよォ～おォ～こッくッ！」と、馬鹿陛下が突然、朗々たる声で歌いだした。

「……また始まった」マリアローズは顔面の筋肉がひくひくっと引きつるのを感じた。

「ひィ～がしにッのォ～ぼおッてッ、にィ～いしッにッしィ～ずみィ～！」

「まぁ～たぞっろっ、のぉ～ぼおってっ」って、誰だよ一緒に歌いだした馬鹿は。

「しィ～ずめェ～ばァ～のォ～ぼるゥ～ッ！」

「「すぅ～なわっちっ、わぁ～れぇ～らぁ～え～いえ～んふぅ～め～つぅ～」」

「なァ～ぜなァ～らァ～、ハッ！　われらァ～ッ！　たァ～いよォ～おだァ～からァ～」

「「「あぁ～さく～りゃ～かぁ～がやっくっ、き～たよはぁ～あぁ～けるぅ～っ！」」」

「そォ～らァ～にィ～まァ～ばゆゥ～くゥ～ッ！　どでかァ～くゥ～ひィ～かるゥ～！」

「「「「わぁ～れっらっ、しぃ～んせっいっ、たぁ～いよぉ～おぉ～こっくっ！」」」」

　──がっつり合唱しまくってるし。一人や二人じゃないし。間違いなく二ふた桁けた超こえちゃいそうな人数が歌ってるし。まあ、馬鹿陛下以外は一応、戦闘行動をとりながらだけど。

　馬鹿陛下だけは違う。戦場の真まっ只ただ中なかで完全に立ち止

まって、自らの歌声に酔よい痴しれている。「……あの痴れ者め」

「はいッ！　ここでセリィーフッ！」あげくの果てに、聖剣グランソードとやらを振りあげて、新生太陽王国国歌の一番と二番の間にド間ま抜ぬけでクソ恥はずかしい台詞せりふコーナーを挟はさむつもりらしい。「──わたくしィー、ファニー・フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトはァー、国民諸君のためにィー、命を惜おしまァーずッ、全身全ぜん霊れいを捧ささげ徹てつ頭とう徹てつ尾び粉ふん骨こつ砕さい身しんすることを誓ちかいまァーすッ！　新生太陽王国に栄光あァーれッッッッッ！」

「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」

「我らが勝利をつかむためェーにッッッッ……！」

「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」

「キミタチはッ！　実に実に最高だァーッッッッッッッッッッッッッッッ……！」

「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」「おかしなウラー・フランクフアニー・万歳フランク！」

「いよォーしッでは二番を歌うとしようッ！　わァ～れッらッ、しィ～んせッいッ……」

「……もう勝手にして」マリアローズは頭痛をこらえてため息をついた。馬鹿陛下は踊おどりながら国歌の二番を歌っているが、兵士たちは唱和したり唱和しなかったりしながら戦闘を継けい続ぞくしている。これで士気が鼓こ舞ぶされているとは思いたくないけれど、少なくとも場は盛りあがっているようだ。「──まあ、宴会ノリで勝っちゃえるような戦いをつづけるしかないってことなんだろうけど……」

　かなり苦しい時期もあった。とくに、悪魔をふくめた異界生物フリークスたちの動向がまったく把は握あくできず、予測もできな

かった最初のころは。

　だけれど、異界生物フリークスの数も無限ではないし、たぶんもう連中の手はα大陸中に、もしかしたら他の大陸にまで及およんでいるかもしれないが、まんべんなく蔓延はびこっているわけじゃない。このカウバーロークの谷のように手て薄うすな場所も、探せばけっこうあるのだ。それがわかってきてからは、楽になったとは冗談でも言えないにしろ、無理をしなければなんとかなるかもしれないという手て応ごたえは感じている。

「けど、そんなにうまくはいかないんだよね。きっと……」つい悲観的になってしまうのは変えようがない性質だし、馬鹿陛下が突き抜けて楽天的なぶん、心配性しようの人間もいないと困るだろう。「──今回はどうやら大丈夫っぽいけどさ」

　第一、第二、第三中隊は旧リモテーの中心部まで進出している。敵は押しまくられて、もはや抵てい抗こうらしい抵抗はしていない。潰かい走そうしているといってもいい状態だ。第四、第五中隊は先行している主力部隊に追つい随ずいしようとしているが、第六中隊は──ああもう。マリアローズは急激に強まった頭痛に顔をしかめて声を荒あららげた。「──こら第六中隊！　泥どろ人形なんかいじめて何の意味がある！　無む駄だなことしてないで前進しろ、このバカッ！」

　最後の「このバカ」は余計だったか。案の定、第六中隊の中隊長ケメック出身のジン・ウォッカーが目を吊つりあげて何か怒ど鳴なっている。

　妙に恰かつ好こうが派手で山師的な風ふう貌ぼうで、下品で下げ劣れつなあの三十男は要注意人物だ。いかにも底が浅そうだし、実際、小物だと思うが、口が達者なので阿あ呆ほうはころっと騙だまされる。たぶんその手管で集めたのだろう五十人ほどを率いて新生太陽王国に合流したもので、あまり軽く扱あつかうこともできないからやむをえず第六中隊を任せているけれど、本人は与あたえられた立場にまったく納なっ得とくしていないようだ。そのうえ軍の編制を馬鹿陛下にほとんど一任されているマリアローズを逆さか恨うらみしているらしい。ようは身の程を知らないクモソウ野フ郎オなのだ。めんどくさいし邪じゃ魔まだし、消えてほしいが、馬鹿な馬鹿陛下には気に入られていて、もともとの部下もいる。本当にうざい。頼むからどうにかしてほしい。「……ていっても、頼む相手がいないんだけどさ」

　第六中隊は泥人形いじめをやめようとしているから、とりあえずウォッカーは無視してもかまわないだろう。馬鹿陛下を追いたてて旧リモテーの中心部に足を踏み入れると、主力部隊は敵を深追いせずにある程度、隊形を保ってくれていた。負傷者はいるようだが、あちこちに転がっている死体は豚野郎や山羊助、蛸魔のものばかりで、見たところ自軍に死者は出ていないようだ。

　ユリカとカタリ、そして第一中隊の中隊長孫ソン狼ロウが細い目でマリアローズのほうを見た。

　マリアローズはうなずきかえし、そっと息をついた。「──じゃあ、第二、第三中隊は引きつづき警戒にあたって、第一中隊は豚野郎と山羊助を解体！　あと、怪我をしている人はユリカに言って治してもらって！　始め！」

　命じるが早いか、マリアローズもナイフを抜ぬいて近くの豚野郎にのしかかった。いろいろ試してみたが、蛸魔はどうやっても使えない。でも豚野郎と山羊助はなんとかいける。

「どれどれッ」と馬鹿陛下が駆かけよってきた。「私も手伝うとしようッ、軍師どのッ」

「……邪魔はしないでね。お願いだから」

「任せておきたまえッ。私はこう見えて、オメガでありアルファであるッ」

「さっぱり意味がわかんないんだけど」

「何でもできる、超便利万能人間だということだッ！」

「そのわりには不器用だよね……」

「この際、効率は度外視して、結果のみで判断してもらいたいッ」

「自覚がないんだろうけど、言ってることがむちゃくちゃだよ？」

「この混こん沌とんとした世に秩ちつ序じよを打ちたてるのが私の宿願なのだよ、軍師どのッ！」

「あーそうですか……」

　話をしても埒らちが明かないので、馬鹿陛下と何の因果か手を携たずさえて豚ぶた野や郎ろうの解体作業に励はげむことにした。

　それにしても、見た目がそうとうグロいし、ぬるぬるぬめぬめぬちゃぬちゃしているし、臭くさいし、不快だ。何度やっても慣れない。手が震ふるえてうまく力が入らなくて、吐はきそうになる。こんな汚よごれ仕事はしたくないが、他人にばかり押しつけるわけにもいかない。最低限、自分自身の手を汚してみせないと、誰も言うことを聞いてくれないだろう。そうでなくても、悪魔の肉なんぞ食えるかと文句を垂れる者は多いのだ。「……僕だって食べたくないけどさ。あたりまえじゃないか。でも、畑はどこもぶんどられて使えないし、鹿しかとか猪いのししとか、もっと小さい動物とかも異界生物フリークスたちに狩られまくってぜんぜんいないし、魚だってたくさん釣つるのは難しいし、だからって草だの木の実だのばっかり食ってたら弱る一方だしさ。とにかく食べられる物がないんだから……」

「むッ!?　何か言ったかね、軍師どのッ!?」

「べつに……」

「そうかッ、私の空耳かッ！　ムフフッ、しかしこの腿もも肉にくなどはうまそうだねえッ！　見たまえよ軍師どのッ、この赤身と脂あぶら身みの絶ぜつ妙みようなグラディエーションッ！」

「うぷっ……」

「どッ、どッ、どッ、どうしたのかねッ、軍師どのッ!?　もしや具合でも……ッ!?」

「や……なんでもないから。それ、ちょっと遠ざけて」

「それとはこれッ!?　これかねッ!?」

「だから近づけるなっての！　あと、グラディエーションって何だよ!?　グラデーションじゃないの!?　それでも変だけど！」マリアローズは馬鹿陛下を押しのけ、厄やつ介かいきわまりない作業をつづけながら、あたりに視線を巡めぐらせて状況を確認した。第一中隊でさぼっている者はさほど多くないから、孫狼に任せておけばいいだろう。第二、第三中隊はすっかり勝って終わった気になっているのか、動きがどうも緩かん慢まんでダレ気味だ。第四、第五中隊

ものろのろしているし、第六中隊に至ってはまだ追いついてくる気配がない。「……まさか、まだ泥人形を相手にしてるんじゃ……」

「て、て、て、て、敵だぁっ……！」と、その第六中隊がいるはずの方向から叫び声が聞こえてきた。

「作業中止！」マリアローズは弾はじかれるように立ちあがって声の方向へと駆けだした。ユリカは医術式で負傷者の手当てをしている。カタリはついてきた。「──敵て、どういうことやねん……⁉」

　知らないよ、そんなのわかるわけないだろ、と怒鳴りそうになって、すんでのところで押し殺した。八つ当たりをしている場合じゃないし、こんなときに当たり散らして許されるような立場でもない。この作戦を立案したのはマリアローズで、馬鹿陛下に裁可するようにうながしたのもマリアローズで、だからすべての責任はマリアローズにある。失敗したらマリアローズのせいだ。「──増ぞう援えんがくるなんて……！」

　ありえないと思っていた。カウバーロークの谷はほとんど孤こ立りつしている。ここから四十キルメーテルほど離れた場所にかつてサーカムと呼ばれていた町があって、今は悪魔どもの拠きよ点てんとなっているが、そこと連れん絡らくをとりあっているような様子もなかった。だいたい、救援を呼んだにしては早すぎる。今このタイミングで、偶然そのへんを敵の部隊が通りかかったなんてことはまずないだろうから、考えられる可能性としては──新生太陽王国軍がいつかの時点から敵に捕ほ捉そくされていた。そして旧リモテーへの襲撃が始まり、後ろへの注意がおろそかになったタイミングで、敵が攻撃してきた。これはありえる。「……だとしたら、敵はそんなに多くないと思うけど……」

　圧あつ倒とう的な多数なら、よほど慎しん重ちような相手でないかぎり、こちらの隙すきを突くような真ま似ねをしないで一気に仕し掛かけてくるだろう。だからまだ大丈夫だ。自分にそう言い聞かせたそばから、さっそく心が折れてしまいそうだ。

　畑は人狩り場と化して、第六中隊は蹴け散ちらされ、逃にげ惑まどっていた。踏みとどまって指揮をとるべきウォッカーの姿は見あたらない。敵は悪魔だ。数はどれくらいだろう。よくわからないが、間違いなく百以上はいる。でも、大軍ではない。せいぜいこっちと同数か、いくらか少ないくらいだと思う。

　ただ、豚野郎や山や羊ぎ助、蛸たこ魔まみたいな雑ざ魚こじゃない。ぱっと見たところでは、ずんぐりしていていかにも屈くつ強きようそうな青あお紫むらさき色いろの肌はだをした悪魔（通つう称しよう・紫団子）が多いけれど、人馬一体となったような姿をしていて腕うでが四本もある悪魔（通称・人馬野郎）や、兜かぶとみたいな頭から二本の角が突きだしていて身の丈たけ二メーテルを超こえる鉛なまり色いろの悪魔（通称・鉛なまり鬼おに）もいる。とりわけ、双そう眼がんに青い炎を宿らせている鉛鬼は本当にやばい。ユリカやカタリのような手て練だれならともかく、並の人間は絶対に一対一ではかなわない相手だ。当然、マリアローズも太た刀ち打ちできない。

「こらまずいでマリアローズ！　早く助けな、第六中隊が全滅してまうがな……！」カタリが大湾刀〝血吸いのブラドキ斬馬刀ユラトス〟を肩に担ぐようにして構え、駆けだそうとする。

　マリアローズはとっさにその襟えり首くびをつかまえた。「──待って！」

「ぐべっ！　……な、何すんねんな、迷っとる暇ひまはないやろ⁉　急がんと仲間が……！」

「わかってる」

　カタリは正しい。迷っている暇はない。一刻も早く正しい決断をして、すぐに行動しないといけない。

　だけど、怖い。

　こんなことを考えている自分が。

　それでも確信している。こうするしかない。これが正しい判断だ。

「全軍、ただちに撤退……！　脇わき目めもふらずに逃げろ……！」

　カタリは目を見開いた。「マリアローズ……⁉」

「行くよ！」マリアローズはカタリの腕をつかんで踵きびすを返した。「──さあ、逃げろ、逃げろ、逃げろ……！　何ぐずぐずしてるんだ、死にたいのか……！　死にたくないなら、逃げろ！　──ファ

ニー・フランクッ！　何うろちょろしてるんだよ!?　さっさときみからも撤退の命令を出して！」

「う、うむッ！　軍師どのがそう言うのであればッ……だが、だがッ、いやッ、わ、わかったッ！　私は軍師どのを信じるぞッ！　みんな撤退ッ、撤退するのだッ、撤退ッ！　これは戦略的撤退であるッ！　撤退ッ！　テッタァァァァァァーイッッッッ……！」

　第六中隊はどうなっているのか、正直まったくわからない。しかしたぶん、ほとんど生せい還かんできないだろう。第四、第五中隊の後こう尾びは敵にのみこまれつつあった。彼らもきっと助からない。でも、第一中隊はさすがに迅じん速そくだ。マリアローズたちが旧リモテーの中心部まで引き返すと、第一中隊は全員ちゃんと解体作業をやめて、すでに回収用の袋ふくろに放りこんであった肉以外には手をつけず、旧リモテーを突っ切って逃走しようとしていた。第二、第三中隊も、隊たい伍ごこそだいぶ乱れているが、なんとか第一中隊を追いかけようとしているみたいだ。

　最悪、中核の第一中隊、第二中隊と第三中隊の一部だけでも残ってくれれば、新生太陽王国軍は消滅しない。大きく揺ゆらいで、壊こわれ、崩くずれるかもしれないが、立てなおせる。

　マリアローズは怪け我が人を座らせて医術式を施ほどこしているユリカの肩を叩たたいた。「──ユリカ、治ち療りようはもういいから……！」

　ユリカは振ふり向いて、灰色がかった青い瞳ひとみでマリアローズを見つめた。「マリアはしょれでいいのね？」

　こんなやりとりは、きっとマリアローズとユリカの間でしか通じないだろう。ユリカは何もかも承知したうえで、念を押してくれているのだ。マリアローズは即そく座ざにうなずいてみせた。「うん！」

「しょれならいいわ！　──しゃあ立って！」ユリカは今の今まで手当てしていた若い兵士を立たせて尻しりを叩いた。「走るのよ！　だいたい治したから行けるはじゅ……！」

「はいっ！」若い兵士がつんのめるようにして駆けてゆく。ユリカはその後ろについた。

「よっしゃ、マリアローズ！　ジブンは先に行けや！」カタリがマリアローズの背を軽く押した。「ジブンとユリカの背中は、わしが守ったる！　──わしにできるのんは、それくらいやからな……！」

　一瞬、鼻の奥がつんとして目め頭がしらが熱くなった。ユリカとカタリが、この二人がいてくれるから、どうにか僕はがんばれる。他ほかの連中はどうかわからないけど、二人だけは僕を信じてくれるし、理解してくれる。ユリカとカタリがいなかったら、僕はきっと何も考えられない、何も決められない、何もできない、最低最悪の屑くずだ。屑以下だ──なんて、思っていても言えるわけがない。とくに、カタリには。

「ばかっ！」

　結局、そんな言葉しか出てこなくて、それでもカタリは「魚うおほほほっ」と変な笑い声を返してくれた。

　ユリカが前にいて、カタリが後ろにいる。ものすごい安心感だ。何があっても大丈夫だという気持ちにさせられる。もちろん、現実はそんなに単純でも簡単でもない。わかっている。

　旧リモテーの中心部は、舗ほ装そうこそされていないものの、地面がしっかりと踏み固められていて走りやすい。でも、もうすぐ村外れだ。孫狼率いる第一中隊は、すでにその先の畑にいる。第二、第三中隊も第一中隊に迫せまる勢いだ。とはいえ全員一糸乱れず整然と、というわけにはいかない。パニクって見当違ちがいの方向へ進む者がいる。脱だつ落らく者もいる。後ろのほうからは虐殺されつつある味方の悲鳴が聞こえてくる。助けてくれ、頼む、行くな、置いていかないでくれ、という声も。

　マリアローズは足を止めずに振り返って、敵との距きょ離りを測った。どうやら敵はまんまと餌えさに食いついてくれたようで、追撃の速度はそう速くない。しかし時間の問題だろう。そのうち第六中隊が壊滅して、第四、第五中隊もたぶん同じ運命をたどる。それまでにカウバーロークの谷を離れ、森へ。山の中に入ってしまえばこっちのものだとまでは言えないが、逃げきることのできる可能性は高まる。大丈夫だ。やれる。危機なんか何度も何度もくぐり抜けてきた。今回も生き残ってやる。「──まだ死ねないんだから……！」

　仲間を見つけないといけない。

トマトクン。サフィニア。ピンパーネル。きゅー。ハニーメリー。それから、トワニング。ジョーカーとクローディアにも会いたい。ロム・フォウとアルファにも。

そのために、生きる。

生きるために、目的を達成するために、マリアローズはファニー・フランクとその一党を利用しているのだ。あくまで、それだけなのだ。

だから、切り捨てても、見捨てても、心は痛まない。絶対に痛んだりしない。何人、何十人、何百人死のうと知ったことか。

しょうがなかったんだ。こうするしかなかった。最善だったんだ。

言い訳じゃない。言い訳なんかじゃ。言い訳をする必要なんてないんだから。

山中に入りこんでからは、ユリカ、カタリ、馬鹿陛下とだけは何があってもはぐれないように気をつけて、まずはとにかく追つい跡せきしてくる敵から遠ざかる方向、遠ざかる方向へと足を進めた。暗くなる前に追っ手の気配は感じなくなったが、念のため、味方をかき集めるために動きまわるような真似は慎つつしんだ。日が暮れると、方角はわかっても現在地の把は握あくが難しくなる。移動せずに身体からだを休め、夜が明けてから合流地点を目指した。

合流地点はカウバーロークの谷の南西約十キルメーテルの場所にあって、女性や子供、老人たちが天幕を張って国王と兵士の帰りを待っている。山奥だし、正確な地図は作れない、勘かんでたどりつけるようなところでもないが、尖とがった山が三つ連なっていて、それを目印にすれば探しあてることは可能だ。

結局、カウバーロークの谷を出て、ほぼ丸一日。合流地点に到とう着ちゃくしたのは、マリアローズ、馬鹿陛下とその護衛役四人、それから中隊長の孫狼、ユリカとカタリをふくめた第一中隊六十五人、マックス・ルビカンの第二中隊は五十八人、ロス・サンディーの第三中隊が六十一人だった。第一中隊は三人、第二中隊は十四人、第三中隊は九人しか欠けていない。まずまずの結果だと考えるべきなのかどうか。

「なァーに心配は無用だッ！　まだまだこれから続々と戻ってくるッ！　私はみんなを信じているぞッ！　大丈夫だッ！　ムハッ！　ムハハハハハッ！　ムハッ……！」

　馬鹿陛下は意気消しよう沈ちんしている国民たちを慰なぐさめようとしているのかもしれないが、生還した兵士たちも待機組もほとんど口を開かない。ただただ座りこんでいるか、寝ね転ころんでいるか、空気をうかがうようにきょろきょろしているか、どうしていいかわからずおろおろしている。そんな中でも一人一人の肩を叩いて声をかけて回っている馬鹿陛下の心臓は、きっと鋼鉄よりも頑がん丈じような何かでできているのだろう。呆あきれるというか、もはや尊敬に値あたいする。すごいよ。ほんと。真似できないって。真似なんかしたくもないけどさ。

　各中隊長と話しあって兵士たちを休ませる手て筈はずを整えると、マリアローズは手持ち無ぶ沙さ汰たになってしまった。

　ユリカの前には負傷者が行列を作っている。たいした怪我をしていなくても、ユリカに治してもらいたいという者は多い。ユリカもいやな顔一つしないで治療してやるから、皆みなつけあがっているのだ。そこまでやさしくしてやることはないのに。そうは思うけれど、それがユリカだ。

　することがないといっても、仮か眠みんをとるような気分にはなれない。マリアローズはクルルを肩にのせて望遠鏡を片手に見張りをすることにした。馬鹿陛下ほど楽天的にはなれないが、なんとか逃げのびて合流地点を目指している者はいるだろう。それに、この場所が敵に嗅かぎつけられる可能性も考こう慮りよに入れるべきだ。もちろん、もともと見張り番は配置してあるが、望遠鏡はマリアローズの私物をのぞけば三つしかない。望遠鏡を持っているマリアローズが見張りに加わる意味はある。

　見晴らしのいい崖がけの縁ふちに腰を下ろして望遠鏡をのぞいていると、クルルが喉のどを鳴らしてマリアローズの頬ほおに鼻はな面づらをこすりつけてきた。

「……あー。そういえばきみ、ほとんどずっと服の中で寝てて、しばらく何も食べてなくない？」マリアローズは腰の物入れから非常食の炒いり実をとりだして、クルルの顔の前に差しだしてやった。「ほら。これ、けっこう好きでしょ」

　クルルはさっそく炒り実を両手でつかんで囓かじりはじめた。でも考えてみると、マリアローズ自身も二十四時間以上、水しか口にしていない。何か腹に入れたほうがいいとは思うけれど、食べたら嘔おう吐としてしまいそうだ。「……こんなんじゃダメだよね」

　自分で決めたことだ。あの判断が間違っていたとは今も思っていない。実際、主力部隊の損害は最小限で抑おさえることができた。各中隊長──孫狼も、マックス・ルビカンも、ロス・サンディーも、この結果に納なっ得とくしているようだ。当然、雰ふん囲い気きは悪い。最悪だ。だけどしょうがない。不測の事態が起こったのだ。その中でよくやった。本当に……？

　たぶん、新生太陽王国軍は敵につけられていた。どうして気づくことができなかったのか。それらしい報告はなかったか。何か見落としていなかったか。予測できなかったのか。アクシデントではなくて、ミスだったのではないか。──そんなことはない。そんなことは。少なくとも思いつくかぎりでは、敵に捕ほ捉そくされていることを示し唆さするような出来事はなかった。マリアローズには知るすべがなかった。知らなかったのだから、やむをえない。何人死んだか知らないけれど、どうしようもなかった。主力部隊の被ひ害がいは軽微だ。二十六人。たった二十六人だ。全ぜん滅めつしただろう第六中隊、ほとんど壊滅したに違いない第四、第五中隊と比べればずっとましだ。「……これでよかったんだ。これで──」

　不意に後ろから近づいてくる者の気配を感じた。

　振り向きかけて、自分を抑えた。──違う。

　そんなわけがない。何を期待してるんだよ。バカみたいだ。バカより悪い。

　だって、あいつがいるはずないんだから。いてほしいとも思ってないし。

　ただなんとなく──そんな気がしただけで。

　ただそれだけで。

「マリアローズ」

　カタリだった。わかってるよ。そりゃそうでしょ。あたりまえじゃないか。

「うん」

「なんちゅうか、そのう……」カタリはマリアローズの隣となりにしゃがんで頭を掻かいた。「大丈夫かいな。いやまあ、大丈夫なわけないわな。わしもそう思うて、こうやって声かけとるわけやし……」

「大丈夫だよ」マリアローズはもう一つ、炒り実をクルルに与えた。「僕は自分のやるべきことをやっただけだから。そうでしょ？」

「まあ……」カタリはため息をついた。「たしかに、わしにはできへんことや。ユリカにも無理やろな。きっとわしやユリカやったら、なんとしてでも味方を救おうとするやろ。ほんでも、わしらは死にはせえへんかもしらん。助けられるモンもおるやろ。せやけど、そのために犠ぎ牲せいになるモンも出る。どっちをとるかっちゅう話や。いや……ちゃうな。どっちもとろうとして結果的にぎょうさんのモンを失ってまうか、そうならんために何かを捨てる決断をするかっちゅうことなんやろな」

「命にはさ」マリアローズは目を伏ふせて苦笑いをした。「重さがあるんだよね。一つ一つ違うんだよ。同じじゃない。ばらばらなんだ。そんなことないって言う人の気持ちもわかるけどね。実際、僕は重さを量って、軽いほうを捨てることにしたんだよ。だから、少なくとも僕にとっては重い命と軽い命があるってことでしょ。いいことだとは思わないけどさ。悪いともべつに思ってないんだよね。だって、しょうがないし──」

「マリアローズ」カタリはマリアローズの背中をさすった。「ええて。もうええから。他の連中はどうか知らんけどな。わしとユリカはよぉーくわかっとるがな。せやから、一人で背負わんといてくれ。わしらはジブンに面めん倒どうなこと押しつけとんのやさかい」



「そんなことないよ」マリアローズはうつむいて頭を振った。
「……そんなこと、ない。押しつけられてるとか、思ってないし。僕にできることって、本当にかぎられてるからさ。せめて、できることくらいはやらないといけないし……」

「なあ、マリアローズ──ええんやで？」

「……何がだよ」

「つらいんやったらな。やめたってええんや。わしとユリカとジブンと、三人おったらどうとでもなるがな。何も重い荷物、わざわざ背負うことない。身軽になって、ＺＯＯのみんなを捜さがしに行ったらええねん」

　マリアローズは顔を上げてカタリを見つめた。「本気で言ってるの？」

　カタリは似合わない真顔でうなずいた。「本気も本気、超大本気やで」

「……でも」マリアローズは唇を嚙かんだ。「──でも、さ」

「やっぱりかい」カタリは笑ってマリアローズの腰のあたりを叩たたいた。「まあ、ジブンらしいわ。なんのかのゆうて、ここまで関かかわってもうたからな。責任感じとんのやろ」

「せ、責任とか、べつに……」

「ええて。ええんや。ジブンはそういうやっちゃ。ジブンはジブンの思ったとおりにやったらええ。わしとユリカが支えたるし、守ったるさかい」

「わかってるよ！　もとからあてにしてるし！　しまくってるし！」

「そーかいそーかい。うひひひひ」

「なっ、何だよっ」

「いやいや、ええんや、ええんや。それでええ。ま、わしらはジブンの判断力を信じとるからな。わけのわからん難なん癖くせつけるダァホがいよったら、わしが空の果てまでぶっ飛ばしたるさかい、安心せえ」

「……そういうことはしないでよね。余計ややこしくなっちゃうから」

「わーっとるわーっとる！　言葉の綾あややがな！　ガッハハハハハハ」

「ほんとにわかってるのかなあ……」マリアローズは呟つぶやきながら望遠鏡を目にあてて、眉まゆをひそめた。「──あ」

「どないしたん？」

「や……見間違い──じゃない。人だ。こっちに登ってくる。うわ……」

「貸してみい」カタリはマリアローズの手から望遠鏡をひったくり、思いきり見開いた右の半魚眼にあてて左の半魚眼をぎゅっとつぶった。「魚うおぉ……あのデーハーな服装……」

「デーハーって……」

「デーハーなソーフク！　間違いないッ……！」

　マリアローズは肩の上でおとなしくしているクルルの喉を指で撫なでてやった。「……喜ぶべきなんだろうけどね。一応」

「悪運の強い男やなあ……」カタリは半魚唇をゆがめた。「──ジン・ウォッカー。よく生きとったもんやで」

十巡月二十八番日　三連山の合流地点

「──よくもやってくれよったのう……！」

　ジン・ウォッカーは女に好かれそうな顔をしている。男くさくて、でも、粗そ暴ぼうな感じはしない。ちょっと陰かげがあるが、陰いん気きくさくはなくて、誰もが食うことに必死で汚よごれ放題なのに、身だしなみに気を遣つかっていることがうかがえる。いつもはへらへらしていて、いかにも話しやすそうだし、事実、よく喋しゃべる男だ。

　そんなウォッカーとは別人みたいだ。身体じゅう血と泥どろに塗まみれ、普ふ段だんはきっちり撫でつけてある髪は乱れに乱れて、どちらかというと垂れ気味の目が吊つりあがっている。

「おお!?　マリアローズ！　おまえ、どないして落とし前つけてく

れるつもりやねん！」

「ま、まままままあ、待ァーちたまえよ、ウォッカーくゥーんッ」

「陛下は黙だまっとってくれますか！　俺はマリアローズと話しとるんですわ！」

「む、むむゥ……ッ」

「落とし前って言われても、ね……」マリアローズは大おお仰ぎようにため息をついてみせた。

　馬鹿陛下用の天幕の前には、馬鹿陛下とマリアローズ、孫ソン狼ロウ、マックス・ルビカン、ロス・サンディーの各中隊長、それからカタリがジン・ウォッカーを囲むように立っていて、その外側に野次馬の国民たちが人ひと垣がきを作っている。

　この状況では、軽々しく自分の非を認めるわけにはいかない。そうでなくたって、認めるつもりなんか毛頭ないけどね。

「いったい僕が、何に対して落とし前をつけなきゃならないっていうのさ？　そのへんがまず、さっぱりわからないんだけど」

「俺ら第六中隊を見殺しにしたやろ！　おかげで、見てみい！　第六中隊の生き残りは中隊長の俺だけや！　他ほかはぜェんぶ糞くそ悪あく魔まどもにぶっ殺されてもうたわ！」

「僕は馬鹿へ──陛下に全軍撤退を進言しただけで、第六中隊を見殺しにしろなんて一言も言ってないけど？　部下を掌しよう握あくできてなくて、迅じん速そくに撤退させられなかったのは誰なのかな？　中隊長のきみなんじゃない？」

「気がついたらもう敵がきとったんじゃ！　援えん軍ぐんくらいよこせ、ボケッ！」

「どうして敵がきてることに気がつかなかったわけ？　泥人形なんか相手にしてたせいだろ？　きみらがちゃんと後方にも注意を払はらってれば、そもそもこんなことにはならなかったと思うんだけどね」

「何もかも俺のせいか⁉　そう言いたいんかい⁉」

「そうは言わないよ。最終的にすべての責任は馬鹿へい──陛下にある。でしょ？」

「ぬ、ぬおうッ!?　う、う、うむッ！　そ、それはそうだッ!?　む、むろんッ!?　私は新生太陽王国の国王なのだからッ!?　全責任は私にありッ!?　ゆえにその……まことに申し訳ないッ！　私がッ！　私がッ！　私が悪かったッ！　ごめんなさいッッッ……！」

「……そんな簡単に泣いて謝らないでよ。土下座とかやめて……」

「しッ、しかしッ！　私が至らぬばっかりに、ご迷めい惑わくをおかけして申し訳ないという気持ちはあふれるばかりで押しとどめることができないのだッ、あの彗すい星せいのようにッ……！」

「どの彗星だよ……」

「茶番はもうたくさんや……！」ウォッカーはマリアローズに歩みよってきて、胸むな倉ぐらをつかんだ。肩の上にいたクルルが慌あわてて地面に飛び降りる。カタリが腰の変形斧に手をかけたけれど、マリアローズは目配せをして制止した。

「お、おゥーい、ウォッカーくゥーんッ、乱暴はいかんよ乱暴は──」

「陛下は黙っとれ！　前からこいつには言いたいことがぎょうさんあったんじゃ！　多少悪わる知ぢ恵えが働くのか知らんけどな、何様のつもりじゃ、ワレェッ……！」

「……軍師、らしいよ。馬鹿──陛下に言わせれば」

「それ訂てい正せいになってへんやろ！　馬鹿陛下って言ってもうてるやん!?」

「モォーンダァーイナッシングッ！　私も自分が馬鹿陛下と呼ばれていることくらい知っているからねえ。たしかにッ。私はそれほど頭の出来がよろしくないッ。タハハッ」

「プライドっちゅうもんはないんかい、陛下！」

「あるよォー？　むろん、あるッ……！」馬鹿陛下は立ちあがって両りよう腕うでを広げ、気味が悪いほど恍こう惚こつとした笑えみ

を浮かべてみせた。「──キミタチ一人一人がッ！　新生太陽王国の国民一人一人がッ！　マァーイ・プライドッ……！　私の誇ほこりだッ！　すなわちッ、キミタチがいてェー私がいるッ！　その逆ではなァーいッ！　キミタチはマァーイベストフレンッ、最高だッッッッッッ……！」

　何を言おうとしているのか、わかるような、わからないような──とにかく国民たちは、最初あからさまに呆あきれていて、次し第だいに、まあ陛下だしな、みたいな雰ふん囲い気きが漂ただよいはじめ、たぶんお愛あい想そで誰かが拍はく手しゅすると、それにつづく者が出て、馬鹿陛下は顔を赤くして照れまくるといった具合の、やっぱりよくわからない、わかりたくもない状況になった。

　気勢を削そがれたようで、ウォッカーは「けっ……！」とマリアローズの胸倉から手を離して唾つばを吐はいた。「……まあ、ええわ。なんやかんや言うたかて、死んでもうたやつらは戻もどってけえへん。第六中隊は編制しなおしてもらうで。なんや。フィッシャーマンとヘリングの顔が見あたらんのう。第四中隊と第五中隊はどうなったん。見た感じ、兵隊はなんぼか戻ってきとるみたいやな。せやったら、俺が第四中隊の中隊長やったるわ。俺はもともと六より四のほうが好きなんや。何しろ、四巡月二十四番日生まれやからな」

「……うわー。いい性格」

「あたりまえや。ええ性格しとらんかったら、五十人からの人間集められへんやろが」

「え？　わざわざ説明しなきゃダメ？　いい性格っていうのは皮肉で言ったんだよ？」

「俺は他人の言葉はみんなええようにとることにしとんねん。そのほうが幸せやろ。ああ、せや、逃にげてくる途と中ちゅうで一緒になったモンがおってな。──おい、バトラー！」

　呼ばれて人垣の中から出てきたのは、冴さえない顔の四十絡がらみの男だった。どうやら新生太陽王国の者ではないらしい。ウォッカーは男を引きよせて肩を抱だいた。

「こいつはな。リック・バトラーや。ちょっと前までシングルーンのヴォイスっちゅう街におったらしいねん」

「街って──でも、敵に占領されてなかったの？」

「半分は」とバトラーは暗い声で答えた。「……でも、人間の抵抗勢力があって。ヴォイスは地下道がすごく発達しているんだ。そこを駆く使しして、我々は敵と戦っていた」

「それは……」マリアローズは下を向いてため息をついた。戦っていた、ということは、今はそうではないということだろう。バトラーたちは敗北したのだ。「大変だったね」

「ああ、まあ……」バトラーは言葉を濁にごした。

「ほんで、や」ウォッカーは馴なれ馴れしくバトラーの肩を叩き、マリアローズに向かってニヤッと笑ってみせた。「マリアローズ、俺かておまえの参さん謀ぼうとしての働きを認めとらんわけやない。おまえとは仲ようやりたいんや。俺としてもな。そこで、プレゼントや」

「……プレゼント？　何だよ」

「前に言うとったやろ。エルデンでおまえがおったクラン。たしか、ＺＯＯやったか。そのメンバーの消息や。知りたないか」

「え──ちょっと待って」マリアローズは胸を押さえた。心臓、やばい。「……そりゃあもちろん、知りたい……けど」

「必ずしもええ情報とはかぎらんで。当然、俺のせいやないけどな。それでもええんか」

　マリアローズはカタリと目を見あわせた。ユリカはまだ負傷者の治ち療りよう中でこの場にいない。それがいいことなのか、どうか。カタリはうなずいた。

「──いいよ。どんなことでもいいから、教えて」

　　　　十一巡月十八番日　ヴォイス

　旧アセチナ法国領から旧シングルーン領入りするのに十二日。そ

れからヴォイス近きん郊こうまで、さらに八日かかった。当然、ただ移動しただけじゃない。途中、悪魔の小集団を三度襲って食糧を確保した。食うか食われるか。情けは無用だ。

　リック・バトラーが所属していたヴォイス抵抗戦線は、彼曰いわく壊滅した。敵に制圧されているヴォイスに、危険を冒おかして潜せん入にゅうするメリットはない。馬鹿陛下は「しかし何せ軍師どののためだッ」みたいなことを言って、マリアローズが提案したヴォイス潜入作戦を支持してくれたが、ようするに我わが儘ままを通させてもらったのだ。もちろん、総勢二百二十一名となった新生太陽王国軍の全軍を動かすことはできない。

　マリアローズは志願者を募つのって、少人数でヴォイスに潜入することにした。潜入隊が丸三日、七十二時間経たっても戻らなければ、新生太陽王国軍は移動する。待機ポイントからヴォイスまでは四時間ほどかかるので、往復八時間くらい。ヴォイスの中にいられるのは約六十四時間だ。

「……でも、意外。なんできみが志願したわけ？」

「ああ？　そんなん、おもろそうだからに決まっとるやろ」ジン・ウォッカーは事もなげに答えた。「こんな世の中やで。せめておもろさくらいは追求せなやっとられんわ」

「ムフフッ。ジブン、地味にわしと気が合いそうやねんか」

「アホか。俺は人間様や。魚類とはツレになられへんがな。あたりまえやろ」

「そうかのう。言葉は通じとるようやし、やってみたらできへんこともないと──って、わしは人間やっ」

「そないなことはな。せめて人間様に見える面つらぁ手に入れてから言いくされ」

「生まれつきこの顔やねんぞっ。どないせっちゅうや！　──ユリカ。医術式でなんとかならんかのう……」

「ごめんなしゃい。いくらなんでも、しょれは無理ね……」

「魚ぎよょぅーん！　見放されてもうたっ！」

「……あのさ。どうでもいいんだけど、そろそろ黙ってくれる？」

「へい。えらいすんまへん……」

　マリアローズ、カタリ、ユリカ、ウォッカー、それからリック・バトラーの五人は、すでにヴォイス内に侵入していた。

　そう。ヴォイス潜入作戦の志願者は、新第四中隊の中隊長ジン・ウォッカーだけだったのだ。まあ、しょうがないとは思うけどさ。

　ヴォイスはかつて、五百年以上の歴史を誇る石造りの美しい街だったという。今もその面おも影かげはあるが、大半の建物は黒や紫色に塗ぬり替かえられ、人間やら動物やらの骨や皮で作られた旗がそこらじゅうに翻ひるがえっている。石いし畳だたみの道に色とりどりの塗と料りようで書かれている文字や記号のたぐいらしきものは、いったい何を表しているのか。絵らしきものも見受けられる。方々に木や骨でできた柵さくや鉄てつ条じよう網もうが設置してあるのは、ヴォイス抵抗戦線との戦いの名残なごりなのか、あるいは、悪魔同士で縄なわ張ばりを主張しあっているのかもしれない。

　ヴォイスは悪魔の街と成り果てていた。

　以前は十万人以上の人口を抱かかえていたというから、街としての規模は大きい。国境から遠く、街全体を囲む城壁が存在しないので攻略は容易だったろうが、住民の退たい避ひもそう難しくはなかったはずだ。比ひ較かく的てき自由に出入りできる。市街の下に複雑な構造の地下道が広がっている。こうした条件があったからこそ、ヴォイス抵抗戦線はつい四十日ほど前まで戦力を維い持じすることができていた──が、それだけではないという。

「ピンパーネル──ハニーメリー……」マリアローズは黒い壁から顔を出して街路の様子をうかがいながら小声で呟つぶやいた。「二人は生きてる。きっと……絶対、生きてる」

　十巡じゆん月げつ六番日。地下道に潜ひそんでいたヴォイス抵抗戦線を悪魔の大部隊が急襲した。この未み曽ぞ有うの掃そう討とう作戦には、地下道を埋うめつくさんばかりの大勢の悪魔どもが動員されたらしい。ヴォイス抵抗戦線は懸けん命めいに応戦したが、とうとう壊滅の憂うき目に遭あった。

　ピンパーネルとハニーメリーは一巡月の半ばにヴォイス抵抗戦線に加わり、最後まで主要な戦力として誰だれよりも多くの悪魔を屠ほふりつづけた。バトラーが言うには、とりわけピンパーネルは、ヴォイス中の悪魔どもに恐れられていたほどだという。

　夜な夜な殺戮を繰り返す無慈悲な人間の殺し屋をなんとか始末しようとして、悪魔どもは罠わなを張り、待ち伏ぶせをし、地下道を捜そう索さくした。そして、そのたびに返り討うちに遭った。ピンパーネルは悪魔を惨ざん殺さつしつづけ、その傍かたわらにはいつもハニーメリーがいた。いつしか二人はヴォイス抵抗戦線の要かなめとなっていた。

　最後の日までそれは変わらなかった。二人は囮おとりとなって敵部隊を引きつけ、仲間たちを落ちのびさせようとしたのだ。逃げおおせた者は決して多くなかったが、二人がいなければ間違いなく皆みな殺ごろしにされていただろう。それ以前に、ヴォイス抵抗戦線が十巡月六番日まで持ちこたえることができたのは、二人のおかげだ――リック・バトラーは沈ちん痛つうな面おも持もちでそこまで語ってから、こうつけたした。だが、あの二人が本当に死んだとは、自分にはどうしても思えない、と。

　マリアローズも同感だ。ユリカも、カタリも同意してくれた。

　ピンパーネルが死ぬわけがない。ピンパーネルがそばにいたなら、ハニーだって生きている。だいたいハニーも尋じん常じようじゃない。かなり人並み外れたところのある女性なのだ。

「地下道には、あそこから入れる」バトラーが約十メーテルほど前方に見える水路を指さした。「……前はもっとたくさん出入口があったんだが、だいぶ塞ふさがれた。二人が生きているとしたら、きっと地下道にいるはずだ」

「悪魔は……」カタリは半魚眼をきょろきょろさせた。「おらへんな」

「そんなら、行くかい」ウォッカーは妙に張り切っている。頼もしいと思うべきか、危なっかしいと思うべきか。マリアローズはうなずいた。「――よし、じゃあ行こう」

　マリアローズが先頭に立って、バトラー、ユリカ、ウォッカー、カタリの順で一気に道を進んだ。ためらわずに梯はし子ごを使って

水路に下りると、腐くさった臭においのする水の深さは膝くらいまでだった。バトラーが無言で方向を示す。マリアローズは皆に手で合図をしてそっちへ向かった。地下道の入口に足を踏ふみ入れると当然、中は真っ暗だった。水音に混じって鼠ねずみや脂羽蟲ゴキが動く気配が感じられる。ウォッカーが呟いた。「くっさいのう……」

かまわずバトラーの案内に従って、手て探さぐりで地下道を進んだ。

「……暗視鏡があればよかったわね」ユリカの声だ。

「我々も暗視鏡はいくつかしか持っていなかった」とバトラーが答えた。「ピンパーネルとハニーメリーには不要だったようだ。あの二人は、暗くら闇やみの地下道だろうと夜だろうと、昼間と同じように行動していた。悪魔の中には夜目がきくやつもいるが、そんな連中にも後れをとることはなかった」

「待って」マリアローズは足を止めた。「……前のほう。明るい。松明たいまつとかランプとかじゃないよね。あれは……陽ひの光だ。天てん井じように穴があいてる……？　どういうこと？」

「わからん」見えないけれど、バトラーは首を横に振ったようだ。「俺が記き憶おくしているかぎりでは、あそこはあんなふうになっていなかった……と思う」

「思うて」ウォッカーはずっこけたのかもしれない。「なんやねんそれ。しっかりしてくれや、バトラー。頼むでホンマ」

「よっしゃ。わしに任しとき」カタリが隊列から離れて、抜き足差し足忍び足で穴方面へと近づいてゆく。──なんだか、いやな予感が。

マリアローズはバトラーに耳打ちした。「……ねえ、この先に地上に出られるところはある？」「ああ」「いくつ？」「……はっきり覚えているのは三つだ」「戻ったら、入ってきたところからしか出られない？」「……俺が確実に案内できるのはあそこだけだ」

「──オッケー。わかった」マリアローズは深呼吸をして心の準備を整えた。

カタリはもう穴の真下に差しかかろうとしている。「……魚ぎ

よ？」

　中ちゆう腰ごしの姿勢で天井の穴を見上げたところで、カタリの動きがぴたりと止まった。

　マリアローズはいつでも走れるように重心を低くした。

「魚うおっ……！」カタリが魚類というより蛙かえるみたいな身のこなしで飛びすさった。

　落ちてくる。穴から。暗くて姿形はよくわからないが、人間に近い。悪魔だ。一いつ匹ぴきじゃない。二匹、三匹。次々と。

　ウォッカーが「やばっ」と叫んで踵きびすを返そうとした。マリアローズは逆だ。バトラーの腕うでをとって引きずるように直進しながら叫んだ。「──突破する！　カタリ……！」

「お、おおうっ！」カタリはすぐさま腰こしから二本の変形斧を抜いて悪魔に斬きりかかった。ユリカがマリアローズを追い抜いて、別の悪魔を極限九手棍で突き倒す。カタリはすでに悪魔を一匹斬り伏ふせて、もう一匹を壁かべ際ぎわに追いこんでいる。それを見たウォッカーがすかさずカタリに加勢してその悪魔にとどめを刺さした。「さすが俺や……！」「──今の手助け、いらんっちゅうの……！」

「さあ、行くよ……！」マリアローズはバトラーを連れて先へ先へと進む。穴からはまだ続々と悪魔が下りてくるが、追いついてきた先からカタリとユリカ、それから一応ウォッカーが蹴け散ちらしてくれる。

「めちゃくちゃだ！」とバトラーが叫んだ。「……こんなことをやっていたら、命がいくつあっても足りんぞ……！」

「一つで十分……！」マリアローズは叫びかえした。「──それでなんとか今まで生きてきたし！　まだ死ぬ予定はないし……！」

「せや、せや！」とカタリが笑えばユリカも「このくらい朝あしやご飯前よ！」と応じて、ウォッカーは「うはは。うは。うははは」と変な笑い声をあげている。大丈夫なのかなあいつ。ちょっと頭おかしいんじゃないの。いいけど。

　汚お水すいを撥はねあげながら、マリアローズたちは下水道をひ

た走る。

「……すまない、自信がなくなってきた！」とバトラーが弱音を吐はいた。怒ど鳴なりつけようかと思ったが、行く手がまた明るい。穴だ。天井に穴があいている。怯ひるんでしまいそうになった。でも行くしかないと開きなおって、穴の下を駆かけ抜ける。案の定、マリアローズとバトラーが穴の下を通過した直後、穴から悪あく魔まが落ちてきた。

「……ぶ、分断されるぞ！」

「大丈夫……！」僕の友だちを舐なめるなっての。カタリとユリカはあっという間に悪魔をぶっ倒して、マリアローズとバトラーのすぐ後ろについた。「うひー」みたいな奇声が聞こえるから、ウォッカーも近くにいるみたいだ。なかなかしぶとい。

「い、息が……！」走りつづけて、バトラーは限界が近づいているようだ。四十男にこの終わりの見えない駆けっこはきついか。だけどしょうがない。

「きみも死にたくはないだろ、だったら走れ……！　――カタリ、ユリカ！　敵は!?」

「少し距きょ離りが開いたみたいやな！」

「しょうね！　でも、まだ追ってきてるわ！」

「うははは。うはは。うはははは。やばっ。これ、めっちゃおもろいやんか……！」

　あー馬鹿がいる。

「なんか知らないけど、妙に馬鹿と縁えんがあるよね……！」超最低ＳＵＣＫ、超最低ＳＵＣＫ、超最低ＳＵＣＫと吐き捨てつつ、マリアローズは一瞬たりとも足を止めない。バトラーが転んでも、引っぱり起こして無理やり走らせる。

「……こ、こんなことなら！　案内なんて、ひ、引き受けるんじゃなかった……！」

「そんなこと言わないで！　感謝してるんだから！」

「い、生きてる、と、ほ、本当に、思ってるのか……!?」

「思ってるってば！　思いまくってるよ！」

「しょ、正直、俺は……！」

「はい、口、閉じる！　また穴だよ……！」

　今度の穴は大きかった。穴というより、むしろその部分の地下道の天井が取り外されているといった感じだ。しかも、通りすぎる前に悪魔が飛び降りてきた。つまり、そいつはマリアローズたちの前に立ちふさがった。

　兜かぶとみたいな頭から突きだす二本の角。身の丈たけ二メーテル超。鉛なまり色いろの巨きょ軀く。双そう眼がんには青い炎。通つう称しよう・鉛なまり鬼おに。「──ＦＵＮＭＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

「だ、だめだ、あいつは……！」バトラーが崩れるように倒れこんだ。気持ちはわかるけど、後あと戻もどりはできないのだ。マリアローズは鉛鬼めがけて突っこんでゆく。「──うううううううあああああああああああああああああああああああああああああああ……！」

「ＭＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨ……！」鉛鬼は糞くそ重そうな鎚つちでマリアローズを粉ふん砕さいするつもりらしい。あと少しでそうなるところだったが──紙かみ一ひと重えの差でマリアローズは鎚をかわした。そうして鉛鬼の懐ふところに入りこみ、股こ間かんを蹴けったくってやった。「──ＧＵＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＵＵＵＵＵＵＵＵＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……!?」

「かったぁーい……！」マリアローズは痺しびれる足を引きずって、思いきり右に跳とんだ。鉛鬼はマリアローズをつかまえようとしたのかもしれないが、そのときにはもうカタリが迫せまっていた。

「我流ッ……！」カタリは鉛鬼に飛びかかって、その左上じよう腕わんを、そして左肩を踏み台にして跳びあがった。

　鉛鬼は青い炎が揺れる目でカタリを追おうとする。

　その瞬間、決着はついていた。

　カタリは空中で舌を出してみせた。「━なんつて！　わしは囮おとりやッ……！」

「覇はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああ……！」

　本命は、ユリカだった。

　ユリカは極限九手棍に黄金色の気パワーをこめて、鉛鬼の胸のほぼ真ん中を突いた。

　突き通す。

　心臓を貫つらぬいた。

「━離りゃあっ……！」ユリカは間を置かずに極限九手棍を引き抜いて、噴ふん出しゆつする血液を浴びながら、鉛鬼の頭頂に痛つう撃げきを加えた。

　鉛鬼は崩れ落ち、間もなく動かなくなった。

　汚きたならしい返り血に塗まみれても、ユリカは美しい。「━しゃきを急いしよぎましょう！」

「いっひーっ！」ウォッカーが飛び跳はねた。「かっこよすぎやろ、惚ほれてまうがな！」

「ごめんなしゃい。わたしには心に決めた男ひとがいるの」

「うわおっ！　そら残念や！　まあ、俺も惚れとる相手くらいおるけどな！　━て、ここは訊きいとくとこやろ！　誰だれやねんって、訊けや誰か……！」

　あー馬鹿がいる。

「ほっとこ……バトラー、立って」

「……あ、ああ。すごいな。あんたたち。あのピンパーネルとハニーメリーの仲間だってのも、うなずける」

「そんなことどうでもいいから。はい、立って走る！」

　マリアローズはバトラーを助け起こして、尻しりを叩たたこうとした。その手が止まった。

　前方の暗闇から何かが近づいてくる。

「……敵？」

　それにしてはちょっと変だ。

　足音というか、汚水をかきわけるような音がえらく静かで、かといって物音を立てないようにしているというふうでもない。

「そうだ……すっかり忘れていた」バトラーが低い声で言った。「……我々ヴォイス抵抗戦線の要かなめは、ピンパーネルとハニーメリーだけじゃない。もう一人いた。前線に立つことはめったになかったが、奇妙な男……いや、女で……」

「女……？」マリアローズは眉まゆをひそめて目を凝こらした。

　ここは天井がないので、かなり明るい。

　闇の中からじわっと染しみだしてくるように、その者はゆるゆると姿を現した。

「……左ひだり脚あしに重傷を負って、彼女は逃げようにも逃げられなかったが━ピンパーネルとハニーメリーが敵を引きつける策を、即そく座ざに決めて……実行させた張本人だ」

「きみは……」マリアローズはまばたきをした。

　髪を撫なでつけ、なぜか口くち髭ひげを蓄たくわえているが、身体からだつきはやはり女だ。

　彼女は左脚に添そえ木をして、杖つえをついていた。「━人の声がすると思いきてみれば、これはこれは」

「ジャン・スタンバック……」バトラーは大きなため息をついた。「……よく無事で」

　　　　　十一巡月十九番日　ヴォイス近郊

悪魔どもに見つかってしまったし、ジャン・スタンバックの左脚は慎しん重ちように治ち療りようしなければならないというのがユリカの見立てだったから、走れない人間を一人抱かかえて移動しないといけないという不利な条件もあり、ヴォイスからの脱出はけっこう手間だった。

それでも全員無事にヴォイスを出て、洞窟を利用した待機ポイントに戻ると、馬鹿陛下の喜びっぷりといったらなかった。何しろ、本物の軍師どのとの再会が叶かなったのだ。馬鹿陛下はジャン・スタンバックにすがりついて泣き叫び、涙と鼻水を撒まき散らしまくって、靴の裏を舐めろと言われたら喜んで舐めかねない勢いだった。

「……とりあえず、僕としてはよかった──かな？　これで、軍師とかいうわけのわからないポジションから解放されそうだし」

「俺は認めへんけどな」ウォッカーはなぜか不ふ機き嫌げんそうだ。「ずっと苦く心しん惨さん憺たんして新生太陽王国軍を引っぱってきたのはおまえやんか。あんなわけのわからん気色の悪い口髭女の言うことなんか聞けるかい」

「え？　何？　どういうこと？　ちょっと、だいぶ気持ち悪いんですけど……」

「俺だけやないで。見てみい。孫ソン狼ロウもルビカンもサンディーも、半信半疑どころか不ふ審しんバリバリっちゅう顔しとるやろ。そらそうや。陛下にとっては昔馴な染じみなんかしらんけどな。俺らにしてみたら、単なる見も知らぬ奇人変人やろが」

「まあ、考えてみたら、馬鹿陛下にとっても、昔馴染みっていうわけじゃたぶんないと思うんだけどね……」

「ああ？　どういうことやねん？」

「や……そのへんはどうでもいいっちゃーどうでもいいんだけど」マリアローズは待機ポイントで帰りを待ってくれていたクルルの喉のどを撫でながら、肩をすくめる。ジャン・スタンバックはもともと昼飯時ランチタイムのメンバーだったのに、いつの間にかファニー・フランクの参さん謀ぼう役になっていたとか言っても、話が

ややこしくなるだけだろう。

「ところで、しょろしょろ治療をしゃしぇてくれない？」

「──んッ!?　おおッ！　ユリカくんではないかッ。きみも無事だったんだねえッ。よかったよかったッ。何ッ!?　治療ッ!?　誰のッ!?　むおッ、軍師どのッ！　よく見れば怪け我がをしているではないかァーッ！　これはいかんッ、ユリカくんッ、急ぎ頼むッッッ！」

「……ええ。じゃあ、ジャン・スしゆタンバックしゃん、この岩にしゅわってくれる？」

「かたじけない」ジャン・スタンバックはおとなしくユリカが示した岩に腰かけて左脚を前に出した。そうして洞窟の中を見まわす。

　その目つきが、誰かに似ている──ような気が。誰だろう。

「戦闘要員が二百名余り、非戦闘員は百五十名といったところか。ファニー・フランク。あなたではこれだけの人数を統率できない。何者かの強力な補ほ佐さがあった」ジャン・スタンバックは口髭をつまんだ。「──そこでＺＯＯのマリアローズか。なるほど」

「……勝手に人の名前を出して、納なつ得とくしないでほしいんですけど」

「きみのことはピンパーネル、ハニーメリー両名からよく聞いている」

「あっそ。……あいにくきみの話はあんまり聞いてないけど、人の話を聞かないタイプだってことはわかったよ。あと、ピンパーネルとハニーメリーがどうなったのかも、きみは知らない。──ようするに、僕にとっては価値のない情報源だってこともね」

「たしかに、私は両名の消息を承知していない。だが、情報は持っている」

「……ぬう？」カタリが首をひねった。気持ち悪いひねり方だ。「どういうこっちゃ？」

「ヴォイスという街は」ジャン・スタンバックは懐から紙の束をとりだした。「交通の要よう衝しようとまでは言えないが、それに準

ずる地理的要件を備えている。かつても交易の中ちゅう継けい拠きよ点てんだったが、現在もそれは同じで悪あく魔またちの往来が激しい。むろん情報も集まる」

「せやけど、情報ゆうてもやで。悪魔の言葉がわからんかぎり、理解できへんやんか」

「だから覚えた」ジャン・スタンバックは紙の束を軽く振ふってみせた。「完璧にとまではいかないが、日常会話程度なら聞きとることも、読むことも可能だ。話すのは発音に特徴があり難しいが。――何せ、脚あしがこのとおりで街から離はなれるのは難しかったのでね。私はたまに地上に出て、身を隠し、聞き耳を立て、情報を収集して時を過ごした。まあ、もとからやっていたことではあるのだが」

「おほおッ！　さァーすがは軍師どのッ！　で、その紙にはッ……？」

「役に立ちそうなことはすべて記してある。たとえば――悪魔たちが把は握あくしている、人間のめぼしい勢力」

「ちょっと貸して」マリアローズはジャン・スタンバックの手から紙の束を奪った。

　少し青みがかっていて厚みがある、見たことのない紙だ。悪魔が作った紙なのか。硬こう筆ひつで書かれた文や図は、走り書きなのだろうが読みやすい。――赤黒い、字。

「……これ、もしかして血で」

「インクが切れた」ジャン・スタンバックは傷だらけの左手を開いてみせた。右手には手て袋ぶくろをつけている。「慣れればなかなか書きやすいものだと知ったよ」

「勢力……」マリアローズは一つ息をついて、紙に目を落とした。

　めくると、これは地図だろうか。α大陸らしい。オークリッド首長国のあたり、モトローリィ、ハッツフォー独立軍領、ファー・セルジナ王国の東、ラフレシア第三帝国の西に印がある。印からのびる線の先には――勢力の名称なのか。豹ひょうの軍団。ジョーカー軍。銀の軍団。馬ば賊ぞく。それから、緋ひの軍団。

「……ジョーカー軍。銀の軍団。これって……」

「どうやら豹は旗印のようだ。ジョーカーは彼らがそう名乗っているらしい。銀の軍団は銀色の鎧を身につけている集団。緋の軍団も同じだ。馬賊は騎兵の集団なのだろう」

　ユリカが治療の手を止めて呟つぶやいた。「……ジョーカー」

「銀の軍団は、あれやろな」カタリの顔が真っ赤だ。笑いたいのを必死にこらえているのだろう。「──間違いない。秩序の番人や。アーニャちゃん……」

「すっげえ……」ウォッカーは両目を見開いている。「すげえ。すごすぎやろ、軍師どの。俺らは喉から手ぇが出るほど他の人間たちの情報が欲しい。せやけど、地上はほとんど悪魔どもに支配されとる。逃げ隠れしとるだけで精せい一いつ杯ぱいっちゅうのが実情や。悪魔から情報ぶんどってきよるとは……」

「わー。さっきは奇人変人とか口髭女とか言ってたのに、調子いいやつ……」

「それはそれ、これはこれや！　軍師どの！　俺は新生太陽王国軍第四中隊中隊長ジン・ウォッカーいうモンや！　以後お見知りおき願うで！」

　ウォッカーにつづいて、孫ソン狼ロウ、マックス・ルビカン、ロス・サンディーも手短に自己紹しよう介かいをした。ジャン・スタンバックは静かに聞いているだけだが、馬鹿陛下はご満まん悦えつだ。

「ヌハハハハハッ！　そうッ！　そうなのだよッ！　軍師どのはすぐゥォーいのだッ！　みんなたっぷり崇あがめるよォーにッ！　──ああ、マリアローズくんッ！　きみにもアレだよッ、今後も第二軍師として活かつ躍やくしてもらうので、そのつもりでよろしく元気ッ！」

「え。やだよ」

「ヌハッ!?　な、なぜだいッ？　も、もしかして第二軍師では不満だとでもォ……？」

「そういうんじゃなくて。もともと軍師とか柄がらじゃないしさ。

しょうがなくやってたけど、もうジャン・スタンバックさんがいるわけだし、僕はお役御ご免めんってことでいいでしょ」

「いや。私からも頼む」ジャン・スタンバックが頭を下げた。「べつに軍師でなくてかまわないし、私を使ってくれてもいい。どうか軍を動かすにあたって、あなたの手しゆ腕わんを発揮してもらいたい」

「……手腕って言われても、僕はそんな」

「私はあくまで新参者だ。この組織のことを何も知らない。私がこの組織を把握するまででもいいので、力を貸していただけないだろうか。お願いする」

「じゃ、じゃあ……」マリアローズは顔をしかめた。「ちょっとだけね。まあ、少しの間だと思うけど。そうしたら僕は一兵卒に戻るから。そのほうが気楽だし」

「かまわない」ジャン・スタンバックは口髭と唇をニヤリと笑わせた。それでいて、目はまるで笑っていない。

　本当に誰かに似ている。あの目。──誰か。誰……？

「ま、ええんちゃうか」カタリに背中を叩たたかれた。「適材適所っちゅうやつや。人間同士いろいろ助けあわな、やってかれへんわけやしな」

「さあッさあッさあッ！　それでは注目ッ！　チュウモォークッ！　軍師どの、第二軍師どのとそろい踏ぶみしたところでッ！　次の我ら新生太陽王国の行動目標を大ッ、大ッ、大発表してしまうぞォーウッ！」馬鹿陛下は身体を斜ななめにして、ジャン・スタンバックを両手の人差し指で示した。「──発表はッ！　軍師どのからッッッ……！」

「きみじゃないのかいっ」「おまえがやらへんのかいっ」

　ウォッカーとツッコミがかぶってしまった。恥はずかしい。ウォッカーも照れている。

「我々は」ジャン・スタンバックはあくまで冷静だ。「──ただちに他勢力との合流を目指す。位置的にもっとも近いのはハッツフォーにいると思われる銀の軍団なので、私としてはこれを第一案として

推おしたいが、どうか」

　馬鹿陛下が拳こぶしを振りあげた。「異議なァーしッッッッッッ……！」

　その勢いに押されて「異議なし！」と唱和した者の多いこと多いこと。これでいいのかと思わなくもないが、マリアローズも異存はない。

　銀の軍団。秩序の番人。飛んでいってしまったエルデンにいたはずの彼らが、どうやって地上に降りたったのか。そのあたりは不明だが、もし彼らが本当に秩序の番人だとしたら、モリーとベアトリーチェもきっと一緒のはずだ。ピンパーネルとハニーメリーのことはもちろん気になる。気になって仕方ない。でも、モリーとリーチェにも会いたい。

　会いたいよ。

　こんなに会いたいのに、会えない人が多すぎる。

十二巡月十三番日　ジャディッシュ山地

　もっとも近いといっても、旧シングルーンから旧ハッツフォー独立軍領までは直線距きよ離りで八百キルメーテル以上ある。非戦闘員を連れての移動となると、一日二十キルメーテルくらいがせいぜいだと思ったほうがいい。単純に考えて、四十日。気が遠くなるが、悪魔を中心とした異界生物フリークスどもに支配されているこの地上には、安住の地などありはしない。一いつ箇か所しよにとどまれば早晩発見されて、敵が群がってくる。敵に捕ほ捉そくされないように移動しつづけるか、敵の攻撃に耐えうる規模の戦力を保有するか。敵に見つからない場所に身を潜ひそめるという手もあるが、食しよく糧りようや水を確保しなければいけないから、永遠に隠れつづけることはできない。結局、とりうる戦略は基本的には二つに一つなのだ。新生太陽王国は動きつづける方法で今日まで生き抜ぬいてきたので、老人だろうが子供だろうが歩けない者はいない。戦闘要員以外は荷物を多く持って、たまに文句を言いながら歩く。平地だろうが山道だろうが沼ぬま地ちだろうが歩く。川があれ

ば押し渡る。歩く。歩く。異界生物フリークスの小集団を見つけたら襲いかかり、その肉を食らって、谷川の水を、たまには湖や池の濁にごった水をすすって歩く。歩く。休んでは歩く。ひたすら歩きつづける。

ヴォイスを離れて三十日。予定よりも速いペースで、もう七百キルメーテルほども歩いた。旧ハッツフォー独立軍領までもうすぐだが、この先は見晴らしのよすぎる荒こう野やがつづく。貴重な川沿いの肥ひ沃よくな土地には決まって街があり、それらの街は現在、異界生物フリークスどもに占領されているので、あまり近づくわけにはいかない。あとは峻しゅん厳げんな山々だ。

銀の軍団はいったいどこを拠きよ点てんにしているのか。

山だろう、という意見が大勢を占しめた。

ハッツフォーの山域には鬼人オーガが多く棲せい息そくしている。人間たちと敵対し、たびたび掃そう討とうされながらも、鬼人オーガは絶滅していない。ハッツフォーの山々には、鬼人オーガが隠れ住む余地があるということだ。今や悪魔どもがかつての人間のように我が物顔に振る舞っているわけだから、人間が鬼人オーガの真ま似ねをしていてもおかしくない。

こうして、寒風吹きすさぶハッツフォーの枯かれ木に覆おおわれた山に足を踏み入れようとした新生太陽王国軍民の行く手に、一人の若者が倒たおれていた。

若者、なのだろうか。腹はら這ばいになっているのでしかとはわからないが、背せ恰かつ好こうからすると二は十た歳ちかそこらだ。もしかすると、十代かもしれない。黄土色で、猫の耳みたいな飾りがあるフード付きの上着を着ていて、黒いズボンを穿はいている。最初に反応したのは馬鹿陛下だった。「──ややややッ⁉　こんなところで行き倒だおれとはッ……⁉」

馬鹿陛下は若者（？）にひょこひょこ歩みよろうとしている。

マリアローズはジャン・スタンバックと目を見あわせた。どう考えてもあやしいですよねえ。お互たがいそう思っているが、なんとなく馬鹿陛下を止める気になれないところも、どうやら一緒らしい。

「いやいや、あかんやろ!?」カタリが駆かけだした。「こら、あかんて！　不用意すぎるやろ、おいッ！　おい、やないわ、ヘイッ！　陛下ッ……！」

「カタリ……しゅごく……ちゅまらないわ……」

「いやいやいや、今のはギャグちゃうて！　少なくとも狙ねらってはないで！　ホンマ、とっさに出てもうただけやて！」カタリが振り返って手を左右に振り、否定している間に、馬鹿陛下は若者（？）のすぐそばにしゃがみこんだ。「──おゥーいッ！　どうしたのだッ、若者よッ！　生きてますかァーッ……!?」

　若者（？）の頭がぴくっと動いた。すぐに顔を上げた。

　人間、なのか。十七、八歳の、なかなかこぎれいな顔をした若者に見える。ただ、かなり顔色が悪くて、目の下の隈くまがやたらと濃こい。濃すぎる。真っ黒だ。

「……あんたぁ、誰ぇ？」

「むうッ、私かッ!?　私はッ──」馬鹿陛下は右手の親指を立てて自分を示した。「ファニー・フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトッ。新生太陽王国国王だッッ」

「へーえ……国王ぉ。王様なんだぁ」

「さようッ！　それで、きみはッ!?　名は何というッ!?」

「ぼくぅ？　ぼくはねぇ……」若者（？）はのっそりと起きあがって馬鹿陛下と同じようにしゃがむ体勢になり、ニタリ、と笑ってみせた。「──ハギピヨ。ハギピヨ・クデ・ウテナウワ。大声のラウデイー大公爵ハイヴエリオンなんだぁ」

「陛下！」「「「陛下……！」」」「「「「「「「陛下……っ！」」」」」」」

　大勢が一いつ斉せいに馬鹿陛下を呼び戻そうとしたが、遅かった。

　ハギピヨは口を大きく開けながら息を吸いこんだ。馬鹿陛下は慌あわてふためいて回れ右をする。その背中にハギピヨの大きな声が襲いかかった。驚くべきことに、マリアローズにはその大声が見え

たのだ。それは透明な何かのかたまりで、馬鹿陛下を紙かみ屑くずみたいに吹っ飛ばしてしまった。

「…………!?」マリアローズは耳を押さえた。聞こえない。自分は声を出している。それなのに聞こえないのだ。声だけじゃない。音らしいものは何も聞こえない。

「散歩してたらぁ。人間とぉ。出会いましたぁ」音は聞こえないのに、ハギピヨの大声は感じる。脳を直接揺さぶられているような感覚だ。「すてきなぁ。すてきなぁ。出会いになるといいなぁ。ぼくはぁ。だってぇ。ひとりで寂さびしかったからぁ。遊ぼうよぉ？」

「…………！」だめだ。とても立っていられない。ハギピヨが何か言うごとに頭がふらふらする。気持ち悪い。内臓が裏返りそうだ。何だよ、これ。何なんだよ。こんな──こんな悪あく魔まもいるのか。マリアローズだけじゃない。誰も彼もよろめいたり座りこんだりしている。カタリも、ユリカでさえ、武器を構えることすらできない。

　終わりだ。

　無理だ。終わった。完全に。こんなにも簡単に。呆あつ気けない。あまりにも。ひどい終わり方だ。いやだ。やだよ。絶対やだ。終わってたまるか。でも、思うように身体からだを動かすことができない。くらくらして、まるで力が入らない。

「遊ぼうよって言ってるのになぁ。ぜーんぜん遊ぶ体勢じゃないもんなぁ。ひどいなぁ。つまんないなぁ」ハギピヨが近づいてくる。逃げないと。わかっている。逃げないとまずい。だけどできない。ハギピヨが手をのばしてくる。僕？　はあ？　いきなり僕？　やめてよ。頼むから。ダメだ。ああ。くそ。ハギピヨの手が。「──つまんないからぁ。殺しちゃえぇー。……あ」



いったい何が起こったのか。突然、ハギピヨの首が右に傾かたむいて、両目を見開いたかと思うと、その身体が横よこ倒だおしになった。

ハギピヨの頭から矢のようなものが生えているのを見て、マリアローズはようやく理解した。

矢のようなものじゃない。矢だ。矢そのものだ。誰かが矢を放って、ハギピヨの側頭部に命中させた。それで、ハギピヨは瞼まぶたや唇をぴくぴくさせている。まるで死にかけているみたいだ。まるで、じゃない。きっと死にかけている。──とうとう動かなくなった。

「…………」マリアローズはあたりを見まわした。まだ音は聞こえないが、頭はふらふらしない。だいぶましになってきた。でも、誰が矢を……？

しばらくの間、皆みな、無言で（というより無音で）きょろきょろしていた。

最初に気づいたのは、たぶんカタリだ。カタリはマリアローズの肩をつかんで揺さぶり、西のほうを指さした。「──……！　……！　…………！」

「…………？」マリアローズはそっちのほうに目をやった。次の瞬間、跳とび起きて走りだした。西は登りの急きゅう斜しゃ面めんだ。その上のほうから、鹿しかのように軽やかな足どりで彼女は下りてくる。彼女だけじゃない。白い毛をまとった大きな生き物が──それも、一頭じゃなくて。「──…………！　…………！　……ゅー……！」

「ロム・フォウ……！　久しぶり……！」マリアローズはロム・フォウに抱だきついた。相変わらず背が高い。あたりまえだけど。お日さまの匂においがする。褐かつ色しょくの肌はだは美しくて、エメラルドグリーンの瞳ひとみは泣きたくなるほどきれいだ。ロム・フォウはちょっと驚いたみたいだけれど、ぎゅうっと抱きかえしてくれて、頬ほおずりまでしてくれた。「ああ。久しぶりだ。元気だったかい、マリア」

「や、まあ、元気とかってより──わぷっ」きゅーがロム・フォウごとマリアローズを抱きしめた。「きゅう！　くう！　くう！　くう！　きゅう！　きゅううううう……！」

「わぁぁぁぁぁ……！　きゅーだ！　きゅーがいる！　きゅー！ロム・フォウと一緒にいたんだね！　捜さがしてたよ！　会いたかった！　きゅー！　きゅーだぁぁぁ……！」マリアローズはきゅーの真っ白なもふ毛に、思うぞんぶん顔を埋うもれさせた。外がい套とうの中にいたクルルが出てきてぴゃーぴゃー騒さわいでい

るが、気にしてなんかいられない。

　大きな白はく狼ろうが悠ゆう然ぜんと歩いてきて、おい、おれに挨あい拶さつは、とでも言いたげに頭を近づけてきた。マリアローズのことを覚えているのだろうか。見るからに特別な狼だ。覚えているのかもしれない。マリアローズはその頭をわしゃわしゃ撫なでた。「──アルファ！　きみはほんっとにおっきいなあ！　きゅーとは違うおっきさだよねえ！　かっこいいなあ！　アルファ、きみも久しぶり……！」

　アルファが「うおん、おんっ」と吠ほえると、クルルがまたマリアローズの外套の中に隠れてしまった。「……アルファの声がおっかなかったのかな？　食べられはしないと思うけど──て、あ。音が聞こえてる。耳、やっと治ったっぽい……？」

「何か変な相手に絡からまれていたみたいだね」ロム・フォウは倒れているハギピヨを一いち瞥べつしてから、ユリカ、カタリに笑いかけた。「やあ。ユリカ、カタリ」

「おうっ。まいど、ロム・フォウ！　前にも増して別べつ嬪ぴんはんやな！」

「お久しぶりね、ロム・フォウ」

「カタリは少し男らしくなったかな」

「そ、そおかぁ？　ま、まあな？　わしもな？　すっかり大人の男やし……？」

「ユリカはちょっと大きくなって、きれいになった」

「……ロム・フォウがお世しえ辞を言うようになるなんて、思ってもみなかったわ」

「お世辞？　ああ──そういう習慣は、あたしにはないと思う。昔から、自分が思ったとおりのことしか、あたしは言えないんだ。ユリカは前からきれいだったけど、今はもっときれいだよ」

「しょ、しょうかしら……自分では、しょういうことって考えないから……」

「こちらは？」ジャン・スタンバックが視線でロム・フォウを示し

た。

「彼女はロム・フォウ」マリアローズはロム・フォウを紹しよう介かいしてから、きゅーをもう一度、ぎゅうっと抱いた。さらに、アルファの頭をもう一回わしゃわしゃしてみせる。「こっちがきゅーと、アルファ。みんなＺＯＯの仲間だよ」

「……人間以外のメンバーもいたとは」

「うちはそのへんこだわらんからのう」カタリが顎あごを撫でながら言うと、ユリカが「しょういえばしょうね」とうなずいた。「考えてみたら、気にしたことがないわ」

「な、なんちゅう美しさや……」ウォッカーは震えている。「こんな美人は見たことないで。野性的っちゅうかなんちゅうか……それでいて気品が……い、いや、あかん！　俺には惚ほれとる相手がっ……」

　あー馬鹿がいる。

「ここにいるのは」ロム・フォウはマリアローズ、カタリ、ユリカをざっと見た。「どうやら三人だけみたいだね」

「うん……」マリアローズは唇を噛かんだ。「いろいろあって、はぐれちゃって。それから、あと──」

　ルーシーのことは言ってもわからない。ロム・フォウは会ったことがないからだ。どこかでほっとしてる自分がいて、いやになる。「──ううん、なんでもない」

「そう」ロム・フォウは一瞬、眉まゆを曇くもらせた。ほんの一瞬だった。「でも、会えてよかったよ。──ところで、いつまで死んだふりをしているつもりなのかな」

「……あれぇ」やつが顔を上げた。

　ハギピヨだ。

　側頭部には矢が刺さったままだし、口から血が流れでている。

「知ってたんなら、もっと早く言ってくれればよかったのになぁ」

「ロム・フォウ！　声……！」マリアローズがそう言うよりも早かった。ロム・フォウは抜く手も見せずにモトロール刀を抜き放った。ハギピヨはたぶん、大声を出そうとした。その前に首が斬きれ飛んだ。マリアローズごときが鮮あざやかと評するのは失礼になるのではないかとさえ思えるような手並みだった。

　ロム・フォウは刀を鞘さやに納めようとして、やめた。「……すごいな」

「…………」地面に転がり落ちたハギピヨの生首の━口が動いた。声こそ出なかったが、喋しやべろうとしたらしい。

　ハギピヨの身体は生首を探しているのか、うろうろしている。

　まだ死んでいないのだ。

　死にそうな気配すらない。

　一同、呆ぼう然ぜんとしている中で、ハギピヨの身体は自分の生首を拾って小こ脇わきに抱かかえた。生首は笑えみを浮かべている。そして腰を折り、人を小馬鹿にしたようなお辞じ儀ぎをして━身を翻ひるがえそうとしたハギピヨに、ロム・フォウが迫せまった。「━きみに恨うらみはないけれど」

　斜ななめに斬った。

　斬り上げて、斬り下ろした。

　横よこ薙なぎにして、さらに斬って、斬った。

　ロム・フォウはばらばらになったハギピヨに刀の切っ先を突つきつけた。「誰か、油を持っているかい？」

　数秒、間があって、何人かが慌てて食用や照明用の油が入った瓶びんを持ってきた。ロム・フォウはそれらを受けとってハギピヨに振ふりかけ、燐寸マツチを擦こすって点火した。燃えはじめても、ハギピヨの身体は動いていたし、生首の目はロム・フォウを凝ぎよう視ししていて、唇は動きつづけていた。「…………、…………、……、…………、………………」

　ロム・フォウはじっと燃えゆくハギピヨを見つめていた。そのエメラルドグリーンの瞳が何らかの感情で揺れることはなかった。ハ

ギピヨが真っ黒に焼け焦こげると、ロム・フォウは大きめの岩を持ってきて、それで丹たん念ねんに潰つぶした。マリアローズたちも途と中ちゆうから手伝ったが、何も感じない、何とも思わない自分が不思議だった。それはただの作業だった。

「今まで出くわした敵は、だいたいこれでなんとかなったんだけれど──」

　すべてが終わると、ロム・フォウはようやくほっとしたように表情をゆるめた。

「ここまでして死ななかったら、ちょっと手に負えないね。でも、大丈夫そうかな」

「……と、思うけどね。だといいんだけど……」

「ところで、きみたちはどこへ向かうつもりなのかな。この先には山しかないよ」

「ああ、僕らは──」マリアローズは念のため、ジャン・スタンバックの表情をうかがってみた。軍師どのは口くち髭ひげをさわりながらうなずいてくれた。「秩序の番人を捜してるんだ。おそらく、ハッツフォーのどこかにいると思うんだけど」

「秩序の番人か」

「もしかして、何か知ってるの？」

「うん。接せつ触しよくはしていないけれどね。彼らは移動したよ」

「えっ」

「ここじゃない、山をもう三つ越こえたところを拠きよ点てんにしていたんだ。二十日くらい前に、そこを捨てて南へ向かった。申し訳ないけれど、目的地まではわからない」

「そっ……か……」

　一気に力が抜けた。とんだ骨折り損だったということだ。

　いや、そんなことはない。ロム・フォウときゅー、アルファに会

えた。

「……うん。だよね。前向きに考えないと。へこたれてる場合じゃないし」

「たぶん、山で冬を越すのは無理だと踏んだんじゃないかな。もうだいぶ冷えてきているけれど、あと十日もしたら凍こごえるような寒さになるから」

「ふむ……」ジャン・スタンバックが低く唸うなった。「そこまで寒いものか。このあたりには長くいた経験がないので、少々甘く見ていたのかもしれない」

「見たところ、冬山だと一晩で凍とう死ししかねない装備の人もいるね。悪いことは言わない。引き返したほうがいいと思う」

「ロム・フォウは野外生活のプロフェッショナルやからなあ」

「あたしはただ、人がたくさんいる場所が苦手なだけだよ。でも、たしかに慣れてはいるから、助言くらいはできるかもしれない」ロム・フォウはジャン・スタンバックに向きなおった。「しばらく同行させてもらえるかな。きみたちがどういう集まりなのか、あたしは知らないけれど、ＺＯＯの仲間のことはわかっている。みんないい人たちだ」

「こちらこそ、よろしくお願いする」ジャン・スタンバックは一礼した。「──ただ、私は我々の指導者を補ほ佐さする者でしかない。それだけは含ふくみ置き願いたい」

「ああ。あなたがリーダーじゃないんだ。勘違いしていたよ。誰がリーダーなんだい」

「誰って──」マリアローズは周囲を見まわした。

　最初にハギピヨの大声で吹ふっ飛ばされた馬鹿陛下は、まだ遠くでひっくり返っていた。

「……紹介しづらいなあ……」

カラミテイジ三年一巡月十五番日　フレンネの森

　一日ごとに冬が深まる。屋根のある寝ね床どこを持たない人間たちにとって、北の地は厳しい。ロム・フォウとの再会は本当に僥ぎょう倖こうだった。あの時点で引き返していなかったら、大変なことになっていたかもしれない。

　新生太陽王国一行は南下した。目的は変わっていない。他の勢力と合流する。合流が叶かなわなくても、最低限の交こう渉しようを持つ。

　現在のところ、手がかりをつかんでいる有力な勢力は、オークリッドの豹ひようの軍団と、モトローリィのジョーカー軍、ハッツフォーの銀の軍団、ファー・セルジナ東の馬ば賊ぞく、そしてラフレシア西の緋ひの軍団だ。

　銀の軍団とは入れ違いになってしまった。ジョーカー軍には、もしかするとジャン・ジャック・ド・ジョーカーが関係しているかもしれないが、酷こつ寒かんの冬が雪深いモトローリィへの道を閉ざしている。馬賊は騎馬の部隊だと想像されるから、おそらく絶えず移動しているだろう。豹の軍団のオークリッドまでは三千五百キルメーテルもある。帝国軍の残党とおぼしき緋の軍団がいるというラフレシア西部は、それよりも遠い。

　乏とぼしい材料をもとに、マリアローズたちは検討に検討を重ねた。半年近くかけてオークリッドまで行ってみるか。銀の軍団を探すのか。馬賊との接触を試みるか。ロム・フォウ曰いわく、モトローリィの雪解けは三巡じゆん月げつだというし、春でも野宿するにはそうとうな準備が必要で、初夏になっても朝晩はかなり冷えこむらしい。気候が厳しいうえ、地形的にも山がちで天然の要害だ。そんな土地なので、悪あく魔まの侵攻が意外と進んでいないということも考えられる。ひょっとしたら、ジョーカー軍はそのあたりを利用してモトローリィに根を張っているのかもしれない。だとしたら、かなり期待を持てるし、名称からしても、あのジョーカーが中心人物として関係しているという仮説に信しん憑ぴよう性せいが出てくる。ジョーカーがいるとしたら、他のＺＯＯの仲間もいるかもしれない。少なくとも、クローディアは一緒だろう。

　問題は冬だ。冬を越せない。だから、とりあえずは南下するしかないのだ。かといって、オークリッドは遠い。結局、折せつ衷ちゆう案をとるしかなかった。南に向かいつつ、銀の軍団を探す。あた

たかくなったら北上して、モトローリィへと向かうのだ。

「……でも、なんか、悪魔が多くなってきたような気が」マリアローズは豚ぶた野や郎ろうの死体を捌さばく手を止めて、腕で髪をかきあげた。だいぶのびて邪じや魔まだけれど、切る暇ひまがない。いや、髪を切るくらいの時間はその気になれば作れる。気持ちに余よ裕ゆうがないのだ。「……気のせいならいいんだけどね。だけど、連中の動きがさ。西から東──サンランドのほうから東に向かってるんじゃなくて、西のほうからこっちに戻もどってきてない……？」

「たしかに、こいつらも移動中の小部隊っちゅう感じやったなあ」カタリは人馬野郎の生皮をゾリゾリと剥はいでいる。手て強ごわい悪魔だし、皮が分厚いが、なかなか肉質がよくて食用に適していることが最近、判明した。「──せやな。考えてみたら、このごろは多いで。おかげで、わしらとしては食うのんに困らんけども」

「ふむふむふむーッ。みんなご苦労ッ！　ご苦労ッ！」馬鹿陛下は解体作業中の兵士たちを見回って声をかけている。どうも近ごろ自分の手を汚よごさないことを覚えてきているようだ。いいのか悪いのか。微び妙みようなところだ。「ご苦労ご苦労ご苦労ッ！　ムハハハッ！」

「……どっちにしても、うざいことには変わらないんだよね」

「おい、マリアローズ」ジン・ウォッカーが近づいてきて、何か黒っぽい、血に塗まみれたものを差しだしてきた。「おまえ、顔色がよくないで。これでも食って元気出したらええ」

「……な、何それ」

「山や羊ぎ助のレバーや」

「いらないよっ」

「なんでやねん！　とれたれほやほやの今しか、生では食われへんのやで！」

「内臓、生でとかありえないし！　火を通さなきゃやばいだろ⁉
何、もしかしてきみ、いっつもそうやって生で食べてるわけ⁉
はっきり言って、あぶないよ⁉」

「お、俺のこと、心配してくれよるんかい……おまえ、まさか……」

「はあ!?　まさかって何!?　もしかして馬鹿なの!?　や、知ってたけど！」

「レバーか」ロム・フォウがゆったりとした足どりで歩いてきた。

　ロム・フォウは悪魔の解体には参加しないし、悪魔の肉を食べることもない。代わりに一人で動物を狩って保存食を作り、それを食べて、余ったぶんは皆みなに配る。べつに悪魔食を否定しているわけではなくて、今のところ、悪魔を食べる理由が見つからないのだという。それが彼女のやり方で、集団に加わっても自分の主義を曲げることは絶対にない。

「香こう辛しん料りようをまぶして塩を振ると、生でもおいしいね。あたしもたまにやるよ。精がつく」

「ほらあああああ！」ウォッカーが勝ち誇ほこったように叫んだ。「ほらほらああああ！　見てみい！　ロム・フォウさんもこうおっしゃっとるやろが！　ほらほらほらああああああ！」

　マリアローズは顔をしかめた。「……あーうっさい」

「ねえ、マリア」ロム・フォウはマリアローズの肩にそっとふれた。「ちょっときてくれないかな、おもしろいものが見られるよ」

「え？　おもしろいものって……？」

　作業を途中で放りだすのは気が引けたが、周りの連中が行ってもいいと言ってくれたので、ロム・フォウについてゆくことにした。

　新生太陽王国一行はシングルーンとファー・セルジナの境目あたり、フレンネの森の中で悪魔の小部隊と遭そう遇ぐう、これを撃げき滅めつして食しよく糧りよう化している最中だった。ロム・フォウはきゅーとアルファを伴ともなってあたりを見回っていたようだ。案内された先は小高い丘おかの上で、きゅーとアルファはそこでロム・フォウとマリアローズを待っていたらしい。こっちを向いて、アルファは小さく吠ほえ、きゅーは手招きした。「くう、きゅう！」

　その丘からは、旧ファー・セルジナ領チャイカの野を見渡すこと

ができた。

　チャイカの野は広大だ。中部ミツド諸国域ランズ随ずいーいちの大国だったファー・セルジナ王国の領土のうち、約六分の一をチャイカの野が占しめていたともいう。なだらかに起き伏ふくする冬ふゆ枯がれした平原が地平線の彼方かなたまでつづいていて、実に雄ゆう大だいな眺ながめだ。

「……あ。遠くで何か動いてる……？」マリアローズは目を凝こらした。ダメか。あまりにも遠すぎて、無数の点が蠢うごめいているようにしか見えない。背負い袋ぶくろから望遠鏡をとりだして、目にあてた。これでもよくわからない。「……何だろ。悪魔なのかな。けど、ごちゃっとしてるような……行進してるって感じはしないよね」

「戦っているんだ」ロム・フォウは少し目を細めているだけだ。弓矢の名手はたいていものすごく目がいい。当然、ロム・フォウもそうだ。「片方は騎馬の部隊だね。人間だと思う。もう片方はおそらく悪魔だろう」

「騎馬……!?」マリアローズは無む駄だを承知で望遠鏡をのぞいた。「……てことは、もしかして、あれが馬賊……？」

「そうかもしれないね。そうじゃないかもしれない。今の段階では、はっきりしたことは言えない」

「接触しないと！」

「問題がある。遠いんだ。ここからだと、五キルメーテルは離れている。相手は馬に乗っているからね。行ったときにはもういないかもしれない。みんなをぬか喜びさせるのもどうかと思ったから、とりあえずマリアにだけ話したんだ」

「……そっか。でも、せっかくのチャンスなのに……狼煙のろしをあげるとか──ダメか。悪魔にも場所を知られちゃう。ちょっとでも馬賊が用心深かったら、そんなところに近づいてくるわけがないし。やっぱり、行くしか」

「それなら、あたしたちだけで行こう。いざとなったら、あたしはどうとでもできる。マリアはきゅーとアルファが守ってくれると思うよ」

「決めた！　行こう！」言うなり丘を駆かけおりようとしたら転びそうになって、さっそくきゅーに助けられてしまった。きゅーはマリアローズを抱かかえあげて、自分の背中へと持ってゆこうとする。おぶされ、と言っているようだ。「──ありがと！　お願い！」

「うおん！　おんっ！」アルファが先頭に立って、ロム・フォウときゅーに背負われているマリアローズが併へい走そうする形になった。アルファは目的を理解しているのだろうか。愚ぐ問もんかもしれない。本当に賢かしこい狼なのだ。一部の人間よりも遥はるかに知性的だと思う。たとえば、カタリとかウォッカーとか、そのあたりよりはずっと。

「──間に合わないかもしれない」ロム・フォウが前方を見すえたまま言って速度を上げた。きゅーも足を速める。アルファはちらりと振り返ってから、ロム・フォウやきゅー以上に加速した。

「きゅー！」マリアローズはきゅーの首に両腕を回して力をこめた。「──手も使っていいから！　そのほうが速いでしょ!?」

「くう……！」

　四つ足で走ると、きゅーはとてつもなく速い。あっという間にアルファを追い越した。

　アルファが怒おこって吠えている。

　マリアローズはロム・フォウを見た。「──僕だけでも、なんとか……！」

「わかった、急いで……！」

「まあ、僕はしがみついてるだけなんだけど──きゅー！　がんばれ！」

　マリアローズはできるだけ身体からだをきゅーにくっつけた。少しでもきゅーの動きを邪魔しないように。きゅーは駆ける。純白の毛が金色に輝かがやきだした。すごい振動だ。速い。怖いくらいの速さだ。目を開けているのが恐ろしい。でも開けていないと見えない。前なんか、とても。マリアローズは破れかぶれで叫んだ。「──おーい……！」

　何を言えばいいのかわからない。とにかく声を出しつづけた。こ

こに人間がいる。どうか気づいてほしい。頼むから。お願いだから。「──おーい、こっち！　こっちだよ！　こっち！　おーい！　おーい！　気づいて！　行かないで！　おーい……！」

　その甲か斐いもなく、行方ゆくえには土つち煙けむりがあがっている。きゅーは悪魔の死体を跳とび越えて走った。ここで戦いがあったのだ。悪魔の部隊は敗れたらしい。勝った騎馬の部隊は東へ去ろうとしているようだ。そんな。嘘でしょ。やめてよ。「──待って……！」

　声が届いたのだろうか。

　きゅーが足をゆるめて、やがて止まった。

　騎馬の部隊は三百メーテルほど前方で停止していた。一騎だけこっちに戻ってくる。

　マリアローズはきゅーの背中から下りた。クルルが外がい套とうの中から出てきて肩につかまる。

　馬上の男は黒っぽい服を何枚も重ね着しているようだが、ひょろ長いという印象を受けた。頭にはやはり黒っぽいスカーフを巻いていて、顔も目の部分をのぞいてほとんど隠している。防寒対策だろう。

　男は手た綱づなを引き、馬に横を向かせて止めた。

「お前の声が聞こえた」

　男は黒い色眼鏡サングラスをかけていた。

「空耳だと思った」

「きみが……馬賊の頭目？」

「馬賊？」男は色眼鏡サングラスの位置を直して、唇をかすかに笑わせた。「──馬賊マーゼイか。そんなふうに名乗ったことはないが、たしかに馬賊といえば馬賊だ」

「荊王ジンワン」気がつくと男の名を呼んでいた。こんな男でも、もう一度会って名を呼べたことが素す直なおに嬉うれしい──なんて、言えるわけないけど。「生きてたんだ」

「ああ——」荊王はしばらく言葉を探すように黙だまってから言った。「これが夢じゃなければ、俺はまだ生きている」



一巡月十九番日　チャイカの野

　馬賊の正体は龍りゅう州しゅう連合だった。といっても、母体が龍州連合だというだけで、実態は寄せ集めのようだ。ただし、馬に乗れる者しか加わることができない。現在の龍州連合の武器は機動力だ。馬を休ませるとき以外は騎き乗じようしていることが求められる。だからといって、馬に乗れない者を見捨てるわけではない。そういう場合は別の集団に引きあわせてやるのだという。龍州連合はその機動力をいかして、複数の勢力と連絡をとりあい、ときに連れん携けいして動くこともあるらしい。

　頭目は荊王ジンワンではない。彼は副頭目として別働隊を率い、他勢力との連絡を受け持ちながら必要に応じて戦闘、略りやく奪だつを行っている。

　頭目が統率している本隊は、中部ミツド諸国域ランズを思うさまに荒あらしまわって、その神出鬼き没ぼつぶりから悪あく魔まどもにも大いに恐れられているのだとか。

　その頭目とやらが、副頭目の報しらせを受けて、疾しつ風ぷうのように駆けつけてきた。

「うおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉユリィィィィィィィィィィ……ッ！　くッそ畜ちく生しようめッちゃくちゃ会いたかった会いたかった会いたかったっつーの……！」

　頭目は馬から飛び降りるなりユリカに抱だきついて、人目も憚はばからずにほっぺたとかおでことか瞼まぶたとか顎あごとか、あと──唇にも口づけしまくった。ただ唇を押しつけてちゅっちゅするだけのキスではあったが、これはもう──とてもじゃないけれど、見ていられない。

「あ、あのさ、飛燕フエイヤン……そういうのは、なんていうか、あとにしてくれない？　まあ、他ほかの人たちもいるわけだし？　みんな見てるし？　見たいわけじゃないんだけど、やっぱり見ちゃうでしょ？　見たくなくても。そのへん考えてもらえると……」

「い・や・だッ！」飛燕はユリカをお姫ひめ様さまだっこして、ぐるぐる回りはじめた。

「──ちょ、ちょっと飛燕、何しゅるの、や、やめっ──」

「やだやだやだッ！　オレァずーっとずゥーっと我が慢まんしてたんだからよォ！　こんくらいいいだろ!?　いいに決まってんだろ!?　ちゅっちゅっちゅっちゅっちゅちゅちゅちゅ」

「やんっ、飛燕、そんな──」

「やほーいッ！　ユリィだッ！　ユリィ！　ユリィ！　ユリィ……！　嘘じゃァねェーよな!?　ホントだよな!?　やべえッ！　ユリィ！　毎日夢に見てたけどよォ！　実物はぜんぜん違ちげェーよッ！　かわいすぎだって！　美しいって！　愛いとしいって！　うはーッ、すげえッ！　オレこんなに好きなンかよユリィのコト！　わかってたけどすげェーッ！　愛してるぜユリィーッ……！」

「うむッ、うむッ……」馬鹿陛下は涙ぐんで感動しているみたいだけれど、正直、唖あ然ぜんとしている者とドン引きしている者が大半だ。

　そんなこんなで飛燕が落ちつきを取り戻もどすまでに要した時間が、実に三十分以上。それから新生太陽王国首脳部と龍州連合の頭目、副頭目が焚たき火を囲んで会談する運びになったのだが、そのときになっても飛燕はユリカを自分の隣となりに座らせ、がっちりと手を握にぎって離そうとしなかった。まあ、もう好きにしてって感じだけどね。ユリカも、恥はずかしそうではあるけど、まんざらでもなさそうだしさ……。

「──つゥーワケでッ、だッ！」飛燕は満面に笑えみをたたえて一同を見まわした。「まずはアレだよな。再会組はめでたしめでたしっつゥーか、そんなカンジだよな！　生きててアンガトー的な！」

「せやなあ！」カタリは立ちあがって拳こぶしを振りあげた。「せや、せやっ！　ホンッマにそのとおりやで！　ちょっとずつやけども、だんだんこうやってな……！」

「うむッ、うむッ！　これも私の人徳のタマモノだなッ！　──なァーんちゃってッ！　ドワッハッハッハッハッ……！　むッ……？　誰も笑っておらんとはッ……？」

「喜びを分かちあうのはいつでもできる」ジャン・スタンバックは口くち髭ひげをつまんで鋭い眼まな差ざしを飛燕と荊王に投げかけた。「まずは今後について話しあわせていただきたい」

「いィーけどよォ。テメェーなんで口髭とかつけてンの？　それギャグ？」

「……飛燕」ユリカが飛燕の脇わき腹ばらを肘ひじで押した。ジャン・スタンバックの口髭については、なんとなく触ふれてはいけない禁忌タブーのような扱あつかいになっている。そんなことは知るよしもないし、たとえ知っていても気にしないだろう飛燕は
「へ？　何ユリィ？」とか言いながら目をパチクリさせるだけだ。でも、見物ではある。ジャン・スタンバックはいったいどんなふうに反応するのか。

「すでに副頭目どのから、そちらが把は握あくしている情報についてはうかがったが──」

　結果は、完かん璧ぺきな無視、だった。

「我々としては、もともと他勢力との合流を目指していた。龍州連合が連携をとっている勢力は、中部ミツド諸国域ランズで活動している秩序の番人モラルキーパーズ、鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイ、昏紡子フンヘージ、東方山さん賊ぞく会とのことだが、豹ひようの軍団と呼ばれるオークリッドの勢力や、モトローリィのジョーカー軍とは一いつ切さい連絡をとっていないということでよろしいか」

「モトローリィ？　何、北のほォ？　へェー。そっちに誰かいンの？　ジン知ってた？」

「いや。モトローリィは山さん岳がくと凍とう土どの国らしいからな。意識が向かなかった」

「だよなァ。えェーと、あとは……豹ォ？　オークリッドねェ。そのへんはアレだな。もしかしたらファルコーネのオッサンのほォーがくわしィーかもなァ」

「鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイ……あのオッサンも生きとったんかい。まあ、ちょっとやそっとでくたばるようなタマやないけども。しっかし、しぶといやッつやで！」

「ヤツらァ、ケッコー南のほォーにいっからよォ。侵入者クラッカー系のクランの生き残りが中心だよな。数はそンなでもねェ。せェーぜェー百人ってトコか。ケド、デッケェー馬車とか何台も

持っててよォ。なかなかいい暮らししてンぜ？　あ、待てよ、でも──」飛燕は眉まゆをひそめて頭を掻かいた。「なんッかアレだなァ。こないだ南のほォー荒らしに行ったトキ、オークリッドの樹海が燃えたとかナンとか、聞ィーたよォーな。まッ、関係あるかどォーか知ンねェーケドよォ」

「オークリッドの樹海っていうと、たぶんヨナ樹海だよね。うーん……」

「ひょっとすると、関係あるかもしれない」ジャン・スタンバックは口髭をいじりながら、もう必要ないのに持ち歩いている杖つえの先で地面に何かを描かいた。「──豹の軍団の正体は不明だが、かつてオークリッドには〝戦場の女め豹ひよう〟と呼ばれる姫君がいた」

「わァーおッ、セクスィーな響ひびきだねえッ。──女豹……ッ！」馬鹿陛下が豹のつもりらしい変なポーズをとった。

「彼女は軍事の天才だったらしい」

　当然、スルーされた。

「しかし、そのせいで首長らに疎うとまれ、罠わなに嵌はめられて、帝国軍に捕ほ縛ばくされた。彼女は大変人気があったから、国民は捕ほ虜りよ交こう換かんか身みの代しろ金きんを支払って彼女を取り戻すことを願ったが、首長はそれを望まなかった。結局、彼女は独力で脱出して、のちに各国の反政府勢力を支援する〝女豹〟となったのだ」

「女豹……それやったら、わしも聞いたことあるで。せやけど、もう何十年も前に表おもて舞ぶ台たいから消えてもうたはずやろ。生きとったとしても、とんでもない高齢や。百超こえてんのとちゃうか」

「私は彼女を知っている」

「「「「「えっ……」」」」」

「もしかすると、私以外にも彼女と面識がある者がいるかもしれない。エルデンの第三区にn'ebulaという定食屋があった。あの店をやっていた老女こそが、女豹だ」

「……僕、会ったことある。オトミさんだよね。え……でも、百歳超えてるとか、そんな年には見えなかったよ？　まあせいぜい、七十とかそれくらいの……」

「一種の怪人なのだろう。彼女は帝国軍のオークリッド侵攻前に突然、姿を消した。オークリッド軍を支援するために帰国したのではないかと私は踏んでいる」

「ちゅうことは、豹の軍団は──そのバアサンの……」

「彼女が直接、関かかわっているのかどうかはわからない。オークリッドは帝国軍に屈くつした。彼女は敗れたのだ。だが、豹の軍団が女豹をシンボルとしているという推測は成り立つ。オークリッドには対帝国軍用のシノビと呼ばれる特とく殊しゅ部隊があって、その創設者は彼女だ。シノビの戦術はヨナ樹海の地形を利用して奇襲、夜襲をかけ、混乱、疲ひ弊へいさせて、撤退に追いこむというものだった。これも彼女が考案した」

「じゃあ……」マリアローズは唇を軽く嚙かんだ。「豹の軍団はシノビと同じように、ヨナ樹海で悪魔たちと戦っていた。そのヨナ樹海が燃えたってことは……」

「焼かれたのかもしれない。豹の軍団は、最低でも逃走を余よ儀ぎなくされただろう。ここから先は私事だが──」ジャン・スタンバックは目を伏ふせた。見れば、杖が小刻みに震ふるえている。「彼女がかの女豹だということを知っていた者は多くない。私も確証を持っていたわけではなかった。だが、彼女は現げん役えきを退いてからも、武器の供きよう与よや交渉の仲立ちといった形で反政府勢力の活動に手を貸し、一定の影響力を持っていた。もちろん彼女は秘ひ匿とくしようとしていたが、いくらかの注意深さがあれば、ただの定食屋の女主人ではないことくらいわかるはずだ。私以外に一人も気づいていなかったとは思えない」

　ジャン・スタンバックは何を言おうとしているのだろう。いぶかしそうにしている者もいる。でも、マリアローズにはわかった。

　昼飯時ランチタイムだ。ジャン・スタンバックは昼飯時ランチタイムのことを話している。

　彼らは向かったはずのテルバド山さん砦さいにいなかった。そのことはジャン・スタンバックにも話した。消息は不明だ。ただ、彼

らを捜さがしに行った頭領マスターも帰ってこない。あいつがそんな簡単に死ぬわけがないし、きっとどこかにいる。あるいは、いた。ヨナ樹海がその場所だった。昼飯時ランチタイムは豹の軍団に参加していた。

　これは想像だ。証拠は何もない。単なる想像だ。見当違いの想像であってほしい。

「よくわッかんねェーケドよォ」飛燕は鼻を鳴らした。「よォーするに豹の軍団ってヤツらのコト考えンのは今ンとこよしといたほォーがいィーってこったろ？　まァオレらの腕うでもそンなに長くはねェー。中部ミツド諸国域ランズで手て一いつ杯ぱいっつゥーカンジだったワケだし、そもそもオークリッドはキビシィーぜ。ただよォ。モトローリィは気になるなァ。なァ、ジン」

「そうだな。中部ミツド諸国域ランズにおける俺たちの戦略は、秩序の番人だけは非ひ戦せん闘とう員を多く抱かかえているからやや事情が違うが、移動しつつ遊ゆう撃げきするのが基本だ。だが、いろいろな条件を考えると、モトローリィでは様相が違うのかもしれない。状況を知っておいても損はしないだろう」

「でも、冬のモトローリィはけっこう大変だよ」ロム・フォウはアルファの背中を撫なでている。「──もっとも、それは悪魔たちにとっても同じかもしれないね」

「そっか」マリアローズはうなずいた。「……そうだよ。僕らはつい、悪魔とか異界生物フリークスをわけのわからない化物みたいに考えがちだけど、そんなことない。食べて、飲んで、眠ねむって、たぶん遊んだりもする。寒いのがつらかったり、暑いときつかったりもするはずだよ。僕らにとって過か酷こくな環かん境きようは、あいつらにとっても過酷なんだ」

「まァー行ってみるだけなら、冬の間にっつゥー手はたしかにアリかもなァー」

「少人数のほうがいいだろう」荊王は色眼鏡サングラスを指で押さえた。「俺か飛燕が精せい鋭えいを連れて北へ向かえばいい」

「あたしが道案内をしようか？　モトローリィには何度か行ったことがあるし、雪山にも慣れているから」

「頼みたいところだが──」荊王はマリアローズのほうに顔を向けた。「いいのか」

「……僕に訊きかれても。まあ、一応、ロム・フォウも新生太陽王国所属ってことになるのかもしれないけど、だとしたら訊く相手って──ファニー・フランク……？」

「ぬぬッ⁉　ついに私の出番がッ⁉　きてしまったのかなッ⁉　そもそもみんなで何の話をしていたのかなッ⁉　そのあたりから教えてもらえるとありがたいのだがッ⁉」

「龍州連合だけに任せるわけにはいかない」ジャン・スタンバックは口髭の端はしを指先でひねった。「モトローリィ行きには我々も参加するべきかと。よろしいか、陛下」

「うむッ！　よくわからんがッ、軍師どののよきにはからってくれたまえッ！」

「……ダイジョブかよ新生太陽王国。つゥーか名前長ッ。ユリィ、よくこォーンなトコでがんばってたなァ。ごめんなァ。さっさと見つけてやれなくてよォ」

「いいの。いちゅか必じゅ会えると思ってたから。実際、こうして会えたじゃない」

「ヒーッ。やめてくれェー。そォーんなカーイイ顔されたらもっと惚ほれちまうってェー」

「え……これ以上？　わたしのこと、もっとしゅきになってくれるの……？」

「……ちょっともう、ユリカまでなんかアレすぎるんだけど。いいけどさ……」

「妙ぉーになあ……こういうの見せつけられると、変に凹へこんでまうよなあ……気持ちはわかるし、ええんやけども……」

「ねー……」ひとしきりカタリと慰なぐさめあってから、マリアローズは頭を振ふって気を引き締しめた。「──よし。じゃ、僕も行くよ。モトローリィ。気になるし。それに、思いだしたんだけど、ハニーはモトローリィにいたことがあるんだよね。だから何だって言われると困るんだけどさ」

「私も──」ジャン・スタンバックは馬鹿陛下を冷たくーいち瞥べつしてから、わずかに首を横に振った。「いや。私は残ろう。これは私見だが、百名以上の非戦闘員がいる我々は秩序の番人と合流したほうがよいと思う。できれば龍州連合の方かたに案内と仲ちゆう介かいを願いたい」

「ン。それはいィーぜ。問題ねェーよな、ジン？」

「ああ。連中は来る者は拒こばまずだ。受けいれを拒きよ絶ぜつすることはないだろう」

「よろしいか、陛下」

「大変よろしいッ！　マルッ！」

「それでは、我々新生太陽王国はモトローリィ探たん索さく隊とそれ以外とに分かれる。龍州連合はモトローリィ探索に最低限の人員をもって臨むようだから、我々も人数を絞しぼるべきだろう。マリアローズ以下数名ということになろうかと思う」

「さもありなんッ！　軍師どのはいつも正しいッ！　グッジョーブッッッッ！」

「秩序の番人に合流することができれば、この新生太陽王国とかいうふざけたお遊びもようやく幕引きということになる。それまでの辛しん抱ぼうだ」

「まったくもってッ！　いやはや、さすがは軍師どのッ！　ヌハハハ──ぬゥ……？」

「……そ、そおかぁー……秩序の番人に……むううぅぅぅぅぅん……」カタリは腕組みをして考えこんでいる。マリアローズはその肩を叩たたいてやった。「きみは合流組でいいんじゃない？　だって、寒いの苦手でしょ。水が凍こおるようなとこは、きみには無理だよ」

「せやなあ。氷の中では泳がれへんしなあ──って、魚類やないがな、ダァホッ！　だ、大丈夫や！　そらアーニャちゃんには会いたいけども、わしは漢おとこなわけやし……」

「もうそういう具合にずーっとうだうだされるのが目に見えてるから言ってるんだけど」

「わたしは行くわ。医い術じゆちゆ士しは必ひちゆ要ようでしょう」

「ンじゃあァ、モトローリィにはオレが行くぜ。ジン、留守は頼まァ」

　荊王は小さくため息をついた。「わかった」

「えーっと、てことは、うちからは──」マリアローズは指折り数えた。「僕、ユリカ、ロム・フォウ……アルファは一緒だよね。きゅーは？　どうする？」

「くう！」

「行ってくれるんだ。すっごく心強いよ。カタリはいらない。てゆうか邪じや魔ま」

「そこまでゆうことないやろ！　もうええわ！　絶対行ってやらんからな！　べーっ！」

「──で、五人かな？」

「六人や」ジン・ウォッカーが手をあげた。「俺も行くで。ええやろ」

「えー……あんまりよくなーい……」

「はあ？　なんでやねん」

「てゆうか、きみ、中隊長でしょ。どうするんだよ。中隊」

「せやったら、辞めたるわ。中隊長。これで問題解決やろ。どや」

「どや、じゃないよ……」

　荊王がフッと笑って焚たき火に枯かれ木をくべた。「相変わらずだな」

「……どういう意味だよ、それ」

「さあな」

　ふくみがありそうな口ぶりだ。なんかむかつく。マリアローズは

両膝を抱えこんで、それから北のほうに目をやった。「……モトローリィ、か」

二巡月十二番日　ザザラーン高原

　凍いてついた路面を馬ば蹄ていが蹴けりつける。百メーテルどころか五十メーテル先も見えない。猛もう吹雪ふぶきだ。吹きさらしの高原に降る雪はほとんど積もることがない。風が強すぎるのだ。おかげで馬を進ませることができるのだが、寒い。重ね着をした上に毛皮のコートを身につけていても、頭がおかしくなってしまいそうなほど寒い。寒いっていうか顔が痛いとか騒さわいでいられたころが懐なつかしい。口を開くと、寒い、しか出てこないので黙だまっている。だいたい口を開くことができるのかどうか疑問だ。凍ってるんじゃないかな。口だけじゃない。全身が凍てついて、氷と化している。そんな感じがしてしょうがない。これは無理だ。徒歩では絶対、無理。きっと一歩も動けない。こんな吹雪の中でうずくまっていたら、あっという間に凍とう死しするだろう。馬はすごい。偉えらい。偉すぎる。でも、普ふ通つうの馬では立ち往生して潰つぶれてしまうだろうとか、誰かが言っていた。誰か。誰だっけ。気が遠くなる。いけない。そうだ。龍州連合の崑崙クンルンだ。崑崙はすごく馬の扱あつかいがうまくて、馬に乗って無限凍土や不毛地帯にも行ったことがあるらしい。よくわからないけれど、そういう人があまり足を踏み入れない場所に分け入って貴重な資源や珍ちん品ぴんを見つけだすことを生業なりわいにしている探検家とか冒険家と呼ばれる連中がいるみたいで、崑崙はそいつらにくっついて各地を旅していたのだという。その崑崙が選えりすぐった馬が二十四頭。ただの馬じゃない。ファー・セルジナ産のユスラン種という馬がいる。最良の軍馬を目指して改良に改良を重ねて生みだされ、名だたるファー・セルジナ軍の鉄騎兵団を支えつづけてきた、体高一・七～一・八メーテル、ときには二メーテル以上に達し、体重は千キルグラハムを超こえるという巨馬だ。龍州連合が乗馬にしているのがまさにそのユスラン種かその混血馬で、決して駿しゆん足そくとは言いがたいが、とにかく疲れを知らず、二人、三人が乗ってもびくともしない。暑さにも寒さにもよく耐たえるし、馬なのに腹が減れば昆こん虫ちゆうや肉まで平気で食べる。その中でも毛が長くて忍にん耐たい強く、性格のいい馬ばかりを揃そろえた。人間のほうは、龍州連合頭目の飛燕フエイヤンを隊長、それか

らマリアローズを副隊長（なんで……）として、総勢十名（きゅーをふくむ。人間じゃないけど）、それから一頭（アルファ。もちろん、人間じゃない）。マリアローズもなんとか一人で馬に乗れるようになってきたが、今はロム・フォウに手た綱づなを握にぎってもらって、彼女の背中にしがみついている。あとはユリカが飛燕と二人乗りしているはずだ。吹雪のせいで見えないけど。ああ、でも、だから、マリアローズは楽をさせてもらっているのだ。自分で馬を操あやつる必要がない。ロム・フォウにくっついている。寒いとか、つらいとか、きついとか、やばいなんか眠いとか思っている場合じゃない。きゅーはどうしているだろう。アルファは当然そうだが、きゅーも馬には乗らない。自分の足で歩いて、走る。寒くないのかな。もふもふした毛があるから平気かな。きゅーの毛にさわりたい。うずもれたい。こんなに寒いなんて。ちょっと想像を絶している。ちょっとじゃない。かなりだ。想像なんてできるわけないし。こんなの経験してみなきゃわからないって。それにしても眠い。寒くて苦しいのに眠くてたまらない。ダメだ。眠るのはまずい。たしか崑崙が言っていた。凍死する前はだいたい眠ってしまうんだって。身体からだを動かしてみる。正確には動かそうとする。ちゃんと動いてくれない。考えろ。何でもいい。考えて眠気を覚まさないと。崑崙って何歳なんだろ。名前は龍州風で、東方系といえば東方系の顔立ちだし、髪の毛は黒いけれど、瞳ひとみは緑色で、複雑な血筋を感じさせる。四十歳には見えない。けれど、三十歳でも二は十た歳ちでも通用しそうだ。もともと龍州連合の食客だったらしいが、探検家に随ずい伴はんして世界中を旅していた過去も、馬に詳くわしいことも、誰も知らなかったようだ。こんなことになって、初めてその経験と才能が龍州連合を助けることになった。龍州連合には他ほかにもそういう人材がたくさんいて、飛燕が今回の北行隊の隊員として選せん抜ばつした者──崑崙クンルン、魏洪ウエイホン、震了ジエンレ、チョイ・ホーの四人は全員そのたぐいらしい。もしかすると、悪あく魔まら異界生物フリークスが地上を席せつ巻けんするという異常事態が起こらなければ、彼らが頭角を現すことはなかったかもしれないのだ。まったくさ。人の才能って不思議だよね。うん、うん、とうなずいているつもりなのだが、頭が上下しているような気がしない。寒いよ。ほんと寒い。馬鹿じゃないの。こんなに寒いなんて。いかれてるよ。いつ終わるんだよ。この吹雪。終わってよ。頼むから。クルル。生きてるのかな。服の中にいるとは思うんだけど。ぜんぜん動いてないっぽい。やばくない？　どうなんだろ。確認する気になれない。置いてくればよかった。でも離れようとしないから。てゆうか誰だよ。こんな季節にモトローリィ行こうとか言いだしたの。散歩じゃないんだから。三歩

進んではいおしまいって具合にはいかないんだから。ここまでき
ちゃったら帰るわけにもいかないし。行くも地じ獄ごく戻るも地
獄って、まあ、その地獄から悪魔が大挙して押しよせてきちゃって
るわけだけど、無理だって。悪魔だってこんな場所にはこないっ
て。くるわけないって。だって寒いもん。おかしいもん。こんなに
寒いなんて。なんか同じこと何回も何回も何回も何回も考えてるよ
うな気がするけど、しょうがないでしょ。実際、寒いんだから。
あーカタリむかつく。今ごろアーニャ・クルチバと再会していちゃ
いちゃしたりしてるんだろうなあ。ふざけるな。マジでふざける
な。この怒いかりのパワーが熱に変わって身体をあたためてくれな
いだろうか。くれませんか。ダメですか。そうですか。やめてよも
う。いいかげんにしてよ。寒いよ。寒いんだよ。誰か抱だきしめ
て。嘘。嘘です。いいです。出てくるな。なんであいつの顔なん
て。きもい。ほんっとにきもい。誰がきもいって、もう自分がきも
い。眠い。眠いよ。寝ちゃダメだ。どうしよ。どうしようもない。
我が慢まんするしか。寒いと思うからダメなんだ。寒くない寒くな
い寒くないちっとも寒くない寒くない寒くない。いや、寒いから。
てゆうか、寒くなくなったら終わりだよね。たぶん。だから、いい
んだ。寒くていい。よくないって。いいわけないって。

　かつてモトローリィに〝残忍公ザ・クリユーエル〟と呼ばれる男
がいた。男は時の王を傀かい儡らいにして専横を極め、残ざん虐ぎ
やくなまでの圧政を敷しいて遠えん征せいを繰くり返し、版図を拡
大させた。

　アザエル・ノーウェンダルク。

　失しつ脚きやくして逃のがれた先のエルデンでも十年近くに及お
よぶ血の時代ブラッデイ・エイジを現出させた暴君は、だが、北方
に石いし畳だたみの街道を張りめぐらせるという功績も残した。猛
吹雪の中、北行隊が馬を進めているこのザザラーン高原の街道も、
ノーウェンダルクが整備させたものだ。風が強すぎるため、いくら
雪が降ってもさして積もらないから、街道が積雪のせいで消えてし
まうことがない。それでこの地に街道を作らせたのかもしれない
が、この気象条件で人間が行き来するのは不可能に近いのではない
か。でも実際、何のかの言って北行隊は一日あたり四十～五十キル
メーテルの距きよ離りを稼かせいでいる。旧トレイン公国領を突
つっ切るまでは一日百キルメーテル以上進むこともあったから、そ
の半分以下に落ちているとはいえ、とてつもないペースだ。人間っ
てすごい。というか、馬たちがすごい。あと、アルファときゅーも

すごい。マリアローズは━ダメだ。ダメすぎる。ダメダメだ。

「大丈夫だよ！」まるでダメなマリアローズの心を読んだかのように、ロム・フォウが叫んだ。「人間はこれくらいで死にはしない！　風も雪もいつかやむ！　ただそれまで息をしていればいいんだ！　簡単なことだよ！」

　そんなことを言われても、それが簡単なことだとはどうしても思えない。思えないのに、どういうわけかロム・フォウの声と言葉はマリアローズの気持ちを軽くしてくれた。

　なんか、この人、好きだなあ。

　同じＺＯＯなのに、こんなにも長い間、一緒にいるのは初めてかもしれない。一緒にいればいるほど好きになる。ロム・フォウはどんなときもロム・フォウなのだ。アルファと抱だきあって眠っているときなどは、とても愛らしい寝ね顔がおを見せたりもするけれど、ああ、こんなところもあるんだ、とはあまり思わない。繕つくろっているところがないからだろう。自然体という表現がここまで似合う人を、マリアローズは他に知らない。そりゃアルファにも惚ほれられるわけだよね。

「おっしゃーッ！　ミンナ気合い入れろォッ！　がんばンベーよッ……！」飛燕が掛かけ声をかけた。すぐにユリカが「おーっ！」とかわいい声で応こたえて、他の者たちもつづく。マリアローズも吹雪よ消し飛べとばかりに声を張りあげた。「━おぉーっ……！」

　……そんなことを何度繰り返したか知れない。

　ようやく雪の降り方が弱まったのは、それから二日後だった。風は強いままだ。身体にこびりつく雪をはたき落とす手間は省けるが、寒さはたいして変わらない。それでも、恐ろしい速度で移動する雲の合間からときおり太陽が顔をのぞかせると、生き返るような心ここ地ちがした。

　自然と空を仰あおぐ回数が増えて、顔を上げるようになると不思議と力がわいてくる。

　久々にクルルが襟えり元もとから顔を出した。よかった。生きてたんだ。

　行けそうだ、という気がしてきた。好こう事じ魔ま多しとはよく

言ったものだ。

　空を見上げていたロム・フォウの身体がこわばるのを感じた。

「どうしたの……？」尋たずねながら、マリアローズは片時も止まることのない灰色の雲を見つめた。目を凝こらしても雲は雲でしかない。

　ロム・フォウが手綱を引き締しめた。

　馬が立ち止まる。少し前を歩いていたアルファも足を止めて振り返った。

　ロム・フォウは毛皮のコートのフードをはねあげた。「──何かいる。鳥じゃない。もっと大きなものだ」

「鳥……じゃなくて？　大きなって──あっ……！」マリアローズは目を瞠みはった。

　一瞬だが、見えた。そいつは雲の中にいる。当然、飛んでいるのだろう。黒い影のようなものだ。たしかにあれは鳥じゃない。鳥にしては大きすぎる。

「何だ!?　何があったッ……!?」飛燕が馬を止めて叫んだ。他の者たちもばらばらと馬を立ち止まらせる。ロム・フォウとマリアローズが乗っている馬──剣ケン山ザン号のすぐ後ろにいたきゅーが、振り仰いで飛び跳はねながら「くう！　くう！　きゅうーっ！」とわめいた。マリアローズたちに何か言おうとしている。危険を察知して、教えてくれようとしているのだ。マリアローズはロム・フォウにしがみついた。「──どうしよう!?」

「わからない！　とりあえず、走ろう！」ロム・フォウは手綱をゆるめた。「──行け、剣山……！」

　ただちに剣山が駆かけだす。マリアローズは前方の飛燕に向かって叫んだ。「空に何かいる！　正体は不明！　確認しつつ前進しよう……！」

「了解ッ……！　ハイヤッ！」飛燕も馬を走らせた。剣山もかなり馬体が大きくて頑がん丈じような葦あし毛げの馬だが、飛燕の愛馬、壱イツ突トツ号はひときわ立派な体格をした黒馬だ。そうとうな暴れ馬だったらしくて、プライドが高く、飛燕と崑崙、それから

飛燕の後ろではなく前に乗っているユリカ以外は近づくことも許さない。馬たちの中でもリーダー格で、飛燕が命じて壱突号が駆ければ、とくにそれぞれの乗り手が指示を出さないかぎり、他の馬たちはこれに従う。人間が乗っていない馬たちも、勝手に壱突号についてきてくれるのだ。

「何なんじゃ、ありゃあ……!?」ジン・ウォッカーの声を聞いたのは久しぶりだ。寒いのは本当に苦手のようで、ここしばらくはいつ見ても死にそうな顔をしていた。だったら北行隊に志願なんかしなければよかったのに、馬鹿な男だ。

「──って、ばっ……」ばって何だろう。わからない。マリアローズは自分が何を言おうとしていたのかも忘れてしまった。雲だ。

　雲の中からそれは出てきた。降下してきたということになるだろう。たしかに、どう見ても鳥じゃない。羽はある。でも長い。胴どう体たいが。そして首が。尻尾しつぽもある。四し肢しは細い。色はよくわからない。黒く見えるが、空にいるからかもしれない。大きさはどうだろう。対象物がないし、かなり大きい、としか言えない。あれは何だと訊きかれたら、どう答えるべきか。一つだけ思いついたものがある。「──竜……!?」

「ウヒャヒャヒャ！　マァージかッ！」飛燕はなぜか喜んでいる。「よりにもよって竜のお出ましかよォッ！　すげェーなヲイッ！　つゥーかアレ、敵なン……!?」

「どうかしら……!?」ユリカの声も心なしか弾はずんでいるように聞こえた。きっと飛燕から悪い影響を受けているのだ。なんてことだ。僕らのユリカが。「──でも、降りてくるみたいだわ！」

「たぶん七メーテルはある……！」ロム・フォウが叫んだ。「一頭じゃない！　少なくとも、三頭はいる！」

「三頭ぉっ……!?」マリアローズは空を見まわした。本当だ。最初に見つけた一頭からだいぶ離れたところの雲の中に、それらしい影が二つある。「──さ、三頭！　三頭いるよ、三頭っ……！　やばい……のかな!?　てゆうか、こっちに近づいてきてるし、明らかにやばいよね……!?」

「先手をとろう……！　マリア、あたしが下りたら手た綱づなを……！」

「わ、わかった！」答えた途と端たん、ロム・フォウが剣山から飛び降りた。マリアローズは慌あわてて手をのばす。手綱をつかんだら引っぱる恰かつ好こうになった。剣山は嘶いななきながら竿さお立だちになって急停止する。しがみついて落馬を避さけるだけで精せい一いつ杯ぱいだ。「――くうっ……！」

　ロム・フォウは雪面を転がってすぐに起きあがり、弓を構えた。「当てる！」

　矢を放つ直前、めずらしく自分に言い聞かせるように声を出した。ロム・フォウといえども、あえて必中を期さないといけないほど、難しい標的だったのかもしれない。

　黒い竜らしき生き物が急降下してくる。でかい。七メーテル？　感覚的にはそんなものではきかない。迫せまってくる。竜。竜なのか。何か違う。たとえていえば、何種類かの生き物をごた混ぜにして竜に似た姿に無理やり整えた、とでもいうような。竜ではないが竜のような悪魔がいると、どこかで聞いたことがある。邪じや竜りゆう。こいつがそうなのか。

　ロム・フォウが放った矢は邪竜の赤い右目に突き刺さった。邪竜が空中で身をよじって吼ほえる。ＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ……！　それで邪竜は右側に傾かたむいて、マリアローズたちを直ちよく撃げきするコースからずれた。くる。衝撃。雪ゆき煙けむりがあがった。誰か巻きこまれたか。わからない。見えない。「散れッ……！」という飛燕の声が聞こえた。そうだ。一いつ箇か所しよにかたまっていたら一挙にやられる。マリアローズは手綱を左側に巻きこむように引いた。「――剣山……！」剣山は思ったとおりに動いてくれた。雪原に墜つい落らくした邪竜はＧＹＡＡＡＧＹＡＡＡＡと鳴きながら大暴れしている。こっちの被ひ害がいはまだわからない。それに、邪竜はあと二頭いる。「――わ……！」

　近い。残りの二頭が急速度で降下してくる。どうしよう。どうにもできない。マリアローズは無我夢中で剣山の名を呼びながら走らせる。街道から外れたので、少し雪が深い。走りづらそうだが、剣山はマリアローズのつたない手綱捌さばきに応えてくれている。振り向くと、右前ぜん肢しの鉤かぎ爪づめで一頭の馬をつかまえた邪竜が、脂あぶらっぽい黒こく翼よくを羽ばたかせて上昇しようとしていた。もう一頭は、最初の一頭と一いつ緒しよに雪上で暴れている。誰かやられたのか。それとも馬だけか。馬をつかまえている邪

竜がＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹと鳴き叫んで身体からだをくねらせた。矢か。左目に矢が当たったらしい。ロム・フォウだ。とりあえずロム・フォウは無事なのだ。でも、どこにいるのか。ちらちらと人影らしいものは見える。だけど、誰なのか。邪竜がさかんに雪を巻きあげている。ダメだ。これじゃあ何も。「――見えたって、何もできないけどさ……！」

　マリアローズは完全に無力だが、そうじゃない者もいる。

「ウウウウウウウゥゥゥゥゥオオオオオォォォォォラアアアアアアァァァァァッ……！」

　飛燕だ。一頭の邪竜が頭を下げたところを見計らい、飛燕が躍おどりかかって、蹴けった。邪竜の顔、その横っ面つらに、飛燕が回し蹴りをお見み舞まいした。

　どれだけすさまじい蹴りだったのか。邪竜は雪原に倒れこんだ。その瞬間、長い首や胴どうがぐにゃりと曲がったから、意識が飛ぶほどの威い力りよくだったということだろう。もう呆あきれるしかない。ただ、驚くのはまだ早かった。マリアローズがひたすら逃げまわっている間に、たぶん彼女はしっかりと機をうかがっていたのだ。そして――今。

「覇
はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
……！」

　ユリカは飛燕がぶちのめしたのとは別の邪竜の懐ふところにすっと飛びこんで、極限九手棍をねじりながらまっすぐ突きあげた。極限九手棍が邪竜の下した顎あごから頭頂まで貫つらぬき通す。邪竜は力を失い、崩れるように横よこ倒だおしになった。

　なんとユリカはたった一撃で終わらせてしまったのだ。

　さすが最強伝説の持ち主。余計な手間をかけない。

「ヒューッ、ユリィかっちょえェーッ！」飛燕はさっき一発食らわせた邪竜に飛びかかって踵かかと落としを脳天にドゴンッと一発、それから拳こぶしの連打をズガゴゴ浴びせた。邪竜は間もなく動かなくなった。「――チェッ！　期待させやがって、見かけ倒しかよッ……！」

　見かけ倒しではないと思うのだが、残る一頭の邪竜も顔中から矢を生やして右往左往していた。前肢や尻尾を振りまわし、やめてくれ、どうかやめてくださいとお願いしているようでもある。ロム・フォウが射た矢で両目を潰つぶされて、何も見えないのだ。

　もはや見境なく暴れることしかできない邪竜に、アルファときゅーが肉にく薄はくする。そうはいっても相手はでかい。大丈夫なのか。見ているこっちとしてはハラハラしたけれど、杞き憂ゆうだった。まずアルファが邪竜の前肢をかいくぐって喉のど笛ぶえに食いつく。咬かみちぎる。アルファが下がると、入れ替かわりにきゅーが突っこんだ。パンチだ。

　きゅーは邪竜の正中線に沿って正確なパンチを連続で叩たたきこんだ。

　邪竜の体勢が崩れた。首が垂れる。きゅーは全身の毛を逆立てて金色に輝かがやかせた。

　今度はパンチじゃない。掌しよう底ていだ。もっと言えば肉球だ。邪竜の額にぶちこんだ。

　そうして破壊した。

　肉球の威力でもって、内部から。

　邪竜は目や鼻や口から紫むらさき色いろの血をあふれさせ、やがて微び動どうだにしなくなった。

「……人間業わざやないな」いつの間にかウォッカーがマリアローズと轡くつわを並べていた。「ユリカはまあ、すごいっちゅうのは知っとったけど、それにしても──ちゅうか、人間やないのもおるわけやけどな……」

「ほんと……」マリアローズは頭を振って、二十メーテルほど離れた場所で空を仰いでいるロム・フォウに向かって馬を進めた。雪はほとんど降っていないが、風は依い然ぜんとして強い。よくもこんな中で矢を的中させられるものだ。「ロム・フォウ、怪け我がは？」

「平気だよ」ロム・フォウはこっちを向いた。「どうやら、とりあえず三頭で終わりみたいだね。竜りゆう蓋がい骨こつがなかったみたいだから、竜じゃない。悪あく魔まなのかな」

「邪竜っていう悪魔がいるって、聞いたことが──」マリアローズは馬から下りて手綱をロム・フォウに渡した。

　あたりを見まわすと、無残な馬の死体が二つ、雪原に哀あわれな血の花を咲さかせている。ウォッカーは無事だし、崑崙、魏洪、震了、チョイ・ホーの姿もあった。皆みな、騎乗している。飛燕が口笛を吹ふいて壱突号を呼びよせると、他の馬たちも集まってきた。飛燕のそばにいるユリカと目があった。ユリカは手を振ってくれた。マリアローズは軽く手を振り返してから、そっとため息をついた。「……損害は、馬が二頭、かな」

「肉を採とろう」崑崙が馬上でナイフを抜ぬいた。「──今までありがとな、影エイ信シン、光コウ越エツ。こいつらのためにも、おれたちが食ってやったほうがいいよ」

　死んだ馬たちを誰よりも愛していた崑崙が言うのだから、反対なんかできなかった。

　解体作業はマリアローズ、飛燕、ウォッカー、崑崙、魏洪、震了、チョイ・ホーの七人と、それからロム・フォウも手伝ってくれた。ユリカは馬が怪我をしていないか見て回り、きゅーは人間たちの仕事をじっと見守っていた。途中でロム・フォウが馬たちの内臓をアルファに与えようとしたが、気高い白はく狼ろうは見向きもしなかった。それは自分の獲え物ものではない、ということか。あるいは、種族は違えど戦友だという意識があるのかもしれない。

　彼らのためにもその肉を食う。そんな人間の理り屈くつは所しよ詮せん、小こ賢ざかしいのだろうか。そうだとしても、もったいないから食しよく糧りようにするという以上の意味を、誰もが嚙かみしめていたことは事実だと思う。

　一切れだけ、しまわず口に入れた生肉は血の味がした。そのあとに新鮮な肉の滋じ味みがあふれてきて、こうして食べることで生きるための力をえているのだという実感がこみあげてきた。

　影信と光越の遺い骸がいを雪に埋うめて葬ほうむると、生きるため、生きのびるため、目的を達成するために、現実的な問題について考えずにはいられなくなった。

「……盲もう点てんだったね。たしかに、陸を移動するのは厳しい。僕らも実際、モトローリィに入ってからは一回も悪魔と出くわ

してなかった。でも、あんなやつらがいるなら話は別ってことになってくる」

「ン～……モトローリィは邪竜みてェーなヤツらに攻撃されてるかもってコトだよな？」

「うん。まあもちろん、あんなのがたくさんいるとしたら──だけど」

「ケドなァ。オレらで三ピキ余よ裕ゆうだったンだぜ？　なんとかなンじゃね？」

「あのね。きみたちと普ふ通つうの人間を一緒にしちゃダメだよ。普通の人間っていうのはさ。僕みたいに無力なんだよ？　あんなのに襲われたら、きゃーきゃー叫びながら逃げるくらいのことしかできないんだってば。……なんか、自分で言っててむなしくなってきた」

「お、おまえはあれやろ。頭脳系の労働系とかで貢こう献けんしとんのやねんか！　なあ？」

「……ジン・ウォッカー。なんできみなんかに慰なぐさめられなきゃならないんだよ」

「なっ、慰めとらんわ！　だっ、誰がおまえのこと慰めとるっちゅうねん！　何の理由があって俺がそんな……」

「ンだァ？　テメェー、マリアンローズィーのコト好きなンか？」

「だめよ、飛燕。しょんなわかりきったこと、わじゃわじゃ言っちゃ」

「──ばっ、ち、違っ、な、な、何言って──あ、アホかっ！　アホやろ!?　だってアホやん……!?」

「何？　それオレに言ってンの？　喧けん嘩か売ってンのか？　やァーめとけって。オレァ強ェーから。てか、でもよォ、マリアンローズィーって、女じゃねェーンだろ？」

「「「「えっ……」」」」

　崑崙、魏洪、震了、チョイ・ホーが一いっ斉せいに目を瞠みはっ

てマリアローズを見た。

「……何だよ。僕は女じゃないけど？　それがどうかした？」

「いや……」崑崙は何か言おうとして口ごもった。

「んなこと知っとるっちゅうねん！　だからどないしたっちゅうんや！　俺はもうそのへん乗り越えたんやぁーっ！」

「ウハハッ。筋金入りかよォ。テメェー地味におもしィーヤツだなァ。バトるかァ？」

「……なんか、僕、ちょっと泣きたくなってきたんですけど……」

「とりあえず」ロム・フォウがいいタイミングで割りこんでくれた。「悪魔たちがモトローリィを攻めようとしていることは間違いなさそうだね。でも、どの程度、侵攻が進んでいるのかは、この目で確かめてみるしかない。あたしたちがやることは結局、変わらないんじゃないかな」

「まあ、そうだね」マリアローズは身を寄せてきたきゅーのもふ毛をさわって気をとりなおした。「でも、これからは空にも警戒しつつ進まないといけない。とくに昼間は見晴らしのいい場所をできるだけ避けないと。上からもよく見えるってことだから。まずザザラーン高原は早く抜けたいね。そうすれば、第一の目的地シャッコーまですぐだし──」

「あと八十キルくらいかな」ロム・フォウは顎あごに指をあてて首を傾けた。「ここから二十キルほど南西に小さな村があるよ。そこに寄ると、シャッコーまで少し遠回りになってしまうけれど、深い森の中を通ることになる」

「行ってみよォーぜ。その村？　かナンか知らねェーケド、状況？　的なモンがちったァーわかるかもしンねェーしなァ」

「いしょがば回れ、ね」

「おォー。さっすがユリィ！　いィーコトゆゥーなァー！　愛してンぞコノッ」

「も、もう、やめて、飛燕。……わたしも……だけど」

「ンだよォ。言えよォ。声に出して言ってくれよォ。聞きてェーよォ。言えよォ」

「やでしゅ！　恥はじゅかしいから！」

「ユリカはすごくきれいになったけれど、それ以上に幸せそうだね」

「しょ、しょう？　ロム・フォウにはしょう見えるの？　……否定はしないけど」

「オレのオカゲだよなッ！　なァー、ユリィ？」

「……はいはい、バカップルバカップル。こんなクッソ寒いのにあついあついあつい！　もうやってらんないよ！　ごちそうさまでしたっ！」

　というわけで、北行隊は上空に警戒の目を光らせつつ、南西のグリーンモルという村を目指すことになった。

　目指すといっても二十キルメーテルだ。要した時間は四時間といったところで、あれ以来、邪竜の襲撃もなく、日が暮れるころには無人の村にたどりつくことができた。

　そう。グリーンモルには人っ子一人いなかったのだ。家か畜ちく小屋の中も空っぽだった。人間、動物、異界生物フリークスを問わず、死体もない。家屋の多くは木造で、破壊されている家がいくらかあった。どうもだいたいは落石による被ひ害がいのようだが、グリーンモルは針葉樹林の中にひっそりとたたずむ村で、近くに崩ほう落らくしそうな山などない。ということは、何ものかがわざわざ岩をどこかから運んできて、グリーンモルの家々に向かって投じたのだろう。そんな馬鹿な、と普通なら思うところだが、たとえば邪竜の仕し業わざと考えれば、おそらく可能だ。

　状況から推測すると、グリーンモルは空襲を受けた。住人たちは家畜を放して村から逃げた。逃げきれず、邪竜の餌え食じきになった人間や動物もいるかもしれないが、食べられてしまったので遺体はない。その惨さん劇げきをうかがわせる痕こん跡せきも残っていた。

　血だ。村のあちこちに流血の跡あとがあった。凍こおっていてよくわからないが、おそらくそう古くない。さらに周辺を探さぐる

と、針葉樹がへし折られ、倒れている場所も見つかった。アルファがしきりとそのあたりの臭においを嗅かいで唸うなったり吠ほえたりしたし、邪竜が暴れたあとなのかもしれない。

　ともあれ、グリーンモルでえられる情報はこれ以上なさそうだ。北行隊は石造りの家を拝借して睡すい眠みんをとり、夜が明けてからシャッコーを目指して出発した。それから異常に気づいた。
「……何だよ、これ」

　昨夜、アルファがやたらと気にしていた場所だ。針葉樹が倒れている。一本や二本ではない。幅はば十メーテルほどにわたって、何本も何本も、ずっと先まで木がなぎ倒され、針葉樹林の中に一本の道ができていた。何かとんでもなく大きなものが通っていって、その結果、こんな有様になった。そんな印象を受けた。その道から外れたところで、複数の足跡も見つかった。ロム・フォウが調べてくれたところでは、靴を履はいているようだから断定はできないが、人間の足跡に似ているけれども、たぶん人間のものではないという。

　道と足跡が向かう方角は、北西。その方向にはシャッコーがある。

「何にしても、とりあえず進むっきゃねェーだろ」

　グリーンモルに立ち寄ったので回り道になったが、それでも百キルメーテル程度の道のりだ。例の道さえ避ければ、針葉樹林の中を通るルートだから上空を気にする必要もさほどない。六時から短い休憩を挟はさみながら十時間、一時間あたり八キルメーテルくらいのペースで快調に飛ばして、ついに北行隊はシャッコーへとつづく街道に出た。

「……で、合流しちゃった」

　雪はちらつく程度で、風もほとんどない。相変わらず骨身にしみる寒さだが、まあ穏おだやかな夕暮れといってもいいだろう。

　例の道は白く凍った街道に合流していた。どうやら、やはり何ものかが—とんでもないものが、シャッコー方面へと向かっているようだ。このあたりはザザラーン高原のような強風地帯ではない。天候が安定しはじめたのは一昨日おとといからだ。その前にこの場所を通過したのだとしたら、雪によって跡がもっと覆おおい隠されて

いてもおかしくないから、おそらくそんなに日は経たっていない。

「わからんけど、敵の侵攻部隊──ちゅうことやろな……」ウォッカーはグリーンモルで休んでから体調が悪そうだ。やたらと洟はなを啜すすっている。風か邪ぜでもひいたのかもしれない。

「なんッかワッサリでっかそォーだよなァ。どんなヤツなンかね？」飛燕はにやにやしている。なんで嬉うれしそうなんだよ。馬鹿じゃないの。まあ、馬鹿なんだけど。

「……でも、さ。考えようによっては、だよ？」マリアローズは頬ほおに鼻はな面づらを押しつけてきたクルルに炒いり実をやりながら街道の向こうに目をやった。「敵の侵攻部隊がきてるってことは、攻撃対象がある──まあ、もしかしたら目標はシャッコーの先かもしれないけど、とにかく陥かん落らくしてない人間の拠きょ点てんがあるってことになるよね」

「しょうね。きっと、今も敵に抵抗している人たちがいるんだわ」

「おォー。だとしたらすげェーな。中部ミッド諸国域ランズにはオレらみてェーのとかそれなりにいるワケだけどよォ。基本、動きまわってつかまンねェーよォーにして、なんとかやってるッつゥーのが実情だかンな。まァーオレ的にはタイマンならどんなヤツにも負けねェーと思ってっケド、仲間がいるし犠ぎ牲せいはナルタケ出したくねェー。街に立てこもるってェーのは無理だってハナから決めてかかってたかンなァ」

「シャッコーは要よう塞さい都市だからね」ロム・フォウはしきりと地面の臭いを嗅いでいるアルファに視線をそそいでいる。
「ツァール峡きょう谷こくの岩いわ肌はだから削けずりだして作った頑がん丈じょうな街なんだ。あの峡谷を通り抜けないでモトローリィの中央まで行くとなると、アルゴの大河を渡るか、グアルンスキ連れん峰ぽうの難所をいくつも越えるルートをとるしかない。もともとモトローリィは、南のクライド大山脈、北の氷海に挟まれた細長い国だから、迂う回かいしづらいポイントがたくさんある。シャッコーは長らく難攻不落の要塞と言われてきたみたいだけれど、実際この目で見てみると、たしかにあれは壮そう観かんだよ」

「ンじゃァ、オレらも拝ませてもらおォーぜ。そのシャッコーとかってヤツをよォ」

　北行隊は街道を西へと進んだ。蛇だ行こうする街道はわずかに下り勾こう配ばいで、やがて両側の針葉樹林が途と切ぎれると、行く手にあまりにも巨大な壁が立ちふさがった。まだずいぶん先のはずなのに、まるで目の前にそそり立っているかのように錯さつ覚かくしてしまう。

「あれが、ツァール峡谷……」

その前夜　二巡月十四番日　ツァール峡谷

「──敵襲……！　敵襲……！」鐘かねが打ち鳴らされ、叫び声が飛び交かいはじめたのは、二十三時を回ったころだった。チーロ・パンカロはすぐさま跳とび起きて寝しん所じよから飛びだし、慌あわてて引き返して毛皮のコートを羽織った。それから、あったか丈じよう夫ぶなブーツを履いて、左手にだけ手て袋ぶくろをつける。鋼鉄製の右手、ハンマーパンチ壱いち號ごうには手袋などいらない。あたりまえだ。チーロはふたたび寝所を出て廊ろう下かを駆かけ抜け、玄げん関かんの扉とびらを蹴け破やぶって外に出た。夜中のシャッコーは明るかった。松明たいまつだの角灯だのを持った人間たちがあっちへ行ったりこっちへ来たりしている。その光が雪に反射して夜とは思えないほどだ。「──敵、敵、敵、敵かよ！　まーた空襲だけかあ……!?」

「チーロ坊ぼつちゃん……！」カルロが隣となりの建物から出てきた。「──状況は!?」

「まだわかんねえ！　今日はイビツとボボ・フトッチョが見張りの当番だったよな!?」

「ええ、あいつらァ第一橋の第二哨しよう戒かい塔とうです！　とりあえずそっちに向かいましょう！」

「おしっ！　──おうおうおう！　パンカロ・ファミリー！　起きろ起きろ起きろ！　第一橋前に集合だ！　遅れたらオレのハンマーパンチ壱號でぶっ飛ばすぞ！　死にたくなかったらさっさときやがれ！　ゴーッ……！」

　チーロ・パンカロはカルロ・ボッシ以下パンカロ・ファミリーの野や郎ろうどもを引き連れて、シャッコーの街路をひた走る。シャッコーはツァール峡谷北側の急きゆう峻しゆんな斜しや面めんを利用して築かれた階層状の構造を持つ街だ。最上層は地上二百メーテルの高さにあり、第二層は百五十メーテル、第三層が百メーテル、第四層が七十メーテル、最下層のもっとも高いところが四十メーテルで、その下を断だん崖がい城じよう壁へきに沿そって東西

にのびている幅三十メーテルほどの通路が峡谷の底にあたる。
シャッコーから南側斜面には四本の橋が渡されていて、それぞれの橋には哨戒塔が三基ずつ設けられており、この哨戒塔は見張りだけでなく射手も配置できるし、岩石落とし等の仕し掛かけもあって、防衛施し設せつとしても機能するのだ。また、四本の橋は堅けん固ごなアーチ橋で、橋きよう脚きやくと橋脚の間に門もん扉ぴを備え、これらを閉めきればツァール峡谷を封ふう鎖さできる。当然、こんなご時世だからすべての門扉は閉へい鎖さされているのだが、どうもこの地鳴りのような音はそっちのほうから聞こえてきているのではないか。

　ときおり空を振り仰あおぎながら、チーロは最下層へと急ぐ。最上層と第二層は邪竜による投石攻撃でだいぶ被害を受けたので、現在、大半の人間は第三層以下に住んでいる。チーロたちパンカロ・ファミリーは第四層の住宅を借りて宿舎にしているが、最下層に引っ越したほうがいいかもしれない。だいたいこのシャッコーという街は複雑すぎるのだ。それに、しょうがないことではあるが、階段がやたらと多い。

「カルロぉ！　悪ぃ！　オレ、迷った……！」

「平気です！　私はちャンとわかってますから！　この道であってますよ！」

「ちくしょうめ！　てめーは有能だな！　──うおっ……!?」チーロは一瞬、足を止めてしまいそうになった。ものすごい音がしたのだ。地鳴りどころじゃない。崖がけ崩くずれでも起こったかのような音だ。やはり橋のほうからだろう。「──空襲じゃねーのかよ……!?」

「今ンとこ、投石はきてないようですね！」カルロはファミリーの連中を振り返って叫んだ。「──おめえら！　出入りになるかもしれねえぞ！　気合い入れてけよ！」

「ははっ！」チーロはハンマーパンチ壱號で己おのが禿とく頭とうを小こ突づいた。「ここ何日か、偵てい察さつに出たやつらが邪竜にやられたっぽくて帰ってきやがらねえとか、そんなんばっかだったからな！　なんっかくるんじゃねえかと思ってたけど、ようやくかよ……！」

　チーロらジョーカー軍は、ジェードリからクライド大山脈を迂回

して去年の夏前にモトローリィ入りした。それまでは血湧わき肉躍おどる戦い、戦い、戦いの連続だったのだが、シャッコーに逃げこんでから状況が一変してしまったのだ。

　ジョーカー軍はもともとシャッコーの守備についていたモトローリィ軍に義勇兵として加わり、押しよせる悪あく魔まどもを次々と撃退。連戦連勝、華はなゞばなしい軍功を立てまくって、英雄、救世主と讃たたえられるようになったジョーカー軍総そう帥すいは、しかし、羊の心を持つ狼ではなく正真正しよう銘めいの狼だった。短い夏が終わると、総帥は一計を案じてモトローリィ軍の指揮官ハレンバーグ将軍を追放、同時にモトローリィ兵を武装解除してシャッコーを乗っとってしまったのだ。

　当然、モトローリィ軍はただちにシャッコーを奪だつ回かいするべく部隊を差し向けてきたが、ちょうどそのころ邪竜による空襲が本格化。モトローリィ全土が大混乱に陥おちいって、軟なん禁きんされていたモトローリィ兵たちも続々とジョーカー軍に帰順した。世界最大のクライド大山脈に守られて、いまいち世情に疎うとかった北国の連中も、もはや人間同士が争っている場合ではないことをやっと理解したのだろう。

　一方、そんなことはわかりすぎるほどわかっている我らが総帥は、憎にくらしいほどに冷静沈ちん着ちやくだった。近きん隣りんの街からの避ひ難なん者を受けいれ、空襲に対しては超強弩メガカタパルト、高精度ハイパー投石機スリングといった対空兵器をモトローリィの名だたる職人たちに製造させて対抗、それでもシャッコーの市街は大きな損害を受けたが、人的被害は少なかった。その評判を聞きつけて、さらにうろたえるだけで何もできないモトローリィ首脳部に嫌いや気けが差したのか、モトローリィ軍最大の武力集団である武士団がシャッコー入りし、棟とう梁りようウィリアム・タイガーボーンの名において、軍ぐん籍せき離り脱だつとジョーカー軍加入を表明。おかげで一気に人手が増えて、パンカロ・ファミリーの仕事は減り、空襲はあっても熱い闘争ファイトに巡めぐりあう機会はなくなって、チーロはすっかり時間と身体からだを持てあましていたのだ。「──いってー何のためにこんなクソ寒ぃーモトローリィくんだりまできたと思ってんだよ……！」

　十分近くかけて最下層の断崖城壁上に到とう着ちやくしたチーロは、身み震ぶるいして笑いながら絶ぜつ叫きようした。「ズバリこのためだっつーの……！　きたきたきたぁぁぁぁ！　よーやっと敵がきやがりやがったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ

……！　━う、おっ……!?」

　断崖城壁が、いや、シャッコー全体が揺ゆれた。そんなふうに感じられるほどの大きな震動だった。

　チーロたちは今、第一橋のすぐそばにいる。目の前には第一哨戒塔。第一橋の下には第一門がある。夜間は断崖城壁上に一定の間かん隔かくを置いて火を灯ともしているのでかなり明るいが、さらに第一橋の第一、第二、第三哨戒塔から次々と照明弾だんが投下されていて、四十メーテル下の峡谷底の状況が確認できた。━いる。

　何かこう、ピンク色だったり灰色だったり紫色だったりする、ぶよっとしていてぬめぬめしていそうな肉のかたまりのようなものが。

　でかい。超でかい。肉のかたまりは直径十メーテルを超える潰つぶれ気味の球状で、そいつが第一門を押して押して押しまくっている。

　第一門は開くというよりぶち壊されようとしていた。哨戒塔から雨あめ霰あられと矢が降り注ぎ、一ひと抱かかえ以上ありそうな岩が次々と落とされて、ちゃんと命中しているのに、そいつは物ともしない。矢はひたすら無む駄だに突き刺さるだけだし、岩はボヨンッと弾はじかれてしまう。

「何なンだ、ありゃあ……」カルロが呆ぼう然ぜんと呟つぶやいた。「いいかげん、たいがいの化物には驚かねえ自信があるが、あんなのは……」

「知らねえけどよ。まあ、何だ。あえてネーミングするとしたら、肉球ってとこ？」

「……チーロ坊ちゃん。そいつは何か違いませンかね……」

「おうっ。そっか。肉球だったらアレだよな。あの、猫ねことかの。アレと一緒だもんな。かわいすぎるよな。じゃあ、肉球大王ってのはどうよ？」

「好きにしてください。ていうか、第一門は本格的にやばそうですよ。第二門まで破られちまったら、その先はシャッコーの正門だ」

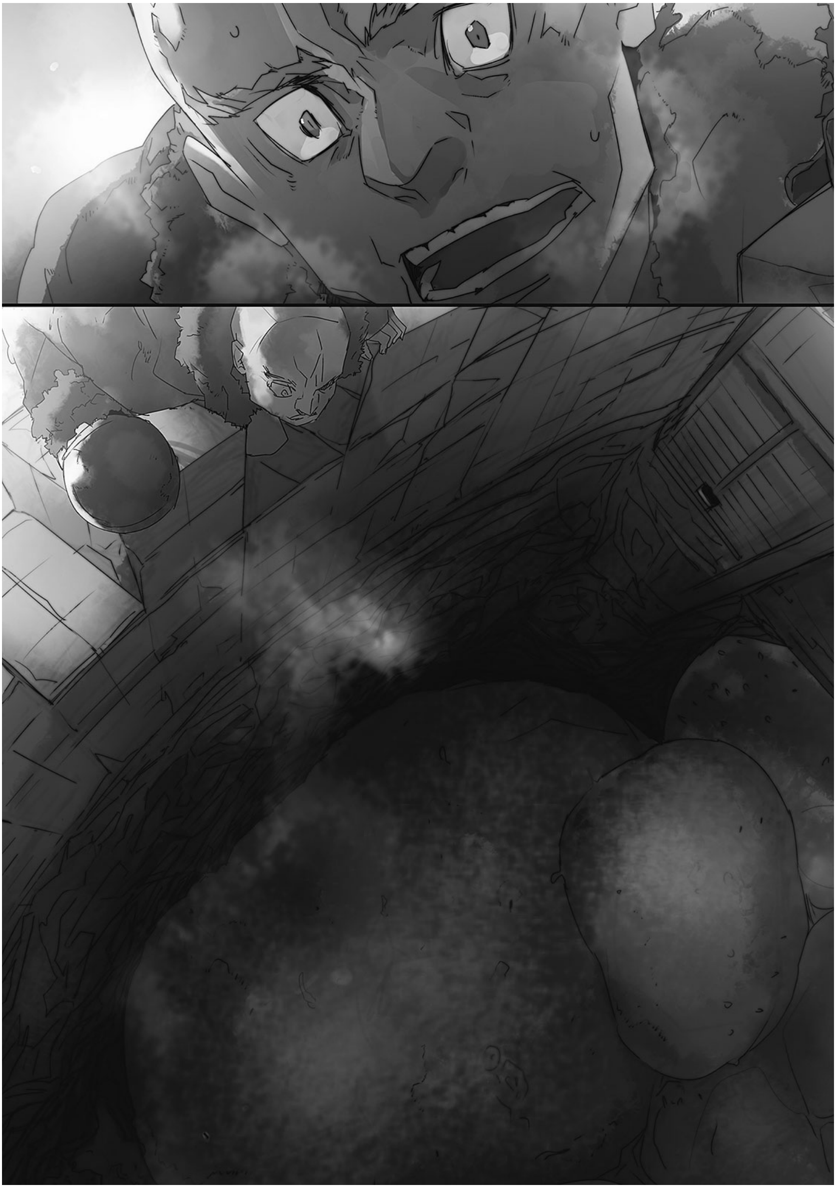
「だよなあ。やべーよなあ。うっへへへへへ。つーかよう、カル

ロ。敵はあの肉球大王だけだと思うかよ。きっと違うよなあ？　んなわけねーよなあ？」

「なんで楽しそうなンですか。遊びじゃねえンですから──くっ……！」

　また震動。さっきよりも激しい。チーロとカルロは大丈夫だったが、ファミリーの中には転ぶ者もいた。チーロは目を思いっきり見開いた。「──きた！　第一門が……！」

「きた、じゃないでしょうが……！」文句を言うわりに、カルロも目を離せないようだ。立てつづけに震動。破は裂れつするような音がした。チーロは「お、お、お、お、お」と変な声をもらしながら体勢を低くする。第一門の門扉の左半分が内側に開いていた。右半分はまだだ。肉球大王が強ごう引いんに入りこもうとするが、門扉の幅ははは十メーテルほど、その半分だと五メーテル程度しかない。肉球大王は大きすぎる。それでもねじこむつもりなのか。肉球大王は意外とやわらかいようだ。ぐぐぐぐ、ぐにゅっと自分の身体を押しこんで、だが、そこで止まった。全身をぐりゅぐりゅごにゅごにゅ蠢うごめかせているが、前にも後ろにも進まない。「──ヤロウ！　挟はさまってんじゃねえか！　なーにやってやがるボケッ！」



「あンなの応おう援えんしないでくださいよ！　第二哨戒塔にはイビツとファッチョだっているんですから！」

「あぁ!?　ああ、そうだった！　忘れてた！　お──つーか、あいつの後ろ……！」

「……なんてこった！　最悪だ！」

　カルロが言うように最悪だとは思わないが、大変なことは間違いない。

　肉球大王はお一人様ではなかった。何を隠かくそう団体様だったのだ。闇の向こうから、一人、二人、三人、四人、五人──七人か。人っておかしくね？　まあいいか。とにかく七人の肉球大王がずりずりと這はいだしてきて、第一門に挟まっている肉球大王に迫せまろうという勢いだ。

　ただ、どいつもこいつも挟まっている肉球大王ほど大きくない。後続の先頭に位置している肉球大王がたぶん直径五、六メーテル程度で、後ろにいけば後ろにいくほど小さくなる。最さい後こう尾びの肉球大王はおそらく直径三メーテルくらいしかないだろう。チーロは舌打ちをした。「──だめだ！　あんなにいっぱいいるヤツに大王の称号はもったいねえ！　なんかねえか!?　もっとこう、スケール感じゃなくてスモール感のある称号……！」

「心底どうでもいいンですよ！　ンなこたあ！　私らァどうします!?」

「いや、どうするったってよぉ……」

　第一門が肉球大王によって破られる寸前という事態を受け、第一橋の周辺は火がついたような騒さわぎになっている。そこにやつが姿を現したのだ。

　男は黄金色の霊れい刀とう〝大ダイ懺ザン悔ゲ嘯シヨウ〟を帯び、幻まぼろしの巨鳥摩マ訶カ鴉ガラスをモチーフにして生みだされたという黒と金の全身鎧よろい〝摩訶マハーク鴉一式ロウスーツ〟を身につけて、月の女め神がみを伴ともなっていた。クローディア、ああクローディア、クローディア。やべえ。鼻血ブーだ。美しすぎる。

「うろたえるな、この馬鹿どもが！　各員、警戒行動は継けい続ぞく！　加えて、ただちに己おれが定めたとおりの防衛行動を行え！　さすれば勝てる！　たとえ貴様が死んだとて、その命は友や女たち、子らのために捧ささげた犠ぎ牲せいだ！　安心して戦い、生きて死ね……！」

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカーの声は威い力りよく抜ばつ群ぐんだった。あたふたしていた兵たちが一瞬でしゃんとして、一いつ斉せいにきびきびと動きはじめる。第一橋の周辺はまたたく間に秩ちつ序じよをとりもどした。

　ちなみに我らが総帥は、とくに認められた者をのぞいて、女と十五歳以下の子供は戦闘に参加させないことを表明している。この理由も明言していて、子供は人類の未来を担になう宝であり、その子供を産むことができる女は人類の貴重な財産である。男が減っても全滅しないかぎり、女さえいればそのぶん子は生まれるのだ。男たちは人類の未来のためにぞんぶんに戦って死ね。そんなふうにけしかけられて、燃えない男は男じゃない。

　それに、総帥は決してただ死ねと命じるわけではなくて、無む駄だ死にするような行こう為いは厳に戒いましめる。戦場においては犠牲を最小限に抑おさえるべく最善を尽つくすし、苦しい局面では必ず陣じん頭とうに立ってまず自らの命を危険にさらす。そういう男だとわかっているから、チーロは退屈でしょうがなくても我が慢まんして今まで言うとおりにしてきたのだ。

「オッスオッス、ジョーカーっち！　お疲れお疲れ！　なあ見た見た見た⁉　なんっかすげーのがきてんだけど！　肉球大王！　だけどぜんぶで八名様だから大王ってのはなんだかな！　つーかオレ何すればいい⁉　オレとしてはできればやっぱタイマンとか張りたいんすけどね⁉」「阿あ呆ほう！」「──ぶへっ……⁉」

　まさかいきなりぶん殴なぐられるとは予想だにしていなかったので、ジョーカーの右ストレートはチーロの左ひだり頬ほほにクリーンヒットした。すげーいいパンチだった。びっくりした。

　チーロは大の字になって夜空を見上げている。倒れた記き憶おくがない。これだからたまんねえよなあ。ふひっ。とか思いながら、チーロは跳はね起きた。「──え……⁉　何何何っ⁉オレ、なんかジョーカーっちに怒おこられるようなこと言った⁉　マジで⁉　つーか何すればいい⁉　やっぱタイマン……⁉」

「うつけが！」ジョーカーだけではない。傍かたわらのクローディアもすごく冷たい目でチーロを見ている。見下している。うはっ。やべ。感じるっ。これ、癖くせになりそう。

　とか言ってる場合じゃありませんよね。

チーロは頭を下げた。「……すんません。調子に乗りました。何でもやりますんで何すればいいか教えてください。がんばりますんで！　おねあいしゃーす！」

「これより第二門を補強する作業を実じつ施しする。貴様らはそれに加われ」

「地味っ」

「また殴られたいか」

「ごめんなさいっ。やらせてもらいやーす！　よっしゃカルロ！　行くぞ！　イビツとかフトッチョとかは当番だからほっとけ！　オレたちでがんばんぞ！　うらーっ！」

本音を言えば、なんでオレ様とオレ様のパンカロ・ファミリーがそんな土木作業みてえなことやらなきゃならねえんだよという気持ちもなくはなかったが、ジョーカーっちの命令だから仕方ない。だいたい、ジョーカーっちが必要だと判断したということは絶対に必要なのだ。何がなんでもやらなければならないのだ。ジョーカーっちはパンカロ・ファミリーの底力を知っている。そのうえで命じたということは、パンカロ・ファミリーの総力をあげて大至急やらないといけない仕事なのだろう。

チーロとカルロ以下パンカロ・ファミリーの男たち百余名は、倉庫から荷車でどんどん土ど嚢のうを積みだした。昇しよう降こう機を使って峡きよう谷こく底まで荷車を下ろすのだが、人力で滑かつ車しやを回さないといけない。これがけっこう骨が折れる。峡谷底についたら正門から出て、閉とざされた第二門の門もん扉ぴまで荷車を引っぱってゆき、土嚢を下ろす。下ろした先から門扉の裏側に積みあげてゆく。

すぐにファミリー以外の者たちも作業に加わった。元モトローリィ兵がいる。元バルモア商会私兵隊の隊員など、ジェードリから一緒に戦ってきた男たちの顔も見かける。武士団は白兵戦に特化して訓練し抜ぬかれている部隊なので若干扱あつかいが違うが、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーの区別は単純だ。戦闘員か、非戦闘員か。非戦闘員にはできうるかぎりの後方支援と、何より死なないことが求められる。戦闘員にはそのときどきで役割が与あたえられ、全力全開でそれを果たさない者は処しよ罰ばつされるし、戦場では自らの命で怠たい惰だの罪を償つぐなう羽目になるだろう。

　チーロたちが第二門の補強を命じられたのは、たまたま何の役割も割り当てられていなかった。いわば非番だったからだ。防衛のために必要な人員は常に配置されているので、他ほかの者たちはそれ以外の作業に励はげめばいい。頭ではわかっているのだが、身体がうずうずしてたまらない。「──ああああああああああああああとりあえず積むかあ……！」

　土嚢はすぐに尽きた。なくなったら作ればいい。丈じょう夫ぶな袋ふくろを調達してこさせる。峡谷の南側斜しゃ面めんを削けずって削って土嚢を作る。切りだした岩も積む。土嚢も作っては積む。積んで積んで積みまくる。戦せん況きょうはどうなっているのか。地鳴りのような気味の悪い音はつづいている。気になってしょうがないが、必死にこらえて土嚢作りと土嚢積みに専念する。

　やがて夜が明けた。峡谷底からも太陽が見えた。日がだいぶ傾かたむいてきた。

　そうして幅十メーテル、高さ十五メーテルの門扉が土嚢でほとんど隠れたころ、別命が下った。第二門の補強は中止して、作った土嚢を最下層に運べというのだ。「──んだよそれえ!?　運べとか簡単に言いやがってちくしょう……！」

　意味もわからず言われたとおりに土嚢を荷車に積みこみ、昇降機で最下層まで上がると、わりとまずいことになっていた。

　最初の肉球大王は第一門に挟まったままだが、なんと他の肉球大王どもがそれにのしかかり、重なって、第一橋の上によじ登ろうとしているではないか。

　どうやら肉球大王が第一橋に登ってしまった場合に備えて、土嚢を第一橋の手前に積んで防ぼう壁へきにしようということらしいが、そんなことをしたら哨しょう戒かい塔とうにいる連中が孤こ立りつしてしまう。第一橋の第二哨戒塔にはイビツとボボ・ファッチョもいるのだ。「──それはやべえだろ！　──ちょっとおい！ジョーカーっち……！」

　チーロは土嚢を満まん載さいした荷車をそのままにして、第一橋の近くで指揮をとっているジョーカーに詰つめよった。「どうなんだよ!?　いやどうなんすか!?　土嚢なんか積んだら哨戒塔のやつらが戻もどってこらんねえよ！　ですよ！　見捨てんのか……!?」

「黙だまっていろ、阿あ呆ほう」ジョーカーは微み塵じんも表情を動かさない。「──まだ決めたわけではない。だが、市街への侵しん入にゆうはなんとしても食い止めねばならん。これは生かすべきを生かすための戦いなのだ」

「わかってるっつーの！　そんくらい、オレだって──じゃあ、オレに命じてくれ！　あんなぶよぶよヤロウ、オレのハンマーパンチ壱號でぶっ飛ばしてやる……！」

「貴様に任せるくらいなら、己おれがやる。……気になることがあるのだ。あれはおそらく悪あく魔まではない。贄にえの園そのの住人だ」

「に、贄の園……!?」チーロは振ふり返って、長時間にわたる作業のせいで泥どろまみれになっているカルロの顔を見た。「──て、何!?」

「……私も詳くわしくは知りませンがね。聞いたこともないンですか。というか、これまでも贄の園の住人とは何度かやりあったでしょう」

「知らねーよ。敵が何とかいちいち考えてねーよ。んなこと考えてどーなるんだよバーカバーカバーカ」

「あれは」ジョーカーは顎あごをしゃくって肉球大王を示した。「己おれの記憶と想像が間違っていなければ、屍かばね玉だまという。ただし、己おれが見知っているのはせいぜいこの程度のものだ」

　そう言ってジョーカーは右の掌てのひらを上に向けてみせた。その上にのるくらいの大きさだということだろう。しかすぐそこにいる肉球大王は、大きなもので直径十メーテル超、小さいものでも直径三メーテルはある。チーロは首をひねった。「……いくらなんでも大きさ違ちがいすぎじゃね？　別物なんじゃないっすかねえ……」

「そうだといいがな」ジョーカーはふんと鼻を鳴らして顎あご髭ひげを軽くこすった。「──屍玉は屍し肉にくや生あるものをとりこんで成長する。だが、連中は贄の園では他の住人に食われる餌えさなのだ。もし食われることなく屍肉だの何だのをとりこみつづけたら……？　ひょっとしたら、ああなるのかもしれん。そして、己お

れの知るかぎり、あれは分ぶん裂れつする」

「……分裂って━えーっと、つまり……何だ？」

「ようするに、ぶった斬ぎったりしたら、増えちまうってことですか」

「昔、霧の虚洞ミストホロウという場所で試ためしたことがあってな」ジョーカーはカルロを一いち瞥べつしてからわずかに顔をしかめた。「なかなかに気味が悪いものだったぞ。燃やしてみたら、さらに分裂した。贄の園の住人はそれを丸まる呑のみして食らうのだ」

「き、斬っちゃだめっつーなら、ぶん殴ればいいだろっ！」

「可能性があるとしたら━」

「無視かよ!?　かよ!?　かよーっ!?」

「魔術だ。生半可な魔術では焼け石に水だろうが、強力な魔術なら葬ほうむれよう。しかし己おれの手て許もとには現在、魔術士はいない。……一か八か、あれを使うか。それとも、奴を呼ぶか」

「ヤツって━おわ……！」チーロはあんぐりと口を開けた。肉球大王━じゃなくて、屍玉というのか。折り重なっている屍玉の一番上にのっかって第一橋によじ登ろうともがいていた屍玉（最小）が、びゅよんっ、という感じで━跳ねた。そうは見えないが、わりと運動神経いいんじゃんっていうかやれるなら最初っからやれよ。いや、やられたら困るからできたとしてもやるなよ。でも、やるなと言われてやらない馬鹿はいないし、もうやられてしまった。屍玉（最小）は第一橋の上にぶびょんと着地した。第一哨戒塔と第二哨戒塔の中間くらいの位置だ。ジョーカーが大懺悔嘯を抜いた。「━やむをえん、クローディア、出るぞ……！」「はい、主様マスター」

「オレが行くって、ジョーカーっち！」チーロは舌なめずりした。「ぶった斬ったら増えちまう！　ぶん殴ってもきかねえかもしんねえ！　でも、とりあえず叩たたき落としゃー時間は稼かせげんだろ！　オレにタイマン張らせろ！　あんたは大将なわけだし……！」

「……ふん。阿呆のくせに勘かんは悪くない。よし、行け！　チー

ロ、貴様に任せる！」

「よっしゃあああああああああああああああああああああああああああああああ……！」

　タイマンだタイマンだタイマンだ。待ちに待ったタイマンだ。こんなに嬉うれしいことはないタイマンだ。チーロはカルロに「ついてくんじゃねえぞ！」と捨て台詞ぜりふを残して走りだした。哨戒塔は橋を塞ふさいでそそり立っているから、中を通り抜けないと向こうには行けない。「どけどけどけどけどけどけどけどけどけどけどけえええ……！」チーロは怒ど鳴なりながら駆かけた。第一哨戒塔の出入口付近に立っていた兵士たちが道をあける。チーロが第一哨戒塔に突とつ入にゅうすると、兵士たちが悲鳴をあげて飛びのいた。ちょうどいいので、そのまま走った。第一哨戒塔を駆け抜けて外に出たら、屍玉（最小）がすぐ目の前に迫せまっていて、最小とはいうものの直径三メーテルくらいってやっぱそんな小さくはねえよなと思わなくもなかったし、遠目で見るより一千倍ぶよぶよねちょねちょしていて、色とりどりの内臓脂し肪ぼう筋肉をめちゃくちゃに混ぜてみましたみたいな感じで、思ってたより一万倍きもいじゃねえかとも思ったが、それがどうかしましたかーっ。関係ねえ。関係ねえ。関係ねえったら関係ねえ。チーロは突撃した。「――タイマンだグォラァァァァァァ……！」

　何にも、何一つ考えていなかった。

　チーロは屍玉に体当たりした。屍玉もぶちあたってきた。そんなナリでも男なのかよ。正々堂々の勝負かよ。「――上等っっうぷ……！」

　突き飛ばすことはできなかった。押されることもなかった。互ご角かくだったが、これは気持ち悪い。本当にぶよぶよでねちょねちょだ。あと、くっせえ。マジくっせえ。どう表現したものか、ウ●コを腐くさらせたような、いや腐るのかどうか知らんけど、それくらいかなり破壊的な、破滅的な臭しゅう気きだ。「――よく食えるよなあ、こんなもん……！」

　ありえねえよと思いながら、チーロは渾こん身しんの力を振りしぼって屍玉を押し返し、少し身体からだが離れた隙すきにハンマーパンチ壱號を繰くりだした。「おらあ！　おらおらおらあ！　おらおらおらおらおらあ！　おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらあぁぁ……！」

殴っても殴っても、屍玉はほとんど下がらない。手て応ごたえも鈍にぶい。鈍すぎる。ぶよぶよしているので、衝撃を吸収してしまうのかもしれない。それでもチーロは殴なぐる。殴る。殴る。殴る。殴るほどに全身に熱い血が巡めぐって調子がよくなってくる。熱い。本当に熱い。湯気だ。チーロの身体から湯気があがりはじめた。

戦いだ。これが戦いだ。男なら戦って死にたい。あいつらもきっとそう思っていたはずだ。悪魔をはじめとする異界生物フリークスどもとの戦いで死んでいった弟たち。そう。死んだ。大勢が死んだ。ファミリーの戦える男は五百人以上いたのに、もう百人ほどしか残っていない。大事な弟が死ぬたびに、チーロだってハラワタが引きちぎれるくらい悲しいのだ。でも戦いは楽しい。楽しくて仕方ない。戦いはいつも男を覚かく醒せいさせてくれる。

ハンマーパンチ壱號は止まらない。殴る。殴る。殴る。一瞬たりとも止まらない。

とうとう屍玉が下がりはじめた。屍玉自ら後退しているわけじゃない。物理的に押されている。チーロが押しているのだ。──いける、と思った。

その瞬間、屍玉が口を開けた。

十字に裂さけるように開くものを、果たして口と呼んでいいのかどうか。よくわからないが、まあ口だろう。食われる。食われちゃう。チーロはとっさに飛び下がった。瞬時に全身が冷えた。怖こわっ。怖っ。怖ーっ。あと口臭きつっ。あの腐ったウ●コ臭を何百倍にも強きよう烈れつにしたような刺し激げき臭が猛もう風ふうみたいに吹ふきつけてきて、さしものチーロ・パンカロも怯ひるんでしまいそうになった。このオレが怯む？　冗談じゃねえ。チーロはハンマーパンチ壱號で自分の禿頭を殴りつけた。鼻血が出た。「──かかってこいゴルァァァァァァッ！」

そのすさまじい気き迫はくに、恐れをなしたのかどうか。

屍玉が口を閉じてぐりょっ、ぐりょっと跳とびはねながら、後退しはじめた。

「お、おおおい……！」チーロは追う。屍玉は逃げる。だめだろ。何考えてんだバカッ。そっちには第二哨戒塔が。チーロは駆ける。

もうちょっとだ。あと少しで追いつく。そんなタイミングで射撃が始まった。第二哨戒塔の兵士たちが屍玉めがけて矢を放ちだしたのだ。その一部はチーロのほうにも飛んでくる。「―うわわわちゃんと狙ねらえ……！」

　やむなくチーロは矢を払いのけた。おかげで速度がゆるんでしまって、その間に―やばい。屍玉が哨戒塔の出入口に突っこんだ。直径三メーテル。出入口の幅はばは二メーテルくらいしかない。入りきらなかった。挟はさまった。「―ざまあっ……！」

　チーロは駆けよってハンマーパンチ壱號を振りあげた。殴る。殴る。殴る。「うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらああぁぁっ……！」

　でも、びくともしない。というか、何だこれ。哨戒塔の中から悲鳴のような声が聞こえてくる。屍玉がぐんっと膨ふくれた。まさか、食っているのか。中にいる兵士を。とりこんで、大きくなろうとしているのか。「―おい、イビツゥゥッ！　フトッチョォォッ！　食われんじゃねえぞ……！」

「わいはここにおります、ボスッ！」上から声が降ってきた。見れば、第二哨戒塔の矢眼からイビツが顔を出している。その隣となりにはボボ・ファッチョの丸い顔もあった。

「アホッ！　心配させんじゃねえよ！　くっそ、こいつ……！」チーロはハンマーパンチ壱號で屍玉に連打を浴びせまくる。膨ぼう張ちようは止まったが、やっぱり効かない。イビツが上から叫んだ。「ボスッ……！　後ろに新手が……！」「―ああ……!?」

　振り返ると、別の屍玉がびょーんっと跳ちよう躍やくして第一橋に飛びのったところだった。目の前にいる屍玉よりも少し大きい。そいつは第一哨戒塔のほうへ向かおうとしている。

　させるかよ。やらせねえ。チーロは駆けだした。こっちに気づいていないのか。そいつは速くない。追いつける。しかしただ殴るだけではだめだ。同じ結果になる。じゃあ、どうする。どうすればいい。何か。何かないのか。チーロは思いあまって回転した。これだ、と思った。これしかない。「―いっくずぅぅえええええ！　ロォォォォォォリングッ！　ハンマーパァァァァァアアアアアアアアンチッッッッッッッッッッッッッッ……！」

　ズドカッと命中して、屍玉はボウンッと吹っ飛んだ。

　屍玉が飛んでゆく。

　そして、落ちる。

　地面に叩きつけられて、どうんっと弾はずみ──それだけだった。四十メーテルの高さから墜つい落らくしても、まるで平気らしい。チーロとしても、ぐちゃっと潰つぶれてくれたりしないかとほんのちょっぴり期待していたので、残念といえば残念だ。だがこれはいける。決めた。この戦法だ。「──よっし、どんどんこい！　どんどん！　オレ様がしっかりきっちり叩き落としてやる……！」「──ボォォォスッ……！」「ああ……⁉」

　イビツかファッチョかの声がしたので振り向くと、第二哨しよう戒かい塔とうの出入口に挟まっていた屍玉が、ぎょうんっと身体を引き抜く衝撃的な瞬間を目もく撃げきする羽目になった。いや、さして衝撃的でもないが、その屍玉がこっちに突っこんでくるという事実はわりと衝撃的だ。

　ついでに、別の屍玉がびょーんと第一橋に飛びのってきて、チーロは屍玉と屍玉に挟み撃うちされる恰かつ好こうになった。これはだいぶ衝撃的な展開だ。「──ど、どうしろって⁉」

　ああだこうだと考えている余よ裕ゆうはない。もう屍玉どもは間近に迫っている。

　チーロは考えるのをやめた。

　身体が勝手に反応する。

　チーロは片方の屍玉に飛びついた。屍玉と屍玉が衝しよう突とつして弾はじきあう。チーロがとりすがった屍玉は宙に投げだされた。そしてゆるやかに回りながら落下してゆく。やべえな。まあどうにかなるだろ、とチーロは思った。何しろ、屍玉は四十メーテルの高さから墜落しても平気なのだ。下した敷じきにだけはならないように、身体の位置を調整する。地面がみるみるうちに近づいてくる。おーっ。でも怖え。怖えけどおもしれえ。──激突。

「おほっ……！」

　思いっきり跳はねた。

　とてもしがみついていられない。チーロの身体が舞まった。高い。どうする。足か。手か。背中か。どこで着地すればいい。考えてもいいことはない。わかっている。チーロは転がるように着地した。それから正真正しよう銘めい、ごろごろと転がった。

　止まった。

　折れた感じもひねった感じもしなかったが、あちこちが痛い。息ができない。それでも動かないといけない。ここは第一門前だ。屍玉がいる。起きあがると、目と鼻の先に屍玉がいて十字形の口を開けていた。失神しそうなほど臭い。「──んだよ、もう……！」

　やられてたまるか。チーロは立ち向かおうとした。そのつもりなのに、踏ふんばりがきかない。屍玉が近づいてくる。思わず腰が引けた。情けねえ。

　チーロは目を閉じようとした。その瞬間だった。

「ラアア
アァァァ……！」

　誰かが──そう、誰か。人間だ。それは人間の声だった。子供か。体格からそう思った。でも違うよな。子供なんかじゃない。そいつは屍玉にすっと近づいて、右の掌てのひらをそのぶよぶよねちょねちょした身体の表面にあてた。そいつがしたことはそれだけだった。チーロの目にはそう見えた。それなのに、何かを感じた。目には見えない、爆発力のようなものを。そいつは右手から屍玉の中にそれを送りこんだ。それは屍玉の中で炸さく裂れつした。

「お、お、お、お、おぉぉぉぉ……!?」

　何だ。何が起こった。

　というか、何が起こっているのか。

　屍玉が崩れる。

　ぼろぼろと崩れる。崩壊してゆく。

「──ウッヒーッくっせェーコイツ。まァでも、すげェーよなオレ。よォーやっと使えるよォーになった技だしよォ。八十四散乱打奥お

う義ぎ〝天位テイエンウエ無法イウーフア〟。かっけェーッ！」そいつはニカッと笑いながら、そんなことを言って振ふり向いた。「──どォーよユリィ！　ユリィもパワーアップしたケド、オレだって負けてねェーだろァ⁉」

「しょうやってしゅぐ調子に乗るんだから！　敵はまだいるのよ！」と誰かが応じた。

　女だ。舌っ足らずの女の声。なんとなく聞き覚えがあるような。気のせいかもしれないが、チーロはそっちのほうに目をやった。人間だ。

　そこには騎馬の一団がいた。

　　　　　二巡月十五番日　ツァール峡谷

「──変なのと一緒に誰か落ちてきたと思ったら、チーロ・パンカロだとか……！」わけがわからないような、わからなくもないような。ジョーカー軍がジャン・ジャック・ド・ジョーカーに率いられているのだとしたら、パンカロ・ファミリーが嚙かんでいたとしてもそれほど不思議じゃない。でも、今はともかくそんなことはどうでもいい。

　マリアローズは頭を振ってツァール峡谷を塞ふさいでいるシャッコーの門に視線を転じた。門は半分こじ開けられていて、気色の悪い肉のかたまりのようなものが挟まっている。その上に同類らしい肉のかたまりがのっかって、さらにその上に──という具合に重なっているのだが、その最上段の肉のかたまりがぶよーんっと門の上に飛びのったかと思うと、すぐに落ちてきた。なんでか知らないが、チーロはそれにくっついていたのだ。

「矢はききそうにないね」ロム・フォウは刀の柄つかに手をかけている。マリアローズはユリカと目をみあわせた。飛燕フエイヤンに代わって壱イツ突トツ号の手た綱づなを握にぎっていたユリカが、下馬してチーロのもとへと向かう。マリアローズは怒ど鳴なった。「──崑崙クンルン！　壱突を！　馬たちを下がらせて……！」

「了解！」崑崙が馬を進めて壱突の手綱を引っつかみ、乗り移る。

壱突が後退すれば、馬たちも下がってくれるはずだ。マリアローズとロム・フォウも馬から下りた。「──てゆうか、あの変なの、いったい何なんだよ!?　なんとなく贄にえの園その絡がらみっぽいけど……！」

「ひどい臭いだね」ロム・フォウは刀を抜いて右へ、シャッコーの断だん崖がいのごとき城壁のほうへと向かう。マリアローズときゅー、アルファもロム・フォウにつづいた。魏洪ウエイホン、震了ジエンレ、チョイ・ホーは崑崙と一緒に馬を誘ゆう導どうしている。ウォッカーだけが馬に乗ったままついてきた。「──けったいな敵やな！　せやけどシャッコーは健在みたいげほげほげほっ」

　風か邪ぜをひいているのだったら、無理をしなければいいのに。なんて言っている場合でもないか。折り重なって門にとりついていた肉のかたまりども──門に挟まっているでかいやつ以外の肉のかたまりどもが、どういうわけかダダダダダダダッと崩れて、こっちに向かってくる。「──はいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!?　なんで……!?」

「ハヒョーッ……」とか変な声を出しながら謎の構えをとっている飛燕は迎むかえ撃つつもりらしい。何しろ飛燕だし、好きにすればいいけれど、チーロの具合を確かめているユリカが心配だ。というか、マリアローズの場合、まず自分の身を心配するべきだろう。ぐりょんぐりょん飛び跳ねながら迫せまりくる肉のかたまりどもから、一も二もなく逃げるべきだと思う。でも、逃げきれるような気がまったくしない。

「マリア！　ここはあたしたちで、なんとか食い止めるから……！」「──や、いくらロム・フォウでも、あれは無理だよね……!?」「正直、あたしもちょっとそう思わなくもない！」「うおんおんっ！」「きゅうううううううううう……！」

　アルファときゅーはやる気満々らしいが、やる気だけでどうにかなるものでもないだろう。マリアローズが判断を誤ったのだ。さっさと退ひけばよかった。肉のかたまりどもが一いつ斉せいに狙いをこっちに変へん更こうするとは予想していなかった。無む駄だに唇を噛んでいると、ウォッカーが馬を寄せて手をのばしてきた。「──乗れや！　おまえだけでも……！」

「なんで僕が──」だけどしょうがない。ミスをしたら悔くいる前にまず取り返さないと。マリアローズはウォッカーの手をとって鞍あ

ん上じようまで引っぱりあげてもらい、その腰にしっかりと腕をまわした。「──ごめん！　いったん退たい避ひする！　きゅーはロム・フォウを！　アルファも逃げるよ……！」

「くう……！」きゅーはロム・フォウを持ちあげて駆かけだした。ロム・フォウが器用に背中に移動すると、すぐさまきゅーは四つ足走行へと移行する。アルファはきゅーと並んで走った。足を動かしながら、ロム・フォウを見つめている。愛されてるなあ。

「ハイヤッ！　ハイヤッ……！」馬を励はげますウォッカーの声を聞きながら、マリアローズは首をひねって後ろを見た。ユリカは大丈夫か。そこまで不安を抱いだいていない自分がいて、原因は飛燕の存在だと気づかされた。「──ユリカのこと、ちゃんと守ってよね！　そこだけは信しん頼らいしてるんだから……！」

　飛燕はユリカとチーロの前に立っていた。

　肉のかたまりどもが、濁だく流りゅうみたいに飛燕に襲いかかる。

「──ルゥゥアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァ……！」

　飛燕は蹴けった。突いた。飛び蹴りをかました。手刀で斬きった。蹴りあげた。裏拳を叩たたきこんだ。蹴りおろした。ありとあらゆる打だ撃げき技わざをいっぺんに繰くりだした。いっぺんに。

　もちろん、そんなことは不可能だ。それなのに、そうとしか見えなかった。

「ふぇ、飛燕がっ……たくさんいる……!?」

　そんなアホな。

　こんなことありえない。

　ありえないったらありえない。

　だけれど実際、それは起こっている。

「アータタタタタタタタタタタタタタタタタアタァァッ！　アタタタタァッ！　アータタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

タタタタタタタタタタタタタァッ……！」

　数十人、ひょっとしたらそれ以上の飛燕が、殺さつ到とうしてくる肉のかたまりどもにパンチだのキックだのをお見み舞まいしているのだ。

　しかも、その一発一発が、たとえばマリアローズくらいなら瞬殺してしまうほどの威力を秘めていることは疑いえない。マリアローズは人間としておかしい者をたくさん知っているし、もともと飛燕もけっこうおかしいレベルだったが、とうとうけっこうじゃなくてかなりおかしいレベルにまで達してしまったらしい。

　肉のかたまりどもはドッカンボカンッと弾け、砕くだけて飛び散った。

　飛燕はたった一人の飛燕に戻り、胸の前で右の拳を左の掌に叩きつけて一礼した。

「──見たかよッ、八十四散乱打究極奥義〝我無双ウオウーシユオン〟！　愛してンぜ、ユリィ……！」

「馬鹿者が……！」

　大怒雷、とでも表現するほかない大声だった。

　シャッコーの断だん崖がい城じよう壁へきの上だ。ここから距きよ離りもあるし、断崖城壁の高さだっておそらく四十メーテルほどもある。その上にいる人ひと影かげは豆まめ粒つぶみたいに見えたが、それが誰だかマリアローズにはすぐにわかった。男の傍かたわらには、いつも金色とも銀色ともつかない美しい髪をした女性が立っている。ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。そしてクローディア。もう薄うす々うすわかっていたことではあるけれど、やっぱりここにいたのだ。

「屍かばね玉だまは分ぶん裂れつするのだ……！　増やしてどうする……！」

「へっ……？　かばね──」マリアローズは目を瞠みはった。
「うっ、わっ……」

「およォ……？」飛燕はあたりを見まわして顔をしかめた。「──マジかよォ。まだまだうねうねしまくってんじゃん……！」

　たしかに、連中はそうとういやな感じでうねうねしまくっていた。しかも、さっきまではどいつもこいつも直径六メーテルから三メーテル程度だったが、今は違う。飛燕の究極奥義とやらで砕け散ったせいで、だいたい五十サンチから二メーテルくらいの手て頃ごろなサイズになっていた。数は──わからない。とにかく、たくさんだ。いっぱいいる。

　ジョーカーが、屍玉、と言っていた。それがこいつの名前なのか。

　屍玉たちはうねうねするだけでは飽あき足らなくなったようで、びょんびょん跳とびはねはじめた。

「ワリと厄やつ介かいじゃねェーか、コンチクショウッ……！」次々と躍おどりかかってくる屍玉を払いのけながら、飛燕は「ああああーっ！」と地じ団だん駄だを踏んでみせた。余よ裕ゆうはだいぶあるのだろうが、力を出しすぎると屍玉の分裂を誘ゆう発はつしてしまう。

「しゃがりましょう、飛燕……！」ユリカは近づいてきた屍玉を極限九手棍でぶっ飛ばし、チーロをかばいつつ後退しはじめた。

「いや、オレはもう大丈夫だからよお！」チーロはぶるるんっと禿とく頭とうを振って、ユリカを押しのけた。「──しっかし、くっそ、強えヤツはいるもんだよなあ！　どれだけ強くなりゃあオレ、最強になれんだよ……⁉」

「マリア……！」ロム・フォウが鋭するどく叫んだ。見ると、ロム・フォウはきゅーの背の上で暮れなずむ東南の空を仰あおいでいた。「邪じや竜りゆうだ……！」

「ええっ⁉」慌あわてててそっちのほうに目を凝こらしてみたら──いる。マリアローズには鳥の群れみたいに見えるけれど、大きい気がする。ロム・フォウが言うからには間違いない。邪竜だ。「──何だよ、こんなときに……！」

「弱り目に祟たたり目っちゅうやつやな……！」ウォッカーが投げやりに笑いながらそんなことを言った。──弱り目に祟り目。

　あちこちでけたたましく鐘かねが鳴りはじめた。空襲、空襲、という声もかすかに聞こえる。シャッコーだ。シャッコーの各所で警

けい鐘しようを打ち鳴らし、住民たちに警戒をうながしているのだろう。

　マリアローズはもう一度振り返って、門に挟はさまっている大きな屍玉を見た。

　邪竜の編隊はどんどんシャッコー上空に接近してくる。

「飛燕……！」マリアローズは声を張りあげた。「最初の何とかって奥義は効いた！　あれならたぶん、分裂させないで倒せる……！」

「おおッ！　そっか……！」

　飛燕の返事を聞いてから、マリアローズは目をつぶった。──屍玉。空襲。弱り目に祟り目。グリーンモル。引っかかる。何か忘れていないだろうか。自然と腕に力がこもる。気がついたら、ウォッカーの背中に顔を押しつけていた。

「……ま、ま、ま、マリアローズ！　そないにぴったりくっつかんでくれんか！　どうも微妙な気持ちに……」

「黙だまってて！　今、考えごとしてるんだから！」

「……す、すまん！　いや、せやけどな！　こんなときになんやけど、なんや頭がぼーっとしとるさかい言うてまうわ、俺、おまえのこと──って、うおおおおっ……！　き、きよったで！　邪竜どもが……！」

「っ……！」思わず目を開けた。邪竜の数はどれくらいだろう。二十か三十といったところか。連中は猛もう速度で南のほうから門の上あたりを飛びすぎていって、その途と中ちゆうで矢や継つぎ早に前ぜん肢しと後肢で抱かかえていた岩石を落とした。岩石は門の上部や門の上に立っている塔とう、それからシャッコー市街にも命中し、壁やら床やらにめりこんで、あるいは破は砕さいする。破は片へんが撒まき散らされ、峡谷底にまで降りそそいだ。

　投石を終えた邪竜どもは、市街の上空──といっても、かなり低い位置を旋せん回かいしている。間もなく市街地から対空兵器による射撃が始まると、邪竜どもはたまらずいったん高度を上げたが、すぐに降下を開始した。市街ではなくて、ジョーカーたちがいる断崖城壁や門のほうへと向かっている。

「対邪竜戦、用ォー意……！」ジョーカーの声はやたらとはっきり聞こえて、何か特別な仕組みでもあるんじゃないかと疑いたくなるほどだった。

　マリアローズはウォッカーの脇わき腹ばらを叩いた。「──止めて……！」

「はあ!?　なんでやねん！」

「いいから！」

「おっ、おう！」ウォッカーは手た綱づなを引いて馬を止めた。それを見て、ロム・フォウをのせたきゅーとアルファも足を止める。

　屍玉はすでに脅きよう威いではなくなりつつあった。ユリカとチーロは追い払う役、飛燕は例の奥義で確実に一いつ匹ぴき一匹しとめる役に徹てつして、着々と数を減らしている。門に挟まっているデカブツをどうするのかという問題は、とりあえず現時点では考えなくていいだろう。

　邪竜が断崖城壁や門めがけて急降下する。全長七メーテル以上の巨きよ体たいが何人もの兵士たちを押し潰つぶして、恐ろしい鉤かぎ爪づめに引き裂さかれる者や、ぶん殴なぐられて吹っ飛ばされる者、つかまえられて放り投げられる者の姿がここからでも見えた。しかし、ジョーカー軍もやられっぱなしではない。邪竜が着地した途と端たん、兵士たちが一斉にこれを囲んで攻めたてる。ジョーカーやクローディアは単身、邪竜と渡りあっているようだ。そろいの白い毛皮のコートを身にまとい、白はく刃じんを振ふりかざしているあの一団は、もしかして名高いモトローリィの武士団じゃないのか。ジョーカー軍はあんな連中まで吸収したのか。

　でも、武士団なんて正直どうでもよかった。

　見間違いだろうか。違う。

　きっと違う。

　マリアローズは馬から飛びおりて望遠鏡をとりだした。望遠鏡を目にあてる。見える範はん囲いが狭せまくて、見たいものをなかなか捕ほ捉そくできない。ウォッカーが何だかんだと叫んでいる。うるさいんだよ。マリアローズは裸ら眼がんと望遠鏡を駆く使しして、ようやく一瞬、本当にちらっとだが、その姿を確認することが

できた。「──あれは……！」

　何かが風のように邪竜に飛びかかる。しがみついたりしない。邪竜の身体からだの上を駆けてゆく。邪竜が身をよじって黒こく翼よくを羽ばたかせた。それでもその何かは振り落とされない。相変わらず駆けて、ついに邪竜の頭部に到とう達たつする。邪竜が飛び立とうとしたときだった。その瞬間をマリアローズは目撃したのだ。

　彼は邪竜の頭部の上で低い姿勢をとった。

　速すぎて見えないが、その両手には雌し雄ゆう一対ついの短剣が握にぎられているはずだ。

　邪竜の頭部には穴が穿うがたれたはずだ。その穴はまたたく間に拡ひろげられたはずだ。皮が剝はぎとられたはずだ。その下の組織に傷がついて、その傷が何倍にも何十倍にもなるまでに要する時間はごくごくわずかだ。そうした技術は一種の芸術だ。つぶさに目で追うことはできないが、芸術的だということはわかる。

　邪竜の頭部は斬り刻まれた。力を失った邪竜が倒れ伏ふす前に、彼は跳んだ。そして彼はふたたび一いち陣じんの風となり、次なる標的へと襲いかかるのだ。

「ピンパーネル……！」

　マリアローズが彼の名を叫んだ直後、銃じゆう声せいが聞こえた。そう。この特とく徴ちよう的な音は、まぎれもなく銃声だ。

　別の邪竜が、いやいやをするように首を振って、前肢をばたつかせている。つづく銃声。火花。煙けむり。あれは銃だ。動きまわりながら、何者かが邪竜を狙そ撃げきしている。その姿をとらえることはできないが、マリアローズは確信していた。

「ハニーメリーだ……！」

　生きていた。二人とも生きてたんだ。あたりまえじゃないか。悪い、恐ろしい夢を見ることはあった。何度も、何度も見てうなされた。だけど、もう生きていないかもしれないなんて、これっぽっちも思わなかった。生きているに決まっていた。やっぱり生きていてくれたんだ。マリアローズは唇を引き結んで歯を食いしばった。やばい。耐えられないかも。泣いちゃいそう。泣くようなことじゃないのに。あふれる寸前だった涙が、一気に引いてしまった。

「ムウウウウウゥゥゥゥゥゥゥハアアアアアアアア
アァァァァァァァァァッ……！」

　何かが大声を出しながら門の上を駆かけている。

「……まさか」マリアローズは望遠鏡を目にあてた。「……脱ぬいでるし……」

　全ぜん裸らではない。半裸だ。上半身だけ裸で、ズボンは穿はいている。それでも異常だ。だって、この寒さなのだ。いくら筋肉がすごいからって、寒くないわけがない。絶対、寒いはずだ。感じないほど頭がイッちゃっているのか。イッちゃっているのだろう。マリアローズはひっそりと呟つぶやいた。「……久しぶり……髭ひげ……」

「ムハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァァァ
―――――ッ……！」

　髭の破は戒かい僧そうトワニングは門の上をひた走って、二つ目の塔の近くで―跳んだ。

「―って、えっ……!?」

　跳んだといっても、ただジャンプしただけじゃない。あれでは落ちる。落ちてしまう。身投げだ。髭は門の上から身投げした。

「食らいおれ下手物ッ！　拙せつ僧そうのォォォォ筋肉の叫
びィィィィ上腕バイセ二頭筋ツプスゥゥ……ッ！」

　いったい何のつもりなのか。どうしてしまったのか。どうなっちゃったのか。おかしいのか。とんでもなくおかしいとは思うけど。わかってるけど。

　髭の身体が落下を開始する。髭はその寸前にくるっと頭を下に向け、あぐらをかくような体勢になって合がつ掌しようした。全身が金色に光りだす。ピッカピカに輝かがやきまくっている。

　その真下には―門に挟まっている、屍玉。

「超ちよう絶ぜつ紹しようッ！　黄おう金ごん権ごん化
げッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッ……！」

　髭が掌てのひらをあわせたまま両手をのばす。その指先が屍玉にふれると金色の光がパアァァッと広がった。まぶしい。マリアローズは目を細めた。黄金の輝きが長大な剣となって屍玉を引き裂いてゆく。それだけじゃない。屍玉は熱されたように溶とけてゆく。どうなっているのか。そんなことを訊きくのは野暮というものだろう。だって、髭なんだから。

「──カァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
ツッッッッッッッッッ……！」

　髭は屍玉を両断して地面に突き刺さった。

　間もなく黄金の輝きが失うせた。屍玉は乾かわききった砂の城のように崩れ落ちてゆく。

　髭はひょいと起きあがると、両腕を曲げて上腕二頭筋バイセツプスを見せつけるポーズをとってから、横向きになって腰のあたりで両手を組み、胸を強調するポーズを決めた。

「拙僧の筋肉にィィィィィィ不可能はァァァァァァァァぬぁ
いッッ！　ムハッ……！」

「……や、筋肉とかそういう次元じゃないでしょそれは……」

　喜ぶべきなのだろうと思うけれど、呆あきれて脱だつ力りよくしてしまい、もう何がなんだか。

　でも、瞬間ふっと頭の中が空っぽに近くなって、その空白を埋うめるように忘れていたことを思いだした。──足あし跡あと。

　屍玉がグリーンモルからここまでやってきたことは間違いない。その前はどこを通ってきたのか。それはわからないが、痕こん跡せきは屍玉のものだけではなかった。足跡もあった。

　だいたい、屍玉のような生き物がそこまで高い知性を持っているとは思えない。たぶんエルデンに塞ふさがれていた大穴メガボロスから出てきたのだろうが、自発的にわざわざこんなところまでやってくるものか。まずありえない。何者かがここまで連れてきた、誘ゆう導どうしてきたと考えるほうが自然だ。

　敵は他ほかにもいるのだ。しかし、マリアローズたちはその姿を見ていない。

「……ロム・フォウ。たぶん──敵はまだいると思う。屍玉をここまで誘導してきたやつが。隠かくれてるだけなら、まあいいんだけど……何か企たくらんでるかも」

「ああ。そういえば、足跡があったね」さすがロム・フォウだ。察しがいい。

　ロム・フォウに言われるまでもなく、アルファはそのへんを嗅かぎまわりはじめた。きゅーもロム・フォウを下ろしてアルファを手伝おうとしている。

「どないしたん？　ぶえっくしょん！」ウォッカーに声をかけられたが無視して、マリアローズは周囲に視線を巡めぐらせながら考えた。飛燕たちはもう屍玉の始末を終えようとしている。邪竜の襲撃はまだつづいているものの、そのうち撃退されるだろう。シャッコーはまさしく難なん攻こう不落だ。もし自分が攻める立場だったらどうするだろう。正面からは屍玉。空から邪竜。相手に迎げい撃げきさせて、その間に──たとえば、シャッコーに侵入するとか。どうやって……？

「うおん！　おん！　おん！　うぉんうぉん……！」アルファが断だん崖がい城じよう壁へきの下で吠ほえはじめた。きゅーもアルファのそばで上を指さして「くう！　きゅう……！」と騒さわいでいる。マリアローズは断崖城壁を下から舐なめるように見ていった。「──あ」

　断崖城壁や門には明かりを灯ともす設備があるようだが、まだ黄昏たそがれ時なので点灯していない。そもそもこの時間帯は物を視認しづらいのだ。ぱっと見ただけではちょっと気づかない。

　シャッコーはツァール峡きよう谷こくを削けずって築かれた城じよう塞さい都市なので、断崖城壁もようするに垂直に切り立った岩壁だ。門の手前、六十メーテルくらいのところだろうか。断崖城壁に何かが点々とへばりついている。人間か、人間に似た姿の生き物だ。十四人、いや、十五人か。岩壁に馴な染じむような色の衣類を身にまとって登とう攀はんしている。一番上の者は、そろそろ断崖城壁の上まで到達しそうだ。もう少しというところでアルファときゅーに見つかってしまったものだから、とくに下のほうの者たちはあからさまにうろたえている。マリアローズは手をラッパにして声を張りあげた。「ジョーカー……！　敵が城壁を登って侵入しようとしてる……！　──ロム・フォウ……！」

「うん」ロム・フォウは弓を構えたと思ったら、すぐに矢を放った。しかも、つづけざまだ。一射目は一番上の敵の首筋に命中して、そいつは落下した。二射目は上から二番目の敵を見事にとらえて、そいつも落ちた。三射目は外れた。ロム・フォウがしくじったのではなくて、二番目に落下した敵が三番目の敵を巻きこんだので、標的がいなくなってしまったのだ。ロム・フォウが四射目で四人目をしとめると、五人目はパニックに陥おちいったのか、自ら飛び降りた。これは明らかに無む謀ぼうだが、下のほうにいるやつらはまだ十メーテルも登っていない。狙ねらい撃うちにされるよりは、峡谷底に下りることを選択するだろう。ただ、下にはアルファときゅーがいる。マリアローズもそっちへ向かった。ウォッカーも馬を駆ってついてくる。

　ロム・フォウが六人目、七人目を射落とした。下のほうの敵三人は、飛び降りてすぐ、きゅーにぶん殴なぐられ、蹴け飛とばされて、アルファに喉のどを咬かみちぎられた。身体の恰かつ好こうは人間に似ているけれど、悪あく魔まなのか。フードが外れると、顔色がやたらと悪い。悪いを通り越して灰色だ。黄色い目が二つではなく三つもある。

「下りてこいやこらぁっ……！」ウォッカーが馬上で剣を振りあげて怒ど鳴なった。その直後、ロム・フォウが八人目の後頭部に矢を命中させて、これで敵は残り四人になった。

「＠％＆＄＋＊＃％￥＋……！」そのうちの一人が何か怒鳴り、断崖城壁を蹴けって宙返りをするような感じで後ろに跳とんだ。もしかして、マリアローズたちの後方に着地して逃にげるつもりか。そいつは空中でしょっていた背負い袋ぶくろをマリアローズのほうめがけて投げつけてきた。「──ニンゲン風ふ情ぜいが……！」

　共通語だ。喋しやべれるのか。経験的に、共通語を喋る悪魔は爵しやく位い持ちで手て強ごわい。マリアローズは背負い袋をよけた。剣の柄つかに手はかかっている。でも、抜ぬけない。本当に臆チ病キ者ンだと思う。だけれど、そのおかげでまだなんとか生きているのかもしれない。

　ロム・フォウは九人目、十人目を射落とした。

　もう一人が飛び降りて、アルファがまるでそいつを受け止めようとするかのごとく襲いかかる。

七、八メーテルの高さから跳んで下りたくせに、事もなげに着地してみせた爵位持ちにはきゅーが飛びかかった。ウォッカーも雄お叫たけびをあげて援えん護ごしようとしている。

マリアローズは唇をきゅっと嚙かんで、爵位持ちが投げつけた背負い袋に目を落とした。背負い袋は口が開いて、中身がこぼれていた。「……え」

意味がわからなかった。それが何かということもすぐには理解できなかった。否定したかった。こんなこと、あっていいはずがない。でも、自分のせいだと思った。僕が悪いんだ。僕が。持ってこなかったから。できたのに。やらなかった。だからこんなことに。それから、見間違いかもしれないと思った。それっぽい目鼻立ちに見えるだけで、別物かもしれない。赤い眼めだってかなり濁にごっている。本当にこれは赤なのか。とにかくそれは肉のかたまりのようなもので、屍玉だった。──そういうことだったんだ。

きっと屍玉は人間やら何やらを貪むさぼり食って、それをとりこむのだ。そうして大きくなるのだ。シャッコーの門にとりついていた巨大な屍玉どもは、おそらくグリーンモルの住民たちを食った。それまでは小さかった。こうやって背負い袋か何かにしまわれて運ばれてきた。悪魔どもはたぶん、この屍玉をシャッコーの中に持ちこもうとしていたのだ。

ぶよぶよしていて、白っぽい部分もあれば、紫色っぽい部分もあって、オレンジ色っぽい部分もある、この屍玉を。

人間の手らしい形がうかがえる。内臓らしいものも見える。そして──そして、顔。

「……ルーシー……」

今にもその唇とおぼしき部分が動いて、僕の名前を呼ぶんじゃないだろうか。

マリアさん、と。

そうなることを自分が望んでいるのか、望んでいないのか、マリアローズにはわからない。どっちにしても、ありえないのだ。そんなことは起こりえない。

ルーシーは死んだ。死んでしまった。死んでいる。今、目の前

で、死んでいる。

　マリアローズは剣を抜いた。

　振り向くと、爵位持ちはきゅーに攻めたてられ、ウォッカーに牽けん制せいされながらも、逃げだそうとしていた。

「逃がさない……！　逃がすか……！」マリアローズは走った。もうきゅーもウォッカーもその他の何も目に入らなかった。爵位持ちめがけてまっすぐ走った。爵位持ちはマリアローズを見た。やつも細身の剣を持っていた。剣身が半はん透とう明めいでうっすらと輝いている。だからどうした。それが何だ。マリアローズは爵位持ちに突っこんだ。「──うあああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

「な、何を……!?」爵位持ちは細身の剣を操あやつって、マリアローズが握にぎっていた剣を叩たたき落とした。それがどうした。知ったことじゃない。かまうものか。マリアローズは体当たりをしかけた。爵位持ちの剣がマリアローズに突き刺さる。痛みなんか感じなかった。もっと刺されればいいと思った。深く深く突き刺されば、そのぶん距きょ離りがちぢまる。この身を貫つらぬけばいい。マリアローズは爵位持ちに近づいた。まだだ。もっとだ。黄色い三つ目が見開かれ、灰色の顔が醜みにくくゆがんだ。「──何を!?　貴様──俺は伯爵テリオンなんだぞ……！」

「知るか……！」マリアローズは自らの身体からだを押しこんだ。「ぐうううううううううううううあああああああああああああああああああああああああああああああ……！」

　今だ。この間合いだ。血が、頭が沸ふつ騰とうしていても、それだけはわかった。マリアローズはナイフを抜き、ありったけの力をこめて爵位持ちの首に叩きつけた。「ああッ！　あああッ！　ああッ！　あああッ！　ああッ！　あああッ！　ああああああああッ……！」

　何回も何回も繰くり返し叩きつけた。首だけじゃない。顔面にも、側頭部にも叩きつけて、突き入れた。爵位持ちが倒たおれてもやめなかった。動かなくなっても手を止めなかった。爵位持ちの頭が原形をとどめていないほど破は壊かいされていることに気づいて、やっと身体から力が抜けた。

　口から血があふれている。爵位持ちの剣はマリアローズの腹部を貫かん通つうして、鍔つばのところまで刺さっていた。身動きすると、恐怖を覚えるほどの痛みが走る。どうでもいいや、というような気分で引き抜こうとしたら、いつの間にか馬を下りてすぐそばにいたウォッカーに「あかん……！」と止められた。「──ユリカに処置してもらわな！　ユリカ、きてくれ！　マリアローズが……！」

「今、行くわ……！」ユリカが駆かけよってきて、さっそく医術式で痛みを感じなくしてくれた。剣けんを抜くとものすごく出血したが、なんだか他ひ人と事ごとのようだ。マリアローズはユリカを追いかけてきた飛燕に顎あごをしゃくってみせ、例の背負い袋を示した。「……あそこにもいるから。屍玉。悪いんだけど、片づけておいてくれる？」

「ン。おぅ。いィーケドよォ……」飛燕は物問いたげだが、マリアローズがうつむくと何も訊きかないで背負い袋のほうに向かった。

「大丈夫かい、マリア」ロム・フォウがしゃがんで顔をのぞきこんできた。



「なんであないな無茶なこと……」ウォッカーは落ちつかない様子でうろうろしている。

　マリアローズはロム・フォウに「平気」とだけ答えてかすかにうなずいてみせ、目を伏ふせた。飛燕はおそらく気づかないだろうし、このことは誰にも話さないほうがいい。話したってしょうがな

い。何がどうなるわけでもないんだから。

「手傷を負ったのか、マリアローズ……！」髭ひげが走ってきた。「──ユリカ！　拙せつ僧そうも手を貸そう！」

「ありがとう、トワニング」

「久しぶりだね、髭」

「うむ。ロム・フォウ。久方ぶりだ。他の者たちも──いや、今はそれどころではないな。どれ、拙僧にも傷を見せよ」

「……ところで、何者なん？　このオッサン。ちゅうか、寒くないんかい……」

　髭はウォッカーを一いち瞥べつしたが、何も言わずにマリアローズの前に膝をついた。相変わらずものすごい筋肉だ。汗が光って、湯気が立っている。

　チーロ・パンカロが門のほうを見て「終わっちまいそうだなあ……」と呟つぶやいた。

「──それはどうかなぁ？」

　この、声は。

　その場にいた全員が、ほとんど同時に西のほうを見た。

　もうすっかり暮れようとしている空の下に、そいつは一人きりで立っていた。

　うつむき加減だ。猫の耳みたいな飾りの付いたフードを目ま深ぶかにかぶっている。上着は黄土色で、黒いズボンを穿はいていた。白い息を吐いている。震えているようだ。

「うぅぅ～……ほんっと、ここ、いやになるくらい寒いなぁ……」

　嘘だ、とは思わなかった。たしかにそいつはロム・フォウが殺した。ばらばらにして、燃やして潰つぶしたのだ。普ふ通つうは死ぬ。少なくとも、あのときは死んだと判断するしかない状態だった。でも、悪魔だ。しかも、本人の名乗りを信じるなら、大公爵ハイヴエリオンらしい。ロム・フォウは「ここまでして死ななかった

ら、ちょっと手に負えないね」と言っていた。手に負えないやつだったということだ。ただそれだけのことだ。そんなふうに考えないと、とてもじゃないけれどやっていられない。

　マリアローズはとっさに叫んだ。「──耳を塞ふさいで……！」

　言い終える前に、両手で自分の耳を塞いだ。

　大声のラウデイー大公爵ハイヴエリオンハギピヨ・クデ・ウテナウワが胸を反り返らせる。目の下に真っ黒い隈くまができているものの、わりと整っている顔がのぞいた。ハギピヨが大きく口を開けて何か大きな声を出すと、マリアローズの身体が浮きあがって流された。

　飛ばされる。ハギピヨの大声に。

　もちろん、マリアローズだけじゃない。全員だ。体重が違うから個人差はあれど、皆みな、五メーテル以上飛ばされて、地面に激しく叩きつけられた。起きあがろうとしたら、ハギピヨが歌いはじめた。

「らぁぁぁぁ～ん、らんっらんっらららんらぁぁぁぁぁ～ん、らぁぁぁ～ん、ららららんらんらららぁぁぁぁぁ～ん、らぁぁぁぁ～ん、らんっらんっらららんらぁぁぁぁぁ～ん」

「……ぁ──っ……！」ひどい。ひどい大声だ。耳なんか塞いでいてもぜんぜん意味がない。いや、もしかすると、耳を塞いでいるからまだ聞こえるのかもしれない。塞いでいなかったら、とっくに鼓こ膜まくが破れてしまっているかも。全身がびりびりする。ハギピヨの声に揺ゆさぶられているのか。痺しびれて力が入らない。

「あっさぁぁぁぁはぁぁぁぁ～きらいだよぉぉぉお～だってぇぇ～あさだからぁぁぁぁ～。よっるぅぅぅぅもぉぉぉ～きらいだよぉぉぉ～だってぇぇ～よるだからぁぁぁぁぁ～」

　何だよ、この歌。何なんだよ。やめて。やめてよ。お願いだから。気が変になってしまいそうだ。

　叫びたい。

　泣き叫びたい。

「ひっるぅぅぅがぁぁぁぁ～いいなぁぁぁぁぁ～だってぇぇ～ひるだからぁぁぁぁ～」

　ハギピヨは大声で歌いながらゆっくりと近づいてくる。

「おまえらぁぁぁぁ～ぼくはきらぁぁぁぁ～い。だってぇぇ～つまんなぁぁぁぁぁ～い」

　ハギピヨが一歩進むごとに声は大きくなる。

「つぅぅぅまんなぁぁぁぁ～いやぁぁ～つぅぅ～みんなしんじゃえしんじゃえぇぇ～」

　ハギピヨの声が大きくなるほど人間たちは身もだえる。

「らぁぁぁぁ～ん、らんっらんっらららんらぁぁぁぁぁ～ん、らぁぁぁ～ん」

　ハギピヨはそれを楽しんでいるかのようだ。味わっているかのようだ。

　痛い。痛い。痛い痛い痛い。傷の手当てが途と中ちゆうだった。でも、痛いのはそこじゃない。頭だ。頭が痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

　マリアローズは割れそうな頭を抱かかえるようにして周りを見た。なんてことだ。僕らだけじゃない。断だん崖がい城じよう壁へきの上からシャッコーの兵士たちが転げ落ちている。ハギピヨの歌はあんなところまで届いているのだ。これじゃあ無理だ。不可能だ。対抗できない。できっこない。──マリアローズのような常人は。

　ここにはさいわい、まともじゃないやつが何人もいる。先頭をきってハギピヨに殴なぐりかかろうとしたのは飛燕だった。殴りかかろうとしたのだ。できなかった。

「はあああああああぁぁぁぁーっ！」

　ハギピヨは大声をぶつけて、飛燕を簡単に吹っ飛ばしてしまった。

　飛燕につづいて、極限九手棍を突つきだそうとしたユリカも同じ

だった。

　ロム・フォウときゅーは二人で一いつ斉せいにハギピヨに襲いかかろうとしたが、大声の前では無力だった。二人は絡からまりあうようにして地べたを転げまわった。

　でも、髭だけは──という気持ちが、判断能力を失いつつあるマリアローズの頭の中にはきっとあった。

　ハギピヨに躍おどりかかる髭の右みぎ脚あしは黄金色に光っていた。黄おう金ごん脚きやくだ。ハギピヨのしたことは、だが、それまでと一緒だった。

「かああああああああああああああああああぁぁぁぁぁーっ！」

　やはり大声だ。

　髭までハギピヨの大声で退けられてしまった。

「──なんだよぉぉぉ。なんだよぉぉぉ。なんだよぉぉぉ。なんだよぉぉぉぉぉぉぉ」

　ハギピヨは歌うのをやめて大声で喋しやべりはじめた。それでも大差ない。

「せっかく見つけたのにぃぃぃぃ。ずいぶん捜さがしたのにさぁぁぁぁぁぁ。けっこう楽しく遊べるかなぁぁぁと思ったのにさぁぁぁぁ。ひどいじゃないかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「あああうううううぐぐうぐううううぐあうぐあぐうがうがうぐあうがぐうあうが」マリアローズは悶もん絶ぜつしかけている自分自身を認にん識しきしているのかどうか自分でもよくわからない。とにかく転げまわっている。やめてやめてやめて。この大声やめて。どうかやめて。やめて声この声やめて声。「うふああがううがぐあがあうがううあうぐああだあがうがががが」

　マリアローズの近くにはウォッカーとアルファしかいない。他ほかはみんな吹っ飛ばされてしまってここにはマリアローズとウォッカーとアルファしかいないということをマリアローズはわかっているのかわかっていないのかよくわからない。アルファは耳を塞ぐことができないし人間なんかよりずっと耳がいいせいかたぶん気絶していてウォッカーはマリアローズと似たり寄ったりのざまだという

こともマリアローズはよくわかっていない。

「ひどいひどいひどいぃぃぃぃぃ。ぼく頭にきたぞぉぉぉぉぉ。頭にきちゃったぞぉぉぉぉぉぉぉぉ。捜すの苦労したぶん頭にきまくってるぞぉぉぉぉぉぉぉ。おまえらみんなめちゃくちゃにしてやるからなぁぁぁぁぁぁぁうあははあああはははははあああはあは」

「あがががさあうががうががあ」マリアローズはハギピヨが右足を振ふりあげるのを見たような気がした。ハギピヨはどうやらマリアローズを踏ふみつけようとしているみたいだった。なんとなくそれはわかったがよけることなんかできなかった。踏まれた。顔面を思いっきり踏んづけられた。踏みにじられた。「ががががあがぐあごあぐおがごがぐぐごぐごご」

　息ができない。

　なんとなくずっとずっと遠くのほうで、これでいい、と思っている自分がいるような感覚があった。

　もう楽になりたい。これはひどすぎる。つらいとか苦しいとか、それすらもよくわからない。あまりにもひどい。生きた心ここ地ちがしない。生きた心地がしないのだから死んだほうがましだ。

　それなのに突然、息ができるようになった。

　瞬間、ほんの少しの冷静さが滑すべりこむように戻ってくる。

　ハギピヨの右脚にウォッカーがとりすがっていた。

　鼻はな汁じると唾だ液えきまみれの顔を真っ赤にして、ウォッカーはいったい何をやっているのか。

　助けようとしたのだ。誰を……？

　マリアローズを。

　実際、呼吸ができるようになった。ウォッカーはマリアローズの顔面をがしがし踏みまくって、踏み壊こわそうとしていたハギピヨの右脚にしがみつき、その邪じゃ魔まをしたのだ。そんなことしたらどうなるか。マリアローズはハギピヨにつかみかかりたかったが、身体からだが動いてくれない。いくら動かそうとしても動かないのだ。これが現実だ。

　ウォッカーだって似たようなものだったはずなのに、なんで。どうしてそんなことを。ダメじゃないか。そんなことをするから──ハギピヨはウォッカーの額に拳げん骨こつを一発くれて怯ひるませると、その頭を鷲わしづかみにして持ちあげ、顔を思いっきり近づけて──大声を出した。「うざいんだよ、
ばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
か！」

　近くで聞いてしまったマリアローズも、全身の体液が身体中の穴という穴から噴ふきだしてきそうな、いまだかつて経験したことのない衝撃に襲われた。

　ウォッカーは、まさしくそのとおりになった。

　眼球が飛びだして、涙とか、唾液とか、血とか、胃の内容物とか、いろいろなものが、目とか、鼻とか、耳とか、口とか、あちこちから一気にあふれた。

　ハギピヨが手を放すと、ウォッカーはぐったりして地べたに倒たおれ伏ふした。

　それきりぴくりともしない。

「ぼくを妨ぼう害がいするとぉぉぉぉぉぉ。こういうことになるんだからなぁぁぁぁぁ。なんでわかんないかなぁぁぁぁぁぁぁ。おまえらはぁぁぁぁぼくと遊んでればいいいんだっ」

「うあががおあうふああがづああうぎぎああぐ」マリアローズはまた七しち転てん八ばつ倒とうした。ウォッカーに助けられようと、助けてくれたウォッカーがあんなことになろうと、ウォッカーがたぶんもうダメだろうと、同じことだ。同じことなのだ。歯を食いしばることもできないのだ。何もできないのだ。「あうががぐあうがふぁうぁぐあぐぐふあがぐがうがが」

「さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

　ハギピヨにまた顔面を踏まれた。

「つまんないからぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。飽あきるまで一人ずつ殺してこぉぉぉぉぉぉ」

　息ができない。

「何時間かかるかなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ──ぶっっっっっっっ……!?」

　あれ。

　……また息ができる。

　その瞬間、マリアローズは真っ白い光をたしかに見た。

「──キック……？」

　正確に言えば、真っ白い光をまとった少女を。

　その少女が空から斜ななめに落ちてきて、ハギピヨの横っ面つらを足あし蹴げにするところを。

　ハギピヨはゴム製のボールみたいにダンダンダンッと弾はずみながら地面を転がった。

　百億の星を瞳ひとみに宿す少女は、静かに着地して左手で銀ぎん髪ぱつをかきあげると、白いドレスの裾すそをなびかせて舞まいあがった。──少女。

　少女なんかじゃない。

「……マチルダ」

　なんで閃せん光こうの魔ま女じよが。

　それに、どうして右腕がないのか。

　わからないが、すぐにどうでもよくなった。今日は本当に、何でもかんでもどうでもよくなる日だ。

　魔女が上昇してゆく。

　その先に、彼女がいた。

　魔女が着ているものと似たデザインだが、色は違う、光こう沢たくのある薄い緑色のドレスを身にまとっている。

　魔女と同じ銀色の髪がずいぶんのびた。

　翡ひ翠すい色いろの瞳には、魔女のそれと似て無数の星が宿っている。

　だけど、間違いなく彼女だ。

「さあ、サフィニア。わたくしが選んだ、わたくしの右腕。──あのちんけな悪魔を狩ってごらんなさい。それでわたくしの授業はひとまず終しゆう了りようなのだわ。あなたはこのわたくしの期待に応こたえられるかしら？」

「……やります……！」

　サフィニアはそう答えるが早いか、音もなく降下してきた──てゆうか、今さらだけど、サフィニア、飛んでる……！

　サフィニアは起きあがろうとしているハギピヨめがけて飛んでいって、その顎あごを蹴けりあげた。「……はあ……！」「──ぐべっ……!?」

　ハギピヨの身体が宙に浮うく。

　サフィニアは浮かされたハギピヨの胸に右手を押しつけた。「っ……！」

　それだけだ。呪じゆ文もんなんか唱えていない。吐と息いきのようなものをもらしただけなのに、ハギピヨの身体が藍あい色いろの炎に包まれた。

　藍色炎えん上じよう。

「うおおああぁぁっ……！」ハギピヨは暴れながら地面に落ちてゆく。

　サフィニアはそのハギピヨを指さした。「っ……！」

　まただ。呪文なしで、幾いく条じようもの稲いな妻ずまがハギピヨを打ちすえた。「──ぐあはっ……！」

　あれは、爆ばく雷らい索さく。

　詠唱放棄アリアレナンスだ。意識的には使えなかったらしい詠唱放棄アリアレナンスを、サフィニアは完全に我が物としたのだ。



　ハギピヨは雷撃を食らったうえ、地面に叩たたきつけられた。もうズタボロだが、あの程度で死ぬようなタマじゃない。それに、ハギピヨにしてみれば、殴ったり蹴ったりする必要はないのだ。「──うううううぅぅぅぅなあああぁぁぁぁぁぁぁああああああ……！」

　大声。

　この声だ。ただ大きな声を出すだけでいい。

　世界全体が揺れ動いて、ゆがんでいる。マリアローズにはそう感じられた。心臓がひっくり返りそうだ。何もかもがぶっ壊れてしまう。手て遅おくれになる。

　サフィニアも空中で顔をしかめてよろめいたが――一瞬だった。

「……く、あぁぁっ……！」

　サフィニアが右腕をーいつ閃せんさせると、猛もう烈れつな風がハギピヨの大声を切り裂いた。

「なぁっ――――」ハギピヨが絶句した。

　サフィニアはハギピヨを眼下に見下ろして、左の拳こぶしを振りあげる。

「……わたしの……友だちに……！」

　そして、打ちおろした。

　当然、拳は届かないが、灼しやく熱ねつの火炎がハギピヨを猛襲する。

「ひどいことをした……！」

　さらに、今度は右の拳。

　その動作が魔術を発動させて、ハギピヨを凍こおりつかせた。

「許さない……！」

　また左の拳。

　ハギピヨは緋ひ色いろの炎に包まれてあっという間に解かい凍とうされ、過激に熱された。

「許さない……！　許さない……！　許さない……！　許さない……！」

　サフィニアがパンチを繰くりだすたびに、炎撃が、氷撃が、雷撃が、ハギピヨに浴びせられる。ハギピヨだけじゃない。地面も削け

ずられる。陥かん没ぼつする。

　サフィニアは両腕を振りあげて交差させた。「──はああぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　右腕と左腕の交わった部分が真っ白い光を発しはじめる。

　閃光の魔女が生みだした白魔術か。

　白い光の線が一直線にのびていって、ハギピヨをとらえた。

　たぶん、その直前だったと思う。もうグッチャグチャのメタクソになっていたハギピヨの身体から、何かがにゅるっと抜ぬけだした。白い光はハギピヨの身体を焼きつくして、ほとんど消し去ってしまったが、あの深紫色をした二十サンチくらいある毛虫みたいなやつはいったい何だ。

　毛虫はぞっとするような速さで地べたを這はって西へと向かう。

　サフィニアも、しかし、ちゃんと毛虫に気づいていた。「……それが、本体……！」

　毛虫がみるみるうちに凍いてついてゆく。

　見れば、サフィニアが毛虫のほうに掌てのひらを向けていた。

　動きが鈍にぶり、ついに動かなくなった毛虫にとどめを刺したのは、閃光の魔女だった。マチルダは急降下して毛虫を踏みつぶし、華か麗れいな少女の顔に、にやぁ、と嗜し虐ぎやく的な笑えみを浮かべた。「──詠唱放棄アリアレナンスの感覚は完全につかんだようね、サフィニア。飛行の魔術を使いながらそれくらいできればまあ、悪くはないのだわ。でも、魔術だと意識せずに飛ぶことを覚えなさい。わたくしたちは飛べるのよ。そもそも飛べないと思うのが大間違いなの。よくって？」

「……はい……努力します……」サフィニアはうなだれた。まあ、玄人くろうと的には何か違いがあるのかもしれないけど、素人しろうと目にはどう見たってサフィニアも飛んでるけどね。

「よろしい」マチルダは軽くうなずいて、飛びあがった。「とりあえずは卒業ということにしてあげるのだわ。わたくしがあなたを必要とするまでは、自由にしていなさいな。ただし、サフィニア」

「……はい……」

「その魂が滅びるまで、あなたはわたくしに選ばれた──このわたくしの右腕だということだけは、ゆめゆめ忘れてはいけないのよ」

「……もちろんです、お姉様……」

「いい子ね」

　隻せき腕わんの魔女は白い光をまとって、あれよあれよという間に飛び去った。

　サフィニアがふわりと地に降りたち、駆かけよってくる。「……マリア……！」

　抱だき起こされてから、自分が倒れていることを思いだした。「……汚よごれちゃうよ。せっかく、きれいな服なのに……」

「ばか……！」サフィニアは唇をぎゅうっと噛かんだ。目め尻じりに涙のしずくがたまっている。マリアローズの頬ほおに銀色の髪が落ちかかった。「……もう！　いつも、いつも……無茶してばっかり……！」

　マリアローズは笑おうとした。「……髪も、汚れちゃうって……」

　仲間たちが近づいてくる。

　その姿がぼんやりとしか見えない。

　まばたきをしようとして、やめた。やばい。もう限界だ。

　マリアローズはおとなしく目をつぶった。「──……痛いたぁ…………」

Calamitage 003 “Prayer”

二巡月十六番日　城塞都市シャッコー

　夢なんだろうなあ、と思っている。夢だということはわかっているけれど、まあべつにいいよね。

　なんだか、すっごく疲れたし。

　もうちょっとこうして休んでいたい気分なんだ。

　きみは左膝を立てて、右みぎ脚あしを倒たおして曲げている。

　僕はその右脚を枕まくらにして、横向きに寝ね転ころがって、きみを見上げている。

　きみは僕を見下ろして、ずっと微笑ほほえんでいる。

　あたたかくて、まぶしくて、風はない。空は高くて、どこまでも遠くて、色なんてわからない。きみの瞳ひとみの色よりも薄い青だ。

　静かで、何の音もしなくて、あまりにも静かすぎる。

　僕は言う。

　何か喋しやべってよ。

　だって、きみの声が聞きたいから。

　きみは僕の髪を指で梳すいて、唇を動かす。

　え？

　何……？

　聞こえないよ。

　きみは困ったように眉まゆをひそめて、まだ何か唇を動かしているけれど、やっぱり何も聞こえない。

だから、聞こえない。聞こえないんだ。

きみは何度も、何度も試みる。大きく唇を動かしたり、ゆっくりと動かしたりして。きみの顔がゆがむ。きみの声は聞こえない。でも、きみは苦しんでいる。それはわかる。どうして自分の声は届かないのか。声にならないのか。僕の胸がうずく。泣きたくなる。見たくない。きみのそんな顔なんて見たくないんだ。もういい。本当にいいんだ。ごめんね。ごめん。いいから。声なんか聞こえなくたっていいんだ。

僕はきみの脚にしがみついて、身体からだを丸める。

こうしていられれば、僕はそれだけでいいんだ。

きみはほっとしたように表情をゆるめた。

それだけで、さっき軋きしんだ僕の胸はいっぱいになる。

ああ。

ずっとこうしていたいよ。

僕はこうしていたいだけなんだ。

ほんとはね。

ほんとは、いやなんだ。

戦ったりしたくない。戦うことを考えたりするのも、いやなんだ。

きみの指が僕の顎あごのほうに下りてきて、僕はそれをつかまえる。どこかへ行ってしまわないようにつかまえて、もう放さない。きみは空いているほうの手で僕の頭を撫なでてくれる。どこにも行かない、とでもいうように。僕は少し首をすくめて、目を細める。このままでいたいな。ずっとこのままで。これが夢だと、僕は薄うすうす気づいているけれど、もしかしたらこのままでいることだってできるのかもしれないと、信じかけている。でも、それは無理だということも、知っている。僕はまた泣きたくなる。

だって、敵は、さ。そりゃあ、敵は憎にくいよ。仲間が大勢やられたし。

またやられたんだ。

え？

誰なのかって……？

……それはいいでしょ。

とにかく、敵は憎たらしいよ。正直、さ。殺したいって思うよ。根絶やしにしてやりたいって。僕にもし、その力があったら、絶対やってると思うよ。これっぽっちもためらったりしないと思うよ。

だけどさ。戦ってるうちにね。悪あく魔まにも、人間と同じような部分があるんだなって。仲間をかばったりとかさ。団結したりとかさ。そういうの、悪魔にもあるんだよね。

何、やってるのかなって、ね。思ったりして。

こんなふうに戦って。

殺しあって。

どういうふうに、効率的に敵を殺すか、考えて、考えて。

味方の損害を最小限に抑おさえるっていうのは、できるだけ味方が死なないようにするってことだけど、基本的に死ぬってことは前提なんだよね。必ず、死ぬんだよね。

十人死ぬ作戦と、百人死ぬ作戦があったら、そりゃあ誰だって十人死ぬ作戦を選ぶよ。

でも、その十人の中に、すごく大事な人がいたりするかもしれないんだよね。

かもしれない、じゃなくて、実際、死んじゃった人は、僕の大事な人じゃないかもしれないけど、誰かの大事な人だったりするんだよね。

僕は、でも、そういうことはできるだけ考えないようにしてきたんだ。考えちゃったら、つらいからさ。つらくて、選べなくなっちゃうからさ。選ぶことは必要でしょ？　何も選ばないで立ち止まっていたら、飢うえ死にするか、敵に殺されるか、どっちにして

も死ぬんだ。生きるためには、選ばないといけない。選ぶことって結局、何かを犠ぎ牲せいにするってことなんだ。少なくとも、今の僕らは──僕は、何も犠牲にしないで生きてゆくことなんてできないんだ。

　みんな、好きでこんなことやってるのかな。

　少なくとも、僕らは違うよね。こんなふうになることを、誰も望んでなかったし。

　敵はどうなのかな。

　敵だって、いっぱい死んでるわけでしょ。何とも思ってないのかな。そんなことはないと思うんだよね。

　だったら、なんでこんなことやってるのかな。

　……こういうことは、考えないほうがいいんだよね。考えたって、しょうがないし。

　僕が立てた作戦、僕が選んだ戦術、僕の判断で死んだ人が、僕のために犠牲になった人が、生き返るわけじゃないし。

　取り戻すことなんて、できないんだし。

　やりなおすことも、できない。

　どうしようもないって、わかってるんだよ？

　戦わないで、生きていければいいけどさ。殺さなくてもいい、殺されるかもしれないって怯おびえなくてもいい、それだったら、どんなにいいかって思うけど、現実はそうじゃないからさ。違うから。

　だけど、たまにやめたくなるよ。

　ぜんぶやめにして、もういいやって、放り投げたくなる。

　助けてよ。

　ねえ。

　僕を助けて。

―なんて、言えないけど、さ。

いいんだ。こうしているだけでいい。

僕はきみの指をきつく握にぎったりゆるく握ったりして、腿ももに頬をこすりつける。

きみはじっと僕を見下ろしている。

夢なんだろうな、と思う。

だけど、ひょっとすると、夢じゃないかもしれない。

僕は試ためしに目をつぶってみることにする。

目を開けて、まだきみがいたら、これは夢じゃない。本当だ。

でも、僕は感じるんだ。きみの指の感かん触しよくを。きみのぬくもりを。だからきっと、これは夢なんかじゃない。

目を開ける。

きみの肩の上に、リスみたいな子猫みたいなこの生き物がのっている。

……あれ。

どうしてクルルがきみの肩の上に？

けど、変だ。

クルルの目が。

そんな色、してたっけ……？

虹こう彩さいは赤あか錆さび色いろで、黒い瞳どう孔こうが縦に裂さけている。

あの目―どこかで見たような……？

きみが何か言う。唇を動かす。違う。そうじゃない。

口を開ける。

大きく、大きく、口を開ける。

裂けるよ。裂けてしまう。きみの口が。もう裂けそうだ。裂ける。やめて。ダメだよ。ああ。裂ける。あああ。裂けてゆく。

そして、きみの口の中から、何かが出てくる。

白い——白い、手が。

這はいだしてくる。

手の先には当然、腕がのびていて、それはついに、顔を出す。

気味が悪いほど白い顔を。

髪の毛まで白い。

唇は艶つやのない黒だ。

そいつは目を開く。

白目が黒くて、真しん紅くの虹彩と黒い瞳孔の境目が金色に輝かがやいている、おぞましい目を。

黒い唇が開いた。「——おまえは、逃げられないよ」

「ルヴィー……ブルーム……！」

自分の叫び声で目が覚めた。胸の上にいたクルルが顔をのぞきこんでくる。一瞬、びくっとしてしまったが、クルルはちゃんと黒い目をしていた。——夢だったんだ。

あたりまえだけど。夢を見ながら、気づいてたけど。なんで、あんな夢を。最悪だ。気持ち悪い。なんて気持ち悪いんだ。超最低ＳＵＣＫ。超最低ＳＵＣＫ。超最低ＳＵＣＫ。

「……どいて、クルル」

クルルに声をかけて移動してもらってから身体を起こし、掛かけ布ぶ団とんをどける。暖だん炉ろに火が入っているので、部屋の中はあたたかい。シャッコーの第三層だったか、第四層だったか。とにかく、ジョーカー軍が宿舎として使っている建物の一室だ——と思う。寝しん台だいが二つあり、一つは空で、もう一つにマリアロー

ズが寝ねていた。カーテンが四分の一くらい開いていて、分厚い硝子ガラスが塡はめこまれた窓が見える。外は明るいようだ。

　昨日は一度、意識を失い、ユリカと髭ひげに手当てしてもらっている最中に気がついたけれど、かなり出血が多かったので朦もう朧ろうとしていて、シャッコーに入ったあたりの記き憶おくもおぼろげだ。ジョーカーとクローディアには会った。でも、何か話をしたような、何もしなかったような。挨あい拶さつをしただけかもしれない。よく覚えていない。たしか、チーロ・パンカロに抱だきかかえられて──もちろん、拒こばんだはずだけれど、あまり頑がん強きように抵抗する元気はなくて──この宿舎に運びこまれ、入浴だけはさせてもらった。すごく、とっても、ありがたかった。そのあとのことは覚えていない。おそらく、寝台に倒れこんで眠ってしまったのだろう。

　血を流しすぎたせいもあるが、たぶんそれ以前に消しよう耗もうしきっていたのだ。体力はもちろん、精神的にも。自分の貧弱さが情けなくもあるけれど、正直、ずっと気も身体も休まることがなくて、きつかった。ぎりぎりだった。

　きっと、それであんな夢を見てしまったのだろう。

「……てゆうか、何だったんだろ、あの夢。意味不明っていうか……」

　マリアローズはしっかり着こんで剣を帯び、クルルを肩の上にのせて部屋を出た。

　宿舎の中ですれ違うジョーカー軍の兵士とおぼしき男たちが皆みな、何だこいつ、みたいな顔でマリアローズを見るのでちょっと頭にきたが、一応こっちは部外者だから目礼だけはしておいた。

　宿舎を出ると、よく晴れていて、鼻の奥が少し痛いほど空気がつめたかった。

　ユリカたちはどこにいるのだろう。というか、宿舎を離れて少しぶらぶらしてみたが、道がぜんぜんわからない。しょうがないので、何か重そうな物を運んでいる中年の女性に声をかけて、手伝う代わりに聖堂までの道を教えてほしいと頼たのんだ。女性は快く応じてくれた。二人で芋いもだの何だのが入った大きな麻あさ袋ぶくろをすぐそこの軍宿舎に運びこんでから、聖堂まで案内してもらっ

た。

　モトローリィではロシュ聖教が広く信しん仰こうされている。この宗教絡がらみでいろいろあったマリアローズとしては若じゃっ干かん複雑な気持ちもないではないけれど、あれはロシュ聖教の中でも超がつく過激派みたいなものだったらしいので、一緒くたにしないほうがいいのだろう。とにかく、どの街にもたいていロシュ聖教の聖堂があり、このシャッコーも例外ではなくて、現在は戦死者の安置所にもなっているのだという。

　シャッコーはどうやら完全にジョーカー軍の支配下にあるようだが、その兵士たちの出自はばらばらだ。身寄りがない者のほうが圧あっ倒とう的に多い。見送ってくれる家族や友人がいなくても、聖堂で弔とむらってもらえる。そんなことがどれだけ慰なぐさめになるのか。マリアローズにはわからないが、そこまで気を配るということがおそらく大事なのだろう。自分は考えていなかった。やれるだけのことをやってきたなんて、嘘っぱちだと思わざるをえない。

　聖堂の中に入ると、天てん井じょうの高い広間に白いシーツが並べられていて、その上に一人ずつ遺体が横たえられていた。遺体にすがりついてすすり泣く女や子供、遺体の前で膝をついて祈いのる老人の姿も見受けられる。聖職者らしい身なりの者が、そうした遺族たちに寄り添そって何か囁ささやきかけたり、一緒に祈りを捧ささげたりしていた。

　手て隙すきの聖職者がいたら尋たずねようかとも思ったけれど、自分で捜さがすことにした。

　シーツとシーツの間をそろそろと歩いて、一人一人遺体を確かく認にんしてゆく。

　そう時間はかからなかった。

　ジン・ウォッカーは顔も身体からだも清められて、軍服らしい服を着せられ、胸の上で手を組まされていた。目も唇も閉じていて、引きつっていたりすることもないから、寝ね顔がおとさして変わらないのかもしれない。でも、眠っているようには見えなかった。血の気がないとか、動かないとか、そういうことじゃない。たぶん、身体の組織が死し滅めつしつつあり、崩ほう壊かいしはじめているからだろう。死者はあくまで死者の顔をしている。

　きっとこの聖堂にも奥の間があって、そこに祭さい壇だんが設置されているはずだ。でも、すべての祭壇は、エルデンがあんなことになったあの日以来、機能を停止した。正しくは、起動はするのだが、マグニデア・プールとかいうものにアクセスできず、蘇そ生せい式しきを行うことができないのだという。髭に訊きくまでもない。その話はいろいろな者から何度も聞かされたし、人間たちの間では今や常識となっている。

　人間は蘇生式という技術を失ったのだ。

　死は即そく、永久死を意味する。

「……ウォッカー……」

　マリアローズはしゃがんで手て袋ぶくろを外し、素手でウォッカーの頬ほおをさわった。聖堂の中は吐はく息が白くなるほど寒い。そのせいもあってか、氷みたいにつめたかった。

「ごめんね。僕、何て言っていいか……わからないや。でも……ありがと。きみが助けてくれなかったら、僕は死んじゃってた。きみは僕の代わりに死んだんだね。バカだなって、思うよ。本当にバカだよ。死んじゃったら、終わりなのに……」

　本来あたりまえのことなのに、まだ心のどこかで理り不ふ尽じんだと感じている。

　死んだら終わりなんて、あんまりだ。

　マリアローズは白いため息をついてうつむいた。

　ウォッカーにどんな顔をしてみせればいいのだろう。

　どんな顔をしてみせても意味がない。

　だって、ウォッカーはもう死んでいるのだから。

　死者にたむける花の匂においを死者が嗅かぐことはない。その花の美しさはあくまで死者を送る生者のためのものだ。こんなふうに弔うのだって、死者のためじゃない。まだ生きている者が心の整理をつけたり、悲しみや死への恐怖をやわらげたりするための儀ぎ式しきだ。

　そんなことはわかっている。それでも、考えてしまう。

　最後に僕は、どんな顔をウォッカーに見せてあげればいいのだろう。

　迷ったあげくに、笑うことにした。

「さよなら、ジン・ウォッカー。きみのこと、ずっと嫌いだったけど、最近はそうでもなかったよ」

　うまく笑うことができただろうか。自信はないけれど、これ以上ここにいたら、作り笑いもできなくなりそうだ。

　マリアローズは立ちあがって歩きだした。

　一度も振り返らずに聖堂を出ると、ユリカが一人で立っていた。

「マリア。やっぱりここだったのね」

「……うん。まあね」マリアローズは肩をすくめてみせた。「一応、あの人、中隊長だったしさ。顔くらいは見といてやらないとね」

「残じやん念ねんだったわ」

「しょうがないよ。相手が悪かったし。今から思えば、よくこの程度の被ひ害がいですんだなって感じもなきにしもあらずじゃない？　やばかったよね。ほんと。サフィニアがきてくれなかったら、どうなってたか。でも、結局、マチルダとサフィニアは、なんでこんなとこまできたのかな」

「昨夜ゆうべ、サしやフィニアから聞いたんだけど、先しやきにカタリたちと接しえつ触しよくして、しょれでわたしたちがモトローリィに向かっていることを教えてもらったんでしゅって。なんでも、サしやフィニアはじゅっとマチルダしゃんと修行をしていたみたい」

「修行……ね。こんなときにねえ。魔術士の考えることってよくわかんないな。サフィニアにとってはよかったのかもしれないけど。カタリ、びっくりしてただろうなあ。サフィニア、飛べるようになっちゃってたし」

「しょうね」

「あれ？　飛燕フエイヤンは？」

「べちゅに、いちゅも一緒にいるわけじゃないのよ？」

「そうなの？　だけど、できるだけ一緒にいたいんじゃない？」

「しょんなことないわ。お互たがいが無事だってわかっていれば、離れていても平気よ」

「そっかあ。そういうものなんだね。で、飛燕は？」

「だから、知らないってば。なんだかこの街をしゅごくめじゅらしがってたから、いろいろ見て回ってるんじゃない？」

「あー。たしかに、おもしろいよね。この街。何だろ。エルデンはさ。ぜんぶ人工、人工、人工でしょ。まあもともと蓋だったわけだから、あたりまえなんだけど。でも、シャッコーは山だもんね。山？　違ちがうか。峡きよう谷こくか。それを削けずって作ったんだもんね。自然を作りかえたって感じ？　これはこれですごいなーって。雄ゆう大だいっていうかさ。高いしねえ。一番低いとこでも四十メーテルくらいあるのかな？　僕、ほら、高い場所が好きだからさ。それだけでもけっこう気に入っちゃったかな。上のほうはだいぶやられてるみたいだけど、あとで行ってみようかな」

「マリア」

「え？　うん。何？　あ、ユリカも一緒に行く？」

「……マリア」ユリカは、くぅっ、と顔をしかめて、マリアローズの両腕をつかんだ。

「だから……え？　何？」

「一人で抱かかえこまないで。お願いだから—」

「……べつに、抱えこんでなんか」

「やめて。わたしがわからないと思うの？　わからないはじゅ、ないじゃない」

「それは……」

「我が慢まんしないで。ためこまないで。悲しいときは、悲しんで。ちゅらいときは、ちゅらいって言って。言わないとだめ」

「や、そんな……」

「だめ！」

「……だって」マリアローズは一度、口を引き結んで、洟はなを啜すすった。「……だってさ。今回にかぎらないよ。こんなこと、いっぱいありすぎてさ。僕のせいで、いっぱい死ぬんだもん。僕が悪いわけじゃないのかもしれないけど、たくさん死ぬんだもん。もうわからないよ。自分がどう思ってるのかも、この気持ちが何なのかも。どうやって処理すればいいのか、わからないんだよ。持って行き場がなくてさ。どうすればいいのか……」

「マリアが救しゅくった人も、大おお勢じえいいるのよ？」

「……仮にそうだとしてもさ。多いとか少ないとか、そういう問題じゃないんだよ」

「わかったわ」ユリカはマリアローズを抱だきよせた。痛いくらい、きつく、きつく、抱きしめてくれた。「──わかった。マリアはいっぱい苦しみなしゃい。へこたれてもいいわ。立てなくなってもいい。しょのときは、わたしがちゃんと引っぱって立たしぇてあげるから。だから、安心して苦しみなしゃい。わたしがいるから。わたしたちがいるから。マリアは苦しんで。誰もマリアを放っておかない。放っておいてあげたりなんか、絶じえつ対たいにしないんだから」

「……うん」マリアローズはユリカを抱き返した。「わかってる」

　しばらくの間、ユリカに甘えさせてもらった。こんなことで、死んだ者に対する謝罪や惜おしむ気持ちや罪の意識がすっかり消えるわけじゃない。でも、正直に言えば、いくらかは薄れる。薄れさせて、消え去ったことにしなければ前に進めないことを、経験的にマリアローズは知っていた。そして、前に進むことができるのは生きている者だけだ。死んだ者たちのためにも、なんて口が裂さけても言えない。だけれど、進まないといけない。進みたいのだ。まだ生きたい。死にたくない。僕はこちら側に立ちつづける。一緒に生き

てゆきたい仲間が、友だちが、こちら側にたくさんいるんだ。

　だから、僕はまだ、そっちには行かないよ、ウォッカー。

「──じちゅは、ね」

　やがてユリカはマリアローズから身体を離した。

「わたし、マリアを迎むかえにきたの」

「僕を……迎えに？」

　マリアローズはまばたきをした。ユリカが目を伏ふせている。視線をあわせてくれない。

「何？　誰かが僕を呼んでるの？　ジョーカーとか──」

「みんな待っているわ。行きましょう」

　ユリカに手を引かれた。

　地に足がついていないかのような、なんだか妙な気分だった。

　みんなって、誰のことだろう。

　ユリカに訊けばいいのに、どうしてか訊けなかった。口を開くことすらできなかった。

　曲がりくねった道を歩いて階段を何度も下りたから、たぶん最下層だろう。

　シャッコーの建物はだいたいそうだが、飾り気のない、堅けん牢ろうそうな大きな建物だった。ジョーカー軍のシンボルらしい黒こく旗きが掲かかげられ、周りに歩ほ哨しようが何人も配置されているので、司令部として使われているのかもしれない。玄げん関かんには門衛が二人いた。

「ごくろうしゃま」

　ユリカは門衛に声をかけ、マリアローズを伴ともなって建物に入ってゆく。

　建物の中は外よりも少しあたたかかったが、毛皮のコートを脱ぬ

ぐほどではない。

　クルルがマリアローズの顔の横で喉のどを鳴らしている。

　奥まった部屋の扉とびらの前でユリカが足を止めると、クルルが肩の上から飛び降りた。そのまま廊ろう下かの隅すみのほうへ行って、マリアローズを見上げている。どうやらそこから動きたくないようだ。

　ユリカが扉を開けた。「入って」

　マリアローズはうなずいて扉をくぐった。

　そこは七、八メーテル四方ほどもある貴族の主しゆ寝しん室しつといった趣おもむきの部屋で、廊下よりも寒い。外と同じくらいの温度だろう。調度は立派で暖だん炉ろもあるのに、火が入っていない。

　寝台は一つ、窓まど際ぎわに置かれているだけだ。

　その寝台をＺＯＯの面々が囲んでいた。

「遅おそかったな」黒い毛皮のコートを着たジョーカーが、マリアローズを見て、ふん、と鼻を鳴らした。

　その隣となりで、黒と銀色のロングコートを身につけたクローディアが、軽く頭を下げる。

「具合はどうだ」髭ひげは僧そう服ふく姿だ。「見たところ、だいぶよさそうだが」

　マリアローズは曖あい昧まいに首を縦に振ることしかできなかった。

　サフィニアは床ゆかに膝をついて、上半身を寝台にもたれさせている。

　寝台を挟はさんでその向かい側にロム・フォウが立ちつくしていて、彼女の足あし許もとにアルファが寝そべっていた。

「マリアローズ」

　ピンパーネルがきゅー、ハニーメリーと一緒に歩みよってきた。とっさに左足に目を向けると、義足のままだったが、前につけていたものとは違う。かなり人間の足の形に似ていて、何か仕し掛かけがありそうだ。機術士のハニーがピンパーネルのために製作したものなのかもしれない。

「昨日は話ができませんデシタ。久しぶりデス。心配をかけマシタ」

　マリアローズは首を横に振ると、ハニーが目を細めて手を差しだしてきた。髪はのばさず、短めにしているのか。顎あごの下あたりで切りそろえてある。顔の火傷やけどはだいたい治っているが、首のあたりの皮ひ膚ふは引き攣つれていた。それでも、痛々しくは見えない。表情からも、所作からも、躍やく動どう感があふれている。

「久しぶり。元気だった？」

「……どうかな」

　マリアローズはハニーと握あく手しゆをかわした。苦笑くらいはしてみたつもりだけれど、かなり顔がこわばっている。

　身動きができずにいると、きゅーに頭を撫なでられた。

「きゅう」

「……うん」マリアローズは息をついた。「わかった」

　ユリカが肩を抱いてくれた。

　寝台に近づいてゆく。

　ロム・フォウがこっちを見て、サフィニアが顔を上げた。「……マリア」

　何を、どう言えばいいのか、わからない。

「ジェードリからここにくるまでの途と中ちゆうで拾ってやった」ジョーカーの声音はやたらと不ふ機き嫌げんそうだ。「──最初はここまでひどくはなかったのだがな。己おれが見つけてやらなかったら、どうなっていたかわからん」

　髭が寝台に横たわっている男の足首に手をふれた。「……むう。いかんな。処置をしなければならぬ」

「わたしも手て伝ちゆだいましょうか」

「ああ。お願いしよう。──このようなわけでな。拙せつ僧そうはあまり長い間、この部屋から離れるわけにはゆかぬのだ」

「……このようなわけって──」マリアローズは言葉を失った。

　男は脱ぎ着しやすそうな白い衣を着せられている。髭が衣をまくりあげて右みぎ脚あしを露ろ出しゆつさせると、目を覆おおいたくなるような有様だった。皮膚が──たぶん、皮膚だけじゃなくてその下まで、乾かわいてひび割れているようにも、萎しなびているようにも見え、今にも崩れて剝はがれてきそうだ。脚だけじゃない。手も、足も、胸も、首も、顔も、右脚ほどではないが、その状態に近づこうとしている。

　髭とユリカが右脚にふれて医術式を施ほどこしはじめると、少しずつではあるものの、肌はだが潤うるおいをとりもどしてきたように見えなくもないが──治った、と言えるほどの変化ではないように思える。髭もユリカも、医術士としての腕前は一流なのに、その二人が力をあわせてこの程度なのか。それほど悪いのか。どう考えても悪いのだ。どうして。なんでこんなことに。

　サフィニアが肩を震わせている。

　ロム・フォウはただ立っているだけの抜け殻がらみたいだ。

「意識は……」マリアローズは喘あえぐような息を押し殺した。「……意識は、あるの？」

「今はない」ジョーカーは腰に佩はいている剣の柄つかを叩たたいた。「最後に口をきいたのは十三日前か。それも一言二言だ」

　マリアローズは自分の左手を右手で握にぎりしめた。

　もっとよく見たほうがいい。見たいと思う。見られるわけがないとも思う。

　なんで動かないのだろう。

　ぴくりともしないのだろう。

　せっかく会えたのに。

　こうやってほとんど全員、集まっているのに。

　あいにくカタリはここにいないけど、それでもこんなこと、めったにないんだよ？

　そのめったにないことが、こんなときに、こんな場所で、実現したんだよ？

　それなのに、どうして。

　みんな大切な仲間だけど、きみだけは本当に絶対、何があってもいてくれないと困る。

　要かなめなんだ。

　軸じくなんだ。

　中心なんだ。

　それなのに、なんで、よりにもよって、きみが。

「いろいろ試したのだがな」ジョーカーはまた剣の柄を叩いた。さっきよりも強く、苛いら立だたしげに。「室温を高くすると進行が早まるらしい。それでこのざまだ。あるいは、この阿あ呆ほうにとっては気候と季節が幸いしているのかもしれんな」

「トマト……」

　マリアローズはようやく彼の名を呼んだ。

　返事はなくて、マリアローズの声はつめたい床に落ちて沈しずんで消えた。

　今すぐすがりつきたい。何度も名前を呼んで、声をかけたい。起きろ。起きろってば。何、寝てるんだよ。起きてよ。

　でも、怖い。

　そんなことしたら、壊れてしまいそうで。

　サフィニアも寝台にしがみついているだけだ。彼の手にもふれていない。

「いずれにせよ、時間の問題だ」

　ジョーカーの声はどこまでも乾いていた。

「遅かれ早かれ、この阿呆は死ぬ」

『薔ば薇らのマリア17．この痛みを抱かかえたまま僕らはいつまで』了

あとがき

　東京から約十一時間の長い空の旅を終えてオークランド国際空港に降りたった僕は、タクシーを拾ってカスタムズ・ストリート・イーストのメルキュール・オークランド・ホテルへ。ロビーで受付係の女性に声をかけると、当たり前だが流りゅう暢ちような英語でべらべら喋しやべられてちょっと面食らった。考えてみれば、まともに英語を喋るのは十年ぶりくらいだ。僕はなんとか受付係の話を理解しようとつとめたけれど、正直、半分もわからなかった。ともかくチェックインをすませてホテルを出る。カスタムズ・ストリート・イーストからクイーン・ストリートに入って少し行くと、左手にクイーンズアーケードが見えてきた。さらに通りを進むと、グッチだのルイ・ヴィトンだのの店が並んでいて、どこへ行っても似たようなものだと月並みなことを思う自分自身の陳ちん腐ぷさにため息をつくしかなかった。変わらないのは街並みでもそこに住む人々でもそこを訪れる者たちでもなくて、結局は僕という一人の人間なのだ。だから変わりたいと僕は願っている。

　やがて「private KARAOKE 樂」と書かれた看板を見つけて、僕はその店に入った。何のことはない、ようはカラオケボックスだ。でも僕はニュージーランドにもカラオケボックスがあるのだと驚おどろいたりはしなかった。知っていたからだ。僕は受付の若い男性にエッジワースという客はきているかと尋たずねた。男はうなずいて部屋の番号を教えてくれた。ありがとうと告げて僕はその部屋へと向かう。部屋は暗くて狭せまかった。エッジワースは灰色の髭ひげを蓄たくわえてがっちりした体格の男で、予想よりも十歳ほど年がいっているように見えたが、僕は白人の年ねん齢れいを言い当てるのは苦手だ。きっとエッジワースは僕を見てえらく若いと思ったことだろう。僕が挨あい拶さつをすると、エッジワースは歌うふりをして握にぎっていたマイクをテーブルに置いて、隣となりに座るように言った。僕は言うとおりにした。エッジワースが足あし許もとからリュックサックを持ちあげ、中からノートパソコンをとりだす。松まつ下したのタフブックだ。パソコンを起動してから、エッジワースはわかっているなと僕に念を押した。僕はもちろんだと答え、もう覚かく悟ごはできていると伝えた。エッジワースはようやく笑顔を見せて、僕も笑った。これで扉とびらを開く準備ができ

た。エッジワースはそう言いながらパスワードを入力すると、僕にタフブックを渡わたした。さあ、これからだ。これですべてが終わる。あるいは、始まる。そのために僕はニュージーランドまできた──ところで紙数が尽つきたので、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、いつまでも変わらない感謝と愛をこめて、筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

17．この痛いたみを抱かかえたまま僕ぼくらはいつまで

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア 17．この痛みを抱えたまま僕らはいつまで』平成24年4月1日初版発行